

**第2回 独身女性(40～50代)を中心とした
女性の老後生活設計ニーズに関する調査**

平成18年6月

財団法人 シニアプラン開発機構

はじめに

近年、少子高齢化の進展に対応し、公的年金制度や雇用にかかわる法改正などが実施されてきたが、今後とも家族形態・世帯構造の多様化は一層進むであろう。こうした社会、家族、経済諸関係の進行を背景に、シニアの生き方や生活設計のあり方もますます変わっていくものと考えられ、将来のシニア層がもつであろう、老後に向けた生活ニーズを新たにとらえなおすことが求められている。

当財団では、このような問題意識のもと、従来あまり注目されてこなかった独身の中年女性に焦点をあて、平成12年度に「独身女性（40～50代）を中心とした中年女性の老後生活設計ニーズ及び社会的支援に関する調査」（以下「前回調査」という。）を実施した。この前回調査では40歳代から50歳代前半の独身女性を中心に中年女性のもつ不安意識や自立意識を探り、それをもとに老後の生活設計ニーズや社会的支援のあり方を研究した。

今回調査は、前回調査から5年経過した時点での第2回目となる。ただし、今回調査においては、対象者を40歳代から50歳代後半まで広げかつ未婚の方々に絞り、調査内容に関しては、仕事を中心とする現在の生活そして将来に向けた生活設計ニーズの把握に重点を置いた。

研究にあたっては、研究会を組成しそこでの議論をふまえて、全国を対象とするアンケート調査（定量調査）と、これを補完する全国3都市（東京、仙台、静岡）でのグループインタビュー調査（定性調査）を実施した。本報告書は、これらを取りまとめたものである。

今回調査に関し、研究会の座長をお願いした直井道子氏をはじめ、委員をお願いした今田幸子氏、白波瀬佐和子氏、永瀬伸子氏、武石恵美子氏、椋野美智子氏の各先生方には、ご多忙の中、大変ご協力をいただき、かつ貴重な論文を寄稿していただいた。ここに改めて深く感謝申し上げる次第である。

そしてアンケート調査やグループインタビュー調査にご協力をいただいた多数のモニターの方々へも、この場を借り厚くお礼を申し上げたい。

平成18年6月

財団法人シニアプラン開発機構

(1) 本報告書の構成

ここで、本報告書の構成を簡単に紹介しておきたい。

第1部第1章は、本調査の目的と方法について述べた。

第2章は、本報告書の要約的まとめにあたる。

第3章で、アンケート調査の分析結果に関し、データを中心に取りまとめた。

第2部は、研究会の各委員よりいただいた本調査にかかわる論文である。

そして第3部では、合計6回実施したグループインタビュー調査の記録を掲載した。

最後の資料編は、アンケート調査票である。

(2) 本報告書の執筆者（研究会については P2 参照）

<研究会委員>（順不同、敬称略）

直井道子	第2部1
白波瀬佐和子	第2部2
永瀬伸子	第2部3
武石恵美子	第2部4

<事務局>

千保喜久夫	第1部第2章7、報告書全体の取りまとめ
小川英明	第1部第1章1、2(1)・(2)、第2章1、6、第3章1、2(1)・(2)・(3)b・(6)b・(7)・(8)abc、第3部1、2(1)・(3)・(5)
真野敬	第1部第1章2(3)、第2章2、3、4、5、第3章2(3)ac・(4)・(5)・(6)ac・(8)def、第3部2(2)・(4)・(6)

はじめに

目次

第1部

第1章 調査の目的と方法	1
1. 調査の目的	1
(1) 調査目的	1
(2) 調査対象者	1
(3) 調査内容	1
2. 調査の方法	2
(1) 調査方法	2
(2) 調査方法の概要	2
(3) アンケートの回答者について	3
第2章 現在の生活と老後の生活設計ニーズ	5
1. 仕事について	5
(1) 対象者の49.7%が正規従業員	5
(2) 従業上の地位が、収入を始めとする生活と老後の備えを左右しがち	5
(3) 転職経験者の79.6%が、初職において正規従業員であった	6
(4) 「仕事の内容や職場に不満」で初職を退職したケースが多い	6
2. 世帯の住居の状況	7
(1) 1人暮らしの割合は32.1%	7
(2) 2人以上世帯では、親との同居が約8割(77.4%)	7
(3) 病気・介護などで援助が必要である(あった)人のいる割合は26.2%	8
(4) これから親等への援助が必要になる場合では、在宅介護への期待が大きい	8
3. 収入等について	9
(1) 本人の仕事による年収は、「200～300万円未満」が20.2%で一番多い	9
(2) 従業上の地位別・本人の年収(最多帯)：正規従業員は「500～600万円未満」。 非正規従業員は「100～200万円未満」	9
(3) 全体の93.5%がなんらかの公的年金に加入している	10
(4) 老後のための資産額は平均21.7百万円。一方で、何の準備もなしが20.8%である	11
4. 社会関係と生きがい	11
(1) 全体の67.7%が今の生活に満足している。これは、仕事面・経済面の満足度と 相関度合いが高い	11
(2) 生活の領域別満足度では、家族や友人との関係に対する満足度が非常に高い	12
(3) お付き合いで最も親しい関係にあるのが、家族と友人である	12
(4) 独身であることのメリット：時間が自由に使えること	12

5. 老後への展望	12
(1) 老後生活の世帯の見込みは、1人暮らしが32.5%、わからないが33.0%である	12
(2) 老後の住まい：40.6%が持ち家（含む相続）の見込み	12
(3) 老後生活費（見込）で最多の回答は、月額「15～20万円未満」（34.9%）	13
(4) 老後の主たる収入源：正規従業員は「公的年金」、「預貯金」、「個人年金」。 非正規従業員は「公的年金」、「仕事による収入」、「預貯金」	13
(5) 自分の要介護等では、「公的介護施設に入所」、「在宅介護の利用」、「病院への入院」を希望	14
6. 政策への思いと期待	14
(1) いまの生活に関連して：「税金の軽減」が最大の期待	14
(2) 老後の生活：「公的年金」が最大の関心	14
7. 政策的インプリケーション	15
(1) 非正規従業員の処遇の改善を	15
(2) 初職としての正規従業員職を維持しうる工夫	15
(3) 社会保障制度への信頼感の回復	16
第3章 アンケート調査結果の概要	17
1. アンケート調査の概要	17
(1) 調査の目的	17
(2) 調査項目の構成	17
(3) 調査対象者と調査票の送付	17
(4) 調査票の回収状況	17
(5) アンケート調査票への回答方法と調査結果の数値について	17
2. アンケート調査結果の概要	18
(1) 対象者の基本的属性	18
(2) 職業生活	22
(3) 世帯の状況と住居について	43
(4) 家計の状況	52
(5) 社会関係と生きがい	62
(6) 老後展望	76
(7) 行政への要望事項	89
(8) 補足分析－従業上の地位による仕事と生活	91
第2部	
1. 独身女性の老後生活－落とし穴とハードルと （執筆：東京学芸大学教授 直井道子）	103
2. 独身中高年女性の生活 （執筆：東京大学大学院人文社会系研究科助教授 白波瀬佐和子）	111
3. 新しいシングル層の仕事と中高年期 （執筆：お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授 永瀬伸子）	115
4. 就業形態別にみたシングル女性の生活実態 （執筆：法政大学キャリアデザイン学部助教授 武石恵美子）	123

第3部

1. グループインタビュー調査の概要	127
(1) 調査の目的	127
(2) 調査対象者と調査方法	127
2. グループインタビュー調査記録	128
(1) 東京第1回調査	128
(2) 東京第2回調査	142
(3) 東京第3回調査	155
(4) 仙台第1回調査	169
(5) 仙台第2回調査	183
(6) 静岡調査	196
資料編 アンケート調査票	205

第 1 部

第1章 調査の目的と方法

1. 調査の目的

(1) 調査目的

今回調査の目的は、40歳から59歳までの独身の中高年女性を対象とし、仕事を中心とする現在の生活と将来の生活設計ニーズの把握である。

なお、本調査は、5年ごとの定点観測研究として位置付けているものである。

(2) 調査対象者

今回は、独身女性のうち、いわゆる生涯未婚者に対象を絞り、かつ年齢を40歳代から50歳代後半までとし、前回調査よりその年齢範囲を広げた。

また、調査対象者のサンプル抽出が困難なため、サンプリングにかかわる無作為性の問題があるものの、調査委託を行った株式会社インテージの有する調査モニターから本調査の対象者に該当するモニターを抽出し、それらの方々を対象にアンケート調査を実施した。

グループインタビュー（集団面接）調査に関しては、年齢と従業上の地位により対象者をグループ分けし、株式会社インテージが機縁法により募集を行ったモニターに対して、集団面接法による調査を実施した。

サンプルの性格については「2. 調査の方法（3）アンケートの回答者について」を参照。

(3) 調査内容

今回調査では、その目的に沿い、以下の事項について調査を行った。

<調査事項>

- a. 仕事
- b. 家族・家計
- c. 住まい
- d. いまの生活
- e. 老後の生活
- f. 行政に望むこと
- g. 対象者の属性

2. 調査の方法

(1) 調査方法

本調査にかかわる研究会を組成し、調査の方向性・内容、調査方法などについて検討を行った。調査方法は、定量調査であるアンケート調査を中心に据え、さらにこれを補完するものとしての定性調査、グループインタビュー調査を実施し、アンケート調査では表れない生活の実情把握に努めた。

(2) 調査方法の概要

a. 研究会

直井道子東京学芸大学教授を座長とする委員6名による研究会を設けた。

①研究会

<研究会委員> (順不同、敬称略)

直井道子	東京学芸大学教授
今田幸子	労働政策研究・研修機構仕事と生活部門統括研究員
白波瀬佐和子	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
永瀬伸子	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授
武石恵美子	法政大学キャリアデザイン学部助教授
棕野美智子	企業年金連合会企画振興部長

<事務局>

千保喜久夫	財団法人シニアプラン開発機構主席研究員
小川英明	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員
真野敬	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員 (平成17年10月～)
沖輝久	財団法人シニアプラン開発機構主任研究員 (～平成17年9月)

②研究会の開催

第1回：平成17年10月12日開催。本調査の内容と方向性、調査方法、アンケート調査票などに関する広範な検討を行った。

第2回：平成17年11月7日開催。第1回に引き続き、アンケート調査票の内容についてさらに掘り下げた検討を行った。

第3回：平成18年2月27日開催。アンケート調査のデータ分析、報告書の内容や構成などに関して検討を行った。

第4回：平成18年4月25日開催。研究会の各委員および事務局にて分担執筆した原稿をもとに報告書の内容や構成に関する最終検討を行った。

b. アンケート調査

実施時期：平成 17 年 12 月～18 年 1 月

調査対象地域：全国

調査方法：郵送調査

総発送数：1,250 件

有効回収件数：1,008 件

有効回収率：80.6%

c. グループインタビュー調査

実施時期：平成 17 年 12 月～18 年 2 月

調査対象地域：全国 3 都市（東京、仙台、静岡）

調査方法：集団面接（グループインタビュー）法

モニター数：30 名（各回 5 名×6 グループ）

(3) アンケートの回答者について

ここでは、アンケート調査の回答者について、そのサンプルとしての性格をみておく。

a. 年齢

アンケート調査回答者の年齢分布に関して、平成 16 年国民生活基礎調査（なお、国民生活基礎調査の数値は、離死別者を除く未婚者の結果である）と比較したものが図表 1-3-1 である。これによれば、本回答者の年齢分布は、40 歳代、特に 45～49 歳において同国民生活基礎調査のそれより多く、逆に 50 歳代では、同国民生活基礎調査の結果を下回っている。

図表 1-3-1 年齢階級別の回答者数の分布

年齢	アンケート		平成 16 年国民生活基礎調査		①－②
	回答件数 (単位：人)	構成比…①	推計値 (単位：千人)	構成比…②	
40～44 歳	385	38.2%	401	35.2%	3.0%
45～49 歳	292	29.0%	274	24.1%	4.9%
50～54 歳	174	17.3%	245	21.5%	△4.2%
55～59 歳	157	15.6%	218	19.2%	△3.6%
計	1,008	100.0%	1,138	100.0%	—

b. 居住地

本調査回答者の居住地を、東京都区部・政令指定都市・左記以外のその他の地域に分類して、平成 12 年国勢調査と比較した（図表 1-3-2）。本調査の実施時期が、前回の国勢調査より 5 年経過しているため、今回の調査対象者を、平成 12 年国勢調査の 40～59 歳の層、35～54 歳の

層と比較する。回答者の居住地は、国勢調査に対して、「東京都区部」の割合が7%ポイント程度高く、「その他の地域」の割合が国勢調査比10%ポイント強低くなっている。

図表 1-3-2 居住地別の調査回答者数の分布

地域	アンケート		平成 12 年国勢調査			
	回答件数	構成比	35～54 歳計 (単位:人)	35～54 歳計 構成比	40～59 歳計 (単位:人)	40～59 歳計 構成比
東京都区部	205	20.3%	184,672	12.8%	140,834	13.1%
政令指定都市	230	22.8%	309,616	21.4%	231,731	21.5%
その他の地域	551	54.7%	949,294	65.8%	706,189	65.5%
不明	22	2.2%	—	—	—	—
全国	1,008	100.0%	1,443,582	100.0%	1,078,754	100.0%

注：政令指定都市には、平成 12 年国勢調査以降（平成 17 年 4 月）に政令指定都市なった静岡市を含む。

c. 就業状況

回答者の就業状況を整理したものが図表 1-3-3 である。回答者に占める就業者（労働力人口より完全失業者を除いたもの）の割合は、全体で 86.5%である。これを、今回アンケート調査実施時点と同時期である平成 17 年 12 月の労働力調査（月次）に比較すると、本調査の方が全体で 14.6%ポイント高い。また年齢階層別でも、就業割合が労働力調査より 1～2 割程度高くなっている。

図表 1-3-3 就業状況別の調査回答者の分布

年齢	アンケート			労働力調査（月次 平成 17 年 12 月結果）		
	回答数	就業者(人)	就業割合	人口総数 (万人)	就業者(万人)	就業割合
40～44 歳	385	345	89.6%	49	39	79.6%
45～49 歳	292	264	90.4%	31	22	71.0%
50～54 歳	174	143	82.2%	22	15	68.2%
55～59 歳	157	120	76.4%	26	16	61.5%
全体	1008	872	86.5%	128	92	71.9%

第2章 現在の生活と老後の生活設計ニーズ

第2章においては本報告書の要約的とりまとめを行う。その内容は、第3章のアンケート調査結果とグループインタビュー調査記録を踏まえたものであり、今回調査の全体を把握するには、第2部も合わせてみていただきたい（第2章以下、アンケート調査とグループインタビュー調査の内容を適宜記載するが、両者のサンプルはそれぞれ独立であることに留意願いたい）。

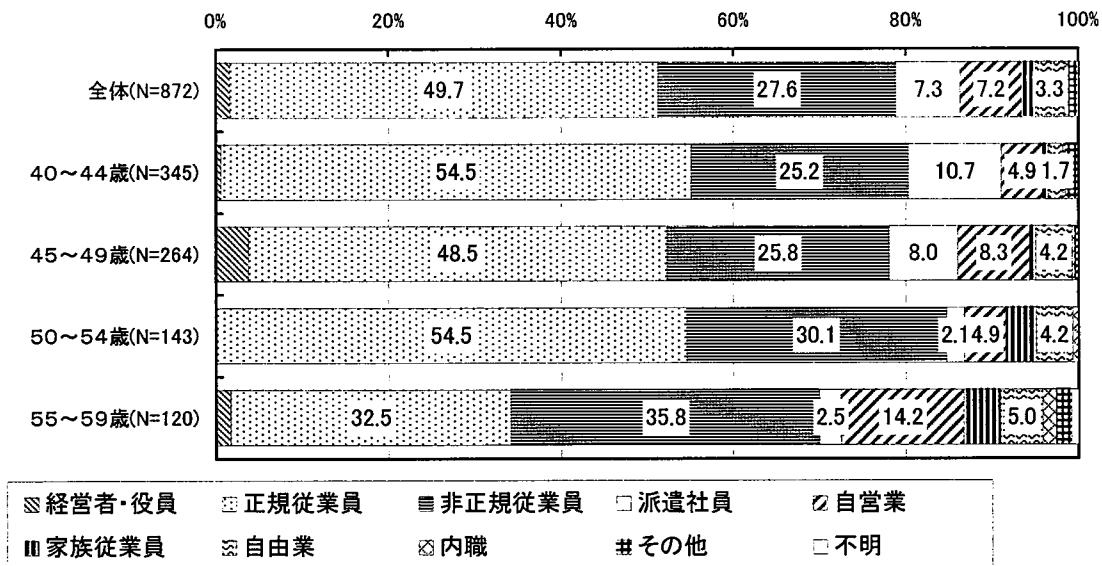
1. 仕事について

(1) 対象者の49.7%が正規従業員

本アンケート調査では、就業者が回答者全体の86.5%であった。このうち、正規従業員は就業者全体の49.7%（回答者全体の43.0%）を占め、非正規従業員が27.6%、自営業と自由業が併せて10.5%であった。

これを年齢階層別にみると、50歳代後半層になると、それ以前の年齢層に比べ、正規従業員が大幅に低下し、一方非正規従業員がやや増え、かつ自営業と自由業の割合が上昇する。これについては、グループインタビュー調査においても、経験、趣味を生かしたい自営あるいは起業したいとの話があった。

図表 2-1-1 従業上の地位（問2）（再掲）

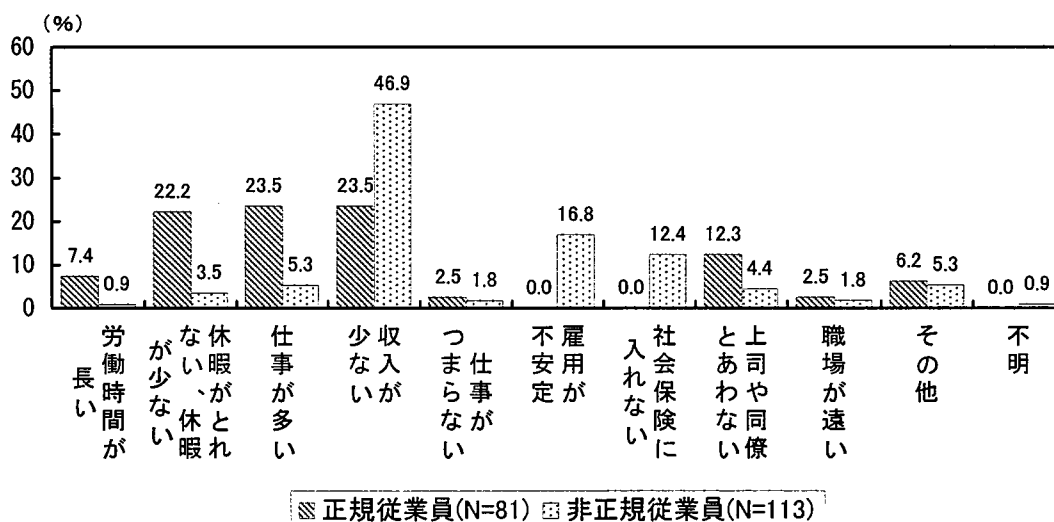


(2) 従業上の地位が、収入を始めとする生活と老後の備えを左右しがち

上記の正規従業員か非正規従業員によって、年収の分布や社会保険の加入状況ひいては老後の備え等へも影響を与えているように伺われる。これらの諸点は、本章「3. 収入等について」と「第3章2（8）補足分析－従業上の地位による仕事と生活」で後述する。

従業上の地位の相違は、現在の仕事にかかわる最大の悩みと不満にも現れている(図表2-1-2)。正規従業員は、収入面でも不満があるが、これと同等に「仕事が多い」や「休暇がとれない」といった就業上のものが大きく、勤務の多忙さといったことが色濃く出た。これに対して、非正規従業員は「収入が少ない」が圧倒的に大きく、さらに「雇用が不安定」、「社会保険に入れない」が続き、これまで指摘されてきた、非正規従業員の置かれた就業面における厳しい立場が、本調査においても確認されたといえよう。

図表 2-1-2 現在の仕事にかかわる最大の悩みと不満 (問2付問2-6-1) (再掲)



(3) 転職経験者の79.6%が、初職において正規従業員であった

職歴についてみると、転職経験者の初職における従業上の地位は正規従業員が79.6%とかなり高い割合であった。その初職の勤続期間は平均で6.4年であった。これに、初職から今まで継続して正規従業員である方(回答者全体の24.2%)を加えると、回答者全体で、初職が正規従業員であった割合は75.4%となる。

転職経験者は回答者全体の52.1%であり、これを現在の従業上の地位別によれば、非正規従業員の転職経験者が82.2%、正規従業員のそれは42.5%である。

(4) 「仕事の内容や職場に不満」で初職を退職したケースが多い

非正規従業員の就業面における厳しい立場を考慮すれば、初職の正規従業員を退職するには相当の理由があると考えられる。そこで、正規従業員としての初職をやめた理由を、非正規従業員と無業者の2グループに分けてみると、前者では、「仕事の内容や職場に不満」といったこととともなう本人の自発的な理由の割合が7割近くに達する。一方、後者では、自発的理由と非自発的理由の各比率がほぼ半々で、非自発的理由では本人の「病気」の割合が高かった。

いずれにしても、初職の退職では、非正規従業員、無業者とも相当の比率で自発的理由によって退職している。それがその後の仕事、収入をはじめ老後の展望までを左右しているものとするれば、なぜこれほど高率で退職するのか、さらに詳しい調査が必要であると思われる。

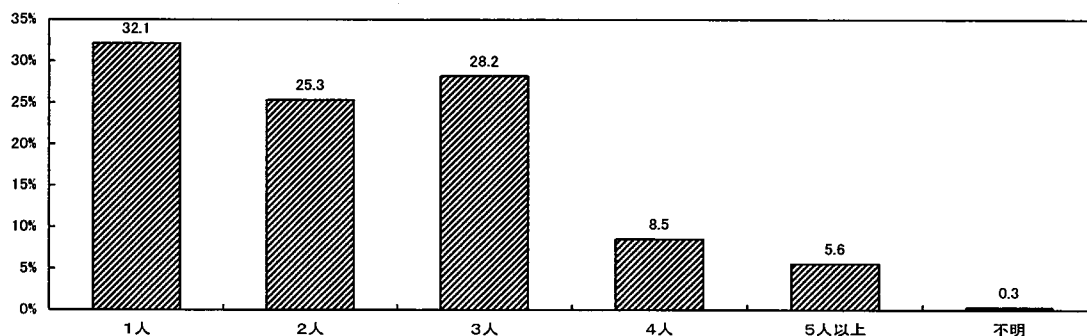
2. 世帯の住居の状況

(1) 1人暮らしの割合は32.1%

世帯人数別の割合をみると（図表 2-2-1）、1人暮らしが32.1%で一番多い。これに3人世帯（28.2%）、2人世帯（25.3%）がほぼ1/4ずつで続く。

地域別にみると、大都市ほど1人暮らしの割合が高くなり（東京都区部 45.4%、政令指定都市 33.5%、左記以外の地域 26.3%）、3人以上世帯の割合が低くなる。また、50歳代後半層になると1人暮らしの割合が高まる。

図表 2-2-1 世帯人数（問6）



(2) 2人以上世帯では、親との同居が約8割（77.4%）

2人以上世帯の同居者別内訳は図表 2-2-2 のとおりで、親と同居する割合が77.4%（全体の52.3%）である。

本人に子どもがいるケースは105件だが、このうち78件が本人と子どものみの世帯であった。これは2人以上世帯の11.5%（全体の7.7%）となる。ただし、本アンケート調査では子どもの年齢を問うていないので、一部に成人した子どもも含まれている可能性がある。

図表 2-2-2 2人以上の世帯の同居者の内訳（問6 問6付問6-1）

同居者の内訳	回答数	割合
親と同居	527	77.4%
うち 親1人と本人のみ	176	25.8%
うち 両親と本人のみ	182	26.7%
うち 親・兄弟姉妹	134	19.7%
うち 親・子ども（兄弟姉妹との同居含む）	25	3.7%
兄弟姉妹と同居（親との同居除く）	38	5.6%
恋人と同居（親・兄弟姉妹との同居除く）	12	1.8%
親・兄弟姉妹・恋人以外と同居	103	15.1%
うち子ども	78	11.5%
不明	1	0.1%
計	681	100.0%

(3) 病気・介護などで援助が必要である(あった)人のいる割合は26.2%

また、援助を必要とする(した)人の約8割は親である。その対処方法では(図表2-2-3)、まず「同居の家族が介護」(29.3%)であり、さらに「病院へ入院」(20.9%)、「仕事をやめて自分で介護」(16.5%)、「ホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用」(15.3%)の順になる。

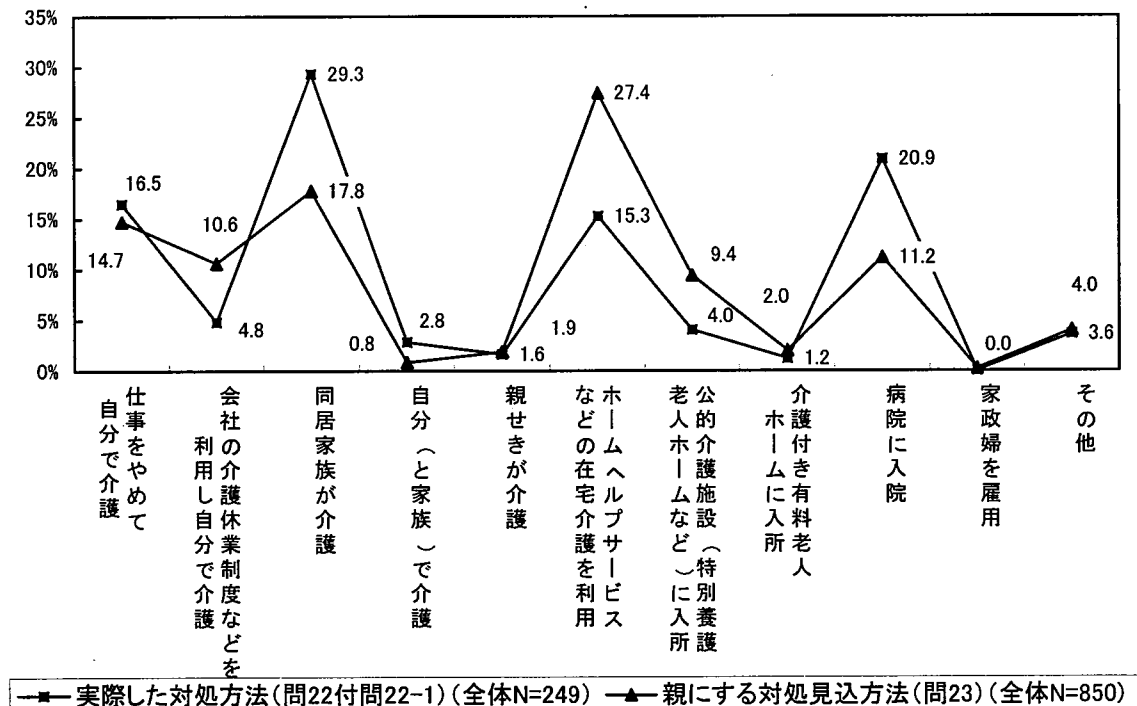
(4) これから親等への援助が必要になる場合では、在宅介護への期待が大きい

これから親等が病気・介護で援助が必要になった場合の主な対処方法の見込については、「ホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用」(27.4%)への期待が大きい(図表2-2-3)。これまでの実際の対処方法と比較すると、相対的に施設ケアの割合が低く、在宅ケアへの期待が大きいことに特徴がある。

ただし、「同居家族が介護」(17.8%)、「仕事をやめて自分で介護」(14.7%)、「病院へ入院」(11.2%)、「会社の介護休業制度などを利用し自分で介護」(10.6%)、「公的介護施設に入所」(9.4%)も一定割合ある。

これからの対処方法において、在宅介護や会社の介護休業制度を利用するとの回答割合が高くなることには、介護保険サービスの普及、企業サイドにおける介護支援制度の拡充などが反映しているとみることもできよう。

図表2-2-3 病気・介護で援助が必要な方への実際の対処方法(問22付問22-1)と、これから援助をする場合の対処方法の見込(問23)との比較(再掲)



注：回答率は、回答より有効回答でない「不明」・「親はいない」(問23のみ)を除いて算出

3. 収入等について

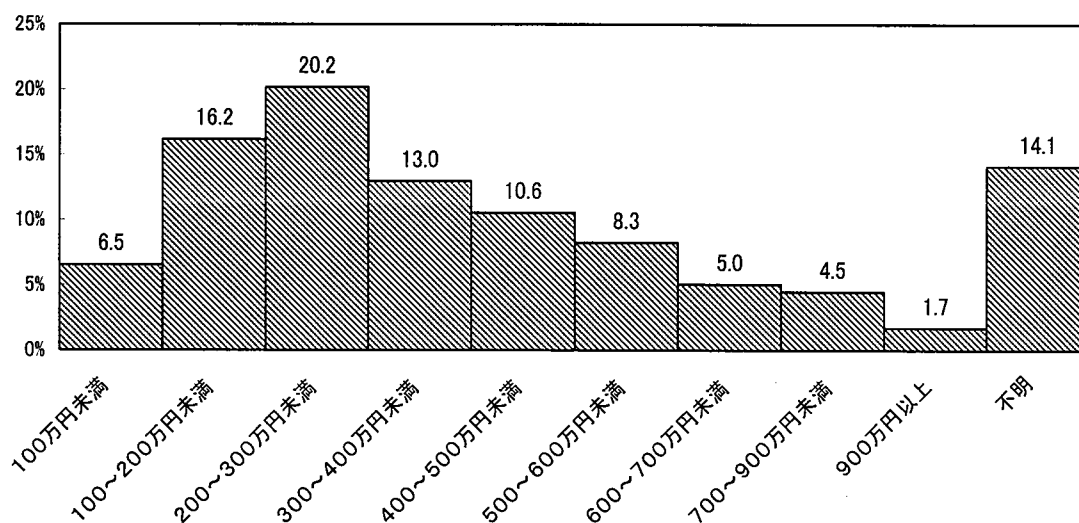
(1) 本人の仕事による年収は、「200～300万円未満」が20.2%で一番多い

図表2-3-1のとおり、本人の仕事による年収は、「200～300万円未満」の層が20.2%で最多であるが、全体では100万円未満～600万円未満の間に幅広く分布している。

また世帯の年収では、やはり「200～300万円未満」(18.1%)が一番多いが、全体では100万円未満～1,500万円未満の間に幅広く分布している。

世帯収入を世帯構成別にみると、最多となる所得帯は、ひとり暮らしで「200～300万円未満」(23.1%)、親との同居で「600～800万円未満」(15.7%)である。年齢層別では50歳代後半層になると、収入の分布が総じて低い方へ移動する。

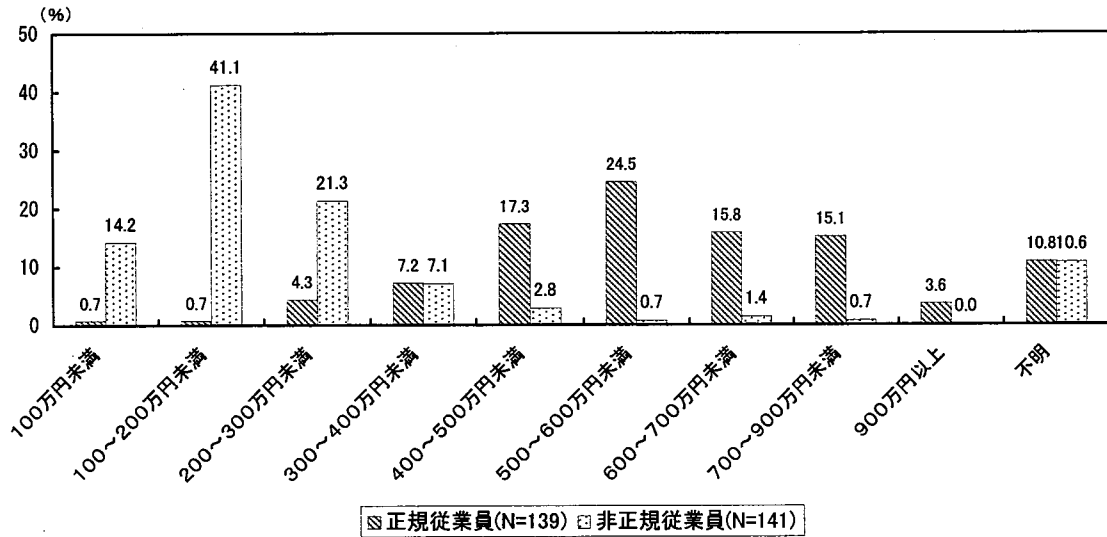
図表2-3-1 過去1年間の仕事による収入(問8付問8-2)



(2) 従業上の地位別・本人の年収(最多帯): 正規従業員は「500～600万円未満」。非正規従業員は「100～200万円未満」

本人の仕事による年収は、従業上の地位によって大きく異なる。これを、図表2-3-2の、所得帯の分布状況で見ると、正規従業員が「500万円～600万円未満」で24.5%と最も多く、400万円～900万円未満で7割を占めている。一方、非正規従業員には年収「100万円未満」の層が14.2%も存在し、最多所得帯は「100万円～200万円未満」の41.1%、100万円～300万円未満で6割となる。

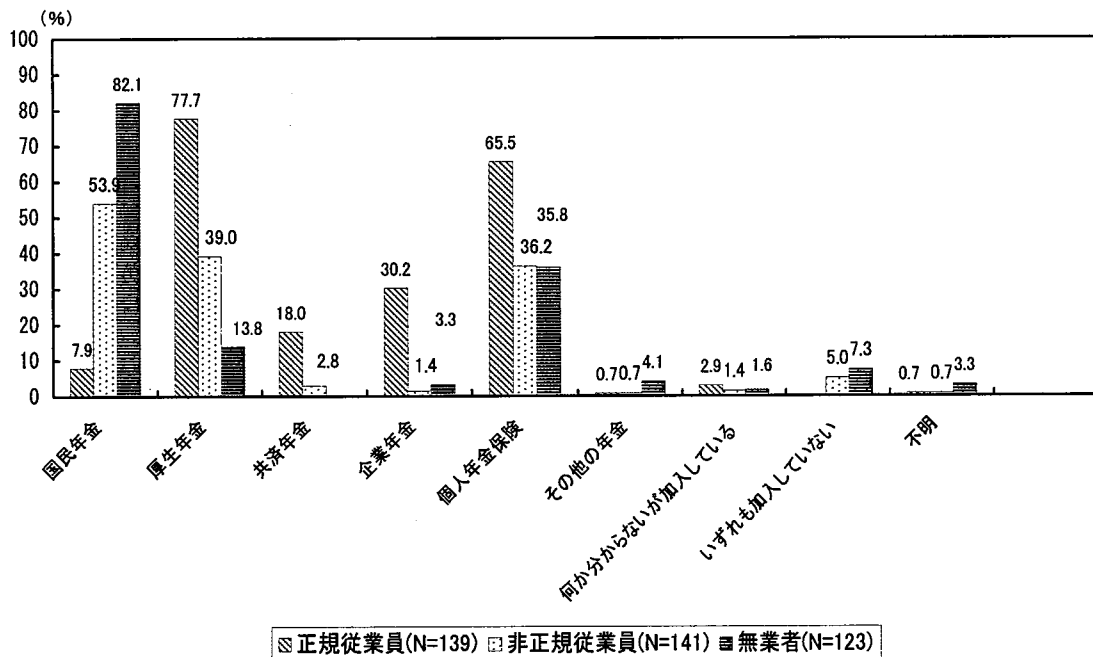
図表 2-3-2 過去1年間の仕事から得た収入（問8付問8-2）（再掲）



(3) 全体の93.5%がなんらかの公的年金に加入している

老後生活への備えについて従業上の地位別にみると（図表 2-3-3）、正規従業員においては「厚生年金」、「共済年金」の他「企業年金」に30.2%が加入している。さらに、自助努力による「個人年金保険」の加入率が高い。非正規従業員は、「国民年金」が主たる制度だが、「厚生年金」にもそれなりに加入している。しかし、当然のことながら、「企業年金」はほぼ増外で、正規従業員にくらべると「個人年金保険」への加入率が半分強となっている。

図表 2-3-3 加入年金（複数回答）（問9）



(4) 老後のための資産額は平均 21.7 百万円。一方で、何の準備もなしが 20.8%である

老後の生計資金のための貯金・保険・有価証券などの金融資産・貯金の平均額は 21.7 百万円であり、その最大の資産額帯は、「1,000～1,500 万円未満」である。

従業上の地位別にその最大資産額帯をみると、正規従業員で「1,000～1,500 万円未満」(24.2%)、非正規従業員で「500 万円未満」(26.2%)、無業者で「1,000～1,500 万円未満」(17.3%)である。また、老後の生計資金向けの資産形成を何もしていないとの回答が 20.8%もあり、これを従業上の地位別にみると、正規従業員で 7.2%、非正規従業員で 26.2%、無業者で 30.1%であった。

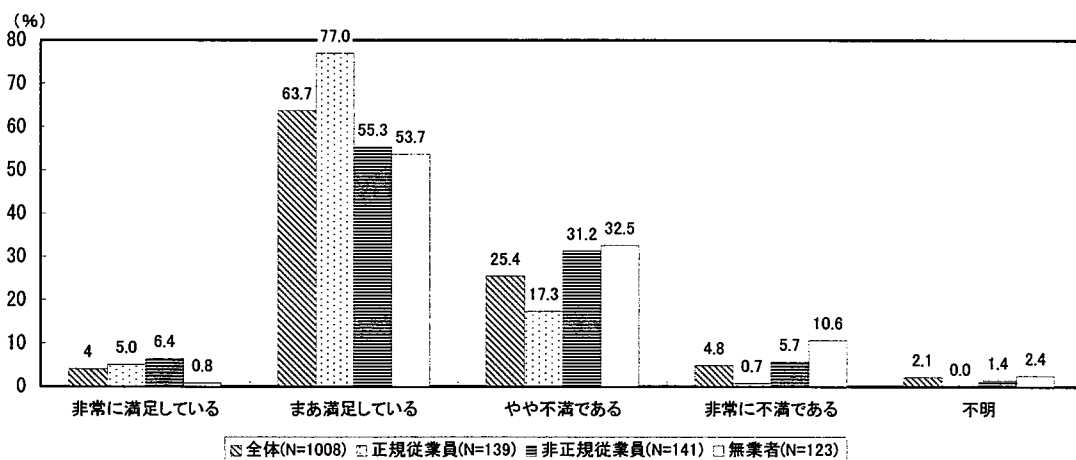
4. 社会関係と生きがい

(1) 全体の 67.7%が今の生活に満足している。これは、仕事面・経済面の満足度と相関度合いが高い

いまの生活全体の満足度については、「非常に満足している」・「まあ満足している」・「やや不満である」・「非常に不満である」の 4 つの選択肢で問うたところ、全体では「非常に満足」(4.0%)、「まあ満足」(63.7%) で合わせて 67.7%が今の生活に満足している。また生活の各領域についても満足度を聞いているが、そのうち「収入」、「資産・貯蓄」に対する満足度と生活全体のそれとの相関関係が高い。

また、従業上の地位別に生活全体の満足度をみると(図表 2-4-1)、満足している合計回答割合は、正規従業員で 82.0%、非正規従業員で 61.7%、無業者で 54.5%となっている。

図表 2-4-1 生活全体の満足度 (問 19) (再掲)



さらに、最も充実感を感じるのは、「趣味やスポーツに熱中している時」(21.7%)、「ゆったりと休養している時」(19.6%)の順となっている。

(2) 生活の領域別満足度では、家族や友人との関係に対する満足度が非常に高い

生活の各領域、すなわち仕事の内容、職場の人間関係、収入、資産・貯蓄、趣味やスポーツ活動、家族、友人、恋人、地域・近隣の人間関係、それぞれの満足度を聞いたところ、家族と友人の「非常に満足」・「まあ満足」の合計回答率がそれぞれ79.8%、85.9%と非常に高かった。他の領域では、収入、資産・貯蓄を除くと、概ね7割が満足している。一方、収入、資産・貯蓄では、「やや不満」・「非常に不満」を合わせた不満との合計回答割合が7割と高い。

(3) お付き合いで最も親しい関係にあるのが、家族と友人である

お付き合いの親密度においては、「非常に親しい」・「まあ親しい」の合計回答が高いのは、家族（1人暮らし76.3%・親と同居90.3%）と友人（79.7%）であり、この結果から見る限り、この両者がお付き合いの中心をなしている。また、親せき、現在の職場の同僚との親しい合計回答はともに5割程度で、総じてそこそこのお付き合いのようである。

一方、近所の人との親しさにおいては、「あまり親しくない」・「全く親しくない」の合計回答率が、全体で51.2%あり、特に1人暮らしでは65.1%であった。グループインタビューにおいて、集合住宅での1人暮らしの場合、近隣との付き合いが薄く、付き合いはせいぜい挨拶程度になる、との話しが散見された。

(4) 独身であることのメリット：時間が自由に使えること

グループインタビューにおいて、独身であることのメリット・デメリットを訊いたところ、メリットについては、家族などに時間を取られることがない、自分の時間に制約が少なく、時間が自由に使えることを挙げるケースが大半であった。こうした時間の使い方の裁量度が高いことも、生活満足度の高い要因と思われる。

一方、デメリットでは、社会が男性中心であること、男性が主たる家計の稼ぎ手であることが暗黙の前提とされていること、社会保障制度が核家族中心であること、などがあつた。

5. 老後への展望

(1) 老後生活の世帯の見込みは、1人暮らしが32.5%、わからないが33.0%である

老後の住まいで、だれと暮らすことを考えているか聞いたところ、全体では「1人暮らし」が32.5%、「わからない」が33.0%である。年齢階層で見ると、50歳代後半層では「1人暮らし」50.3%で、「わからない」が19.1%であった。こうした結果をみると、今後1人暮らし高齢者に向けた各種の生活支援策が一層必要になると考えられる。

以上のことについては、グループインタビュー調査でも、事故を起したときに保険証やお金の引き出しなど、代行してくれる「非常に身近な人がいないということを痛感した。1人でいることを痛感しました。」という話があつた。

(2) 老後の住まい：40.6%が持ち家（含む相続）の見込み

老後の住まいの意向は、全体では、現在の住まいに継続居住が38.6%、転居は21.7%であるが、一方「わからない」も38.7%と高い割合である。

これを住居の保有形態別にみると、将来、親族からの相続見込も含めて、老後の住まいの見込みの40.6%が持ち家となる。また親族保有の家への同居が29.4%である。一方、自立型共同住居（終身利用の有料老人ホームなど）への居住意向は、極めて少なく選択割合は3.6%であった。

(3) 老後生活費（見込）で最多の回答は、月額「15～20万円未満」（34.9%）

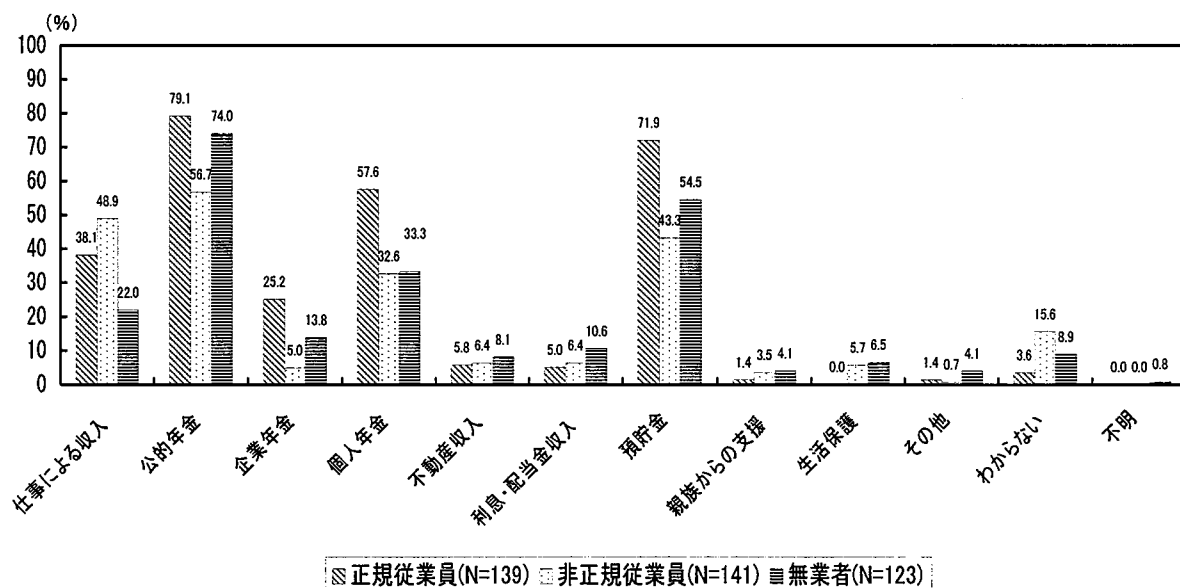
60歳以降（退職後）における生活費の見込み（扶養・住宅ローン支払・医療・教養・娯楽費など含む）は、月額「15～20万円未満」が34.9%で最多である。次は「10～15万円未満」（26.5%）であった。この見込み額が、現在の仕事による年収にかかわらず、相当割合で10～20万円の範囲内に収まるところに特徴がある。

(4) 老後の主たる収入源：正規従業員は「公的年金」、「預貯金」、「個人年金」。非正規従業員は「公的年金」、「仕事による収入」、「預貯金」

老後の収入源について正規従業員と非正規従業員を比較すると（図表2-5-1）、正規従業員に比べ非正規従業員は、「公的年金」、「預貯金」、「個人年金」の選択割合が低い一方、「仕事による収入」の割合が高くなっている。非正規従業員はそれだけ制度や過去の蓄積に頼れる度合いが小さく、就労に依存せざるを得ない様子が伺われる。

このことは、グループインタビュー調査でも現れた。すなわち、60歳以降も生計費を得るため健康なうちは仕事を続けたいとの意向を示す方が多かった。これに関連し、これまでの転職・就業の中断などにより、60歳時点では国民年金の受給資格を満たさず、年金を受給できるかどうか分からない、そうした不安があるため、仕事を続けて老後の生計費を稼がなければならないという話があった。

図表 2-5-1 老後の収入源（問26）（複数回答）（再掲）



(5) 自分の要介護等では、「公的介護施設に入所」、「在宅介護の利用」、「病院への入院」を希望

60歳以降（退職後）、自分自身が病気・介護などで援助が必要になった場合の対処方法見込みについてみると、全体では「公的介護施設（特別養護老人ホームなど）に入所する」が38.7%、「自宅でホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用する」が37.7%と、両者はほぼ同程度の割合となった。これに「病院に入院する」（31.8%）を加えた3つが主たる対処方法であった。

その次は「介護付き有料老人ホームに入所する」（15.9%）だが、この選択肢は、年収が高い層ほど、その選択割合が高かった。

6. 政策への思いと期待

アンケート調査票の「行政に望むこと」という自由記載欄への回答は、およそ政策等への思いといった内容と要望とに大別できる。この両者を、それぞれの対象分野ごとにまとめたものが図表2-6-1である。

(1) いまの生活に関連して：「税金の軽減」が最大の期待

「その他」を除くと、「税金の軽減」に分類されるものが136件（記載件数全体の19.7%）と最大であった。これに関連し、「税金の無駄遣いをやめて欲しい」も49件（同7.1%）あった。雇用の安定・確保の記載数は第2位であった。

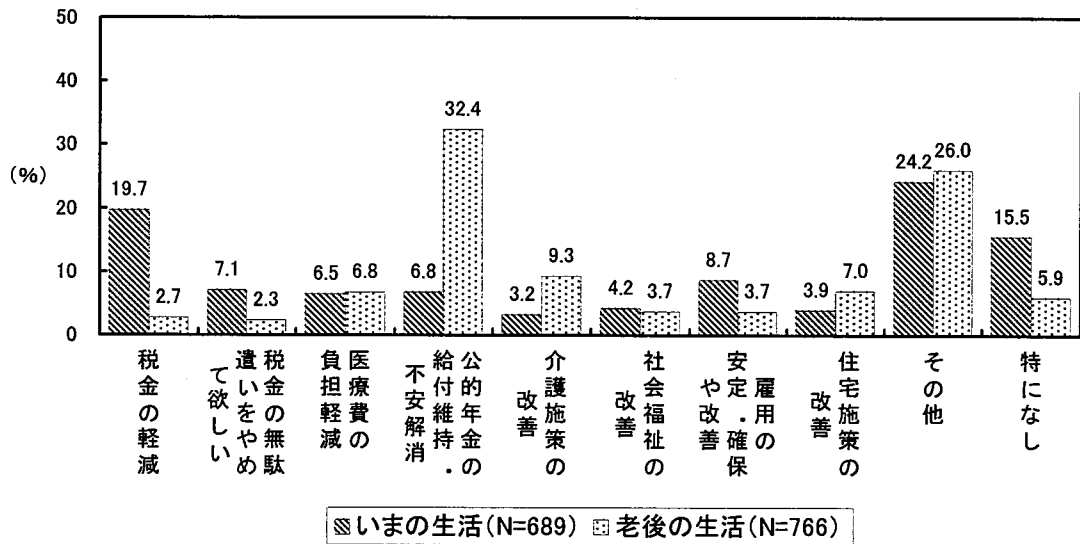
(2) 老後の生活：「公的年金」が最大の関心

老後の生活に関しては、やはり「その他」を除くと、「公的年金の給付維持・不安解消」にかかわる要望件数が32.4%と3割を超えて圧倒的であった。次が「介護施策の改善」である。

特に「公的年金」に関しては、グループインタビュー調査においても、「保険料を納めても、将来年金がもらえないかもしれない」や、「当てにできない」などの不安の声がたびたび聞かれた（東京第1回調査ほか）。また、その一方では、「もっと早くにちゃんと勉強するとか、だれかが教えてくれればよかった」と悔やむ声もあった（東京第2回調査）。

このように公的年金制度への不安、そしてその裏返しである制度安定への期待が非常に大きいことから、今後、制度の理念や仕組みに関する地道な周知や、若い年代からの充実した年金教育の実施などが是非とも必要であると思われる。

図表 2-6-1 行政への要望事項 (問 28)



7. 政策的インプリケーション

今回調査においても、改めて認識せざるを得ないことは、独身女性（40～50代）のライフコースと生活が実に多様だ、ということである。初職から今日にいたる職歴、家族関係と同居の有無などが、現在の生活に、そして老後の生活展望へも少なからぬ影響を及ぼしている様子である。

このことから、独身女性の置かれた現実の環境条件を前提に、可能なかぎり就業条件を改善していくことが求められよう。現在の就業条件の改善は、今の生活を向上させるだけでなく、たとえば老後生活への所得保障にも繋がっていくものでもある。また、ライフコースにおける選択肢が多いこと自体は望ましいといえようが、その選択肢が真の選択肢でなければ意味がないとも言え、とりわけ女性にとっての正規従業員としての役割見直しが期待されるだろう。

以下は、今回調査におけるアンケート調査、グループインタビュー調査の結果、そして研究会委員の先生方の論文、コメントを踏まえ、政策的インプリケーションとして絞り込んだものである。

(1) 非正規従業員の処遇の改善を

非正規従業員としての労働条件が厳しいものであることから、本人の努力しだいで正規従業員に転換できる仕組みの整備が重要である。また、非正規従業員としても社会保険への適用拡大が図られてしかるべきであろう。

(2) 初職としての正規従業員職を維持しうる工夫

正規従業員としての初職から転職するケースが多いことについて、改めて見直す必要があると考えられる。働き甲斐、仕事での役割、それに密接に関連する働く意欲といった観点から、女性の仕事について男性と同等の機会が提供される必要があるだろう。

(3) 社会保障制度への信頼感の回復

今回調査対象者からは、社会保障制度に対する不満、不安の声が多々上げられた。これらの多くは、制度の先行きへの漠然とした不安等ではあるものの、不安なままでの生活を見過ごすべきではなく、それに対する信頼感の回復を極力図る必要がある、そのためには年金制度を始めとする社会保険等について、一層の周知、情報提供が求められよう。

第3章 アンケート調査結果の概要

1. アンケート調査の概要

(1) 調査の目的

今回の調査の目的は、40～59歳の独身の中高年女性を対象に、現在の仕事を中心とする生活と将来の生活設計ニーズの把握に置いた。

(2) 調査項目の構成

アンケート調査票は、調査目的に沿って全体を大きく7つに区切り、それぞれに該当する問を設けた。その区切りとは、「お仕事について」、「ご家族・家計について」、「お住まい」、「いまの生活」、「老後の生活」、「行政に望むこと」、「ご自身について」の7つである。

(3) 調査対象者と調査票の送付

調査対象者のサンプル抽出が困難なため、サンプリングにかかわる無作為性の問題があるものの、調査委託を行う株式会社インテージの有する調査モニターから本調査の対象者に該当するモニターを抽出し、それらの方々へアンケート調査票を郵送した。

(4) 調査票の回収状況

総発送数 1,250 件：有効回収件数 1,008 件。有効回収率 80.6%

(5) アンケート調査票への回答方法と調査結果の数値について

設問への回答方法には、単数回答（1つだけ選択する回答）と複数回答（2つ以上を選択する回答）及び数値の記入がある。

調査結果の数値は、原則としてパーセンテージ（%）で表記した。%値の分母は、原則として各質問項目の該当標本数（その有効回答総数）であり、分子はその各設問への回答数である。%値は小数点以下第2位を四捨五入した（したがって、回答合計には端数の生じることがある）。

2. アンケート調査結果の概要

(1) 対象者の基本的属性

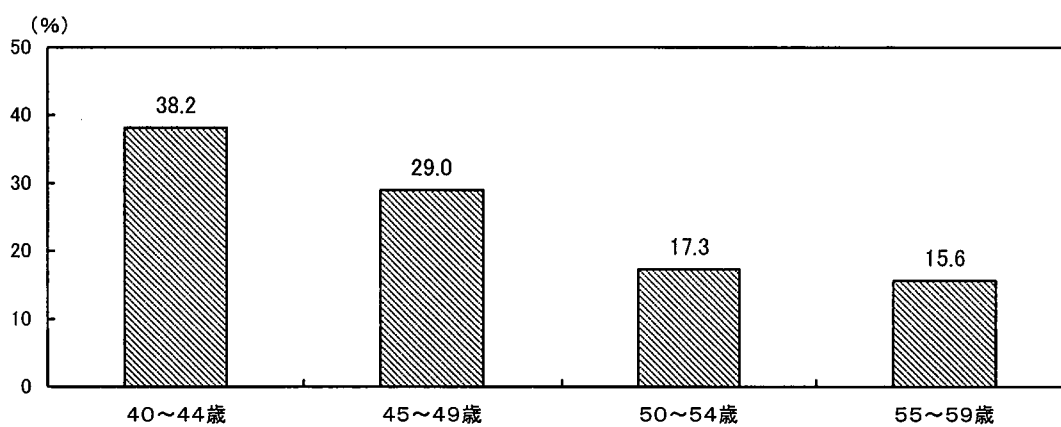
今回アンケート調査における回答者の基本属性にかかわるデータは以下のとおりである。

a. 年齢

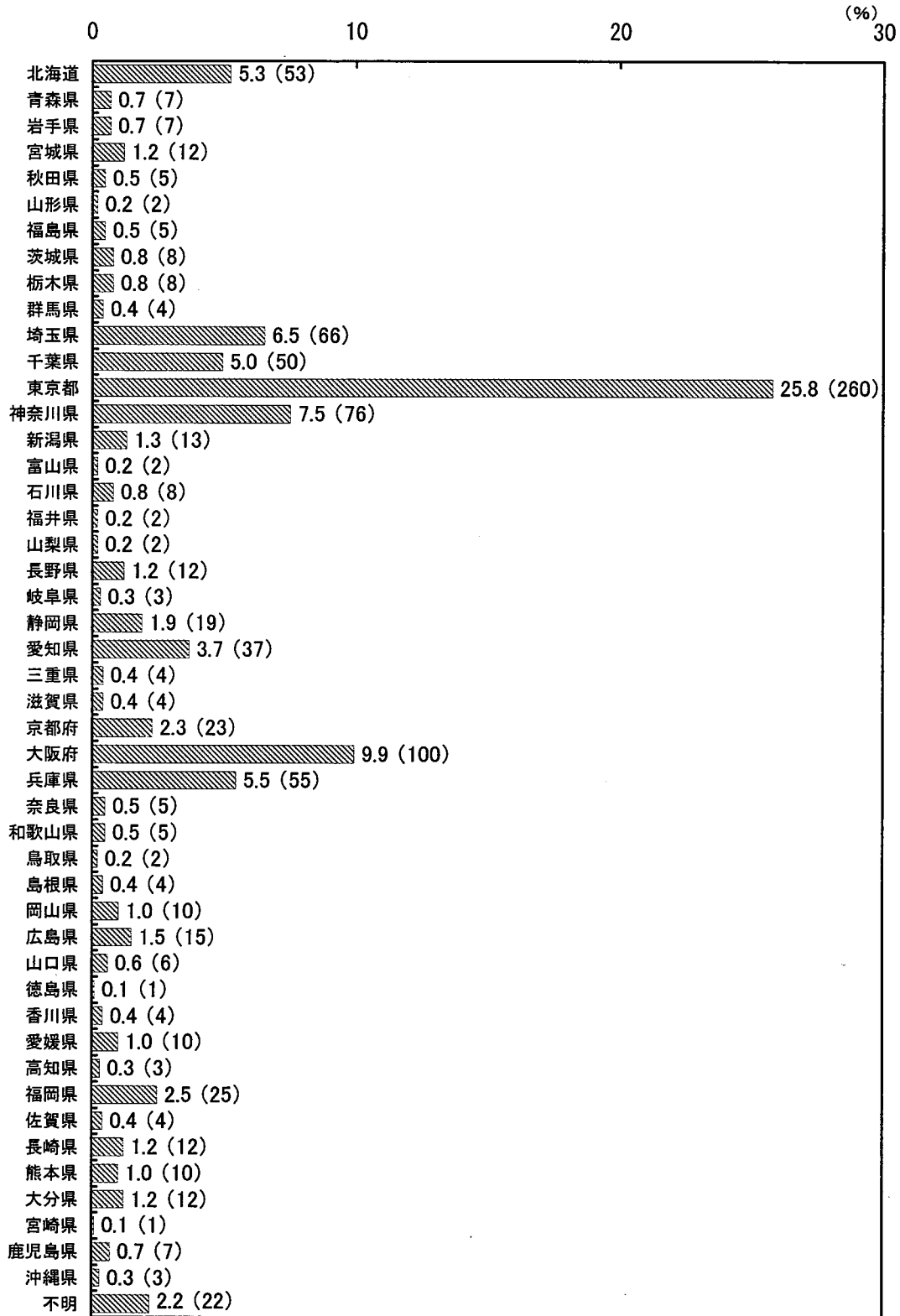
5歳刻みの構成比は下表のとおりであるが、大きく括ると40歳代で67.2%、50歳代で32.9%である。

(単位：人・%)

年 齢	40～44歳 (40歳代前半層)	45～49歳 (40歳代後半層)	50～54歳 (50歳代前半層)	55～59歳 (50歳代後半層)	合 計
対象者数	385	292	174	157	1,008
割 合	38.2	29.0	17.3	15.6	100.0



b. 居住地



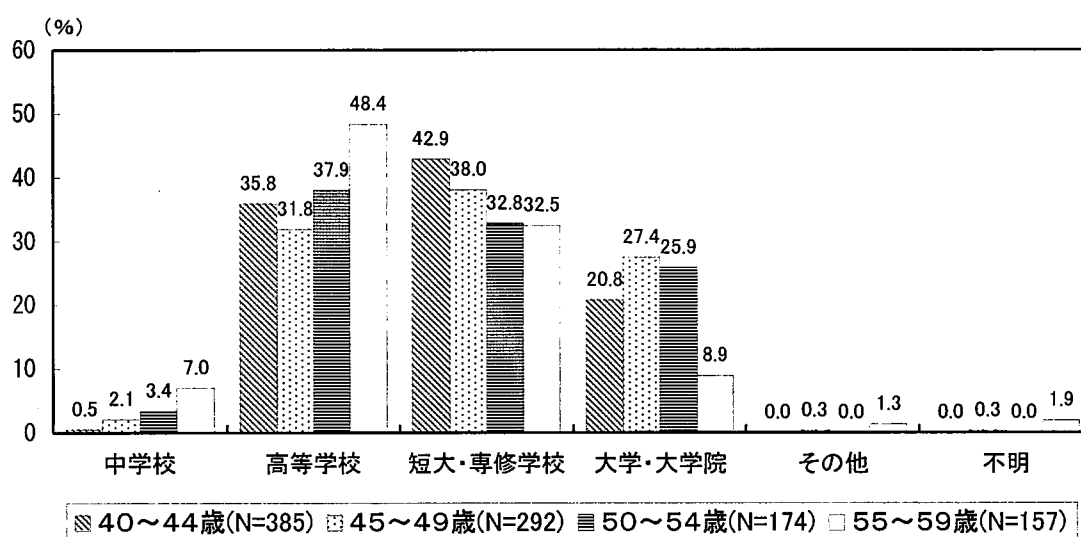
(注) ()は回答者数

c. 最終学歴

サンプル全体では、高卒 37.0%、短大卒 38.1%、大卒 21.7%である。

(単位：人・%)

		中学校	高等学校	短大・ 専修学校	大学・ 大学院	その他	不明	合計
40～44歳	対象者数	2	138	165	80	0	0	385
	割合	0.5	35.8	42.9	20.8	0.0	0.0	100.0
44～49歳	対象者数	6	93	111	80	1	1	292
	割合	2.1	31.8	38.0	27.4	0.3	0.3	100.0
50～54歳	対象者数	6	66	57	45	0	0	174
	割合	3.4	37.9	32.8	25.9	0.0	0.0	100.0
55～59歳	対象者数	11	76	51	14	2	3	157
	割合	7.0	48.4	32.5	8.9	1.3	1.9	100.0
合計	対象者数	25	373	384	219	3	4	1,008
	割合	2.5	37.0	38.1	21.7	0.3	0.4	100.0

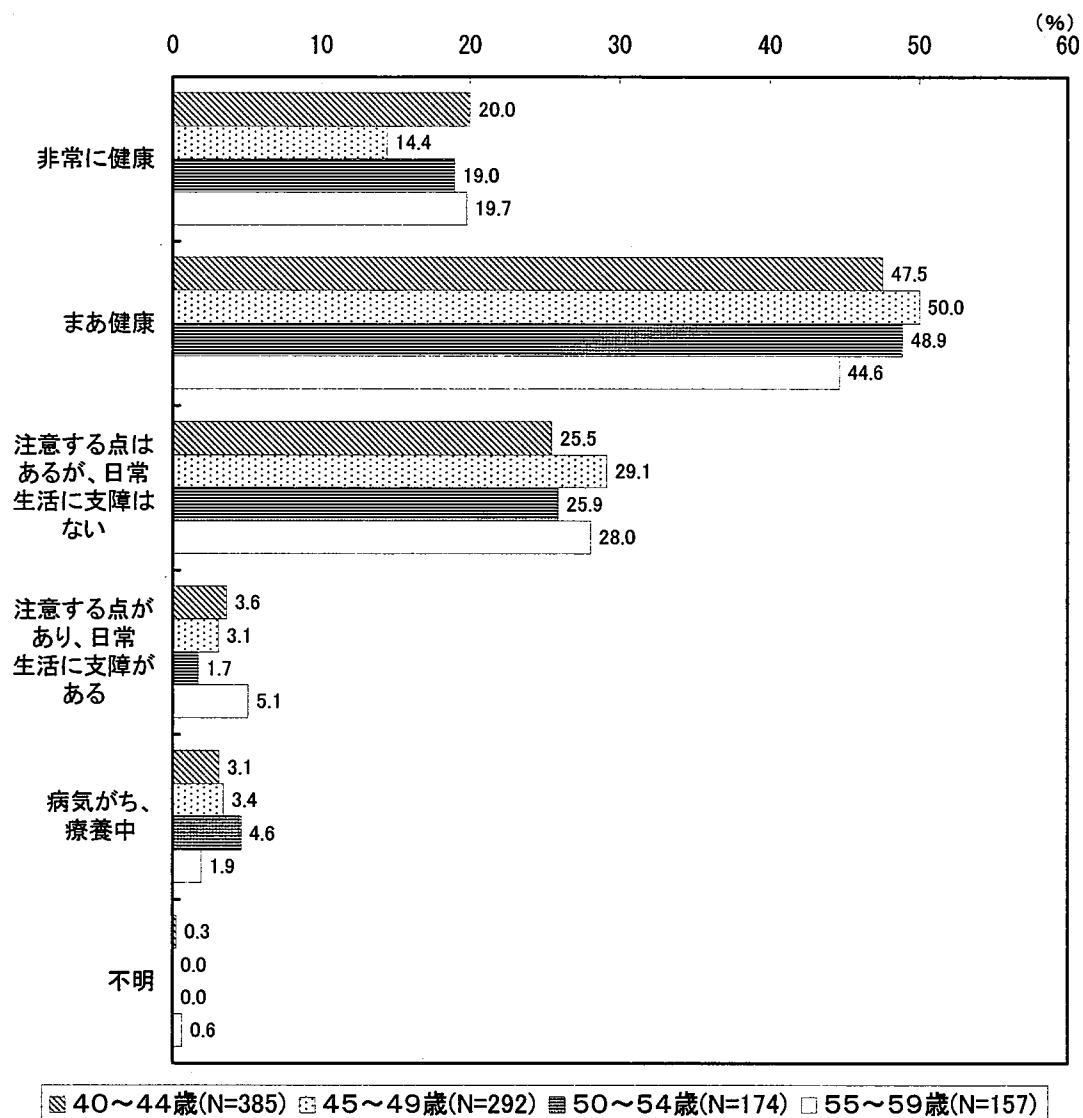


d. 健康状態

健康状態は、年齢による差がほとんどみられず、全体で見ると健康（「非常に健康」、「まあ健康」）が 66%程度、これに「日常生活に支障がない」を加えれば 93%に達し、おおむね健康といってよいようだ。ただし、健康に問題のある方々（「日常生活に支障がある」、「病気がち、療養中」）が 7%いる。

(単位：人・%)

		非常に健康	まあ健康	注意する点はあるが、日常生活に支障はない	注意する点があり、日常生活に支障がある	病気がち、療養中	不明	合計
40～44歳	対象者数 割合	77 20.0	183 47.5	98 25.5	14 3.6	12 3.1	1 0.3	385 100.0
44～49歳	対象者数 割合	42 14.4	146 50.0	85 29.1	9 3.1	10 3.4	0 0.0	292 100.0
50～54歳	対象者数 割合	33 19.0	85 48.9	45 25.9	3 1.7	8 4.6	0 0.0	174 100.0
55～59歳	対象者数 割合	31 19.7	70 44.6	44 28.0	8 5.1	3 1.9	1 0.6	157 100.0
合計	対象者数 割合	183 18.2	484 48.0	272 27.0	34 3.4	33 3.3	2 0.2	1,008 100.0



(2) 職業生活

この区切りでは、今の生活の主要な部分を占めるであろう、現職とこれまでの職歴等にかかわる状況を見る。

a. 現在の職業

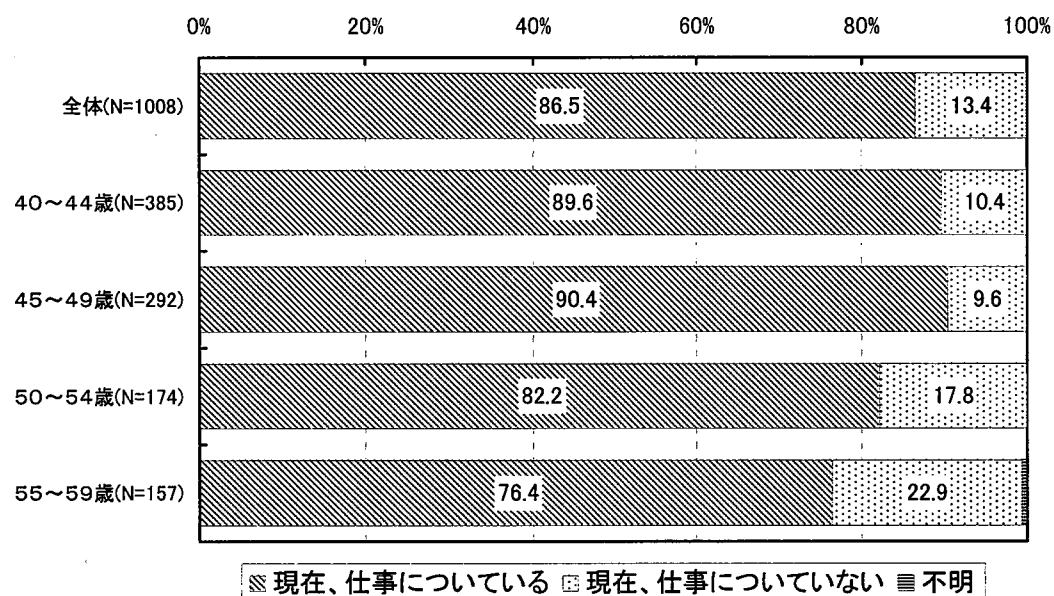
ここでは、独身の中高年女性が、どのような職業に従事し、どのような就労状況にあるのかを取り上げる。具体的には、現在の就業状況、そして現在の職業に関する就業形態、企業規模、仕事の内容、勤続期間、就労条件、入職経路、悩みや不満である。

(i) 現在の就業状況 (問 1)

まず、現在の就業状況であるが (図表 3-2-1)、回答者全体では 9 割近く (「仕事についている」(86.5%)) が職業を有する。

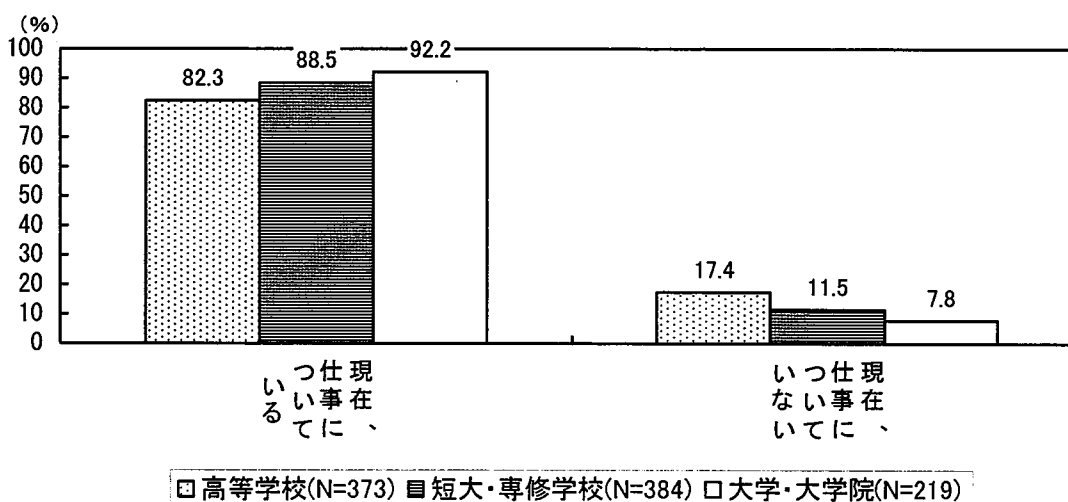
就労状況を年齢別でみると、40 歳代が 9 割前後であるのに対して、50 歳代前半層では約 8 割、50 歳代後半層では 7 割台と、年齢が上がるにつれ就業割合が低下している。

図表 3-2-1 就業状況 (問 1)



次に、これを学歴別でみると中学校卒のサンプル数が小さいため、高卒、短大卒、大卒で見ると、図表 3-2-2 のとおり、「高卒」(82.3%) から「大卒」(92.2%) と、学歴が上がるにつれ就業割合がゆるやかに上昇している。

図表 3-2-2 就業状況 (問 1—学歴別)



(ii) 従業上の地位 (問 2)

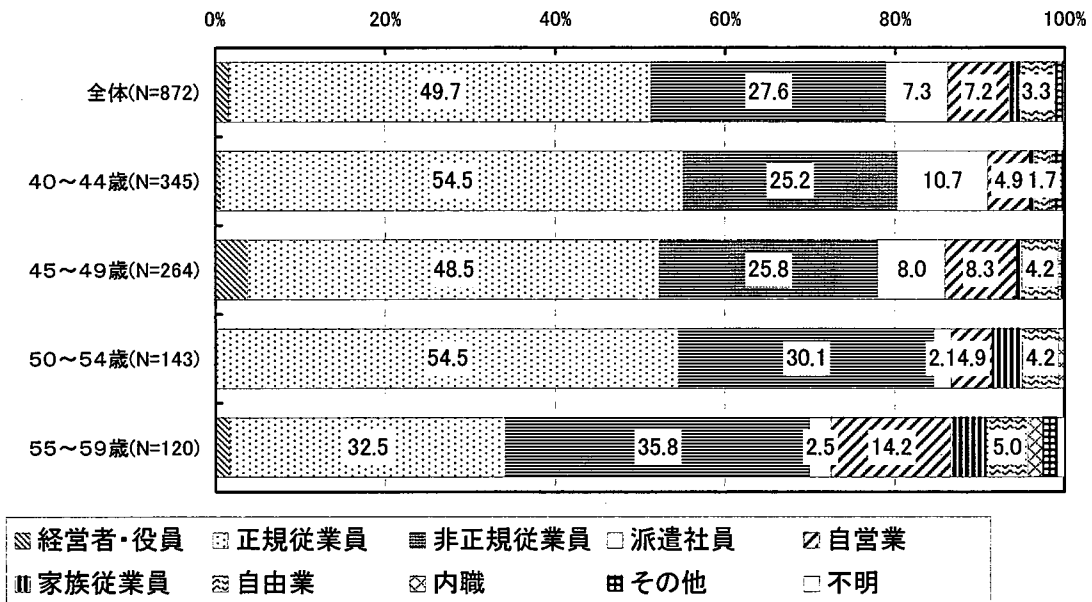
問 1 において「現在、仕事についている」方を対象に、問 2 では従業上の地位とその関連事項を聞いた。

そこで、従業上の地位であるが(図表 3-2-3)、「正規従業員」が就業者全体の約 5 割 (49.7%) を占める。「非正規従業員」は 3 割近く (27.6%) で、「自営業」(7.2%) と「自由業」(3.3%) が併せて約 1 割となっている。

年齢別で見ると、40 歳から 54 歳までの層では全体の割合とほぼ同様である。ただし、50 歳代後半層になると、「正規従業員」が約 3 割へと大幅に低下し、一方で「非正規従業員」(35.8%) が相対的にやや増えていることに加えて、「自営業」(14.2%) と「自由業」(5.0%) が併せて約 2 割へと増加している。

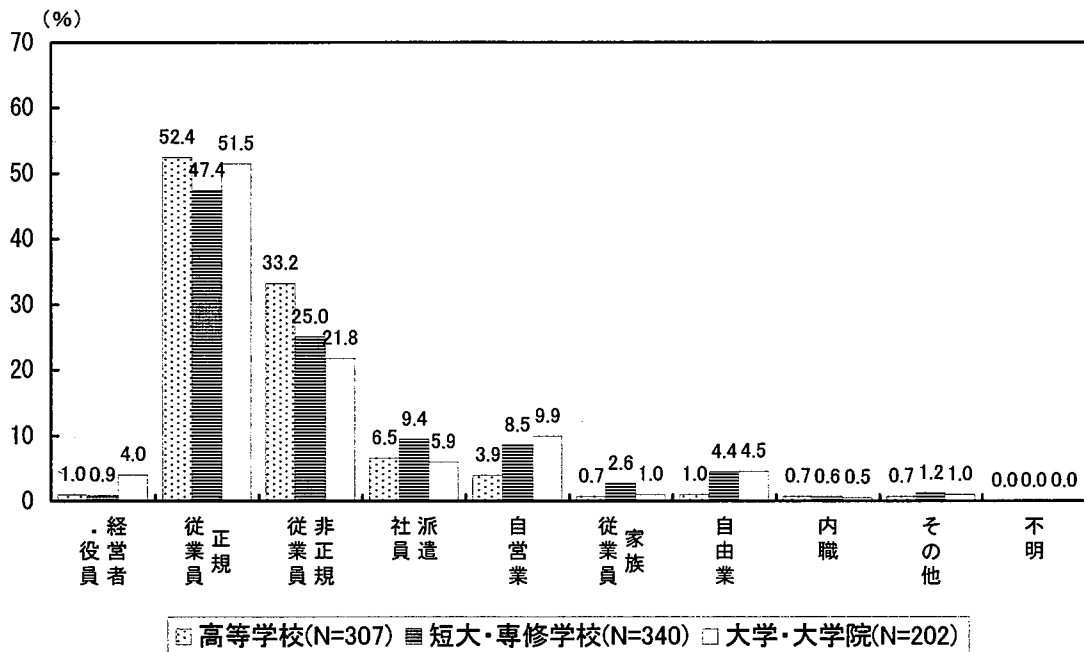
注：従業上の地位等によって、収入をはじめ生活全般に差異を生ぜしめることから、その主たる集計分析は「(8) 補足分析—従業上の地位による仕事と生活」にまとめた。

図表 3-2-3 従業上の地位 (問 2)



また、学歴別では (図表 3-2-4)、「正規従業員」に特段大きな差異はみられないものの、「非正規従業員」は「高卒」(33.2%)で、「自営業・自由業」は短大卒以上で、他の学歴層に比べそれぞれやや高くなっている。

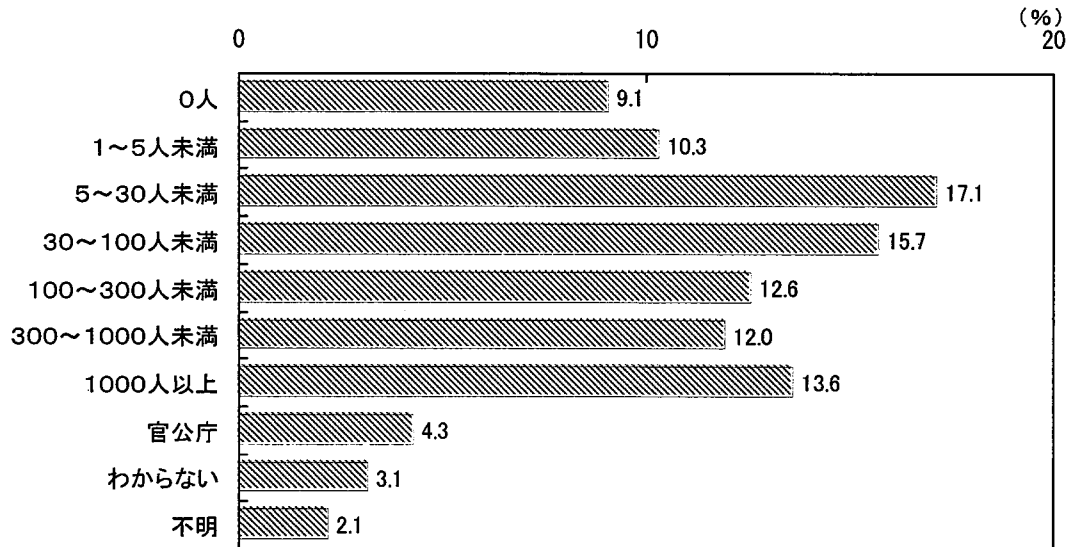
図表 3-2-4 従業上の地位 (問 2-学歴別)



(iii) 勤務先等の従業員規模 (問 2 付問 2-1)

勤務先等の企業規模別分布は図表 3-2-5 のとおりであるが、これを大きく括ってみると「1,000 人以上・官公庁」(17.9%)、「1,000 人未満」(76.8%)、「300 人未満」(64.8%)、「30 人未満」(36.5%) となっており、中堅中小企業が大半を占めている。

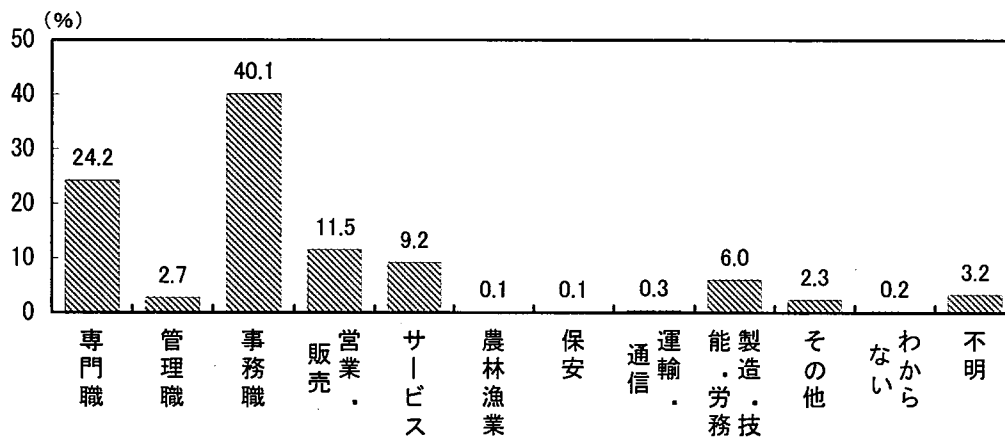
図表 3-2-5 従業員数・雇用者数 (問 2 付問 2-1)



(iv) 仕事の内容 (問 2 付問 2-2)

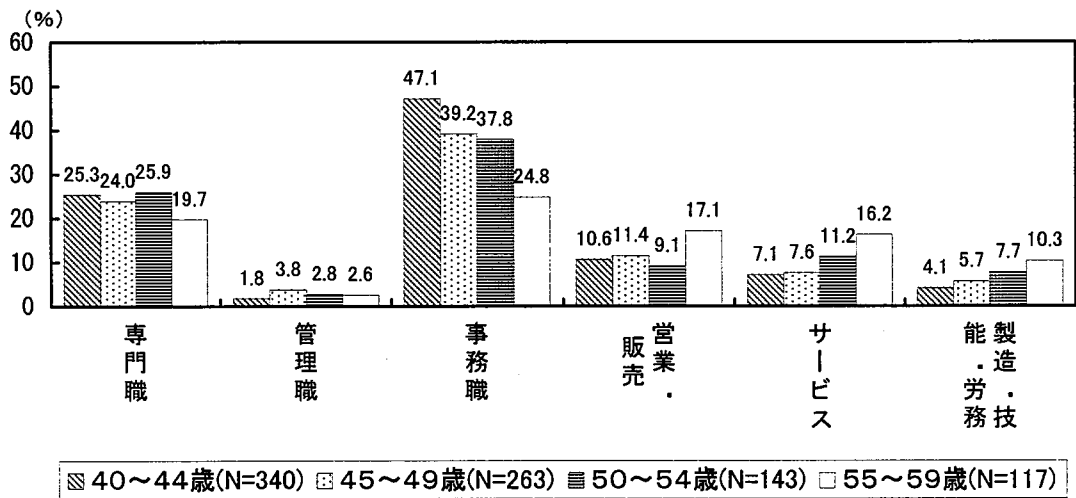
続いて、就業者が従事する職種をみると (図表 3-2-6)、「事務職」が 4 割 (40.1%) と他の職種を引き離して最も多く、次いで「専門職」(24.2%) がこれに続く。事務職、専門職に「管理職」(2.7%) を併せたいわゆるホワイトカラー系の職種では、就業者全体の 7 割近くを占める。

図表 3-2-6 仕事の内容 (問 2 付問 2-2)



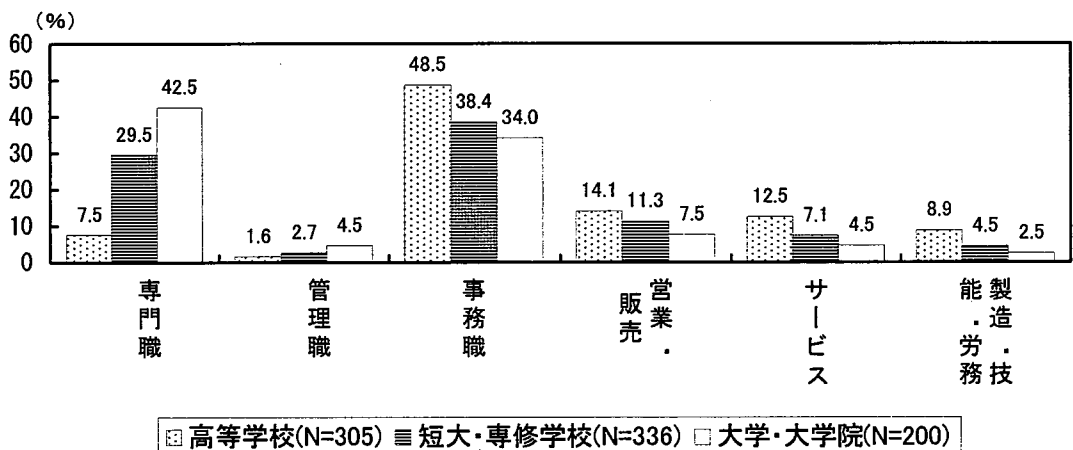
年齢別では（図表 3-2-7）、50 歳代後半層が、ほかの年齢層と比較すると、ホワイトカラー系の職種で大幅に低下し、「営業・販売」や「サービス」の割合が増加する。この点については、当該層の正規従業員比率が低下すること（図表 3-2-3）と、何らかの関係があるのかもしれない。

図表 3-2-7 仕事の内容（問 2 付問 2-2—年齢別）



また、学歴別では（図表 3-2-8）、ホワイトカラー系の職種の割合が、「高等学校」（57.6%）から「大学・大学院」（81.0%）と、学歴が上がるにつれ大幅に上昇する。これは、特に専門職においてその傾向が著しいことによる。

図表 3-2-8 仕事の内容（問 2 付問 2-2—学歴別）

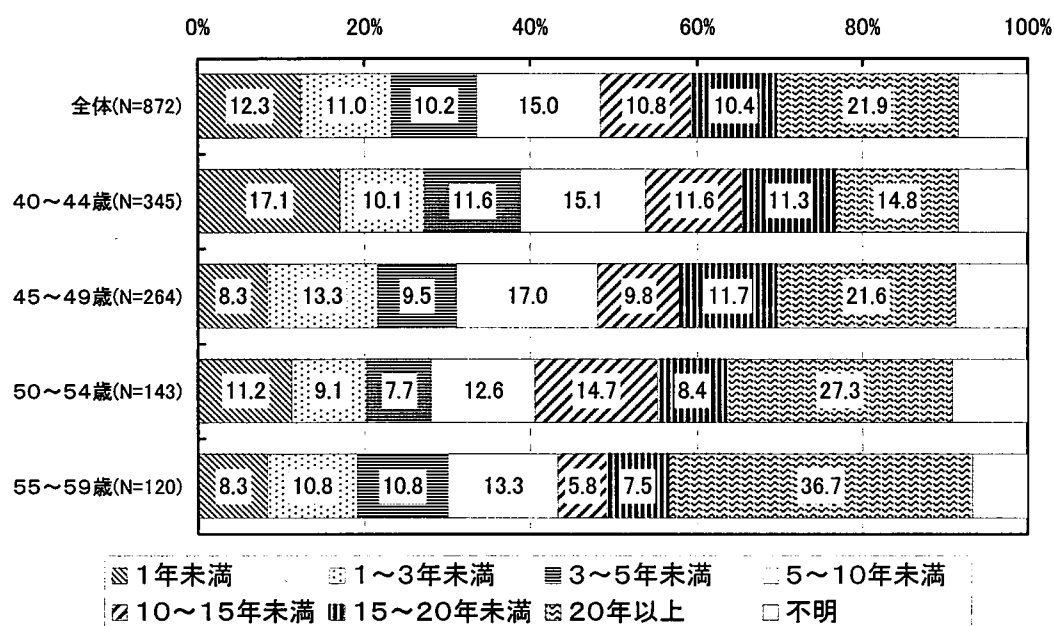


(v) 現在の職業の勤続期間（問2付問2-3）

現在の職業の勤続期間は（図表3-2-9）、就業者全体では「20年以上」21.9%、「20年未満」69.7%、「5年未満」33.5%で、平均勤続期間（有効回答（「不明」を除く）の回答欄に記載された年数（年数帯の中間値を使用）の合計÷有効回答数）は11.2年である。

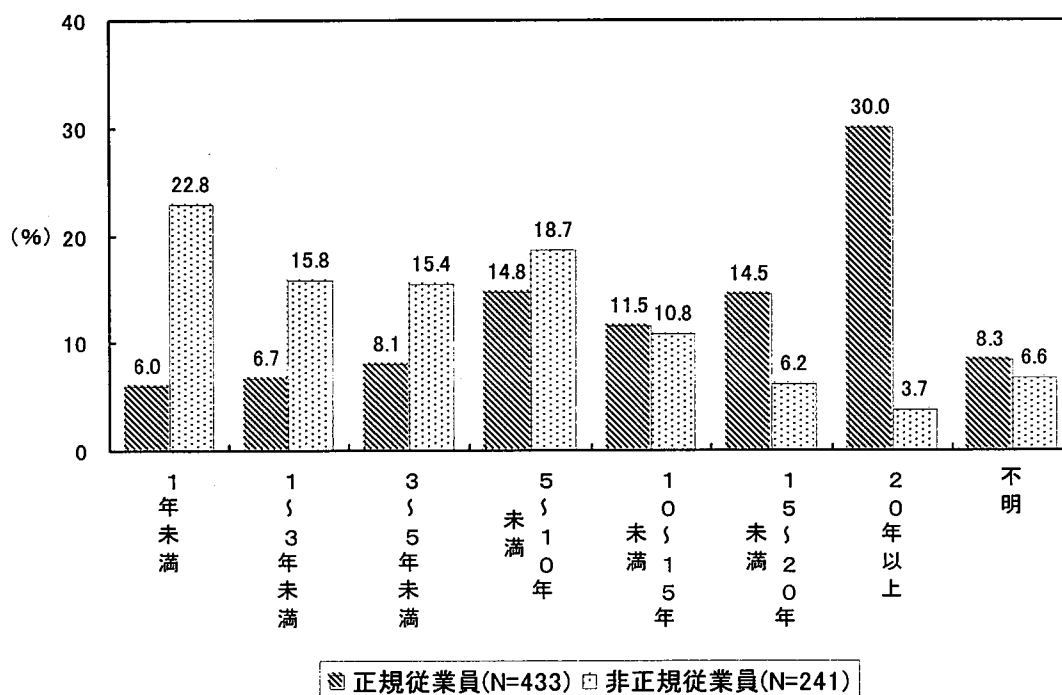
年齢別をみると、「20年以上」の構成比はやはり年齢が上がるにつれ上昇しているが、50歳代後半層においても勤続期間の短い方が相応の割合で存在している。

図表3-2-9 現在の仕事の勤続期間（問2付問2-3）



これを従業上の地位別でみると（図表 3-2-10）、正規従業員は「20 年以上」が 3 割（30.0%）を占め、「20 年未満」61.7%、「5 年未満」20.8%で、平均勤続期間が 14.2 年となっている。これに対して、非正規従業員は 20 年以上の長期勤続者がごくわずかで、「1 年未満」が 22.8%と最も多く、平均勤続期間は 5.5 年である。現在の職業の勤続期間は、正規、非正規で著しい差異がみられる。

図表 3-2-10 現在の仕事の勤続期間（問 2 付問 2-3—従業上の地位別）



(vi) 非正規従業員等の労働日数など（問 2 付問 2-4-(1)・(2)）

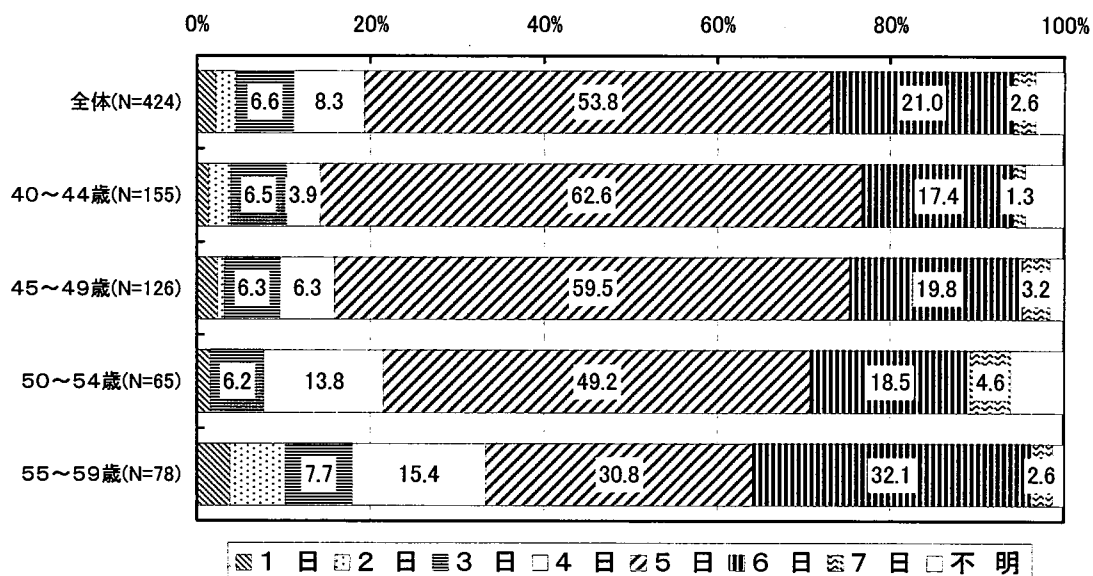
次に、非正規従業員等（経営者・役員と正規従業員以外の就業者）を対象に、1 週間あたりの労働日数や 1 日あたりの労働時間をみた。

図表 3-2-11（ここでは、各日の労働時間を聞いていないことに留意）によると、1 週間の労働日数は、「5 日」（53.8%）がほかの項目を引き離して最も多く、平均労働日数（有効回答（「不明」を除く）の回答欄に記載された日数の合計÷有効回答数）は 4.9 日となっている。

ここでの平均労働日数をみる限り、非正規従業員等も正規従業員並みの日数を働いていることがわかる。

ただし、50 歳代後半層では「4 日」以内と「6 日」の構成比が相対的に増え、労働日数のバラツキが大きくなっている。

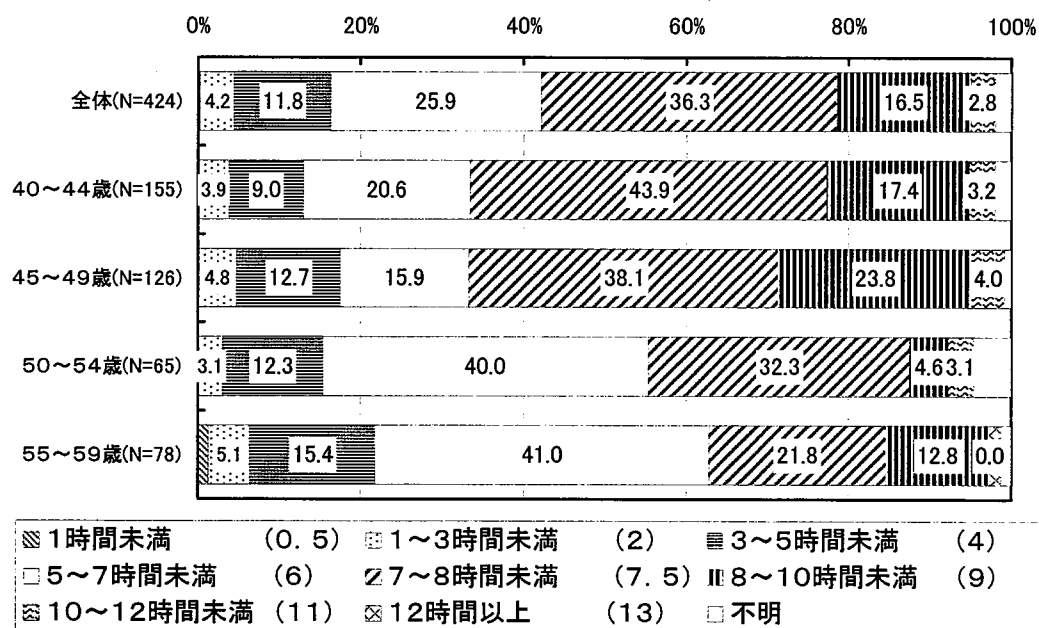
図表 3-2-11 1週間の労働日数 (問2付問2-4-(1))



また、1日の実労働時間は(図表3-2-12。ここでは1週間あたりの労働日数を確認していないことに留意)、「7~8時間未満」(36.3%)が最も多く、平均労働時間(有効回答(「不明」を除く)の選択肢(時間幅)の中間値の合計÷有効回答数)は6.8時間となっている。

非正規従業員等も、週労働日数を別にすれば、1日の労働時間は正規従業員に近い時間で働いている状況が伺える。

図表 3-2-12 1日の実労働時間 (問2付問2-4-(2))

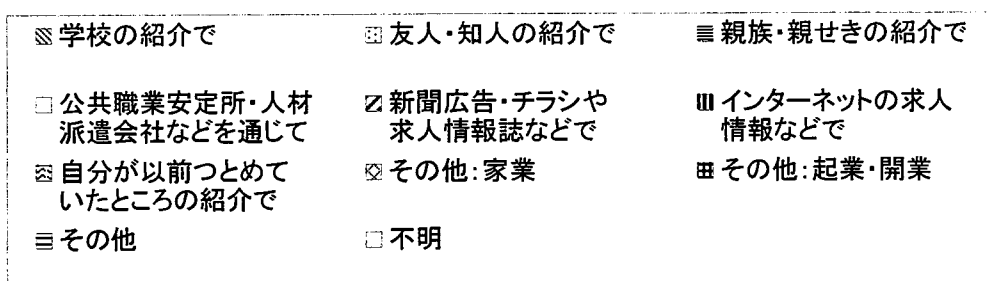
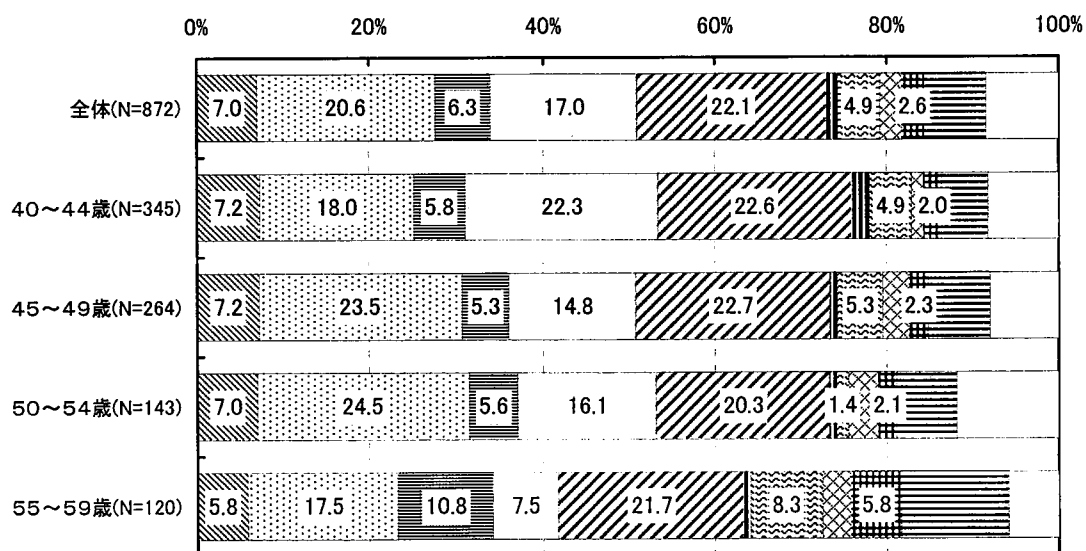


(vii) 現在の仕事の見つけ方 (問 2 付問 2-5)

続いて、就業者全員を対象とした、現在の仕事の見つけ方、いわゆる入職経路についてみると (図表 3-2-13)、「新聞・求人情報誌」(22.1%)、「友人・知人」(20.6%)、「公共職業安定所」(17.0%) の 3 経路が主要なものであり、全体の約 6 割を占めている。

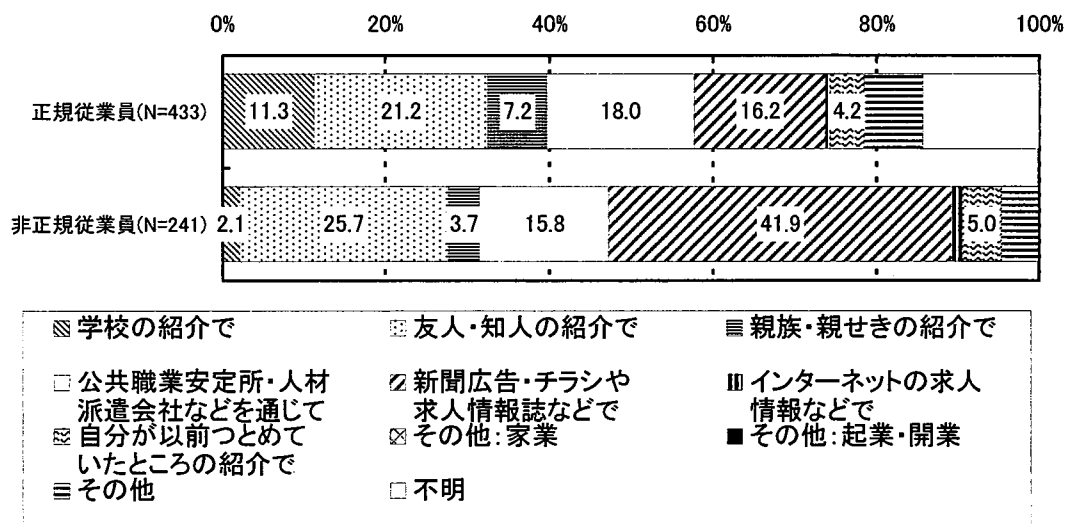
年齢別では、50 歳代後半層で、ほかの年齢層と比べ、友人・知人の紹介や公共職業安定所の割合が低下する一方で、親族・親せきや以前のつとめ先の紹介といった経路、起業や開業が増える。ただし、どの年齢層においも、友人・知人の紹介や新聞・求人情報誌、公共職業安定所の割合が高く、これらが主要な入職経路であることに変わりはない。

図表 3-2-13 現在の仕事の見つけ方 (問 2 付問 2-5)



また、従業上の地位別でみると（図表 3-2-14）、非正規従業員では「新聞広告・求人情報誌」（41.9%）が最も有力な就職情報の取得手段となっている。

図表 3-2-14 現在の仕事の見つけ方（問 2 付問 2-5—従業上の地位別）

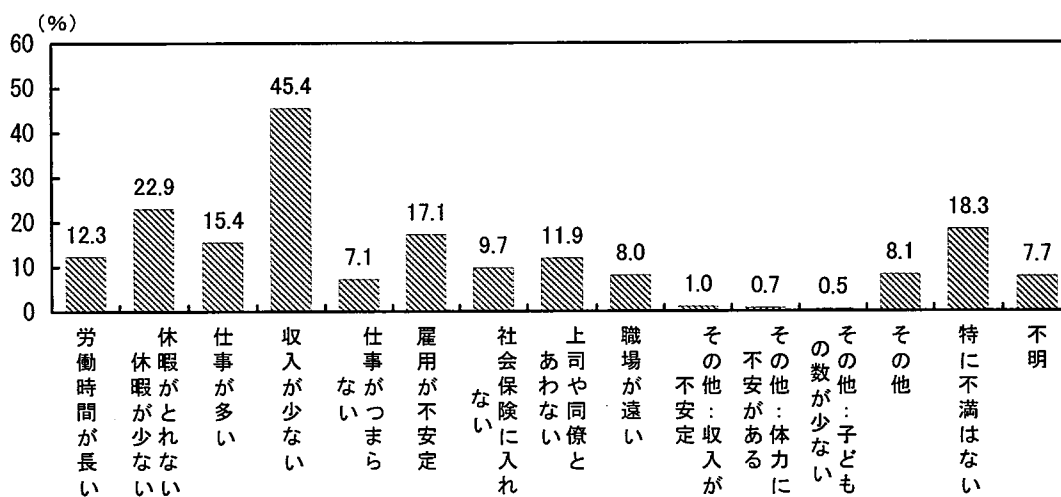


(viii) 現在の仕事についての悩み・不満（問 2 付問 2-6）

それでは、独身の中高年女性は、職業生活を送る上でどのような悩みや不満を持っているのでしょうか。そこで、就業者全員に対して、現在の仕事についての悩みや不満を問うた図表 3-2-15 によると、「特に不満はない」が 18.3%である一方、「収入が少ない」（45.4%）がほかの項目と比べてダントツに多く、次いで「休暇がとれない」（22.9%）、「雇用が不安定」（17.1%）、「仕事が多い」（15.4%）、「労働時間が長い」（12.3%）、「上司や同僚とあわない」（11.9%）、「社会保険に入れない」（9.7%）が続く。

これを収入や雇用にかかわる悩みや不満（「収入が少ない」、「雇用が不安定」、「社会保険に入れない」、「収入が不安定」と就業上の悩みや不満（「休暇がとれない」、「仕事が多い」、「労働時間が長い」、「上司や同僚とあわない」、「職場が遠い」、「仕事がつまらない」、「体力に不安がある」）の 2 つに大別すると、前者が 72.2%、後者は 78.3%であった。

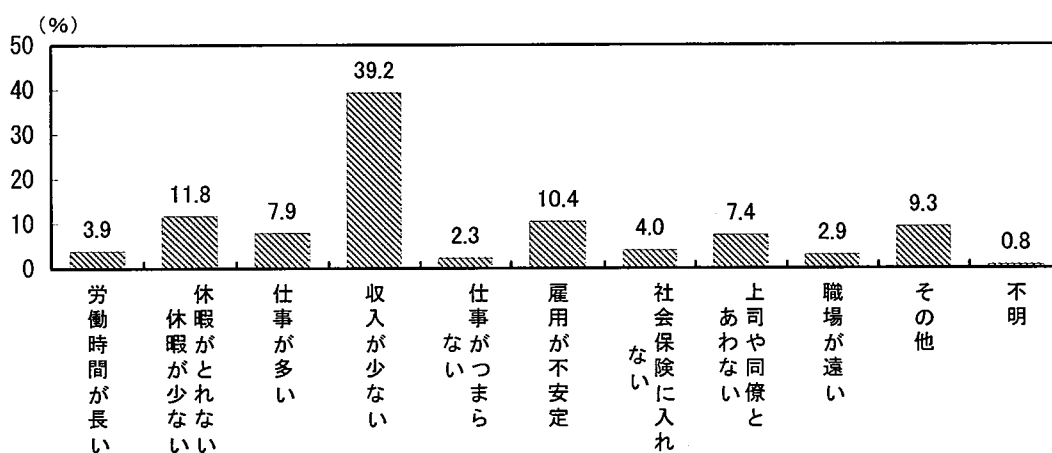
図表 3-2-15 現在の仕事についての悩み・不満（複数回答）（問 2 付問 2-6）



(ix) 現在の仕事についての最大の悩み・不満（問 2 付問 2-6-1）

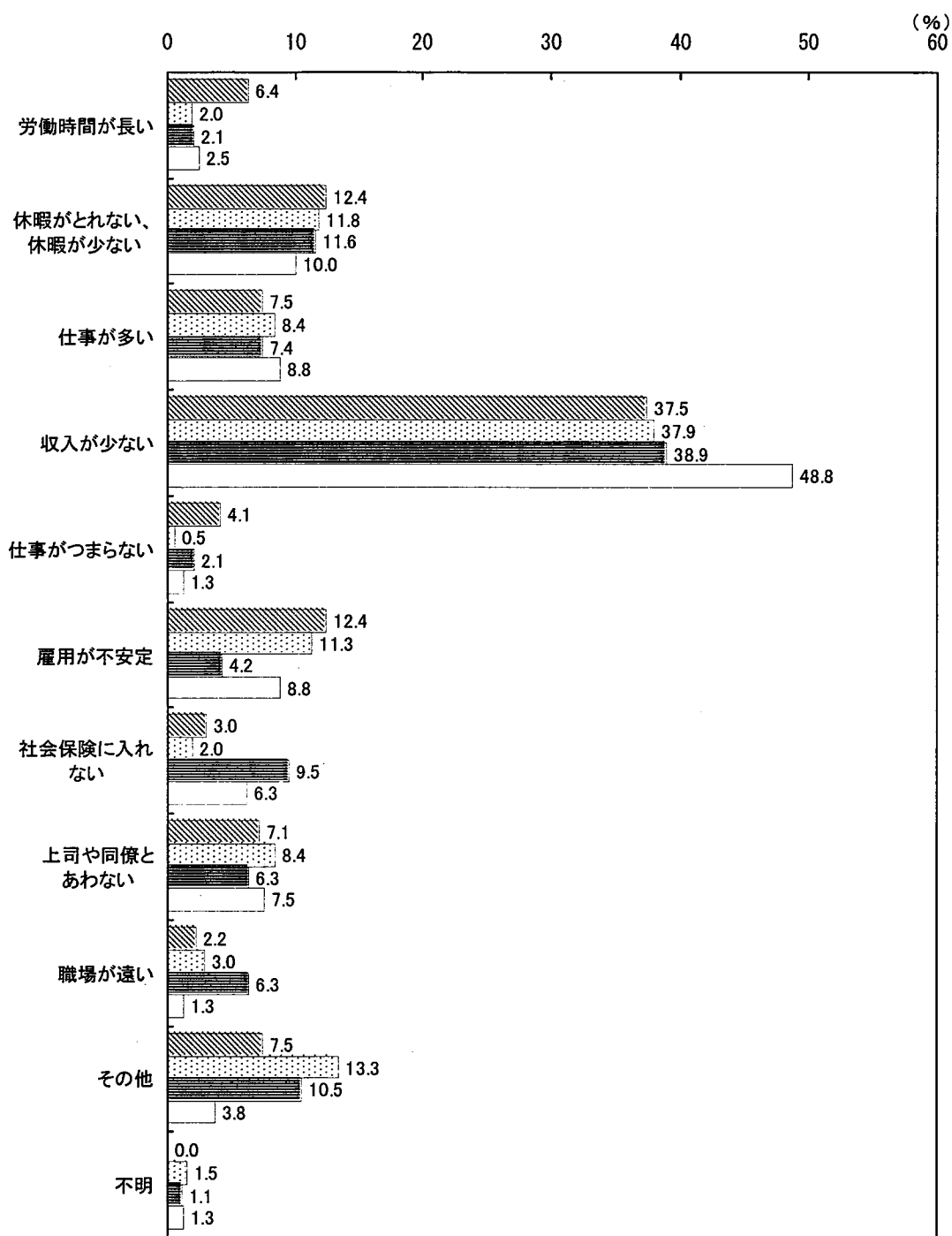
このうち、最大の悩みや不満として1つだけ挙げていただくと（図表 3-2-16）、やはり「収入が少ない」が約 4 割（39.2%）と圧倒的な割合を占める。

図表 3-2-16 現在の仕事についての最大の悩み・不満（問 2 付問 2-6-1）



これを年齢別でみると（図表 3-2-17）、50 歳代後半層で、他の年齢層と比べ、「収入が少ない」との悩みや不安が相応に大きな割合を占める。これは、図表 3-2-3 でみた通り、この年齢層において相対的に正規従業員が減り、非正規等が増えることと関連しているのかもしれない。

図表 3-2-17 現在の仕事についての最大の悩み・不満（問 2 付問 2-6-1—年齢別）



▨ 40～44歳(N=267) ▩ 45～49歳(N=203) ≡ 50～54歳(N=95) □ 55～59歳(N=80)

b. これまでの職歴と今後

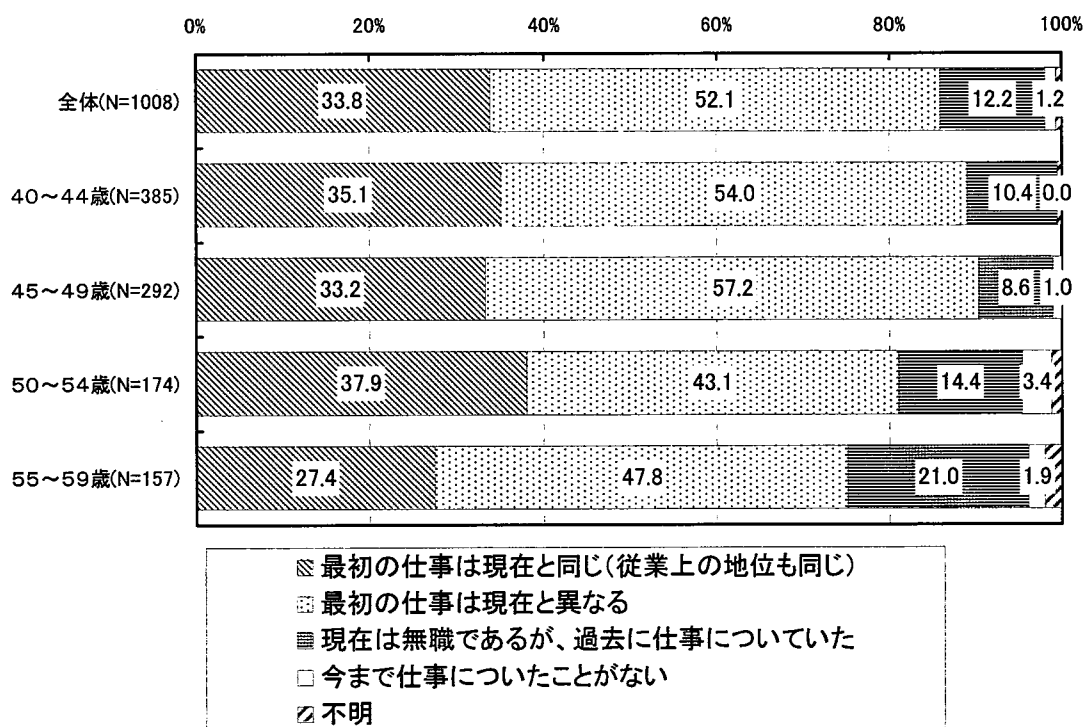
女性におけるキャリアパス、そして現在の仕事の多様性を考慮し、問3では職歴を始め、最初の就業形態、最初の仕事の勤続期間、現在までのキャリア、最初の勤務先や仕事をやめた理由、仕事についていない理由や期間を問うた。さらに、これらを前提として、将来に向けた職業意識を確認するため、今後の仕事、退職意向年齢の問を設けた。

(i) 職歴／最初の仕事と現在の仕事 (問3)

まず、職歴として、最初の仕事と現在の仕事との関連をみると(図表3-2-18)、「最初の仕事は現在と異なる」が52.1%と過半数を占めており、次いで「最初の仕事は現在と同じ」(33.8%)、「現在は無職であるが、過去に仕事についていた」(12.2%)、「仕事についたことがない」(1.2%)となっている。初職からの就業継続者(「最初の仕事は現在と同じ」)が3割強存在する一方、転職経験者が6割を超えている。

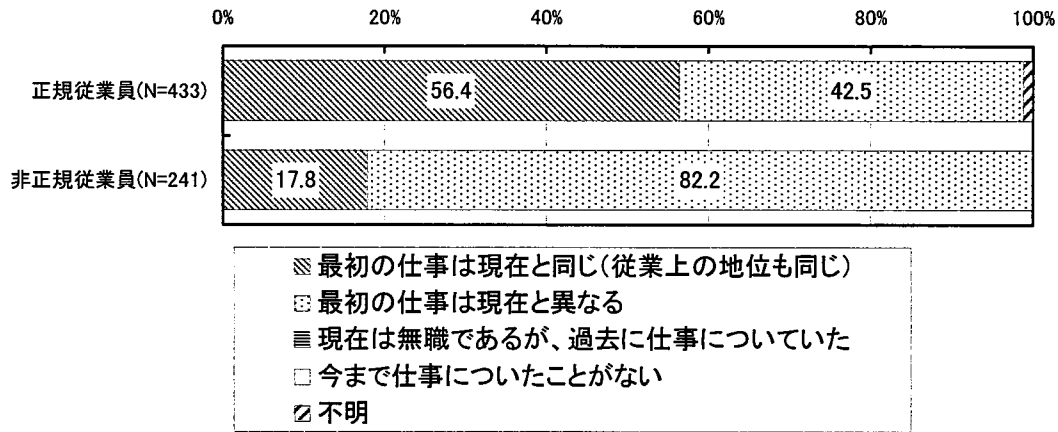
年齢別でみると、50歳代後半層で就業継続者の割合が相対的に低下し、無職(過去に就業経験あり)の割合が高くなっている。これは、一般的な定年年齢に接近してくることが影響しているのかもしれない。

図表 3-2-18 職歴 (問3)



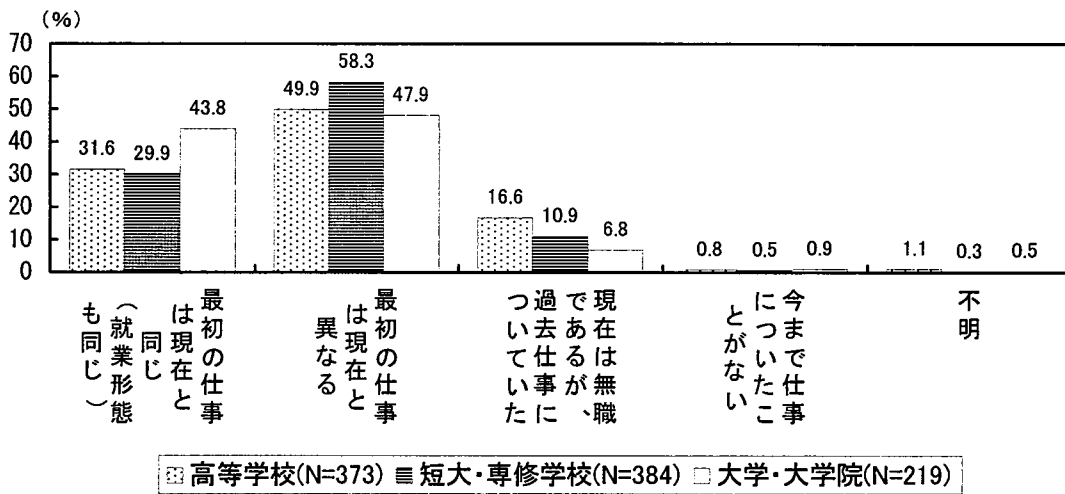
これを従業上の地位別でみると（図表 3-2-19）、非正規従業員はやはり転職経験者の割合が 8割以上（82.2%）を占めており、正規従業員との著しい相違がみられる。

図表 3-2-19 職歴（問 3-従業上の地位別）



また、学歴別では（図表 3-2-20）、就業継続は、「大卒」（43.8%）が他に比べ高くなっている。

図表 3-2-20 職歴（問 3-学歴別）

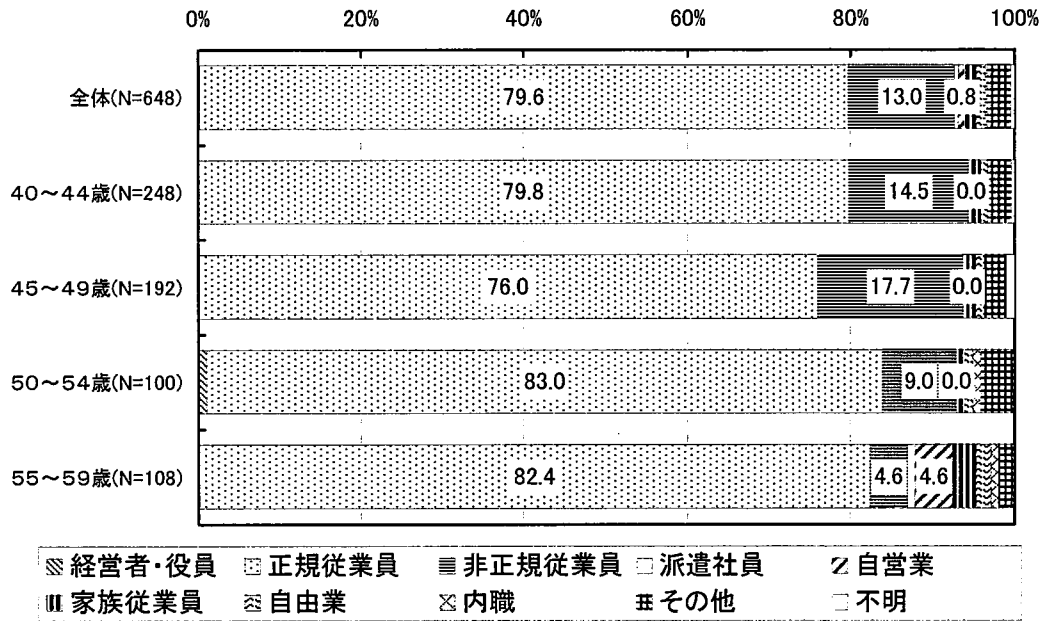


(ii) 最初の従業上の地位（問 3 付問 3-1）

次に、現在、初職と異なる仕事についておられる方等に、最初の従業上の地位を聞いたところ（図表 3-2-21）、正規従業員が約 8 割（79.6%）で、非正規従業員が 1 割強（13.0%）となっている。

年齢別では、非正規従業員は 40 歳代での割合が 1 割台半ばである一方、50 歳代では 1 割未満となっており、多少の差異がみとめられる。

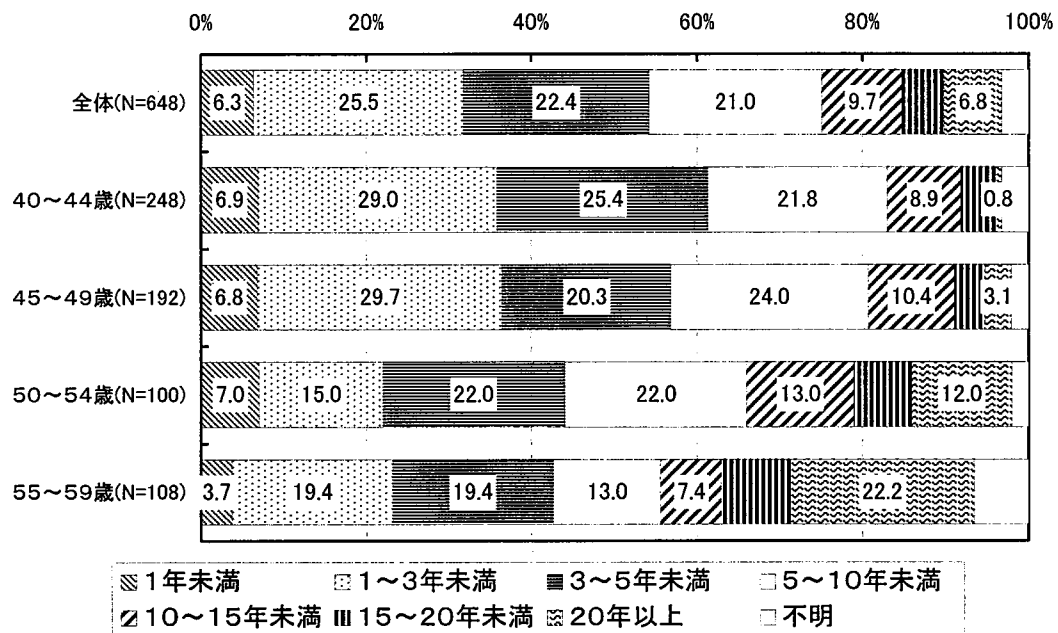
図表 3-2-21 最初の従業上の地位 (問 3 付問 3-1)



(iii) 最初の仕事の勤続期間 (問 3 付問 3-2)

最初の仕事の勤続期間は (図表 3-2-22)、「20 年以上」が 6.8%と低い一方で、「5 年未満」が 54.2%で過半を占め、全体の平均勤続期間 (有効回答 (「不明」を除く) の回答欄に記載された年数の合計 ÷ 有効回答数) は 6.4 年である。

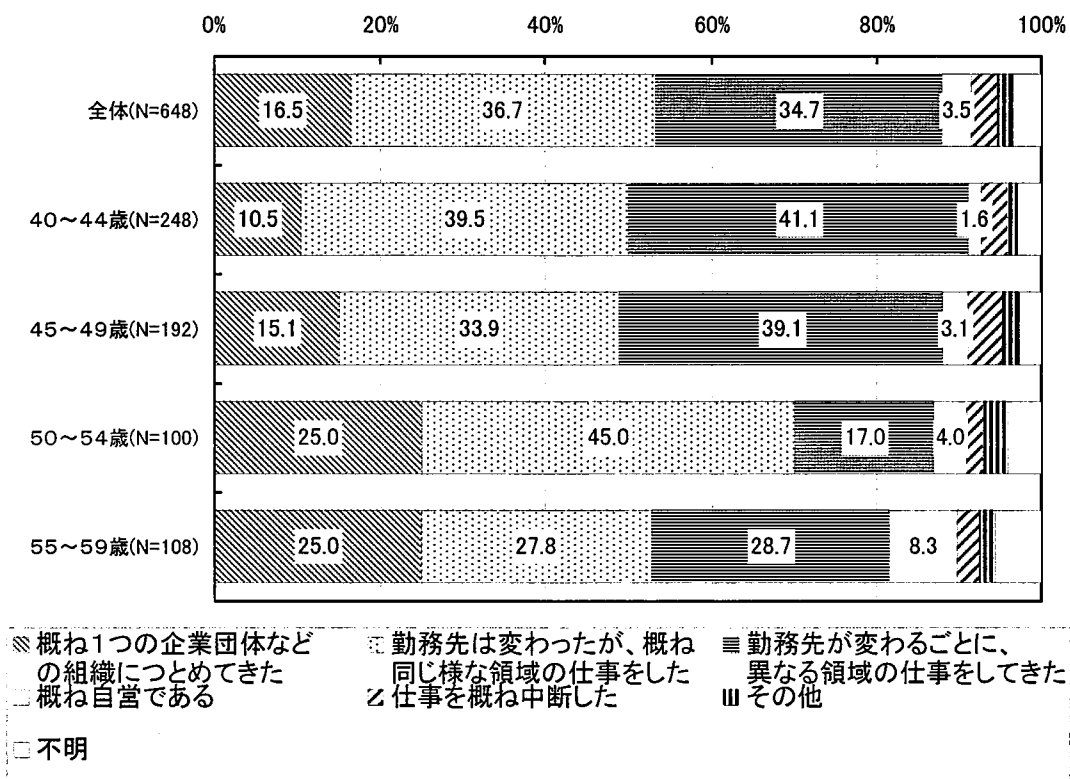
図表 3-2-22 最初の仕事の勤続期間 (問 3 付問 3-2)



(iv) 現在までのキャリア (問3 付問3-3)

同じく初職と異なる仕事についておられる方等の現在までのキャリアは (図表 3-2-23)、「勤務先は変わったが、概ね同じ領域の仕事」(36.7%)、「勤務先が変わるごとに、異なる領域の仕事」(34.7%)、「概ね1つの組織」(16.5%)となっている。

図表 3-2-23 現在までのキャリア (問3 付問3-3)

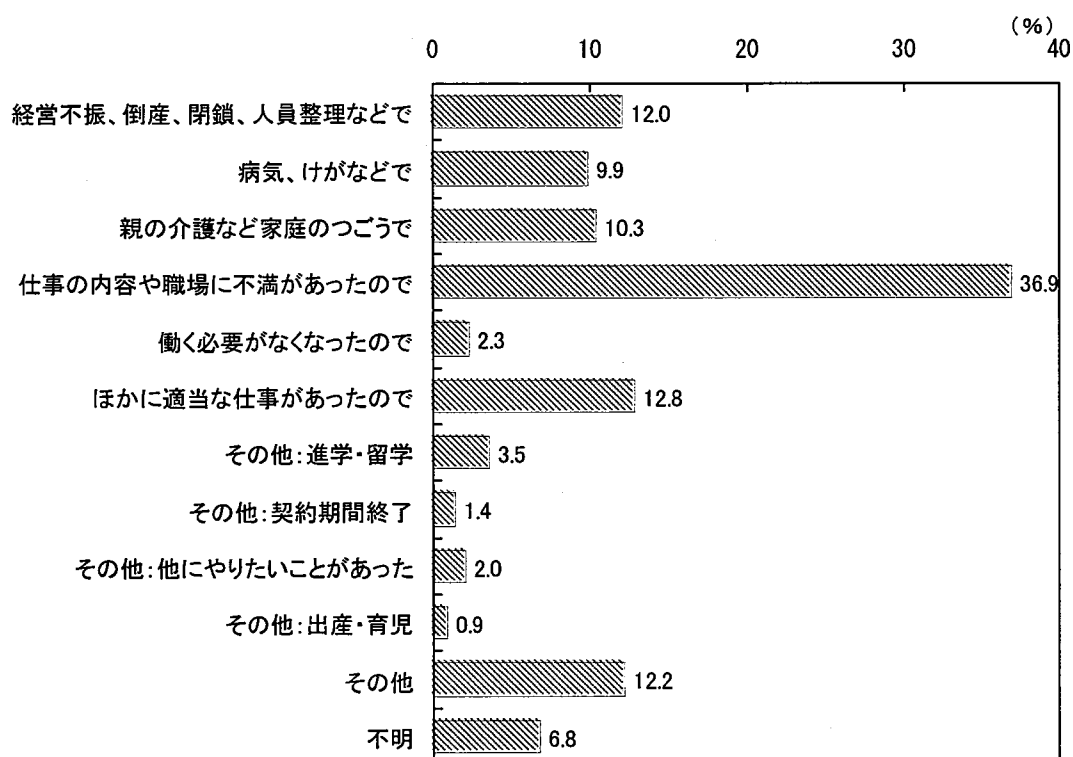


(v) 最初の勤務先や仕事をやめた理由 (問3 付問3-4)

最初の勤務先や仕事をやめた理由は (図表 3-2-24)、「仕事の内容や職場に不満」(36.9%)がほかの項目を引き離して最も多い。これ以外では「ほかに適当な仕事」(12.8%)、「経営不振」(12.0%)、「親の介護など家庭のつごう」(10.3%)、「病気」(9.9%)が主なところであった。

これを、本人の自発的な理由(「仕事の内容や職場に不満」、「ほかに適当な仕事」、「働く必要がなくなった」、「進学・留学」、「他にやりたいこと」と非自発的な理由(「経営不振」、「親の介護など家庭のつごう」、「病気」)の2つに大別すると、前者の割合が約6割となる。ここでは自発的な理由としてまとめたものの、その内容は主に仕事や職場への不満であり、その背景を今後さらに探っていくことが必要に思われる。他方、後者も3割強あり、経営不振などを理由にやむなく退職を余儀なくされる状況もみてとれる。

図表 3-2-24 最初の勤務先や仕事をやめた理由（複数回答）（問 3 付問 3-4）

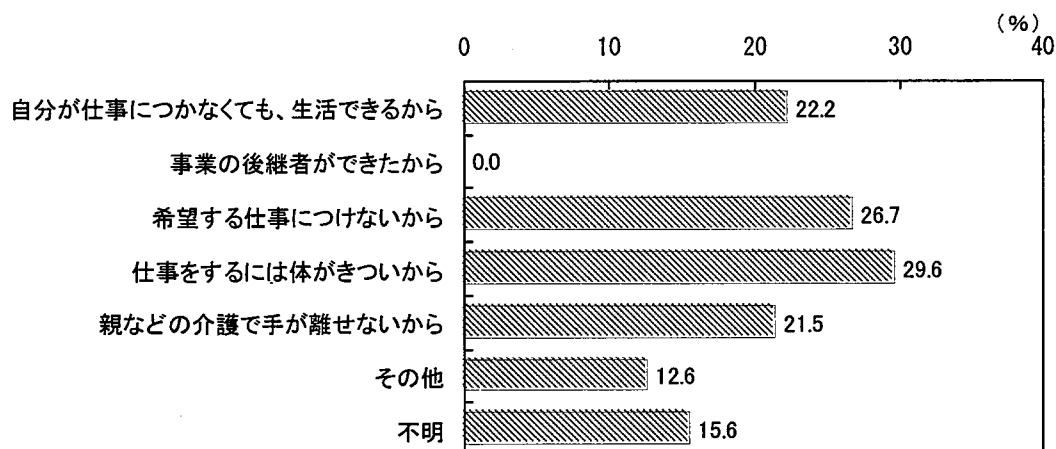


(vi) 現在の無業者の仕事についていない理由（問 4）

今度は、現在の無業者を対象に、仕事についていない理由とその期間についてである。

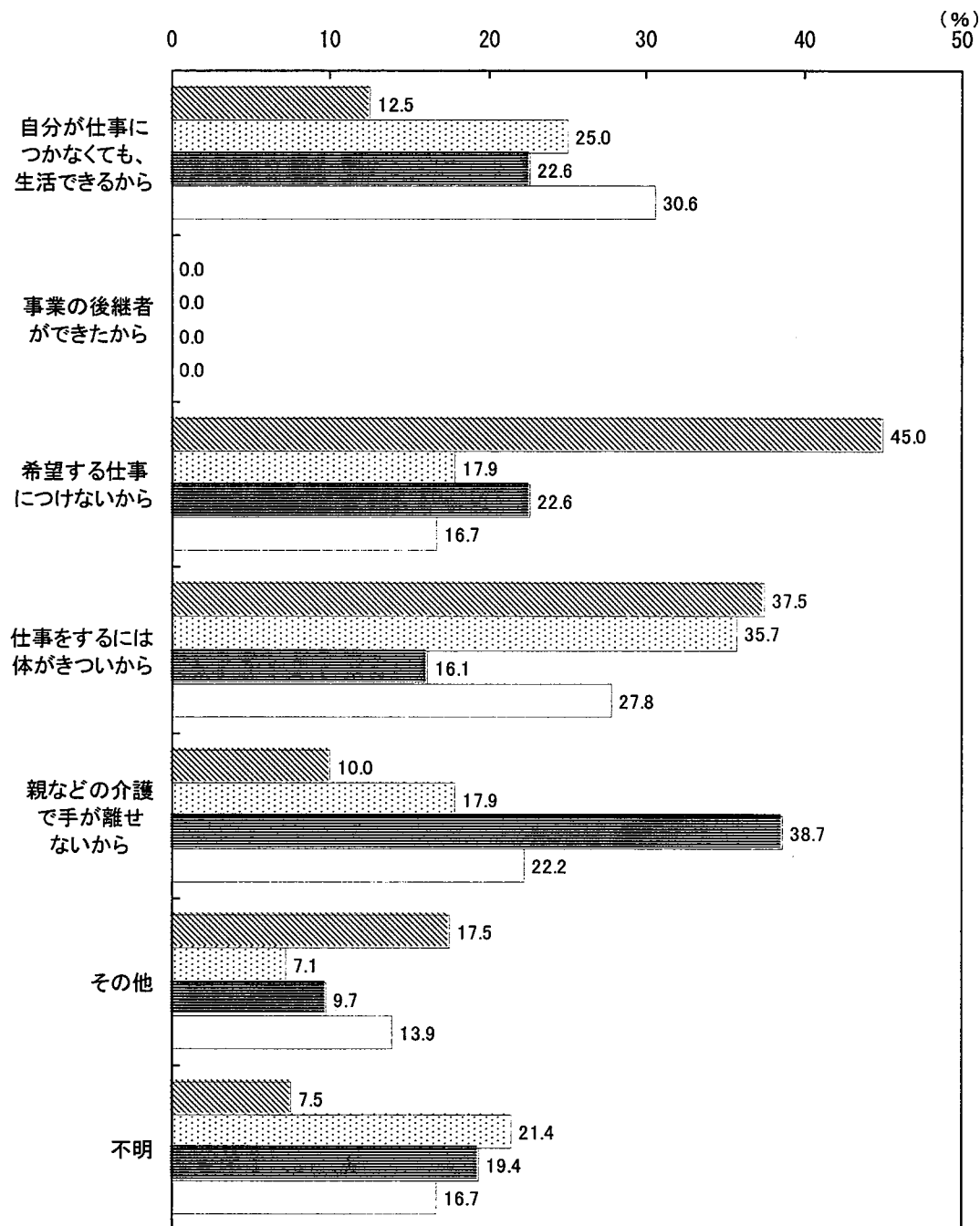
まず、仕事についていない理由であるが（図表 3-2-25）、「体がきつい」（29.6%）、「希望する仕事につけない」（26.7%）、「生活できる」（22.2%）、「親の介護」（21.5%）が、いずれもほぼ同じような割合となっている。

図表 3-2-25 仕事についていない理由（複数回答）（問 4）



年齢別にみると（図表 3-2-26）、40 歳代前半層で希望の仕事につけないことを理由とする割合が極めて高い。逆に 50 歳代前半層では親などの介護を理由とする割合がかなり高い。ただし、50 歳代後半層になると、親などの介護で手が離せないことを理由とする割合が、直前層に比べて低くなるが、これは親との死別といったことが背景にあると考えられる。

図表 3-2-26 仕事についていない理由（複数回答）（問 4—年齢別）

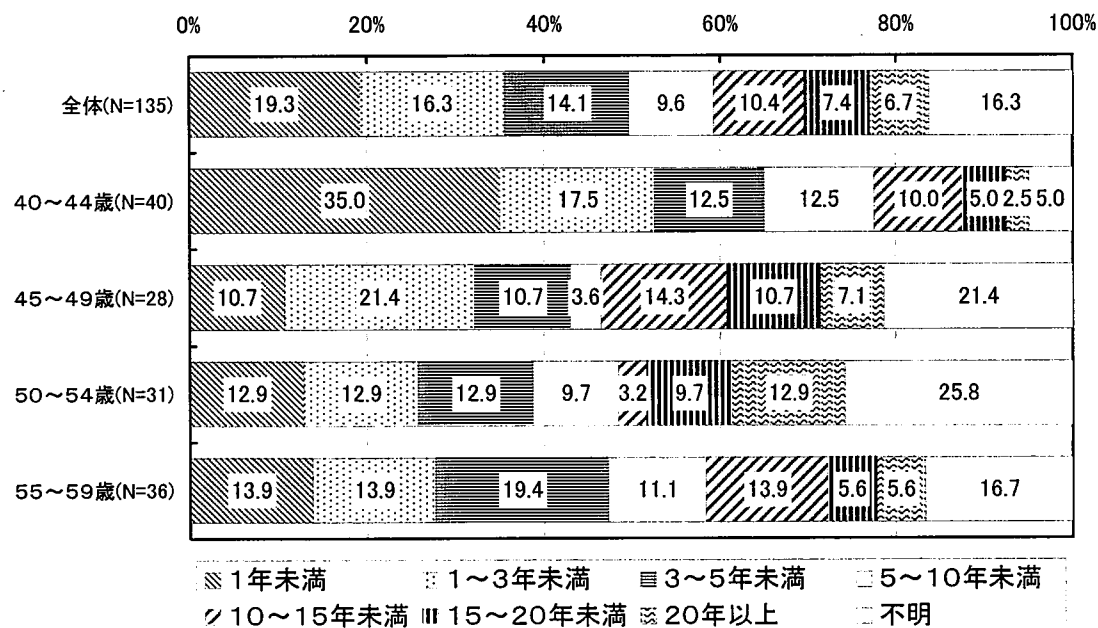


▨ 40～44歳(N=40) ▤ 45～49歳(N=28) ■ 50～54歳(N=31) □ 55～59歳(N=36)

(vii) 仕事についていない期間（問4付問4-1）

現在の無業者の仕事についていない期間をみると（図表3-2-27）、5年以上とする回答の合計が34.1%、5年未満のそれが49.7%であった。全体の平均期間（有効回答（「不明」を除く）の回答欄に記載された年数の合計÷有効回答数）は6.2年である。

図表3-2-27 仕事についていない期間（問4付問4-1）



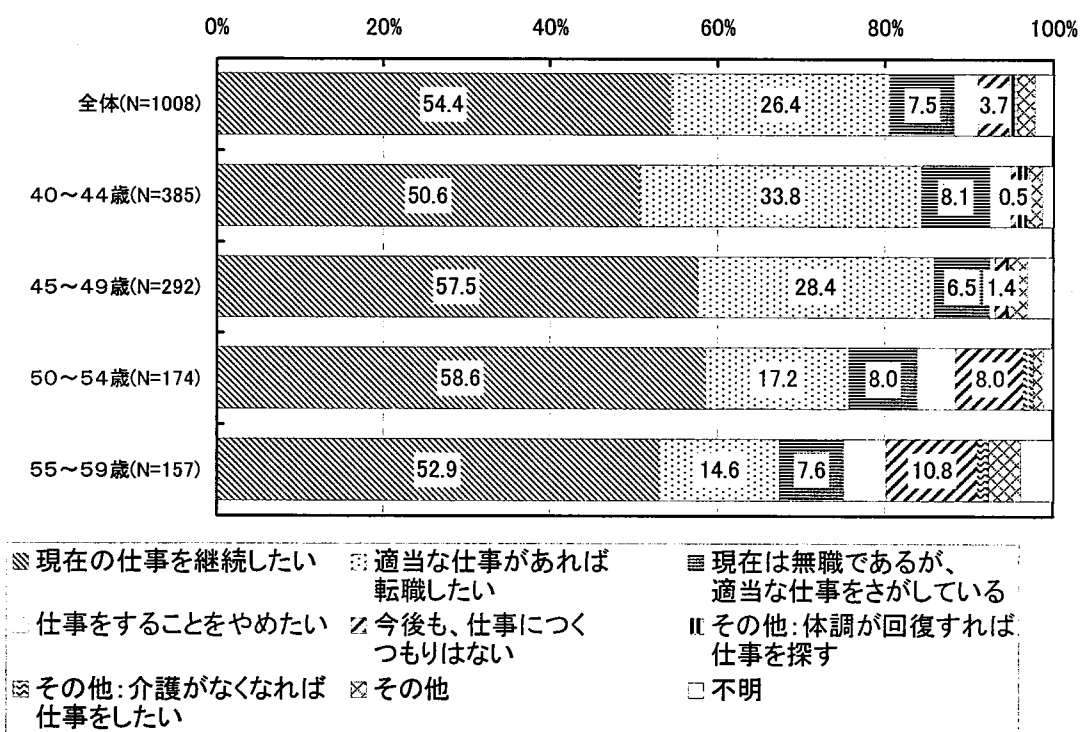
(viii) 今後の仕事について (問 5)

それでは、将来に向けた職業意識はどうなっているのだろうか。

そこで、まずアンケート調査の対象者全員に対して、今後の仕事について問うたところ (図表 3-2-28)、「現職継続希望」が 54.4%、「転職希望」が 26.4%という結果となった。

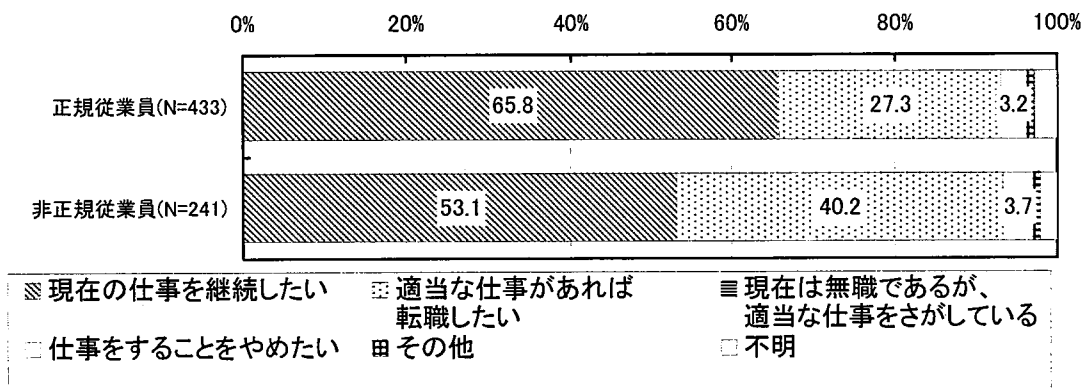
年齢別にみると、年齢が若いほど転職希望の割合が多い。

図表 3-2-28 今後の仕事について (問 5)



これを従業上の地位別で見ると（図表 3-2-29）、正規従業員は現職継続の意向の割合が高いが、これに対して非正規従業員は逆に転職の意向の割合が相対的に高い。

図表 3-2-29 今後の仕事について（問 5—従業上の地位別）

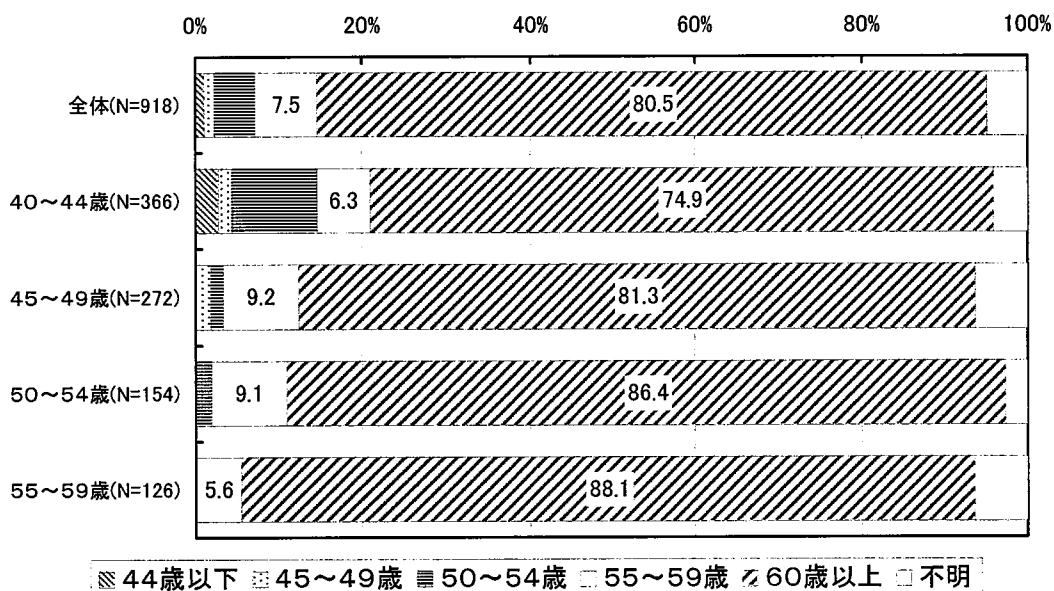


(ix) 退職意向年齢（問 5 付問 5-1）

問 5 で今後の就業意向があるという回答者を対象に、退職（引退）意向年齢を確認したところ（図表 3-2-30）、「60 歳以上」（80.5%）が 8 割を占めており、平均（有効回答（「不明」を除く）の回答欄に記載された年齢の合計÷有効回答数）すると 61.7 歳であった。

これを年齢別にみると、「60 歳以上」とする割合は、年齢が上がるほど高くなっている。

図表 3-2-30 退職意向年齢（問 5 付問 5-1）



(3) 世帯の状況と住居について

本項では、世帯、居住形態、同居者等の状況、そして家族の介護に係わる対処方法を取り上げる。

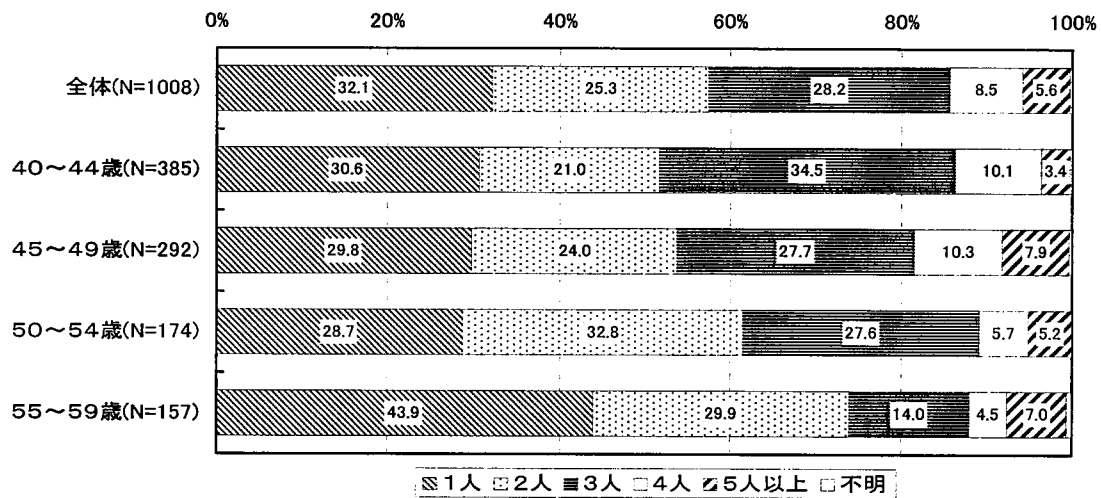
a. 世帯の状況

(i) 世帯人数 (問6)

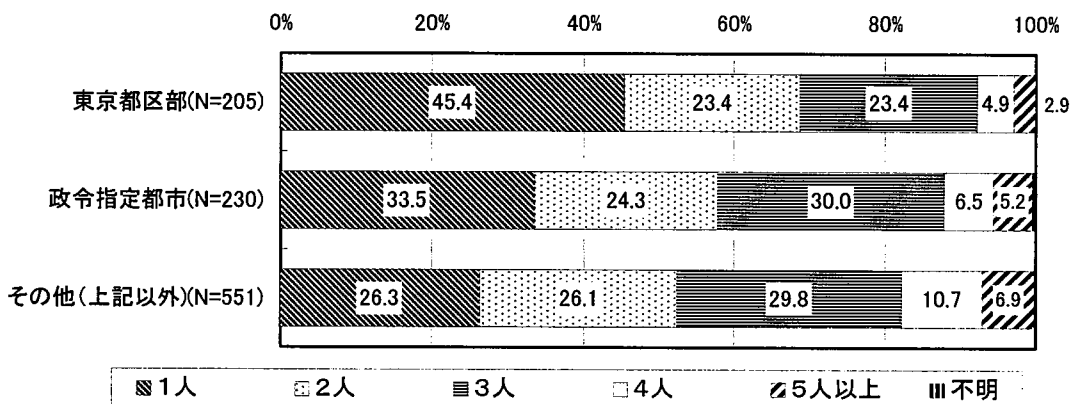
世帯人数の状況を見ると(図表3-3-1)、全体としては、1人世帯が32.1%、2人世帯が25.3%、3人世帯が28.2%とおおむね拮抗している。年齢層別にみると、50歳代後半層で3人以上の同居が減り、1人世帯の割合(43.9%)がかなり高くなる。

また、地域別では(図表3-3-2)、1人世帯の割合は東京都区部が45.4%、政令指定都市が33.5%、左記以外の地域で26.3%と、大都市ほど1人世帯の割合が高くなる。

図表 3-3-1 世帯人数 (問6)



図表 3-3-2 世帯人数 (問6—都市規模別)

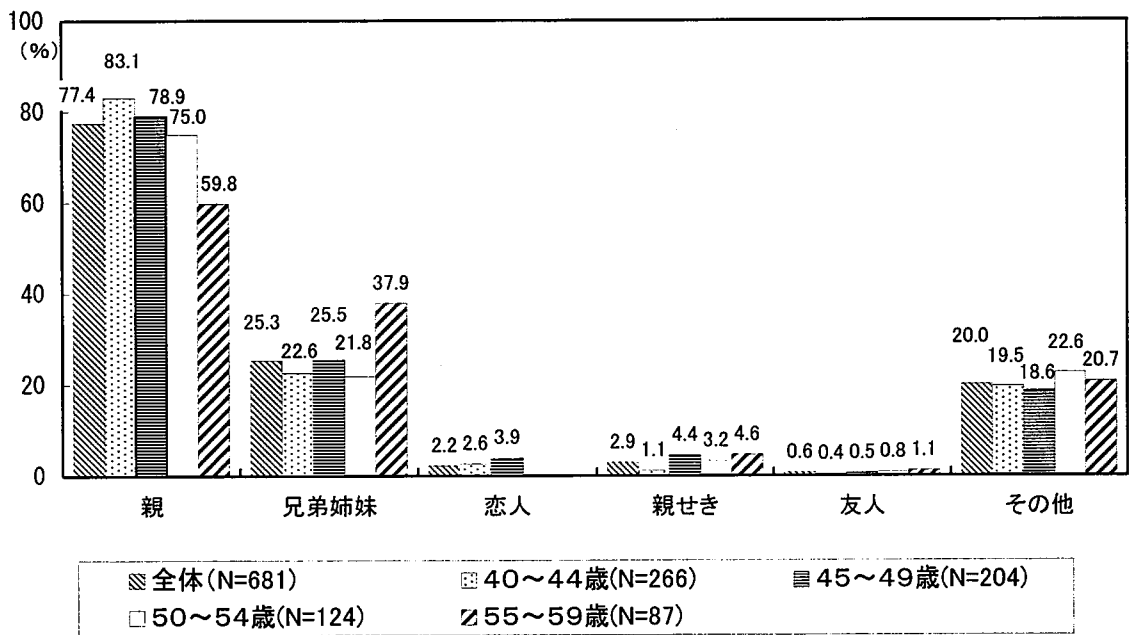


(ii) 2人以上世帯での同居者の内訳（問6付問6-1）

世帯人数が2人以上との回答者に対し世帯の同居者を尋ねたところ（図表3-3-3）、全体では、親との同居率が77.4%と際立って高かった。これを年齢別にみると、40歳代前半層で83.1%を占め、年齢が上がるにつれ、親との同居割合が低下する。親に次いで多い同居者は兄弟姉妹である。また、50歳代後半層において特徴的なことは、より若い年齢層と比べ、親との同居率が低下する一方、兄弟姉妹との同居率が上昇していることである。

なお、同居者の内訳における「その他」は、おもに本人の子である。

図表 3-3-3 同居者（複数回答）（問6付問6-1）



b. 住居について

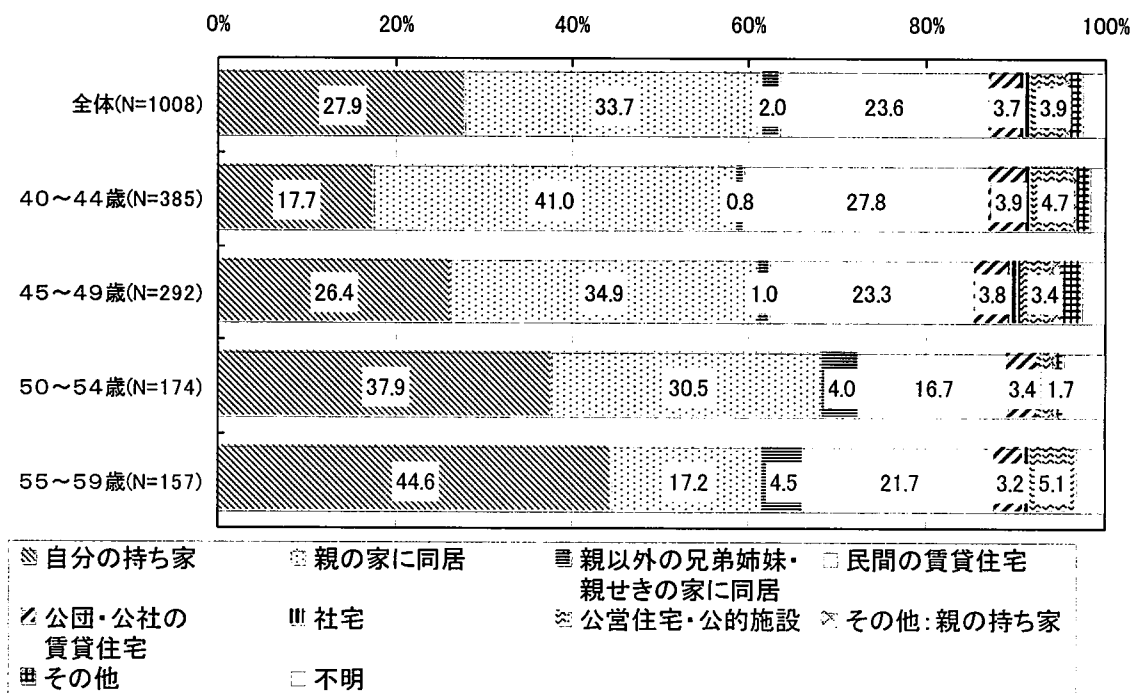
(i) 現在の住居について (問 12)

次は、住居の状況である。

まず、現在の住居状況であるが (図表 3-3-4)、その割合は「親の家に同居」(33.7%)、「自分の持ち家」(27.9%)、「民間の賃貸住宅」(23.6%) の順となっている。一方、「公団・公社の賃貸住宅」(3.7%)、「公営住宅・公的施設」(3.9%) の比率が目立って低い。

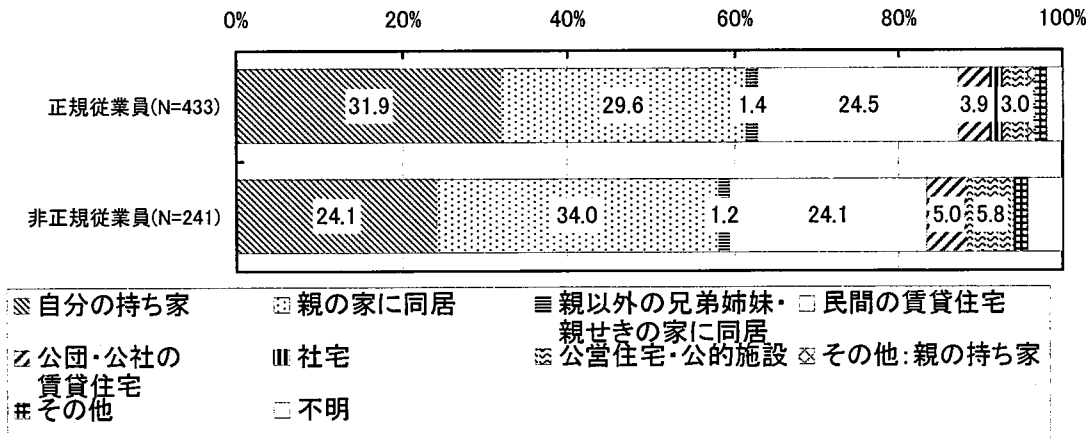
年齢別では、年齢階層が上がるにつれて、親の家に同居の割合が低くなり、自分の持ち家の割合が高くなっている。

図表 3-3-4 現在の居住形態 (問 12)



これを従業上の地位別で見ると (図表 3-3-5)、非正規従業員は正規従業員と比べて、親の家に同居している割合がやや高くなっている。

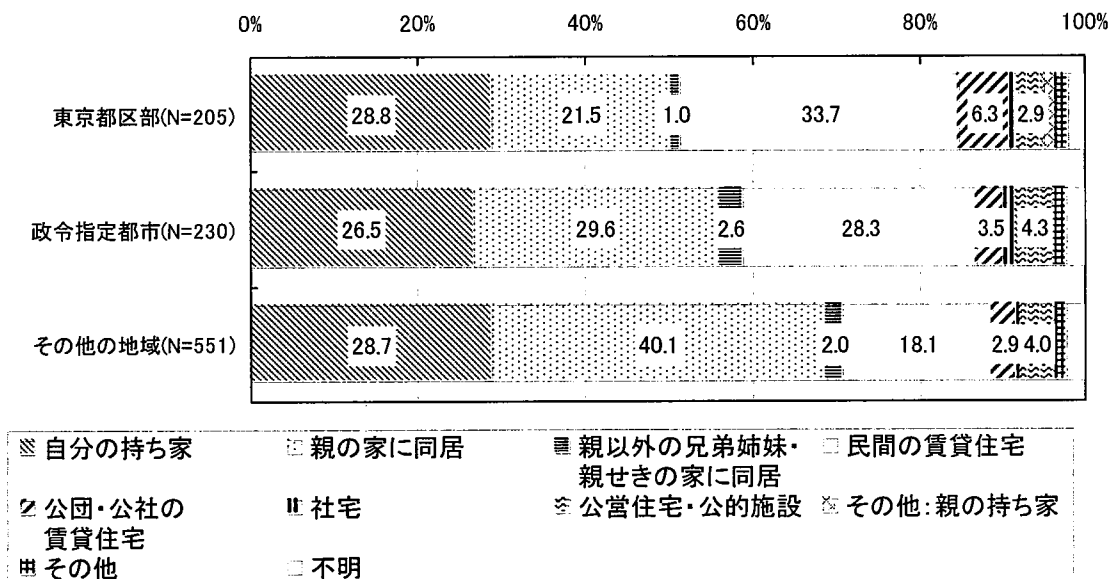
図表 3-3-5 現在の居住形態（問 12—従業員上の地位別）



次に、東京都区部、政令指定都市、その他の地域の3地域別に住居の状況をみると（図表 3-3-6）、親の家に同居する割合が、東京都区部より政令指定都市、さらにその他の地域と、後の地域ほど高くなっている。

なお、自分の持ち家については、地域別での差異はみとめられない。

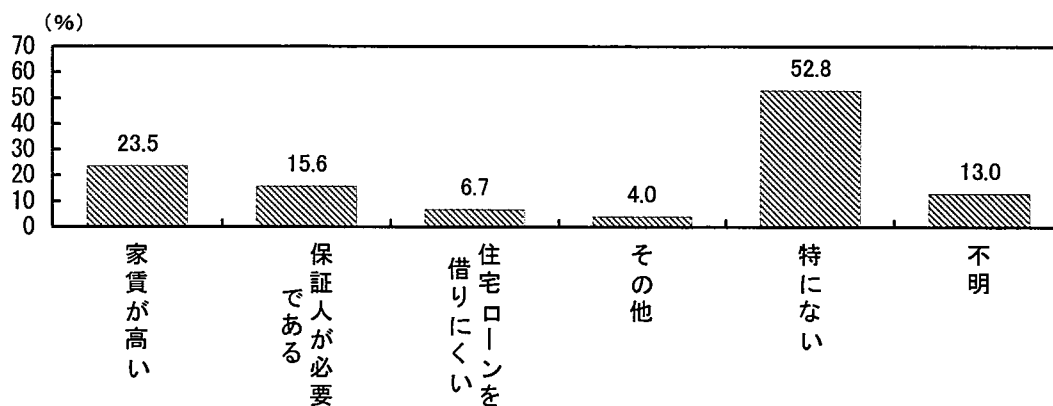
図表 3-3-6 現在の居住形態（問 12—都市規模別）



(ii) 住居を借りる・購入する際に困ったこと（問 12 付問 12-1）

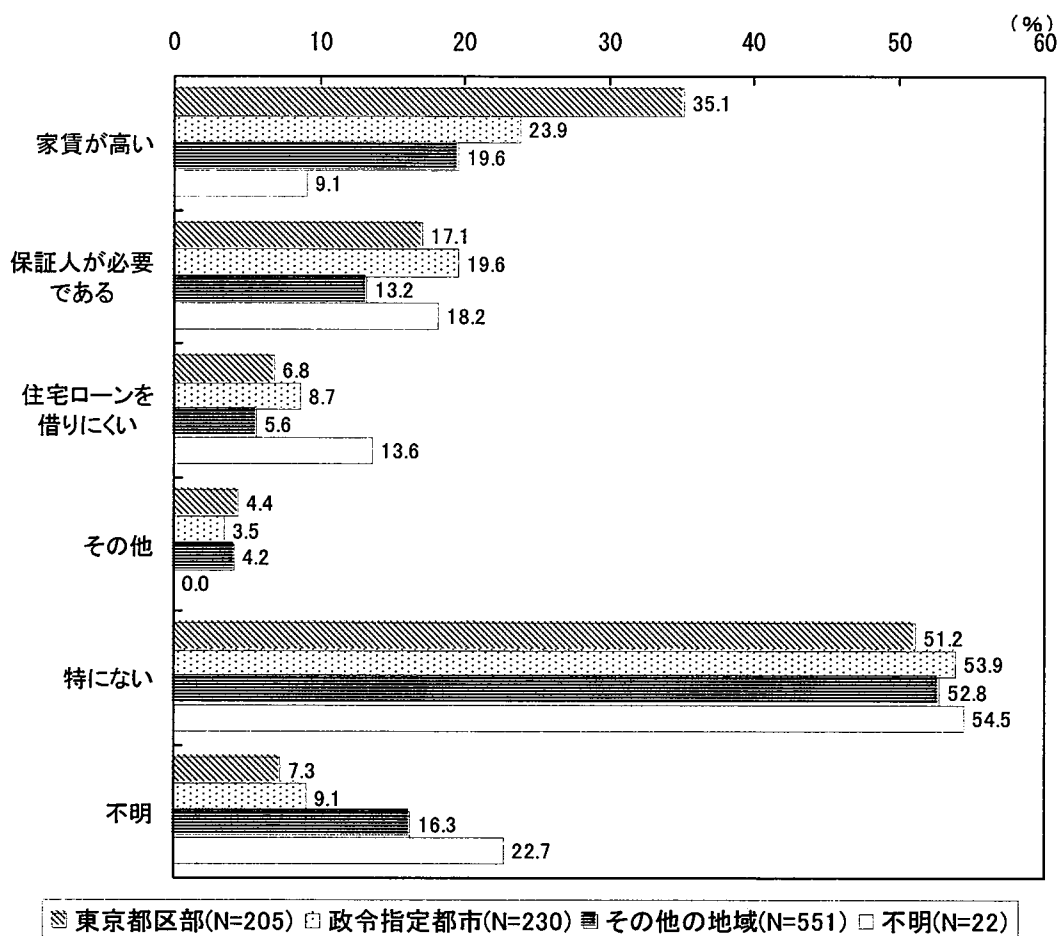
次に、住居を借りる・購入する際に困ったことであるが（図表 3-3-7）、回答者の過半数が「特にない」（52.8%）と回答している一方、「保証人が必要」が 15.6%、「住宅ローンを借りにくい」が 6.7%あった。

図表 3-3-7 住居を借りる・購入する際に困ったこと（複数回答）（問 12 付問 12-1）



また、地域別にみると（図表 3-3-8）、やはり大都市ほど「家賃が高い」という回答割合が多かった。

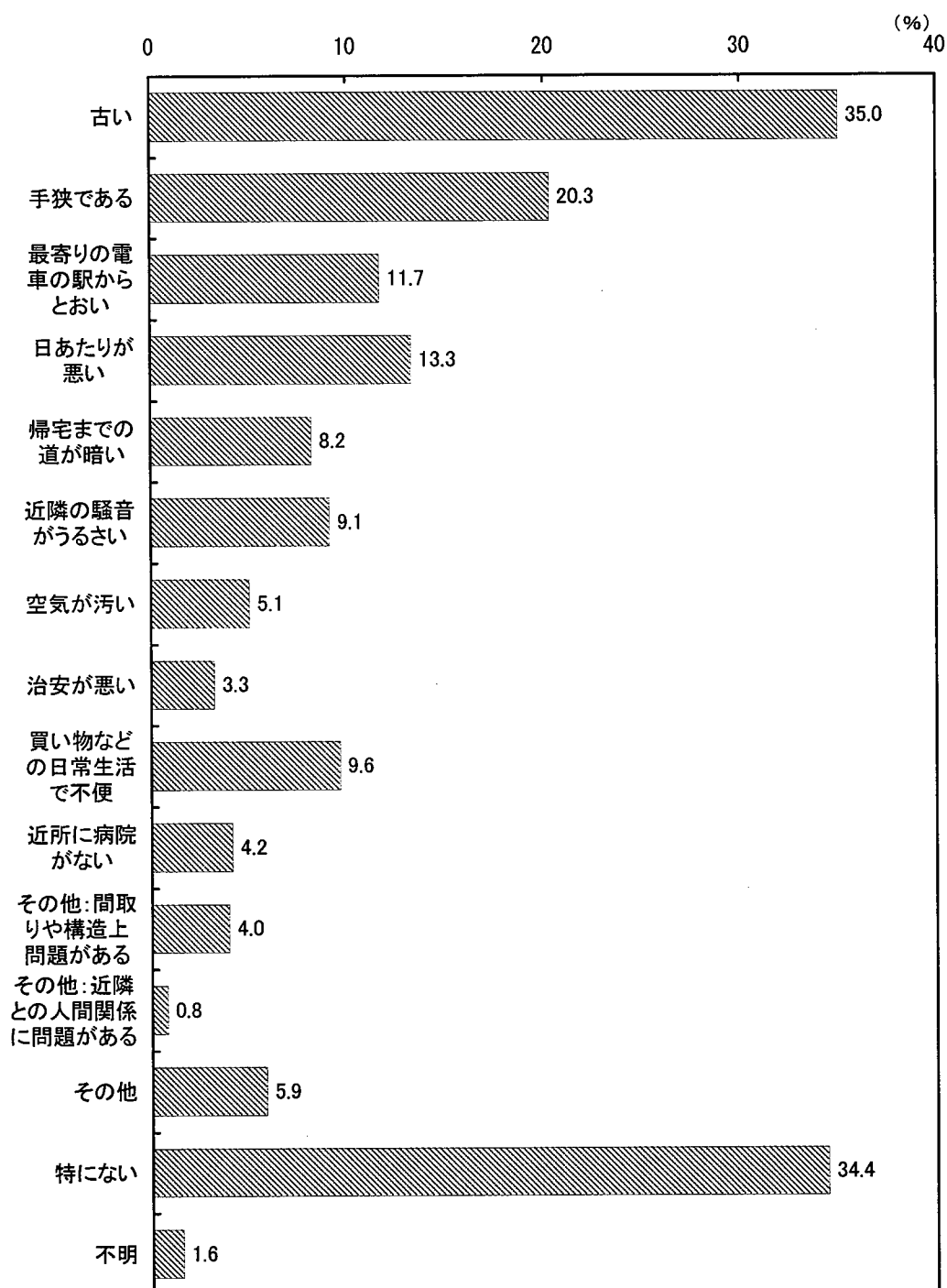
図表 3-3-8 住居を借りる・購入する際に困ったこと（複数回答）（問 12 付問 12-1—都市規模別）



(iii) 住居について困ったこと (問 12 付問 12-2)

住居自体について困ったことでは (図表 3-3-9)、対象者の 3 割強 (34.4%) が「特にない」とする一方で、「古い」(35.0%)、「手狭」(20.3%) が主な問題であった。それ以外は各項目でばらついた結果になっている。

図表 3-3-9 住居について困ったこと (複数回答) (問 12 付問 12-2)



c. 介護

ここでは、要介護者の有無とその対処方法、親が病気・介護で援助が必要になった場合の対応についてみる。

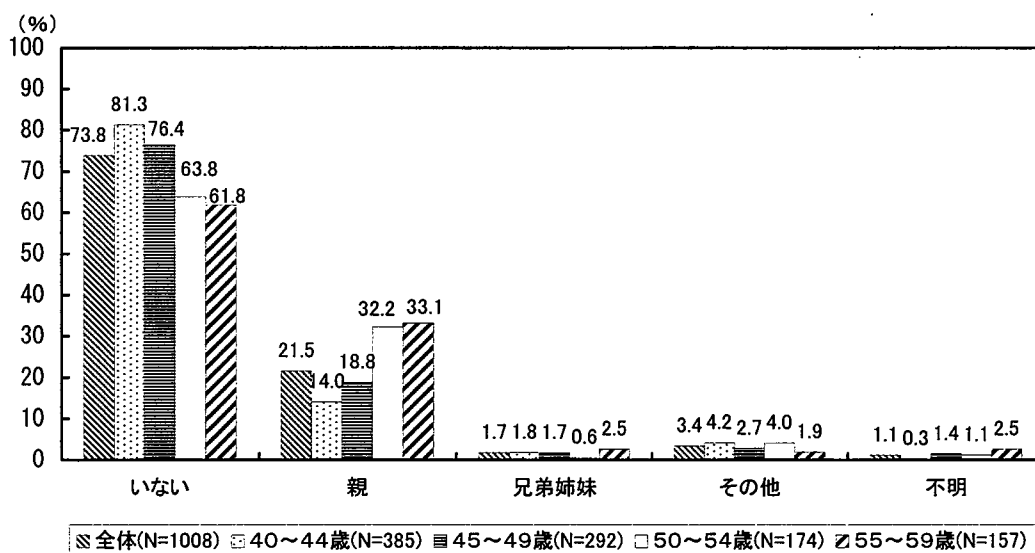
(i) 要介護者の有無 (問 22)

病気・介護などで援助が必要な方がいたか、または、現在いるかとの間に対し、全体で、「いない」の回答が 73.8%であった。また、「いる (いた)」の回答のうち 21.5%が親の介護であった (図表 3-3-10)。

これを従業上の地位で見ると (図表なし)、無業者の場合「いない」が 56.3%へと低下し、「いる (いた)」の回答のうち 32.6%が親の介護であった。いずれにしても、援助を必要とした相手は、そのほとんどが親である。

年齢階層別にみると (図表 3-3-10)、「いない」との回答比率は 40 歳代前半層の 81.3%から、年齢が上がるにつれ低下し、50 歳代後半層で 61.8%となる。全体から「いない」と「不明」を引いたものを、病気・介護で援助が必要な方がいる (いた) 割合とみなすと、40 歳代前半層の 18.4%から 50 歳代後半層の 35.7%まで、年齢とともに上昇している。

図表 3-3-10 病気・介護で援助が必要な方 (複数回答) (問 22)

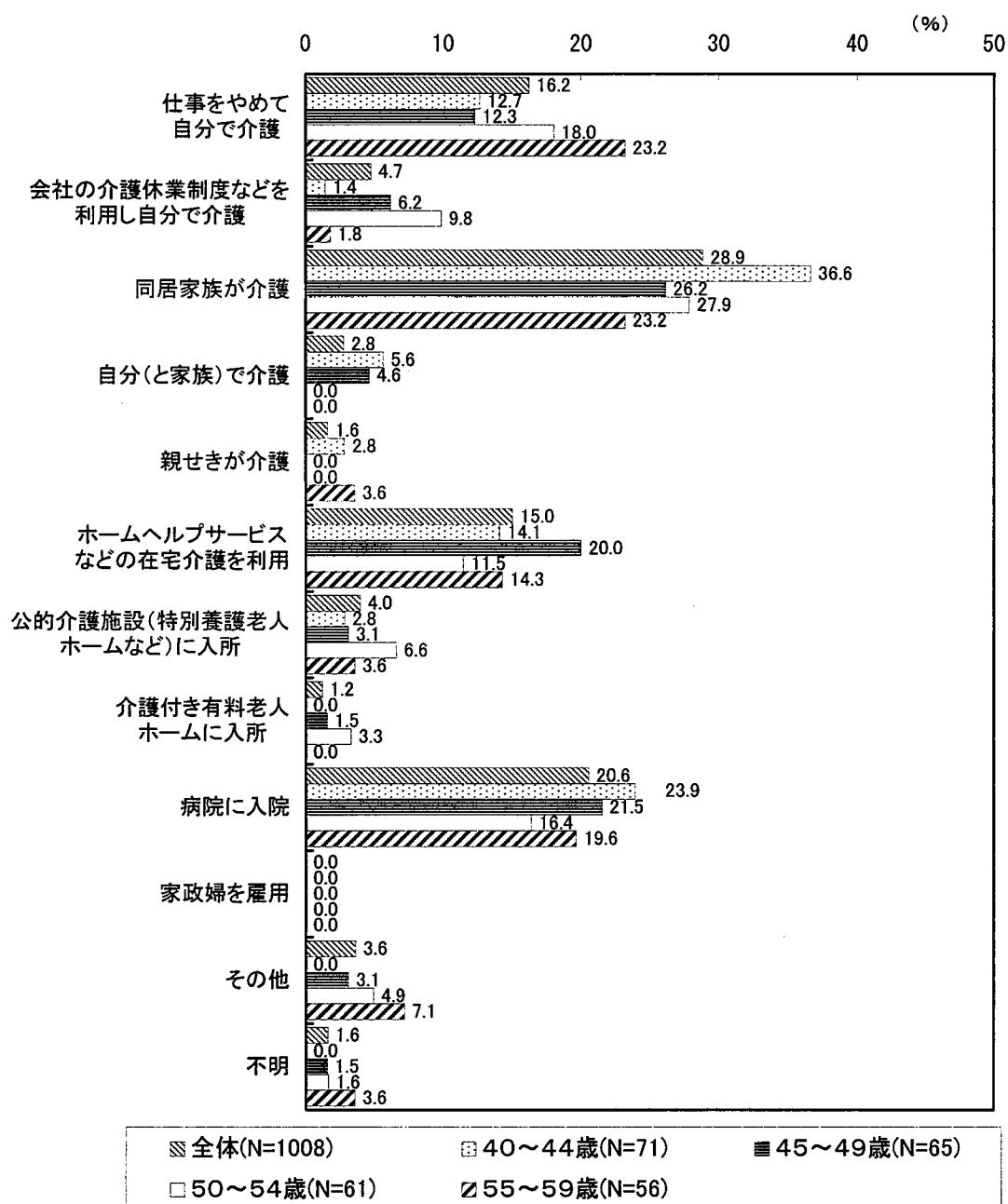


(ii) 病気・介護で援助が必要な方がいた（いる）場合の主な対処方法（問 22 付問 22-1）

病気・介護で援助が必要な方のいた（いる）場合の主な対処方法では（図表 3-3-11）、「同居家族が介護」（28.9%）、「病院へ入院」（20.6%）、「仕事をやめて自分で介護」（16.2%）、「ホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用」（15.0%）の順に多かった。

年齢階層別にみると、40歳代前半層では、「同居家族が介護」が36.6%の一方、「仕事をやめて自分で介護」が12.7%であるのに対し、50歳代後半層は前者が23.2%、後者も同一割合で、年齢が高くなると自ら介護する人が増える傾向にある。

図表 3-3-11 病気・介護で援助が必要な方への実際的な主な対処方法（問 22 付問 22-1）



(iii) これから親への援助が必要になった場合の主な対処方法の見込 (問 23)

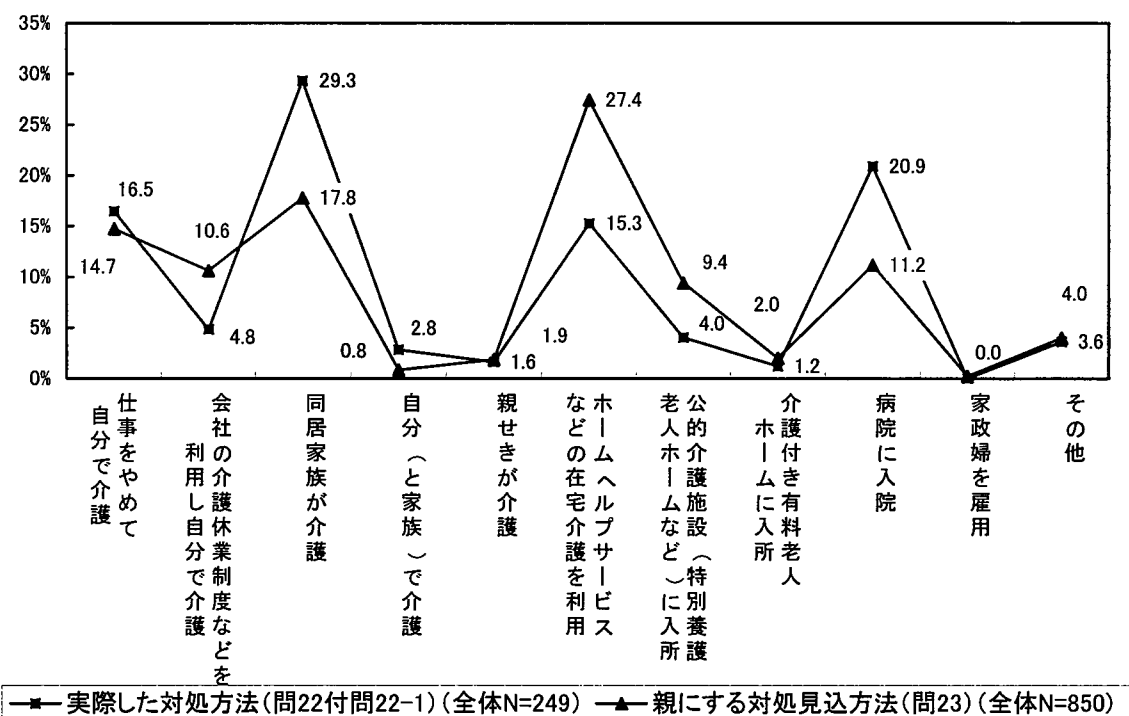
これから親が病気・介護で援助が必要になった場合の主な対処方法の見込については、これまでの実際の対処方法 (問 22 付問 22-1) との比較でみる。

図表 3-3-12 によると、実際の対処方法に対して、今後の対処方法の見込が高いものは、まず「ホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用」、「公的介護施設に入所」がある。一方で、「同居家族が介護」や「病院に入院」の割合が顕著に低く、これらの回答傾向には、介護保険サービスの浸透が背景にあるのかもしれない。

また、「会社の介護休業制度などを利用して自分で介護」の割合が倍増しており、これには企業サイドにおける介護支援制度等の拡大が反映しているとみることができよう。

なお、「仕事をやめて自分で介護」の回答率は、実際の対処方法で 16.5%、対処方法の見込で 14.7%と、ほとんど変わらない。そうだとすると、今後も親の病気・介護による就労の中断が、一定の割合で生じうるものと思われる。

図表 3-3-12 病気・介護で援助が必要な方への実際の対処方法 (問 22 付問 22-1) と、これから援助をする場合の対処方法の見込 (問 23)との比較



注：回答率は、回答より有効回答でない「不明」・「親はいない」(問 23 のみ)を除いて算出

(4) 家計の状況

本項では、現在の暮らしについて、家計の面から概観する。また、家計面に関連して、老後の生活資金となる公的・私的年金の加入状況および金融資産の形成状況についても取り上げる。

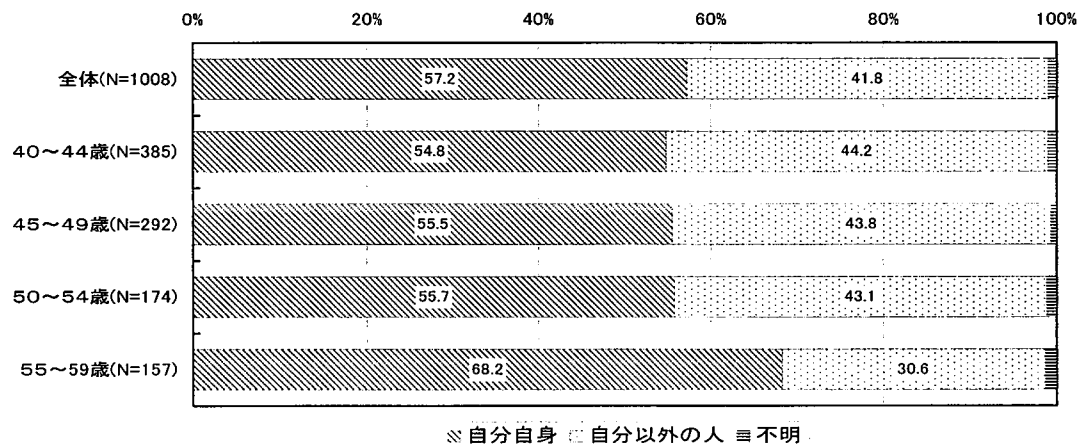
a. 収入面

(i) 生計維持の中心者 (問7 問7付問7-1)

今の世帯で、家計維持の中心になっている方について伺ったところ (図表3-4-1)、「自分自身」との答えが57.2%、「自分以外の人」が41.8%と、ほぼ6対4の割合であった。

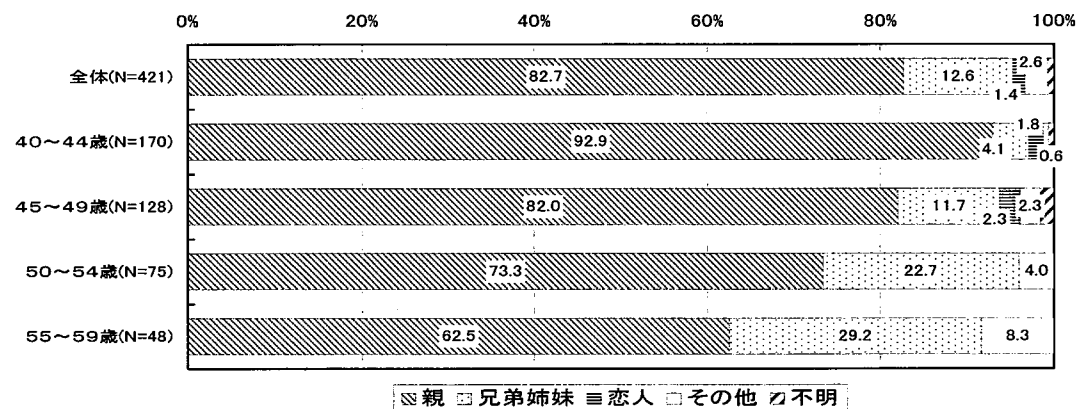
年齢層別では、50歳代後半層で、「自分自身」の割合が高くなっている。

図表3-4-1 家計維持の中心者 (問7)



それでは、自分以外とした方々では、誰が家計維持の中心者であろうか。これを図表3-4-2によってみると、「親」である場合が82.7%と圧倒的で、次いで「兄弟姉妹」が12.6%であった。

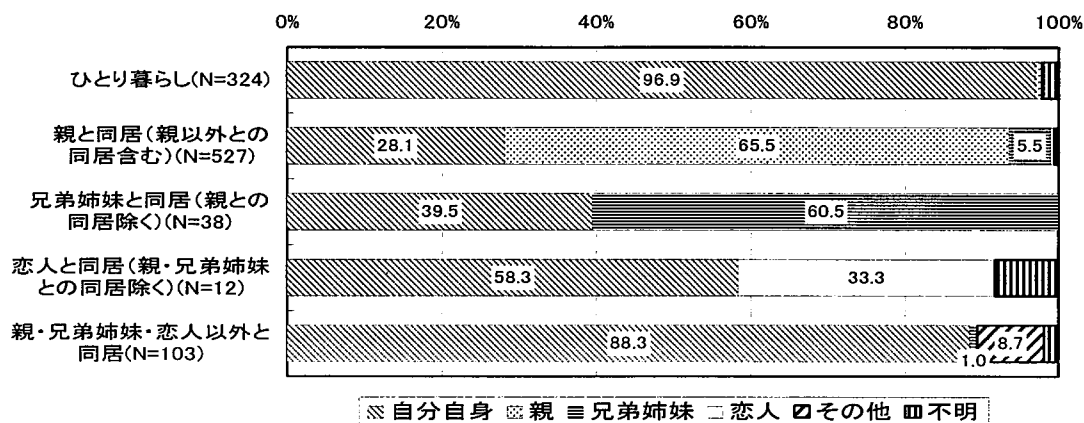
図表3-4-2 主な家計維持者の続柄 (問7付問7-1)



親との同居と生計維持者との関係を簡単に整理すると（図表 3-4-3）、親と同居する世帯のうち、家計維持の中心者が「自分自身」である割合が 28.1%、「自分以外」では「親」である割合が 65.5%となる。

なお、「ひとり暮らし（1人世帯）」の場合、当然のことではあろうが、家計維持の中心者は「自分自身」である（96.9%）。この点は、ほとんどが子どもとの同居世帯である「親・兄弟姉妹・恋人以外と同居」の世帯においても、ほぼ同様（88.3%）のことがいえる。

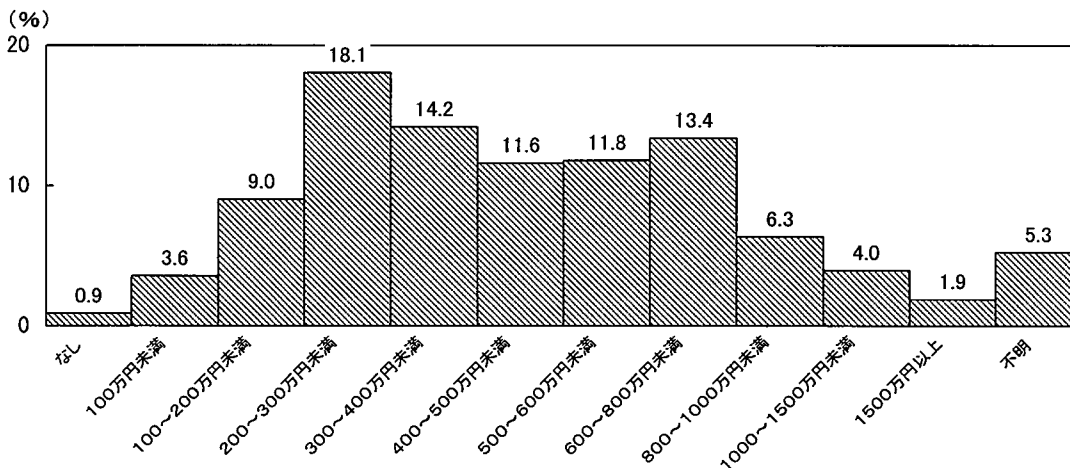
図表 3-4-3 生計維持者（問 7 付問 7-1—家族構成別）



(ii) 世帯の収入金額（問 8）

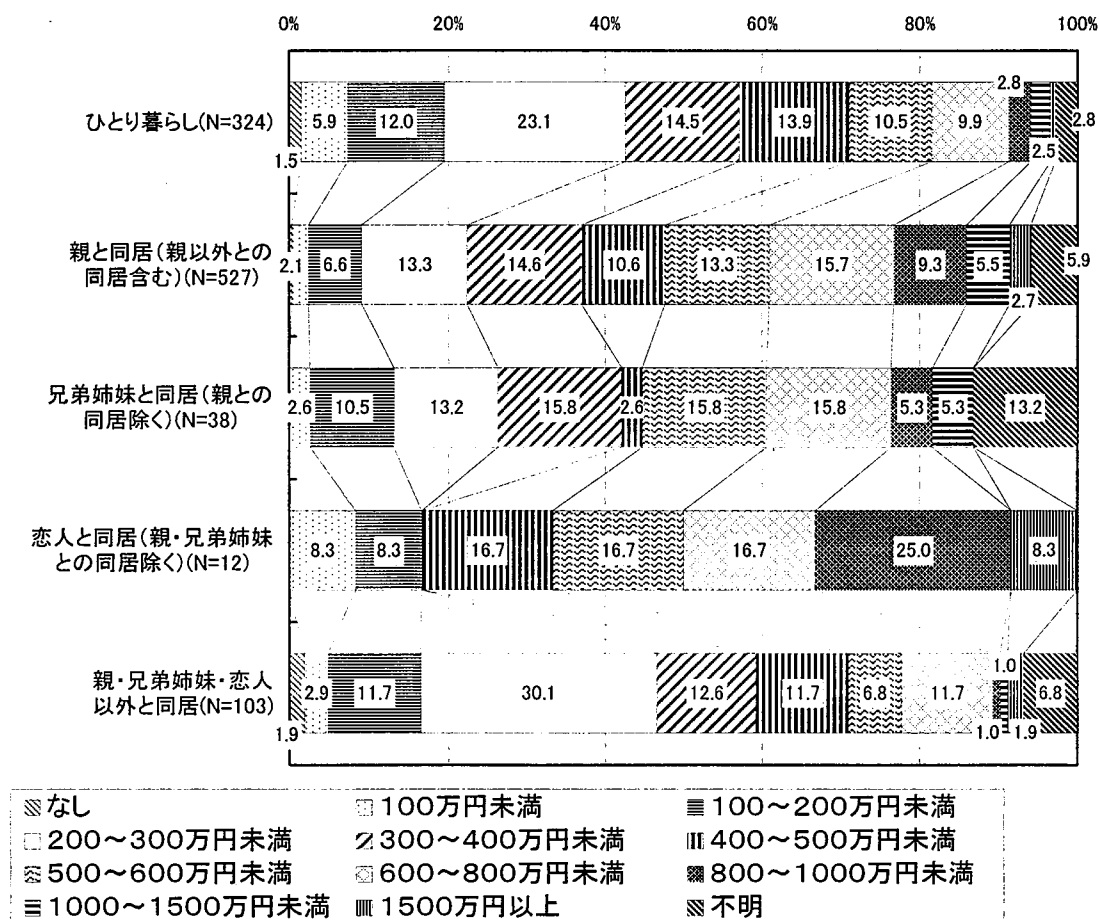
過去 1 年間の世帯全体の収入について、その分布を示したものが図表 3-4-4 である。この世帯全体の収入で最も多く占めるのは「200～300 万円未満」（18.1%）であるが、回答者全体の収入は 100 万円未満～1,000 万円未満の間に幅広く分布している。

図表 3-4-4 過去 1 年間の世帯全体の収入（問 8）



世帯構成別にみると（図表 3-4-5）、ひとり暮らしの場合は、回答者全体と同様に「200～300万円未満」が最も多い（23.1%）が、親と同居の場合は「600～800万円未満」が最大の収入区分（15.7%）となる。ほとんどが子どもとの同居世帯である「親・兄弟姉妹・恋人以外と同居」の世帯の傾向は、ひとり暮らしの場合に類似している。

図表 3-4-5 過去1年間の世帯全体の収入（問8—世帯構成別）

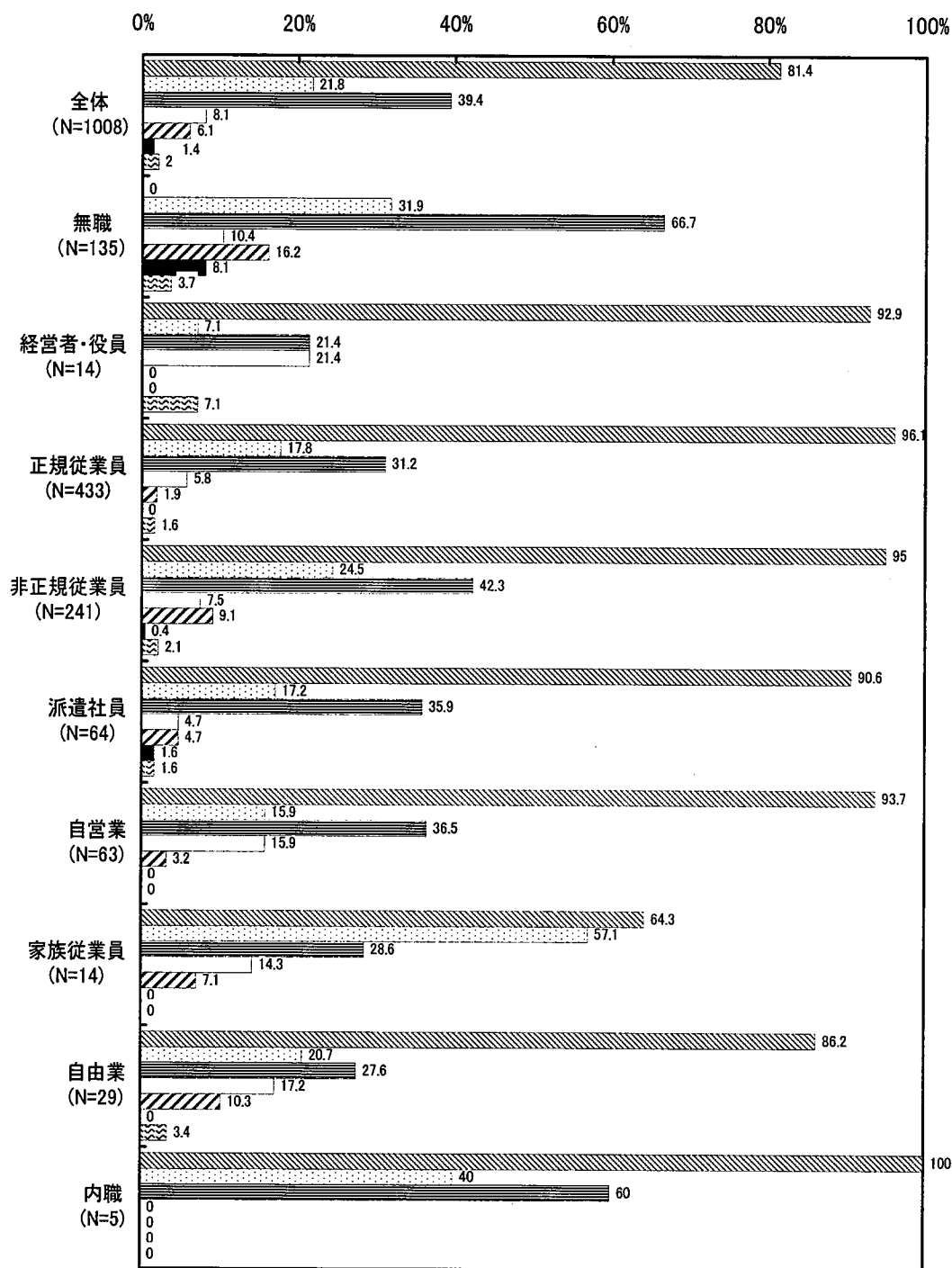


(iii) 世帯の収入源（問8付問8-1）

世帯の収入源では、図表 3-4-6 のとおり、全体では、「自分の仕事の収入」（81.4%）、「年金収入」（39.4%）、「同居の方の仕事の収入」（21.8%）が3大収入源となっている。

従業上の地位別に見ると、無職は「年金収入」（66.7%）が最多で、ついで「同居の方の仕事の収入」（31.9%）である。無職は、親との同居率（86.8%）が高いため、「年金収入」は主に親の年金と思われる。また、非正規従業員では、他の方々に比べ、「年金収入」を挙げる割合が高い。

図表 3-4-6 世帯の収入源（複数回答）（問 8 付問 8-1—従業員上の地位別）



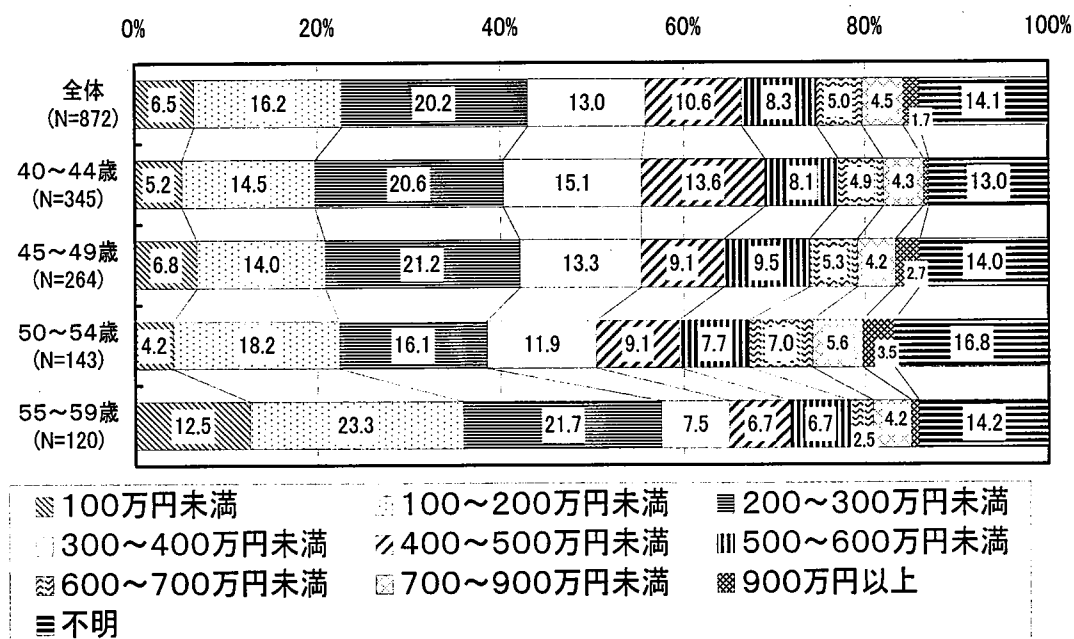
(iv) 本人の収入 (問 8 付問 8-2)

次に、問 1 で「現在、仕事についている」とした方に、本人の仕事から得た過去 1 年間の収入を聞いた。図表 3-4-7 によると、全体としては、「200～300 万円未満」の層が 20.2% と一番多く、300 万円未満までで 42.9%、400 万円未満まで 55.9% となる。

なお、平均年収は 339.0 万円である。

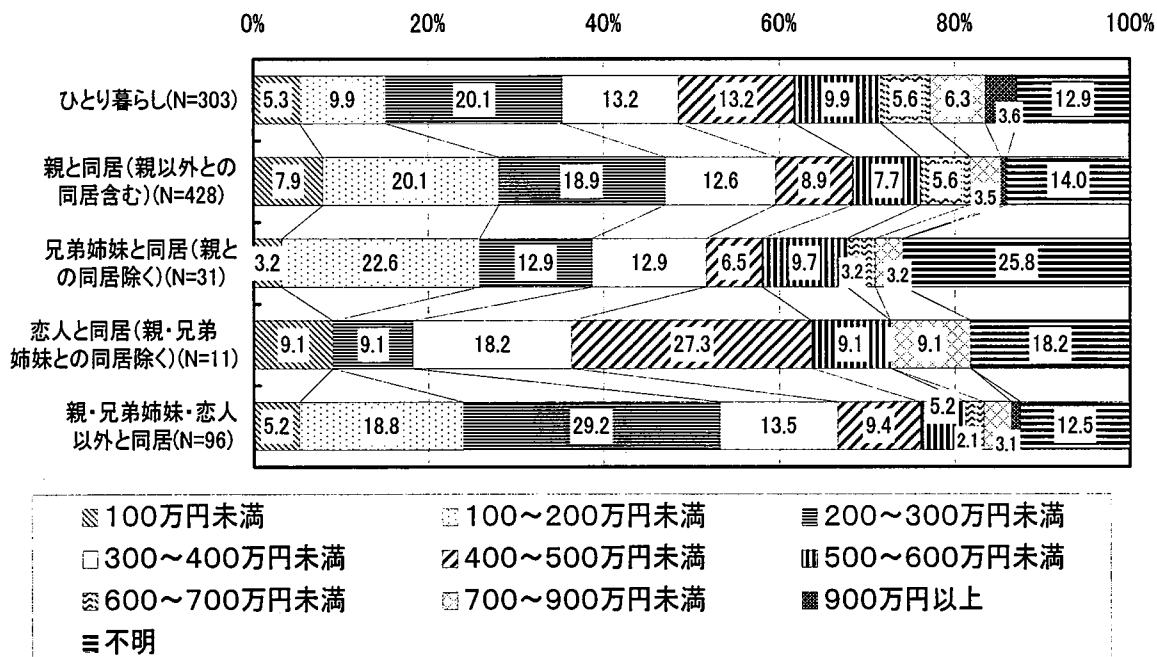
また、年齢階層別にみると、50 歳代後半層では、収入がより低い方に分布し、「100～200 万円未満」の層が 23.3% と最多になり、300 万円未満までで 57.5% を占める。

図表 3-4-7 過去 1 年間の仕事による収入 (問 8 付問 8-2)



本人の収入をもとに、ひとり暮らしと親と同居との場合を比較すると（図表 3-4-8）、前者の収入分布が、後者のそれより総じて高い方にある。これを平均年収で計ると、ひとり暮らしの場合、親と同居する方よりも約 100 万円高い（図表 3-4-9）。

図表 3-4-8 過去 1 年間の仕事による収入（問 8 付問 8-2—世帯構成別）



図表 3-4-9 過去 1 年間の仕事による収入（問 8 付問 8-2—世帯構成別平均）

世帯構成	平均 (万円)
全体(N=872)	339.0
ひとり暮らし(N=303)	401.4
親と同居(親以外との同居含む)(N=428)	306.6
兄弟姉妹と同居(親との同居除く)(N=31)	295.1
恋人と同居(親・兄弟姉妹との同居除く)(N=11)	405.4
親・兄弟姉妹・恋人以外と同居(N=96)	290.4

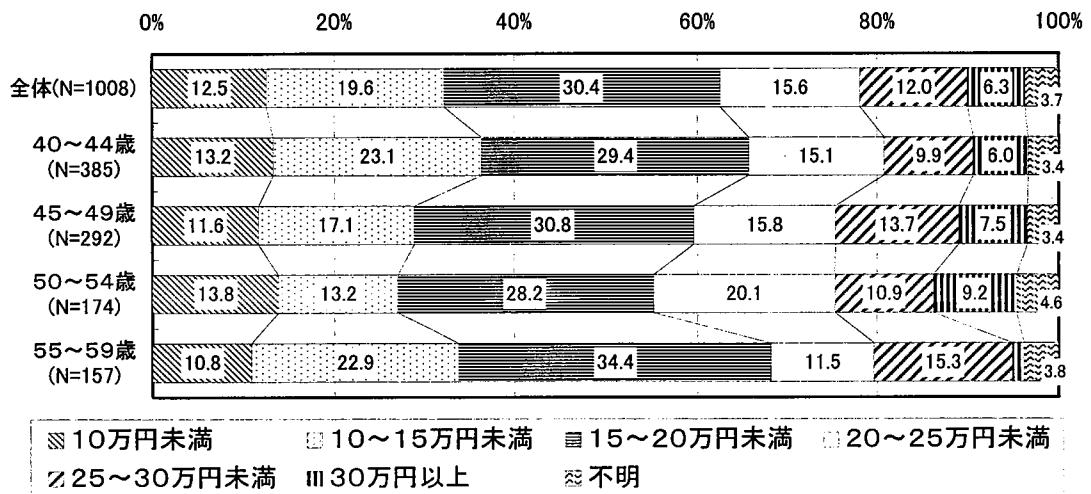
b. 支出面

家計の支出面では、一般にその元利返済が大きな負担となる住宅ローンの有無についてもみる。

(i) 世帯1か月の生活費（問10）

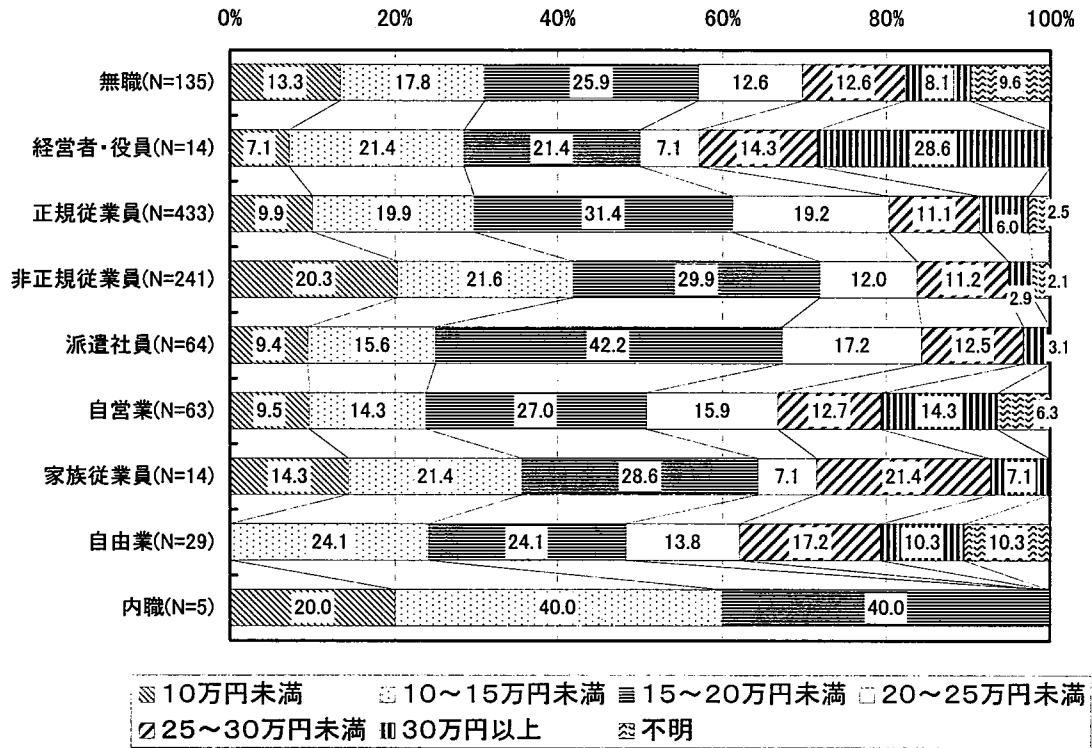
世帯1か月のあたり生活費は（図表3-4-10）、全体で見ると、「15～20万円未満」の割合が30.4%で一番高い。年齢階層別にみると（図表3-4-10）、50歳代後半層の生活費がやや低い方に分布している。

図表3-4-10 世帯の1か月の生活費（問10）



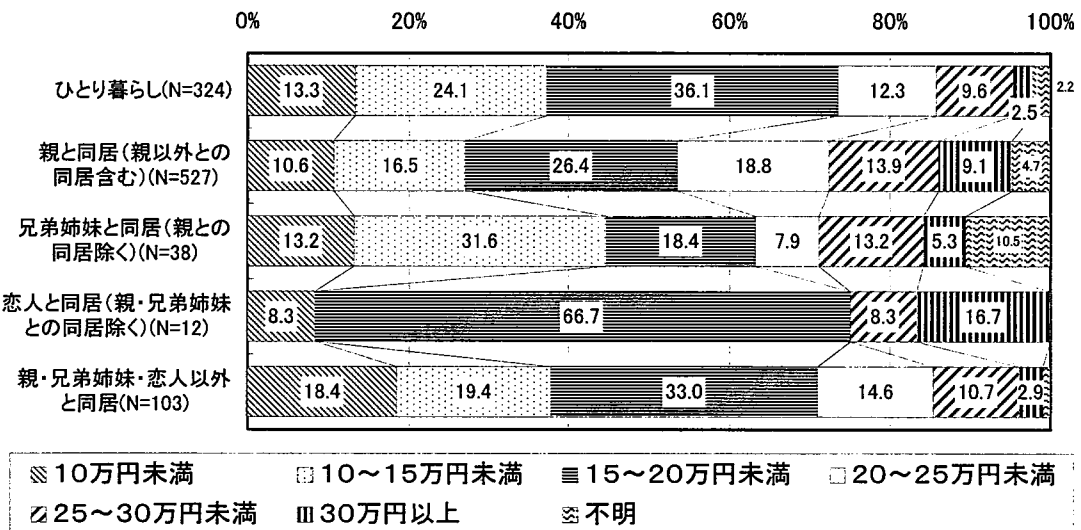
これを、従業上の地位別にみると、特に非正規従業員で「10万円未満」が20.3%と、他形態比、目立って高くなっている（図表3-4-11）。

図表 3-4-11 世帯の1か月の生活費（問10—従業員上の地位別）



また世帯構成別にみると（図表 3-4-12）、ひとり暮らしの場合は、「10～20 万円未満」を中心に、20 万円未満までに 73.5%となるが、親と同居の場合は、25 万円未満までに 72.3%がカバーされる。生活費では、世帯員数が影響を与えているものとみられよう。

図表 3-4-12 世帯の1か月の生活費（問10—世帯構成別）



(ii) 住宅ローン (問 10 付問 10-1)

家計では住宅ローンの負担が大きくなるが、その有無について聞いたところ、図表 3-4-13 の通り、全体の約 1 割が住宅ローンを借りていた。これを有する割合は、年齢にかかわらずほぼ一様である。

ただし、従業上の地位別でみると、正規従業員で 14.5%が借入れしており、非正規従業員(6.6%)、派遣社員(7.8%)と比べてその比率が高い(図表 3-4-14)。

また、住宅ローン借入れ総額は平均 19.9 百万円である(図表 3-4-15)。

図表 3-4-13 住宅ローン借入れ (問 10 付問 10-1)

年齢	借入れあり(%)
全体(N=1008)	9.6
40～44 歳(N=385)	9.6
45～49 歳(N=292)	10.3
50～54 歳(N=174)	10.3
55～59 歳(N=157)	7.6

図表 3-4-14 住宅ローン借入れ (問 10 付問 10-1—従業上の地位別)

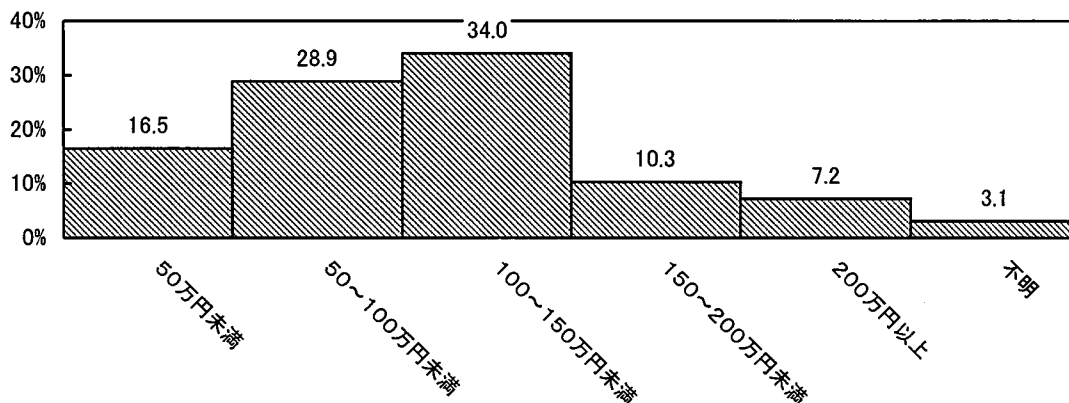
就業形態	借入れあり(%)
無職(N=135)	0.7
経営者・役員(N=14)	21.4
正規従業員(N=433)	14.5
非正規従業員(N=241)	6.6
派遣社員(N=64)	7.8
自営業(N=63)	9.5
家族従業員(N=14)	7.1
自由業(N=29)	6.9
内職(N=5)	0.0

図表 3-4-15 住宅ローン借入額 (問 10 付問 10-1(1))

借入れ総額	構成比(%)
500 万円未満	9.3
500～1000 万円未満	12.4
1000～2000 万円未満	26.8
2000～3000 万円未満	36.1
3000 万円以上	10.3
不明	5.1
計	100.0
平均	19.9 百万円

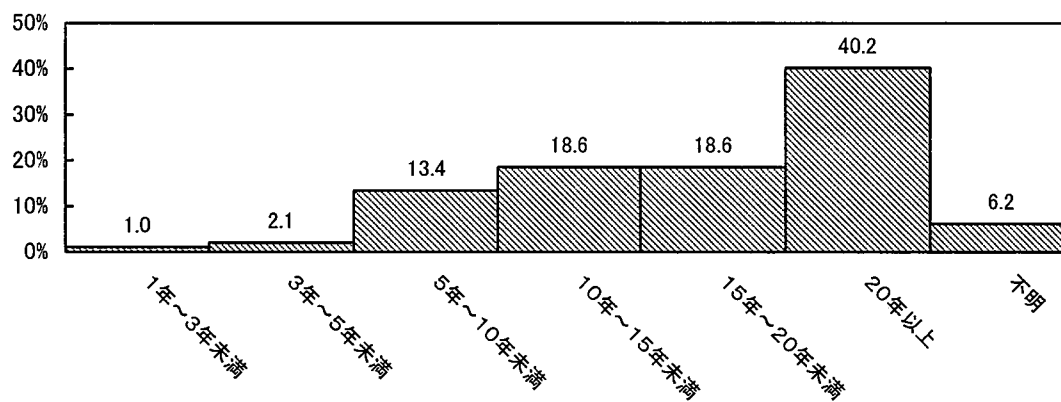
借り入れをした住宅ローンの年間返済額は、平均 98 万円で、最も多い年間返済額は、「100～150 万円未満」が 34.0%、つぎに「50～100 万円未満」で 28.9%である（図表 3-4-16）。

図表 3-4-16 住宅ローン年間返済額（問 10 付問 10-1(2)）



住宅ローンの返済までの残余期間は 20 年以上が最も多い。留意すべきは、現在年齢を起点に考えると、住宅ローン完済までの残余期間が意外に長く、多くのケースで定年年齢を超えて住宅ローンの返済を続けることになるかもしれない(図表 3-4-17)。

図表 3-4-17 住宅ローンの完済までの期間（問 10 付問 10-1(3)）



(5) 社会関係と生きがい

本項では、日常生活のお付き合い等と社会関係、日々の充実感・満足度、そして不安に思っていることについて取り上げる。

a. 社会関係

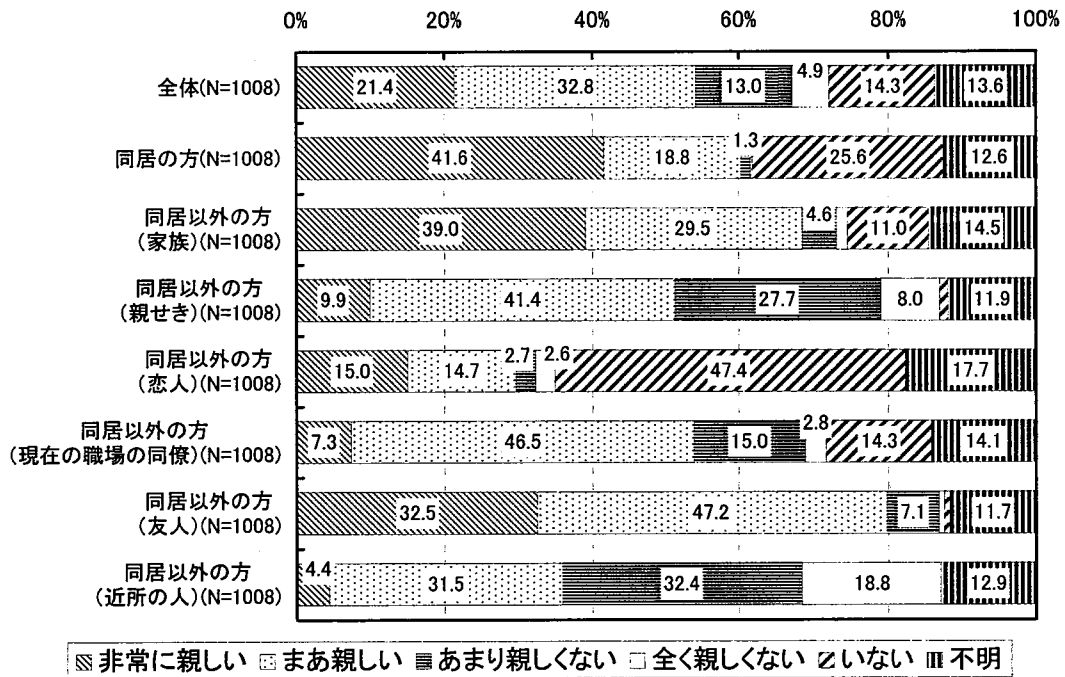
日常生活におけるお付き合いについては、血縁関係である家族・親せき、地縁関係である近所の方、職場の同僚、そして個人的な友人・恋人に関して、どの程度親密であるか。また、恋人とお付き合いの関連では、将来の結婚意向についても触れる。

(i) お付き合いの親密度 (問 17)

全体として、まず「親せき」、「現在の職場の同僚」、「近所の人」をみると (図表 3-5-1)、「非常に親しい」がおおむね 4%から 10%弱の間で低い割合にあり、「まあ親しい」が 31.5%から 46.5%の間であって、これらの方々とは総じてそこそこのお付き合いのようである。

一方、「友人」とは「非常に親しい」が 32.5%、「まあ親しい」が 47.2%で、家族とともに、お付き合いの中心が友人であることを伺わせる。

図表 3-5-1 お付き合いの親密度 (問 17)

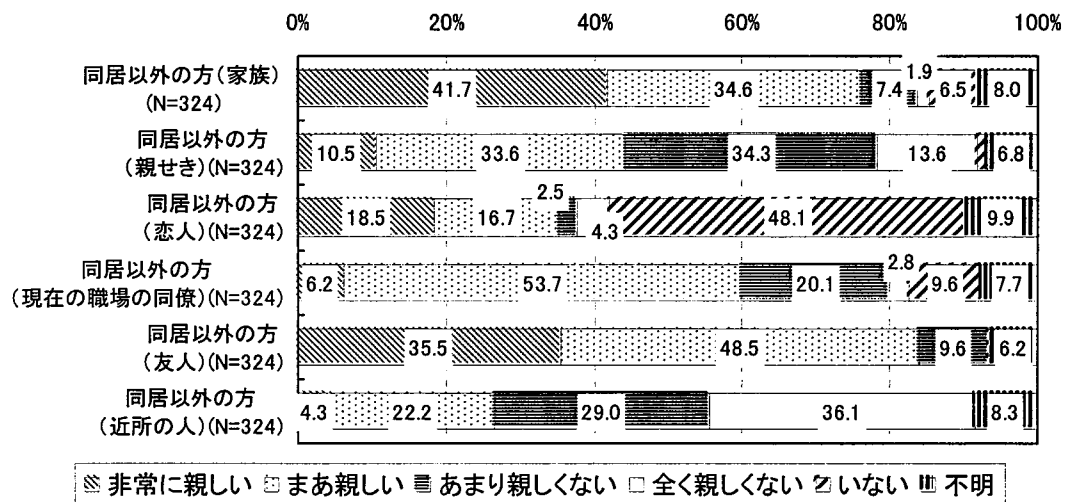


同居の有無などの家族構成別にみると（図表 3-5-2、図表 3-5-3）、1人世帯(全体の 32.1%)では、「家族」との親密度は「非常に親しい」が 41.7%、「まあ親しい」が 34.6%である。「親せき」、「現在の職場の同僚」とは全体とほぼ同じ傾向である。「近所の人」との親密度は「あまり親しくない」が 29.0%、「全く親しくない」が 36.1%であり、全体（51.2%）に対し親密度が薄い。

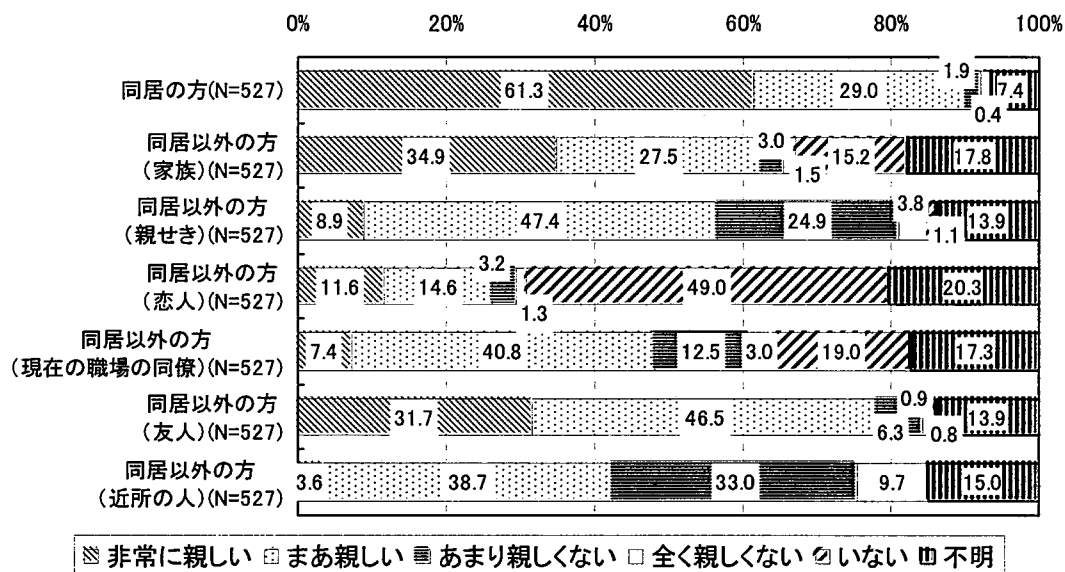
親との同居の世帯(全体の 52.3%)では、同居家族との親密度がかなり高い（61.3%）。その他の方々との親密度は全体の傾向と似ている。

全体としては、親しいお付き合いの中心は、家族であり友人であると言えよう。

図表 3-5-2 お付き合いの親密度（問 17-1人世帯）



図表 3-5-3 お付き合いの親密度（問 17-親と同居の世帯）



【参考 お付き合いの親密度にかかわる前回調査との比較】

今回調査では、前回調査から調査内容の変更を行ったが、社会関係に関しては日常生活での重要性を考慮し、ほぼ同様の設問とした。ここでは、次のような両調査の相違点に留意しつつ、両調査の結果を比較したい。

(両調査の相違点)

- ・対象者：今回調査は原則生涯独身女性。前回調査は、離別・死別を含む独身女性。
- ・世帯構成：1人暮らしの割合は、前回は35.4%、今回は44.8%である。
- ・居住地：前回は東京都区部、今回は全国。
- ・年齢：前回は40～55歳。今回は40～59歳。

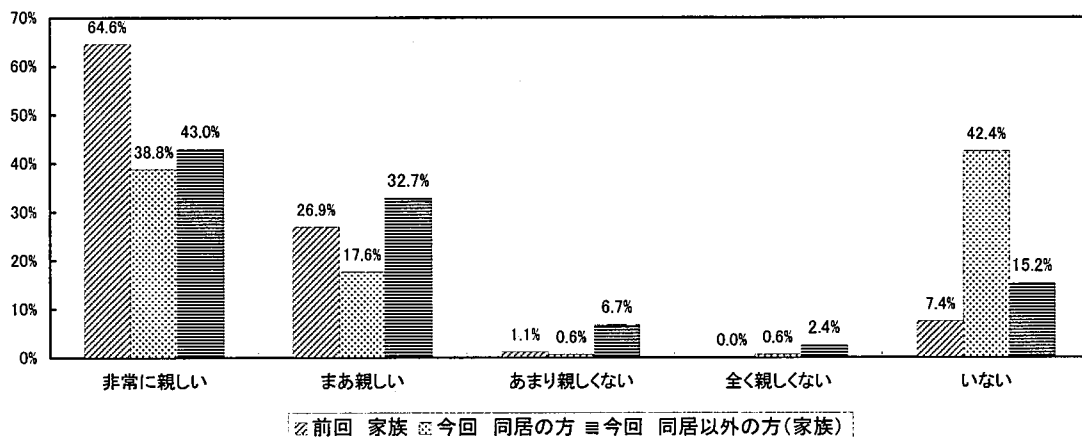
以上の相違点を前提に、可能な限り両者標本を均一にするため、ここでは、前回の離別・死別を含む独身女性の調査結果(N=175)に対して、今回調査対象者から、東京都区部の40～55歳の未婚独身女性(N=181)について集計し比較した。なお、回答率は、設問の対象者が「いない」場合(例えば、1人暮らしに同居の方との親密度を聞く設問)など、無効回答を除いて集計した。

結論を先取りすれば、両調査の関係者との親密度に大きな相違はなかった。ただし、今回調査は前回比、親密度が総じてやや低くなっている。

①家族との親密度 (図表 3-5-4)

前回は、家族というカテゴリーで親密度を訊いたが、今回は、1人暮らしの方も多いため、同居の家族と同居以外の家族とを分けて、親密度を訊いた。1人暮らしで同居の方が「いない」との回答を除くと、ほぼ前回同様に、ほとんどが家族と親密な関係にある。

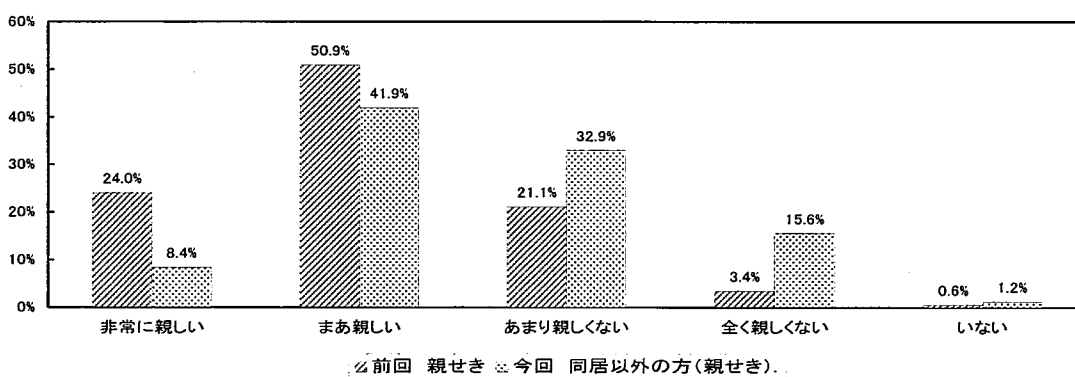
図表 3-5-4 家族との親密度



②親せきとの親密度 (図表 3-5-5)

今回調査では、前回より親せきとの親密度が低くなっており、特に「あまり親しくない」・「全く親しくない」を合わせた割合が、前回より 23.9 ポイント上昇し、48.4%となった。ただし、前回調査の対象者には、配偶者との離別者・死別者が含まれ、また、本人と未婚の子どものみの世帯が 44.6%含まれているので、今回調査の未婚者とは異なり、それなりに親せきとの行き来があったものと思われる。

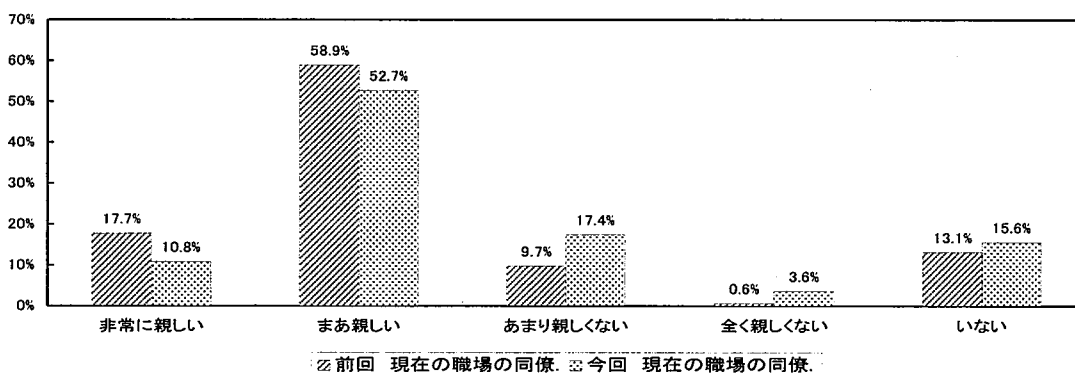
図表 3-5-5 親せきとの親密度



③現在の職場の同僚との親密度 (図表 3-5-6)

前回調査と比較すると、今回調査では、「非常に親しい」・「まあ親しい」を合わせた割合が 63.5%へと 13.1 ポイント低下している。

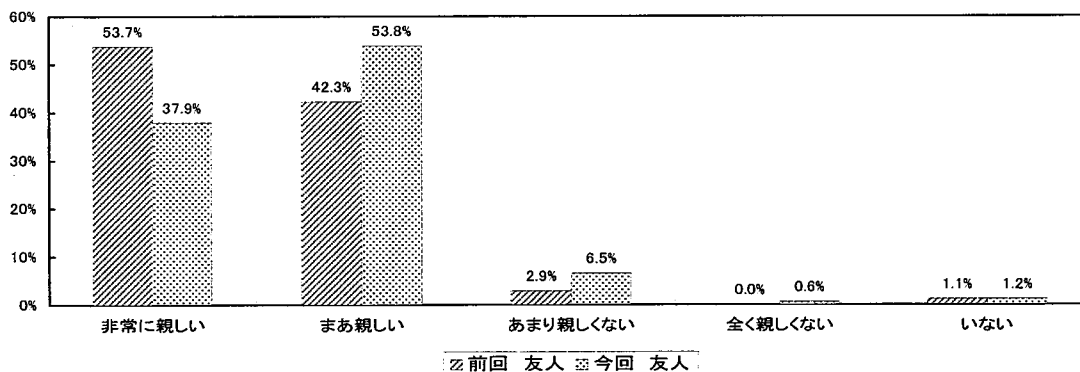
図表 3-5-6 現在の職場の同僚との親密度



④友人との親密度 (図表 3-5-7)

ここでは、前回調査と今回調査とも、「非常に親しい」・「まあ親しい」を合わせた回答割合が 9 割程度でほとんど変わらなかったが、今回の「非常に親しい」への回答割合は前回比 15.8 ポイント低下した。

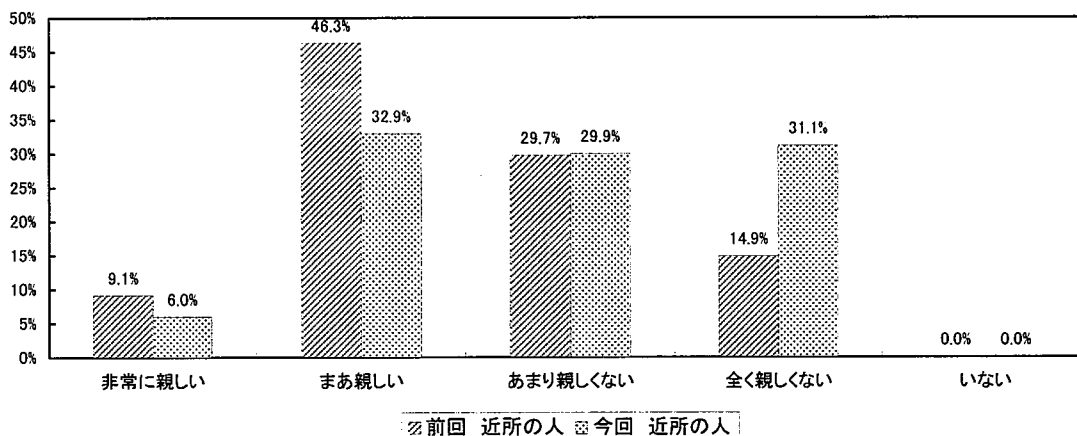
図表 3-5-7 友人との親密度



⑤近所の人との親密度 (図表 3-5-8)

近所の人との親密度については、両調査とも総じて親しさが低いが、今回調査では「あまり親しくない」・「全く親しくない」の合計回答割合が 61.0%で、前回比 16.4 ポイント高い。これは、前回調査が離別者・未婚者を含んでおり、本人と未婚の子どものみの世帯の割合が 44.6%で、それだけ子どもを通しての地域との係りがあるためかもしれない。

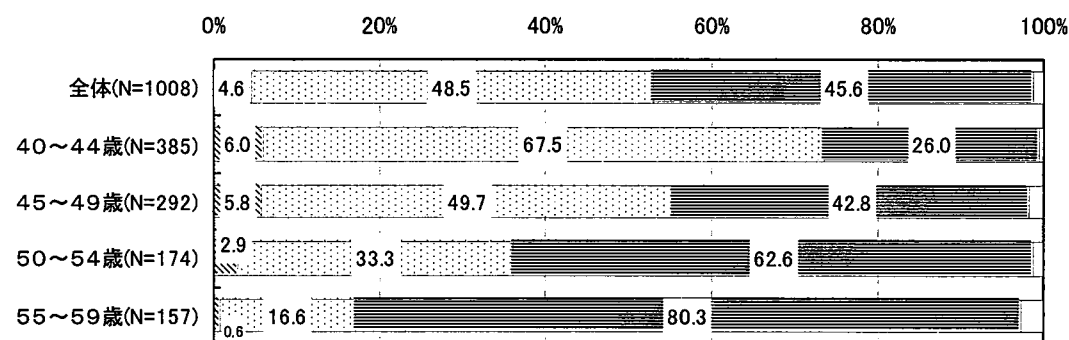
図表 3-5-8 近所の人との親密度



(ii) 結婚意向 (問 21)

将来における結婚の意向について (図表 3-5-9)、全体では、「すでに結婚相手が決まっている」との回答が 4.6%あった。ただ、「適当な人がいたら結婚したい」(48.5%)と「結婚するつもりはない」(45.6%)とはほぼ拮抗した。これを年齢階層別にみると、当然のことかもしれないが、「結婚するつもりはない」との回答が、年齢層が高くなるにつれ急増する。

図表 3-5-9 結婚意向 (問 21)



■ すでに結婚相手が決まっている □ 適当な人がいたら結婚したい ≡ 結婚するつもりはない □ 不明

ここで、結婚意向と、問 17 の恋人とのお付き合いの親密度の回答状況を合わせてみると (図表 3-5-10)、結婚意向のある人で恋人がいる人は 39.7%で、そのうち「非常に親しい」・「まあ親しい」とする恋人がいるのは 33.1%あった。

図表 3-5-10 結婚意向 (問 21—問 17 お付き合いの親密度 (恋人) で分類)

結婚意向.	お付き合いの親密度 (恋人) (%)					
	非常に親しい	まあ親しい	あまり親しくない	全く親しくない	いない	不明
適当な人がいたら結婚したい (N=489)	15.3	17.8	3.7	2.9	45.6	14.7
結婚するつもりはない (N=460)	9.9	11.7	1.7	2.6	54.6	19.5
不明(N=13)	7.7	0.0	0.0	0.0	15.4	76.9

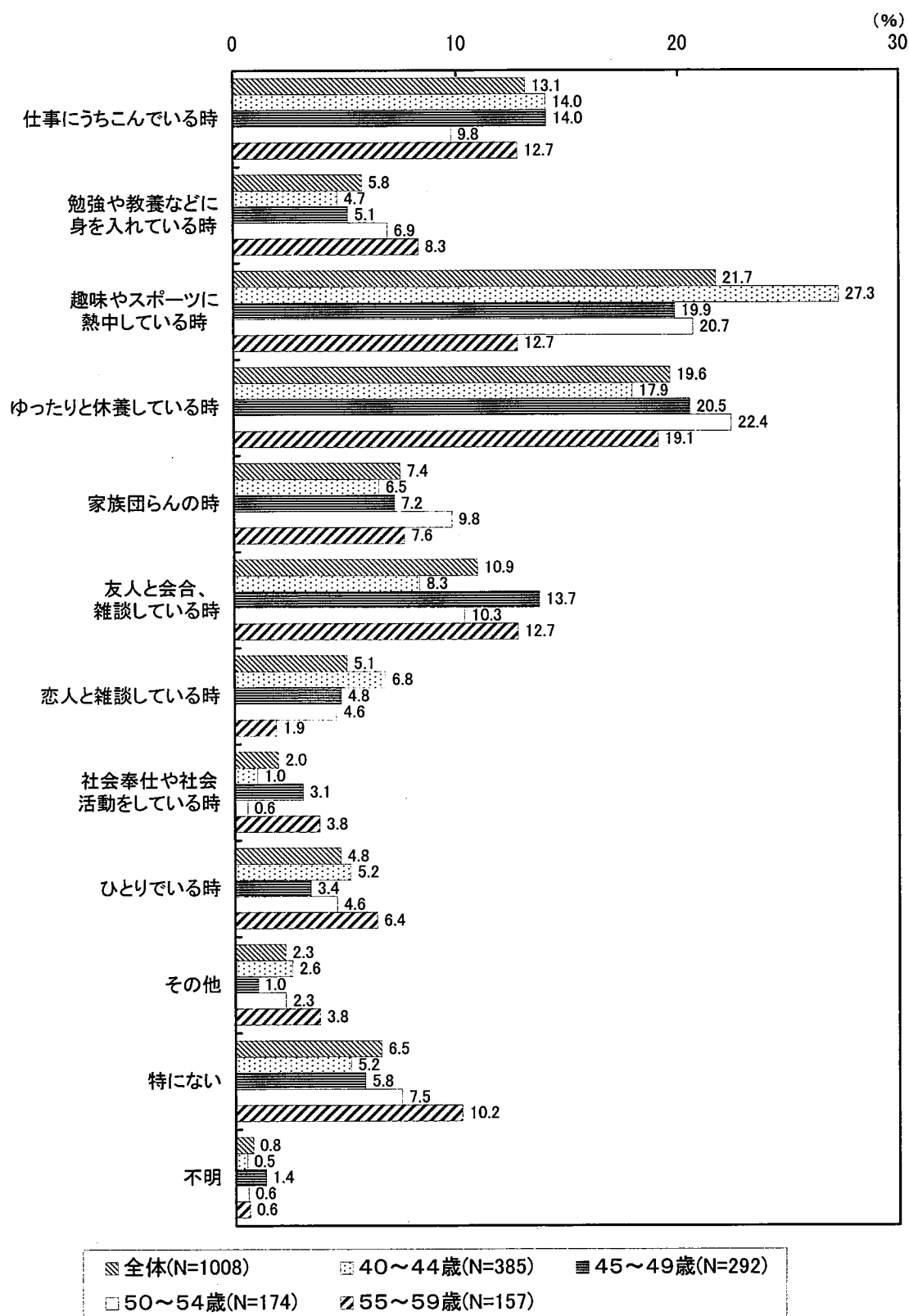
b. 生活の満足度

(i) 充実感 (問 16)

「あなたが日頃の生活の中で、最も充実感を感じるのはどのような時ですか。」という設問に対しては (図表 3-5-11)、全体で見ると、「趣味やスポーツに熱中している時」が最も高い回答で 21.7%、次いで「ゆったりと休養している時」(19.6%)、「仕事にうちこんでいる時」(13.1%)、「友人と会合、雑談しているとき」(10.9%)が続く。

年齢階層による相違はあまり見られないところに特徴がある。ただ強いて言えば、40 歳代前半層の「趣味やスポーツに熱中している時」の割合が、その他の年齢層と比べて、高い。また、「特にない」の選択率が、年齢が上がるほど高くなる傾向にある。

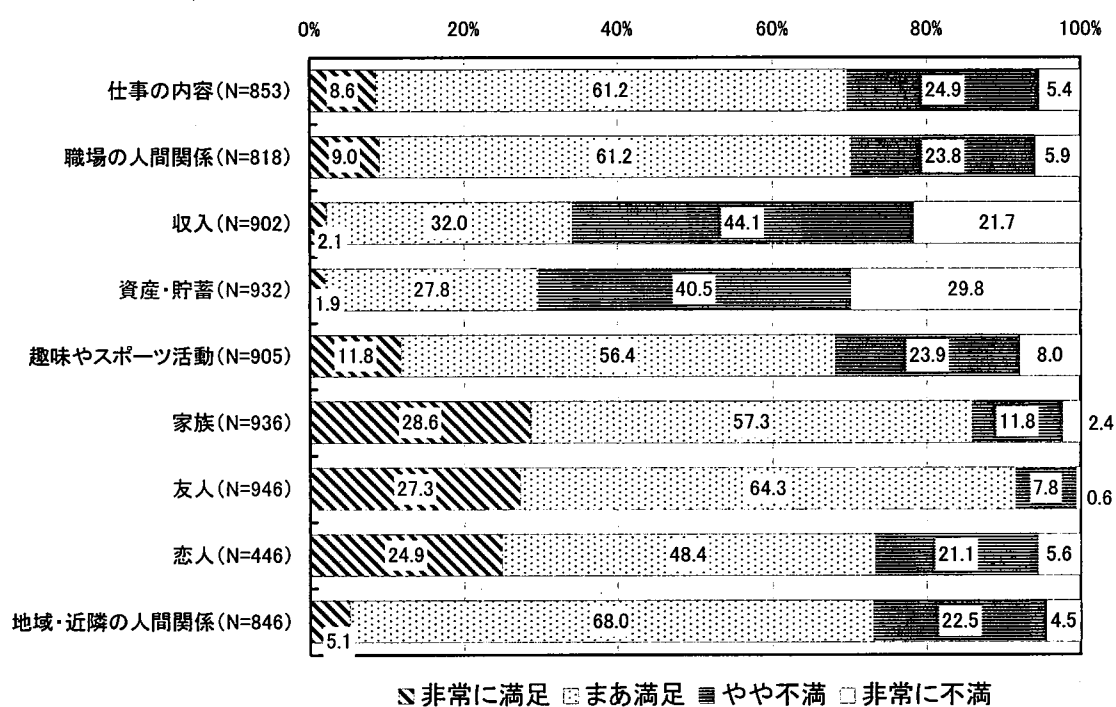
図表 3-5-11 最も充実感を感じる時 (問 16)



(ii) 日常生活における満足度（問 18）

日常生活における満足度を、人間関係（職場の人間関係、家族、友人、恋人、地域・近隣の人間関係）、経済面（収入、資産・貯蓄）、仕事の内容、そして趣味やスポーツ活動の4つの領域について問うた（図表 3-5-12）。「非常に満足」と「まあ満足」の合計が高いものは、まず「家族」、「友人」であり、次いで「恋人」、「地域・近隣の人間関係」、「仕事の内容」、「趣味やスポーツ活動」となる。逆に満足度の低いものは、「収入」、「資産・貯蓄」で、経済面での不満割合は約7割と、他に比べ突出して高い。

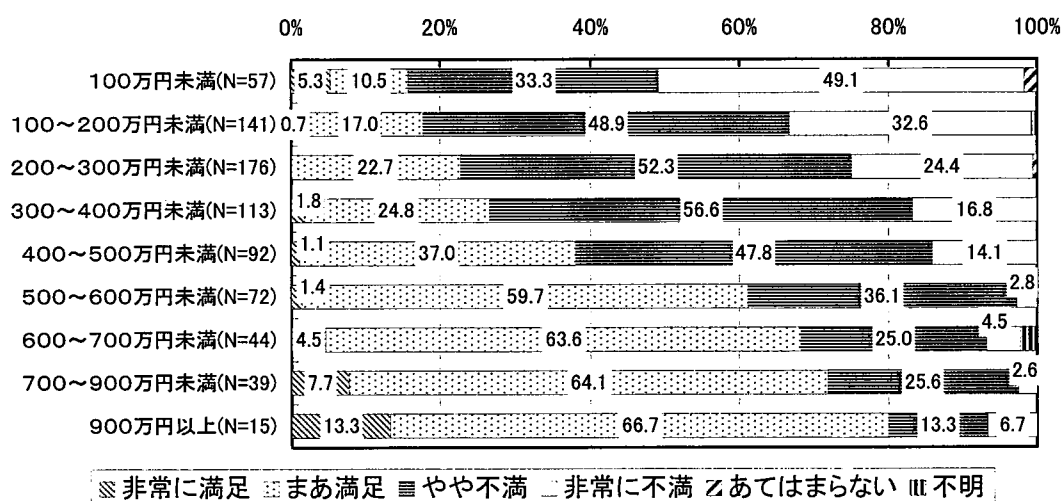
図表 3-5-12 日常生活における満足度—全体（問 18）



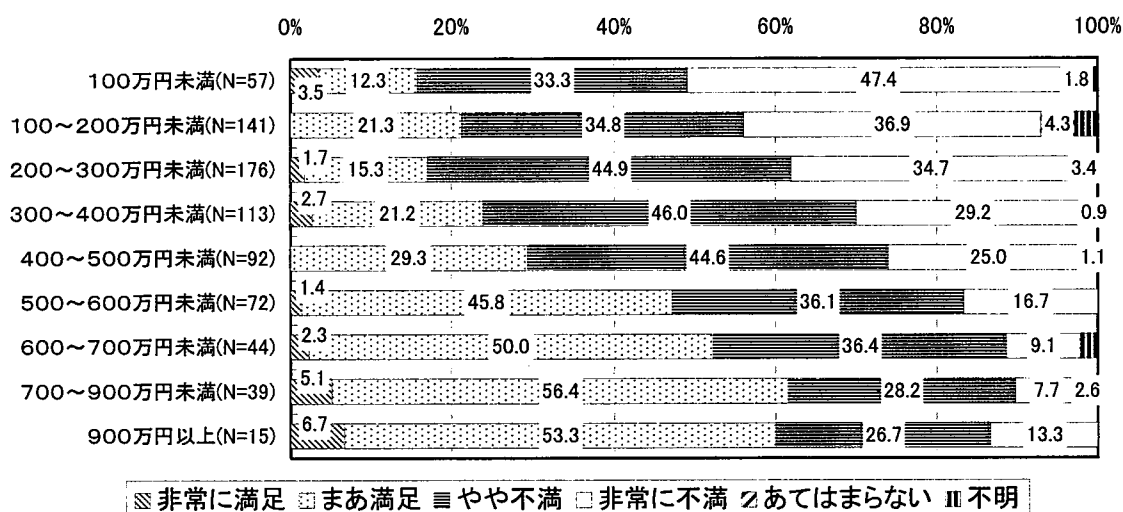
注 回答のうち、「あてはまらない」・「不明」を除き集計

「収入」と「資産・貯蓄」の満足度を、本人の仕事から得た過去1年間の収入で分類してみると（図表3-5-13、図表3-5-14）、その収入が500万円以上になると、2つの項目に対する満足度（「非常に満足」と「まあ満足」の合計）が急に高くなることが見てとれる。

図表3-5-13 日常生活における満足度—収入（問18—仕事による収入別）



図表3-5-14 日常生活における満足度—資産・貯蓄（問18—仕事による収入別）

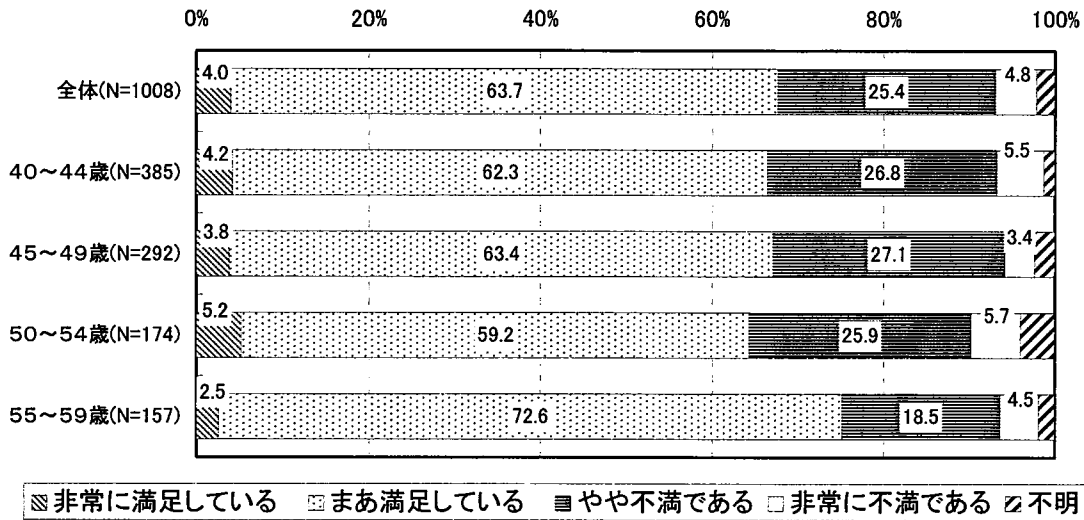


(iii) 生活全体の満足度（問19）

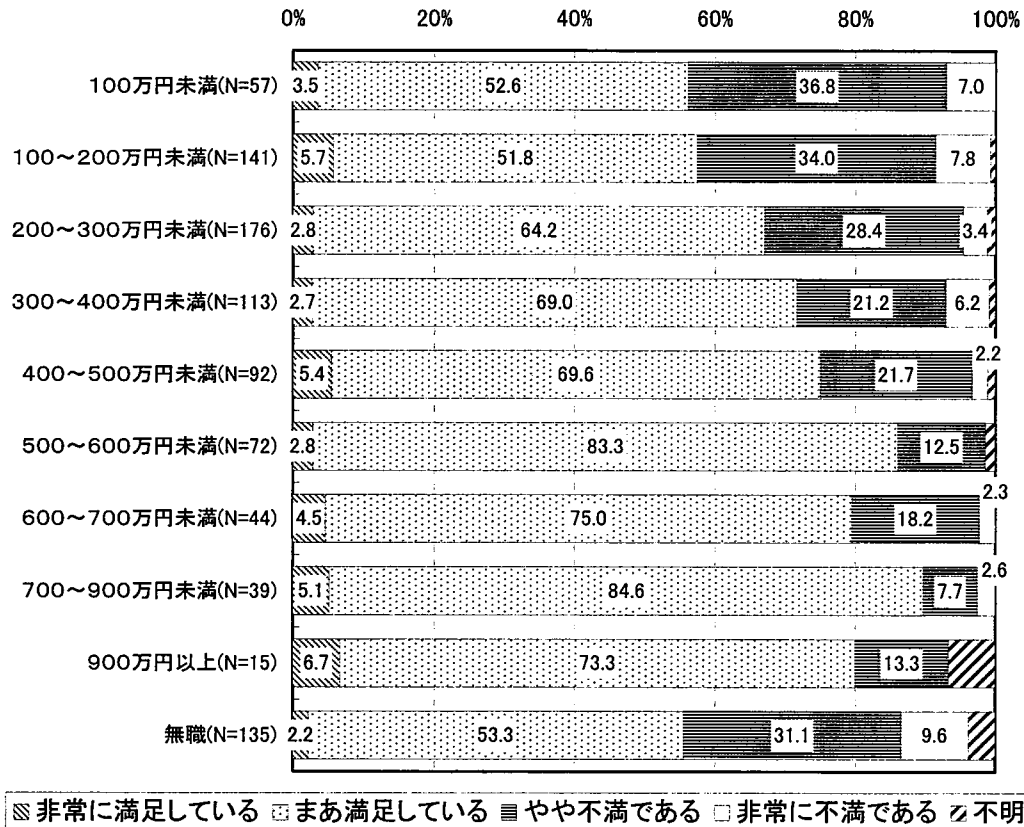
それでは、生活全体としてみた場合はどうであろうか。図表3-5-15によると、全体として67.7%が「非常に満足」あるいは「まあ満足している」と回答し、30.2%が「やや不満」あるいは「非常に不満」としている。

また、生活全体の満足度は、ほぼ年収の大きさに比例し、高くなる（図表3-5-16）。

図表 3-5-15 生活全体の満足度 (問 19)



図表 3-5-16 生活全体の満足度 (問 19—仕事による収入別)



また、日常生活の満足度と生活全体の満足度との相関関係をみると、図表 3-5-17 で示した相関係数のとおり、日常生活の「収入」、「資産・貯蓄」に対する満足と生活全体の満足度との相関関係が高いことがわかった。

図表 3-5-17 日常生活の満足度の回答と生活全体の満足度の回答との相関係数
(問 18 問 19)

日常生活の満足度	相関係数
(1) 仕事の内容	0.389**
(2) 職場の人間関係	0.318**
(3) 収入	0.422**
(4) 資産・貯蓄	0.424**
(5) 趣味やスポーツ活動	0.303**
(6) 家族	0.303**
(7) 友人	0.229**
(8) 恋人	0.319**
(9) 地域・近隣の人間関係	0.209**

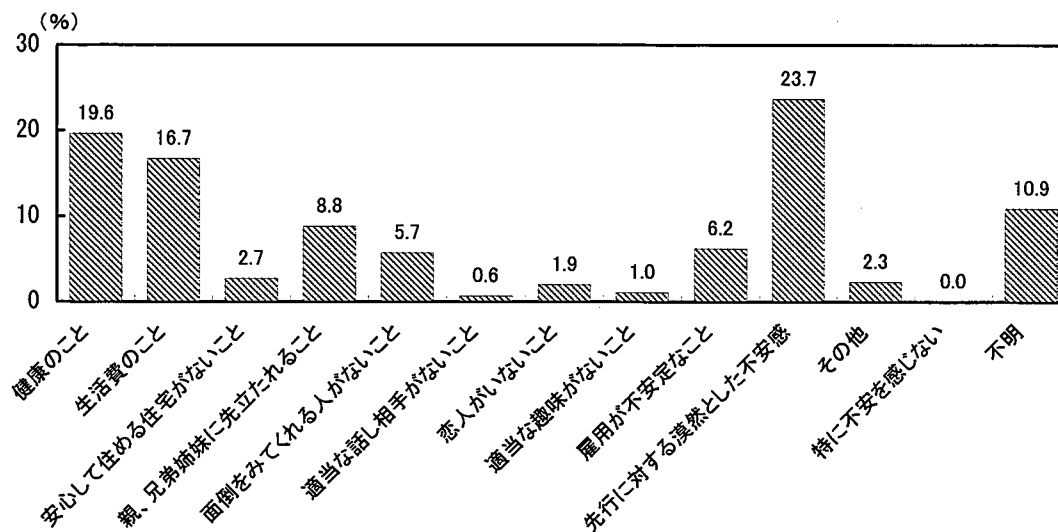
注：**相関係数は1%水準で有意（両側）

日常生活の満足度の値は、アンケート調査票の設問では、「非常に満足している」(4)・「まあ満足している」(3)・「やや不満である」(2)・「非常に不満である」(1)としているので、今の生活の満足度の設問の値を、同じように、「非常に満足している」(4)・「まあ満足している」(3)・「やや不満である」(2)・「非常に不満である」(1)として Spearman の順位相関係数を算定した。

c. 不安を感じていること (問 20)

問 20 では、不安を感じていることについて、その 1 位、2 位となるものを聞いた。1 位と 2 位を合計し集計した結果が図 3-5-18 である。回答率が高いものを挙げると、「先行きに対する漠然とした不安」(23.7%)、「健康のこと」(19.6%)、「生活費のこと」(16.7%)であった。

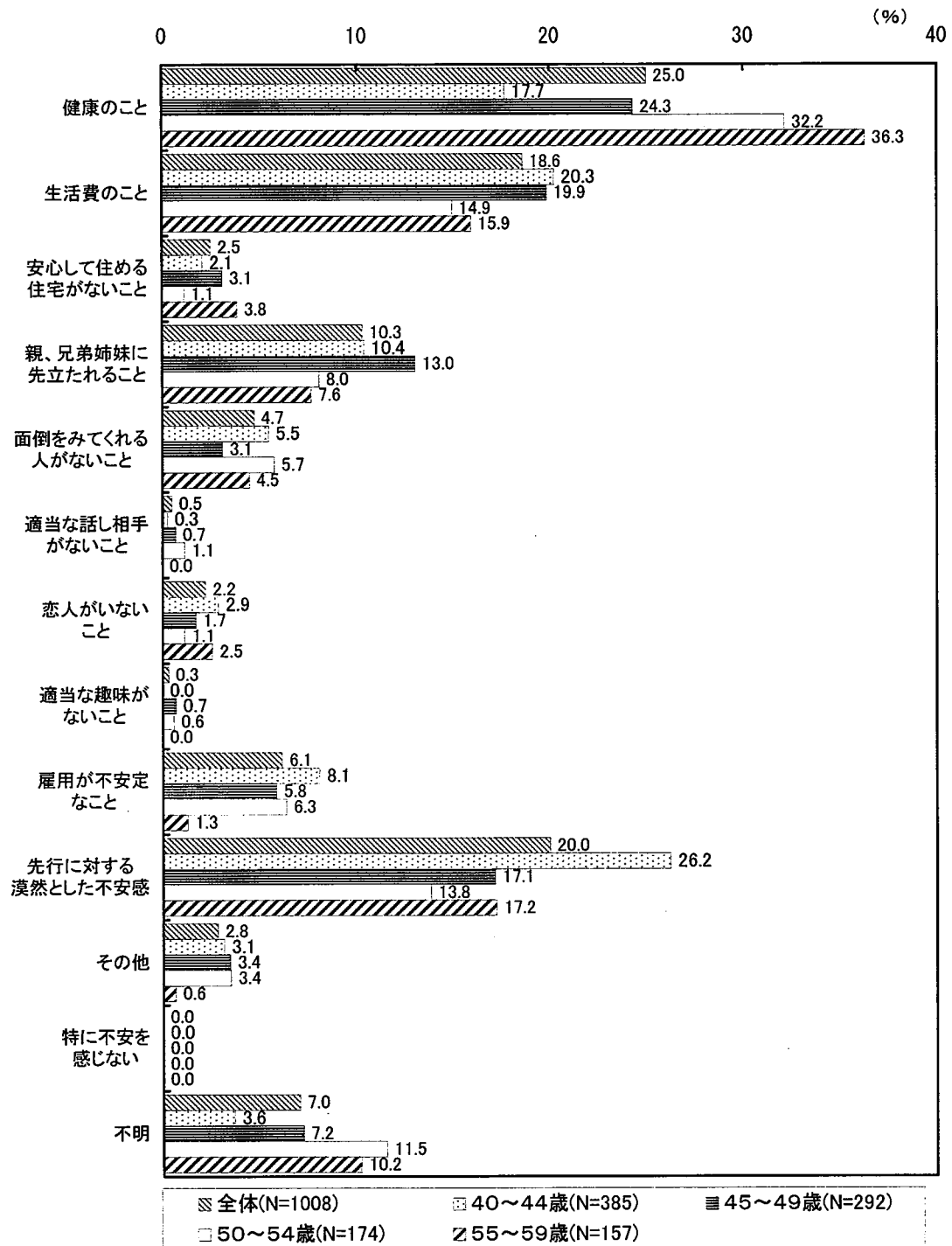
図表 3-5-18 不安を感じていること (問 20)



次に 1 位、2 位別で、まず 1 位をみると(図表 3-5-19)、全体では、「健康のこと」(25.0%)、「先行きに対する漠然とした不安」(20.0%)、「生活費のこと」(18.6%) の順になる。

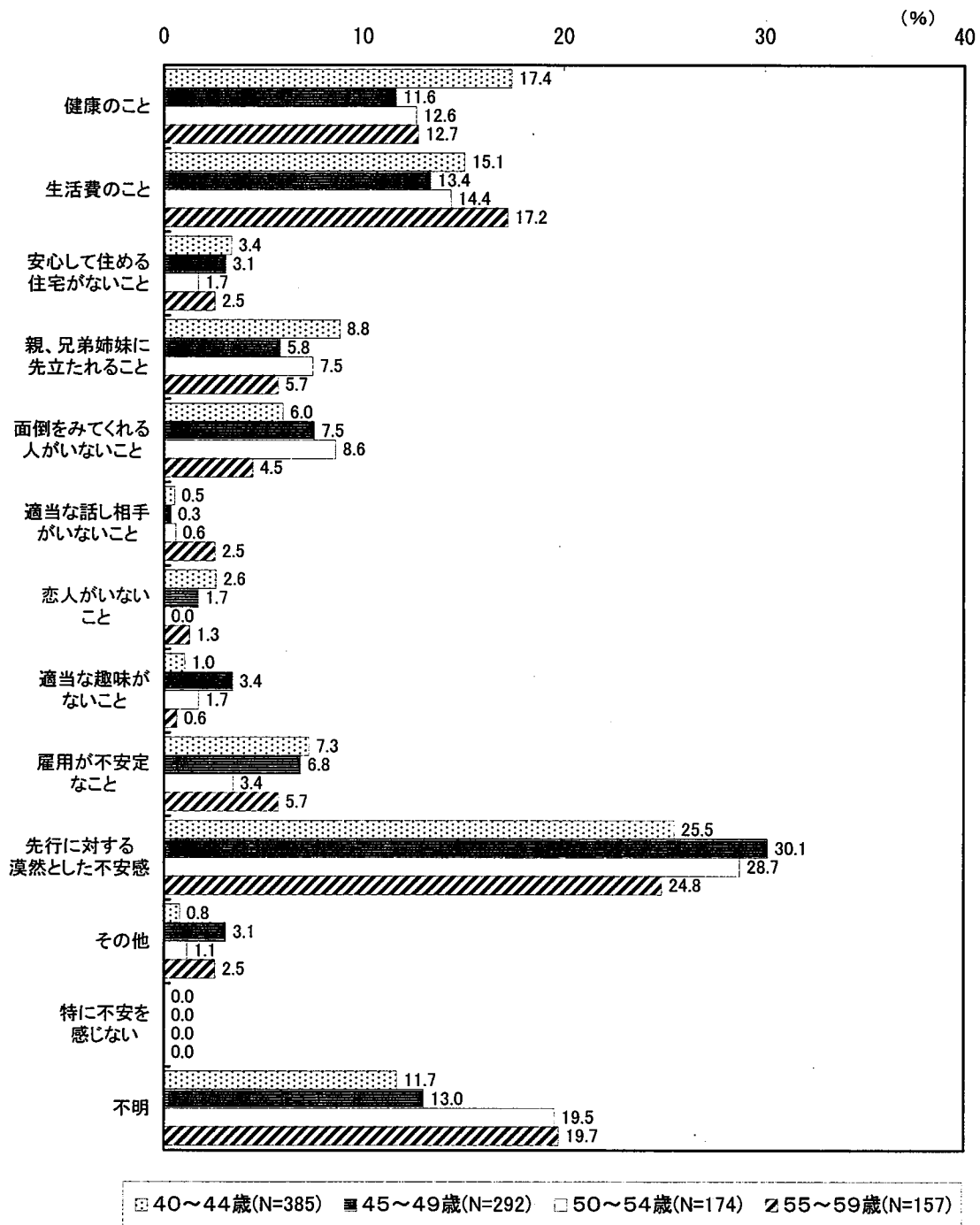
年齢階層別の特徴を挙げれば、年齢が上がるにつれ「健康のこと」への回答率が増える。また、40 歳代前半層で「先行きに対する漠然とした不安」が高かった。

図表 3-5-19 不安を感じていること—1位 (問 20)



不安を感じていることの2位をみると (図表 3-5-20)、「先行に対する漠然とした不安」の割合が他を圧して高かった。

図表 3-5-20 不安を感じていること—2位 (問 20)



(6) 老後展望

本項は、老後の生活設計、老後の生計費用の見込、住まい、病気・介護で援助が必要なときの対処方法の見込である。

a. 生活設計（職業と収入）

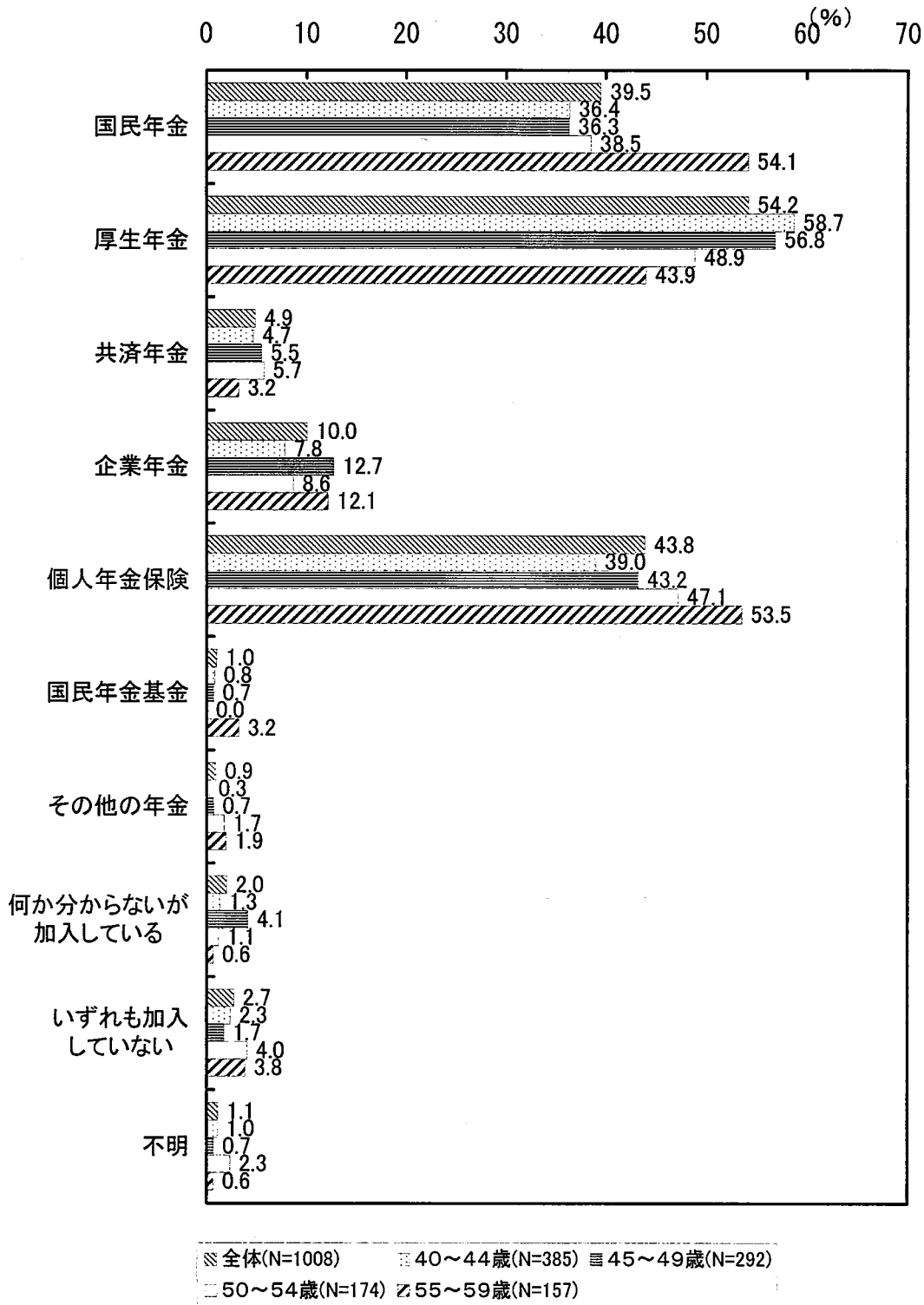
(i) 加入年金（問9）

老後の生活を支える有力な手段として各種の年金がある。ただし、それを受給するには、現役期から保険料負担を行って備える必要があり、そうした意味合いから、年金の加入状況を問うた。

そこで公的年金の加入状況であるが（図表 3-6-1）、ほとんどの回答者が、何らかの公的年金〔国民年金(39.5%)・厚生年金(54.2%)・共済年金(4.9%)〕に加入している。また自助努力による個人年金保険の加入率は43.8%と高い比率になっている。

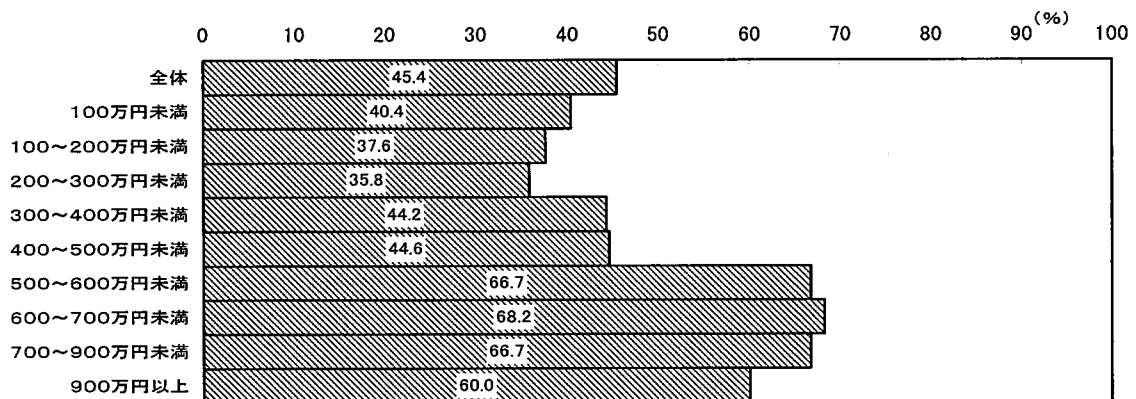
年齢階層別にみると、年齢が高くなるにつれ、厚生年金への加入率が低下している。また、50歳代後半層のところでは特徴的なことは、国民年金保険の加入率と個人年金保険の加入率がそれ以前の年齢層に比べ、高くなることである。

図表 3-6-1 加入年金（複数回答）（問 9）



自助努力による個人年金保険の加入率については、正規従業員 51.0%、自由業 48.3%、自営業 44.8%と、これらの 3 つが他の従業上の地位と比べ高い加入率となっている。また、図表 3-6-2 のとおり、個人年金保険の加入率を本人の仕事から得た過去 1 年間の収入別で見ると、年収 500 万円を境に、加入率が高くなっている。

図表 3-6-2 個人の収入別個人年金保険加入率 (問 9)



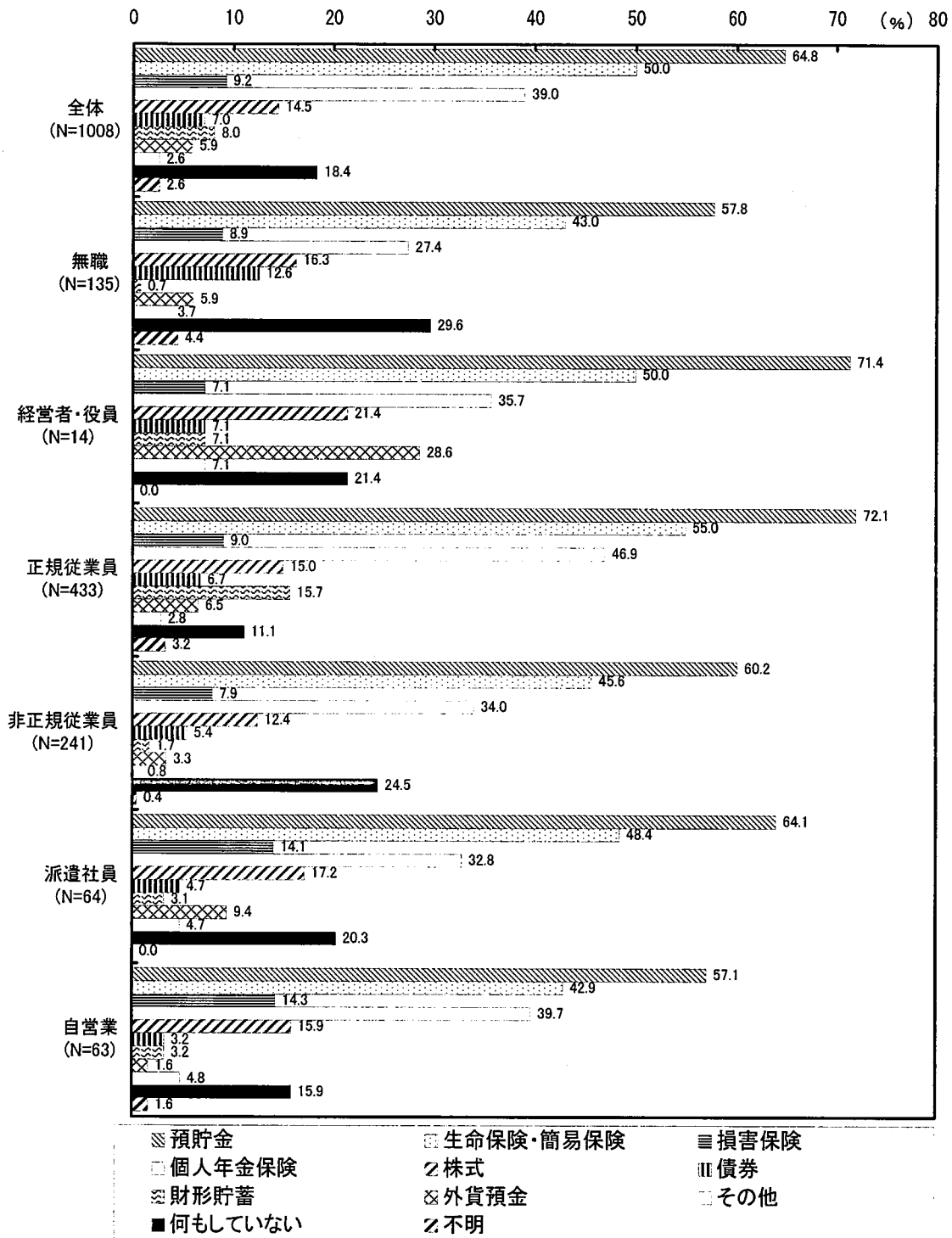
(ii) 老後の生計資金のための資産形成方法 (問 11)

老後生計資金のための資産形成方法について尋ねたところ(図表 3-6-3)、全体では、「預貯金」(64.8%)、「生命保険・簡易保険」(50.0%)、「個人年金保険」(39.0%)の順に多かった。一方で「何もしていない」方が 18.4%もあった。また、市場リスクのある「株式」に 14.5%、債券には 7.0%の回答があった。

これを従業上の地位別にみると、正規従業員で、各資産形成方法への回答割合が、総じて全体より高かった。

一方、資産形成を「何もしていない」の回答率は、正規従業員では 11.1%に対し、非正規従業員 24.5%、派遣社員は 20.3%であった。

図表 3-6-3 老後の生計資金のための資産形成方法（複数回答）（問 11）

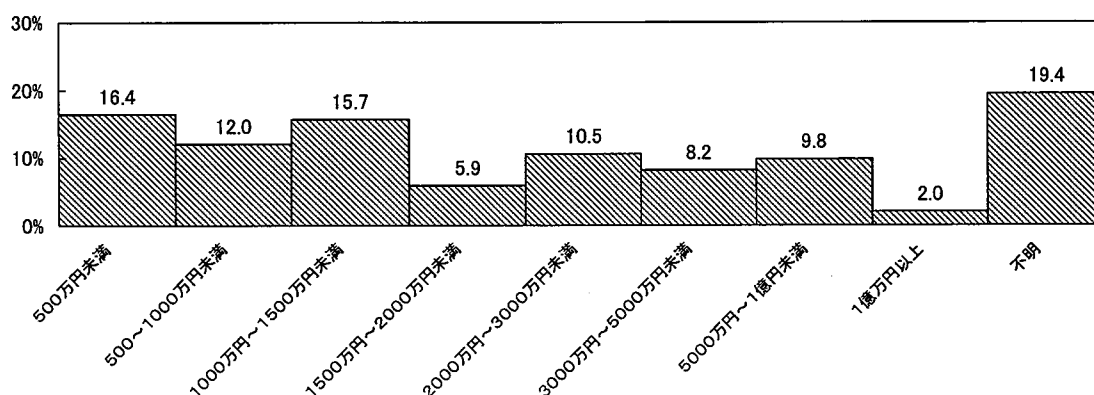


注：従業上の地位のうち、家族従業員・自由業・内職・その他・不明は、サンプル数が少ないため、グラフ表示から除く。

(iii) 老後生計資金のための資産・貯蓄額（問 11 付問 11-1）

老後生計資金のための資産・貯蓄保有額についてたずねたところ（図表 3-6-4）、その全体としての分布は「1,000～1,500 万円未満」が最多（15.7%）である。また、平均額は 23 百万円で（図表 3-6-5）、年齢が上がるほど資産額も増えるが、50 歳代後半層のところでは、その金額がむしろ小さくなっている。

図表 3-6-4 老後生計資金のための資産・貯蓄額（問 11 付問 11-1）



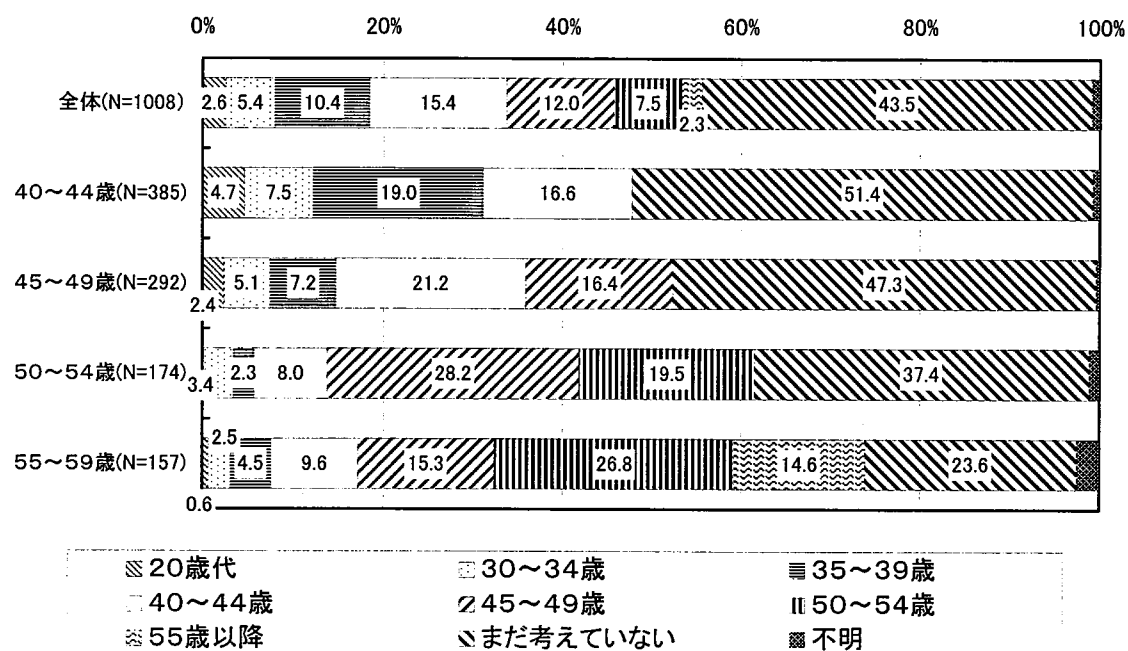
図表 3-6-5 平均資産・貯蓄額（問 11 付問 11-1）

年齢	平均（百万円）
全体	23.0
40～44 歳	20.1
45～49 歳	22.8
50～54 歳	29.3
55～59 歳	23.4

(iv) 老後の生活設計を考え始めた時期（問 24）

老後の生活設計を考えているかどうか、考えている場合、それはいつ頃からか、という問いに対し（図表 3-6-6）、43.5%が「まだ考えていない」、約半数（55.6%）は考えていると回答している。年齢層別にみた場合、50 歳代後半層でも、23.6%が「まだ考えていない」と回答したことが注目されよう。

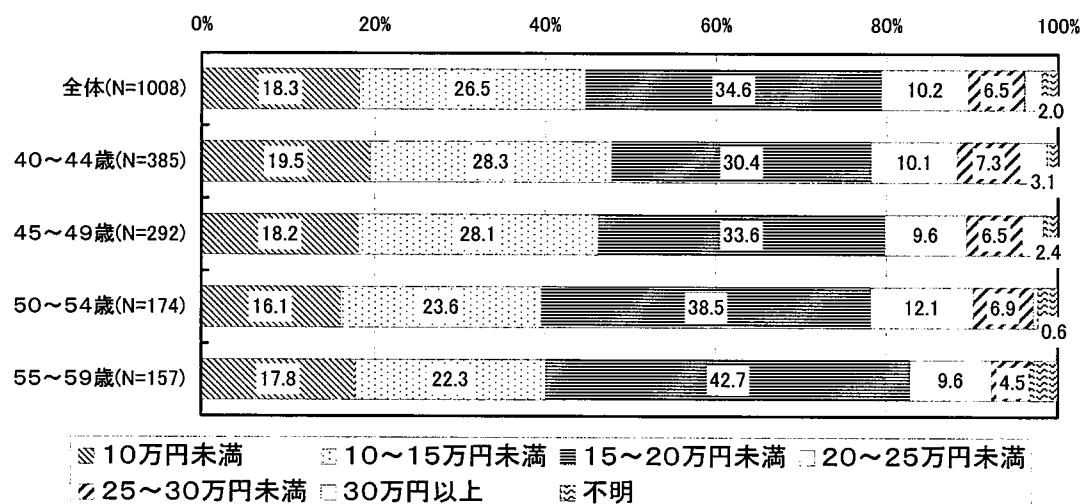
図表 3-6-6 老後の生活設計を考え始めた時期 (問 24)



(v) 老後の生活費の予想額 (問 25)

60歳以降(退職後)における1か月の生活費(扶養・住宅ローン支払・医療・教養・娯楽費などを含む)の予想額を聞いたところ(図表3-6-7)、最多の回答は「15~20万円未満」で34.6%、次が「10~15万円未満」で26.5%となった。

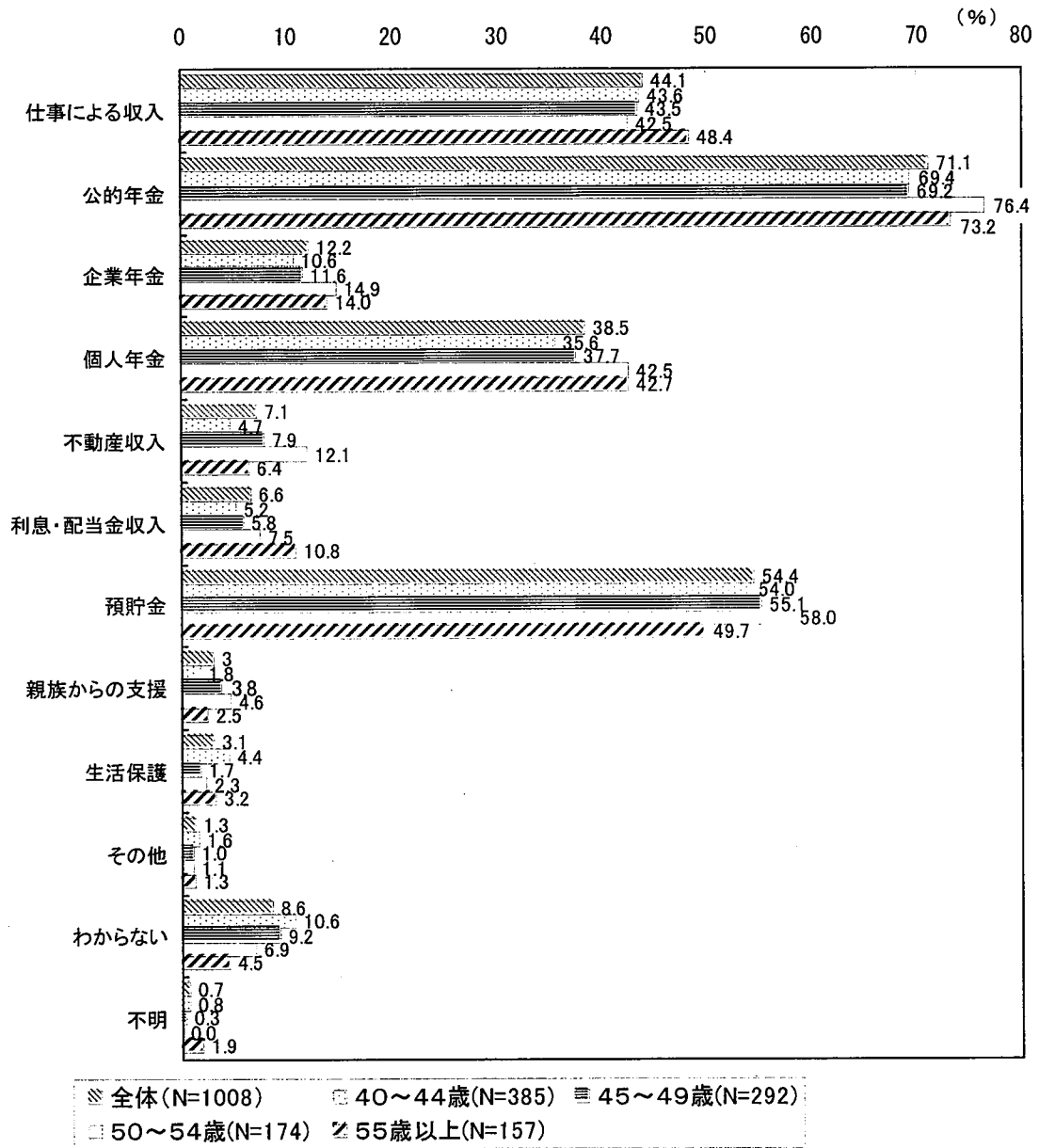
図表 3-6-7 60歳以降(退職後)の1か月の生活費の予想額 (問 25)



(vi) 老後の収入源 (問 26)

老後生活費の原資については (図表 3-6-8)、「公的年金」(71.1%)、「預貯金」(54.4%)、「仕事による収入」(44.1%)、「個人年金」(38.5%)、「企業年金」(12.2%) の順で多かった。各年齢層とも、似たような回答状況にある。

図表 3-6-8 老後の収入源 (複数回答) (問 26)



b. 老後の住まい方

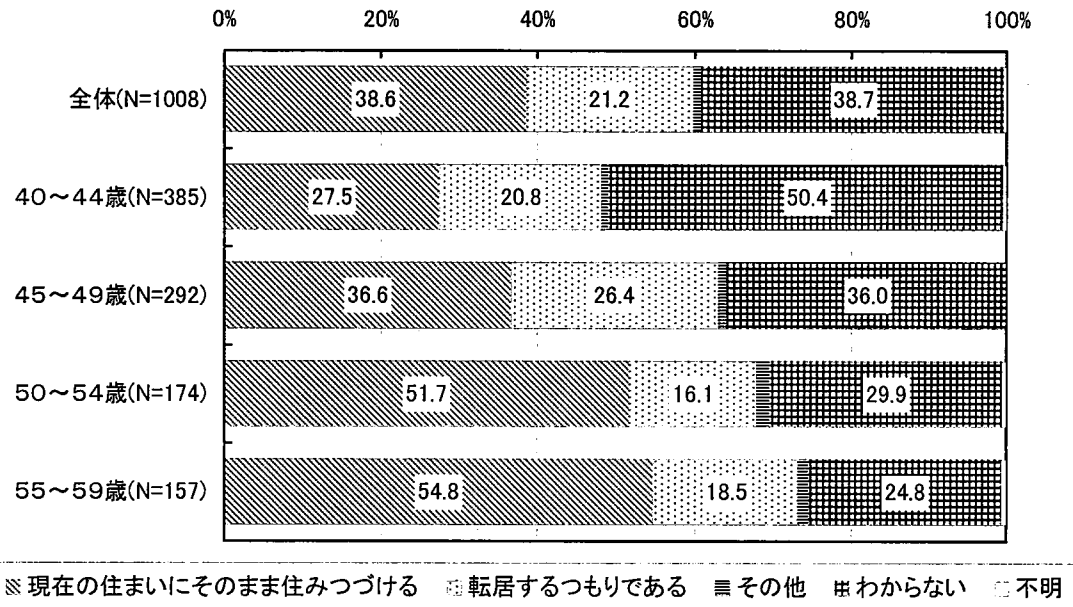
(i) 老後の住まい (問 13)

老後の住まいについて、独身の中老年女性はどのように考えているのであろうか。

これを図表 3-6-9 でみると、「現在の住まいに住みつづける」(38.6%)と「わからない」(38.7%)が拮抗している。

これを年齢層別にみると、年齢層が若いほど、現段階ではまだ具体的なイメージがないか、あるいは決めかねているようで「わからない」の割合が高く、年齢が上がるにつれて「現在の住まい」の割合が高くなる。

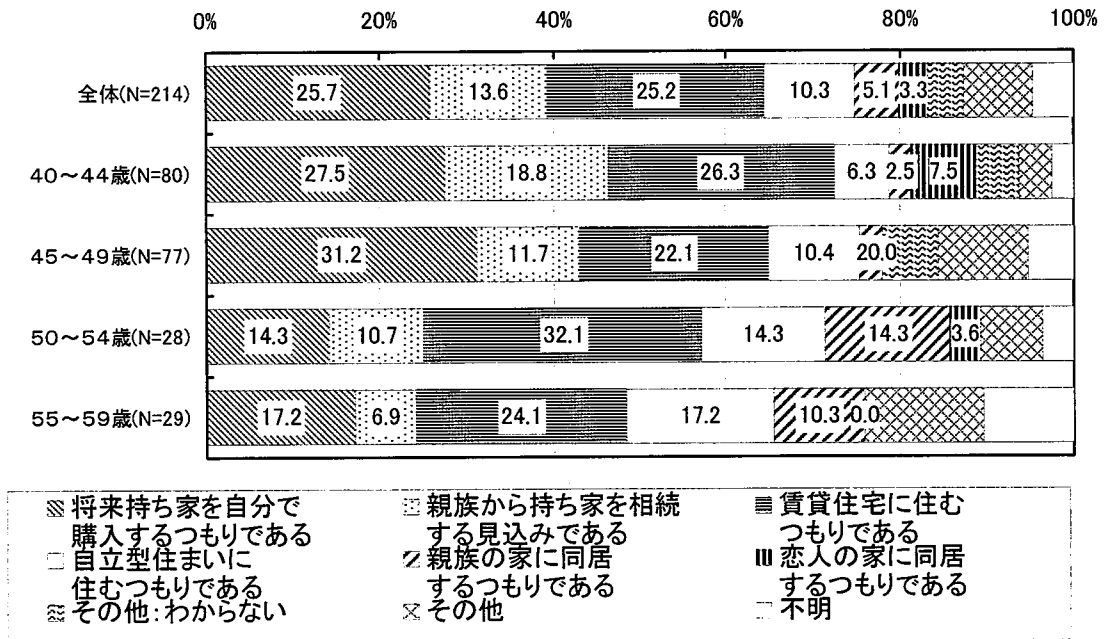
図表 3-6-9 老後の住まい (問 13)



(ii) 老後の居留意向 (問 13 付問 13-1)

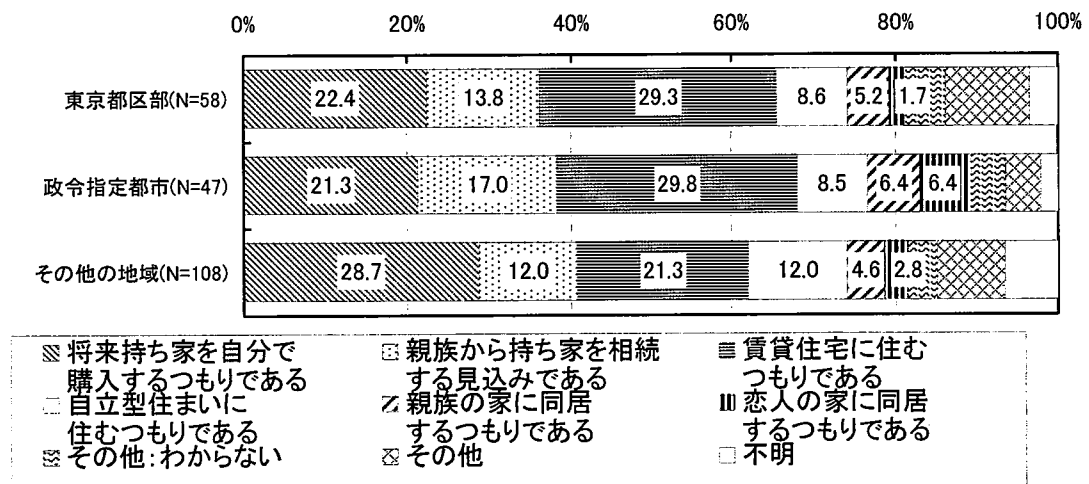
問 13 で「転居するつもり」と回答した方に、老後の居留意向を尋ねたところ (図表 3-6-10)、「持ち家を購入」(25.7%)、「賃貸住宅に住むつもり」(25.2%)が比較的多かった。

図表 3-6-10 老後の居留意向（問 13 付問 13-1）



都市規模別では（図表 3-6-11）、持ち家を購入という回答割合が、東京都区部や政令指定都市よりもその他の地域が高くなっており、各地の住宅事情を反映していることが伺える。

図表 3-6-11 老後の居留意向（問 13 付問 13-1—都市規模別）

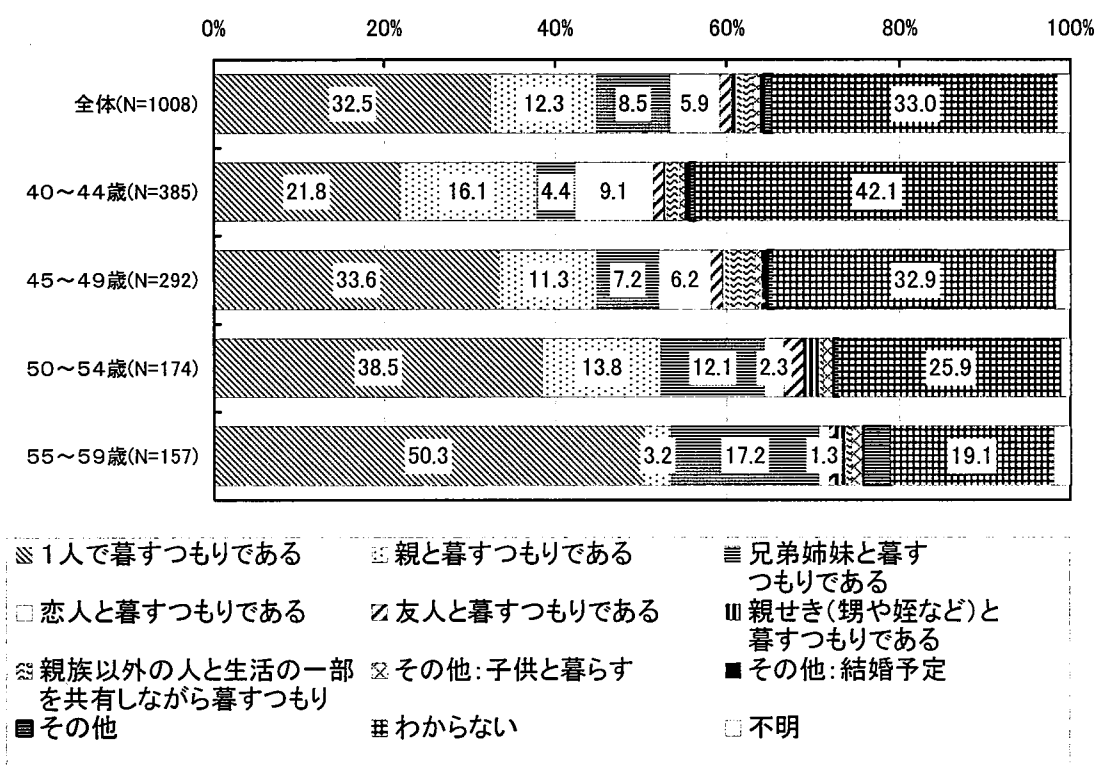


(iii) 老後の同居意向 (問 14)

老後の同居意向であるが (図表 3-6-12)、全体で見るとこれも現段階では「わからない」(33.0%)と「1人で暮らす」(32.5%)がほぼ同じ割合となった。

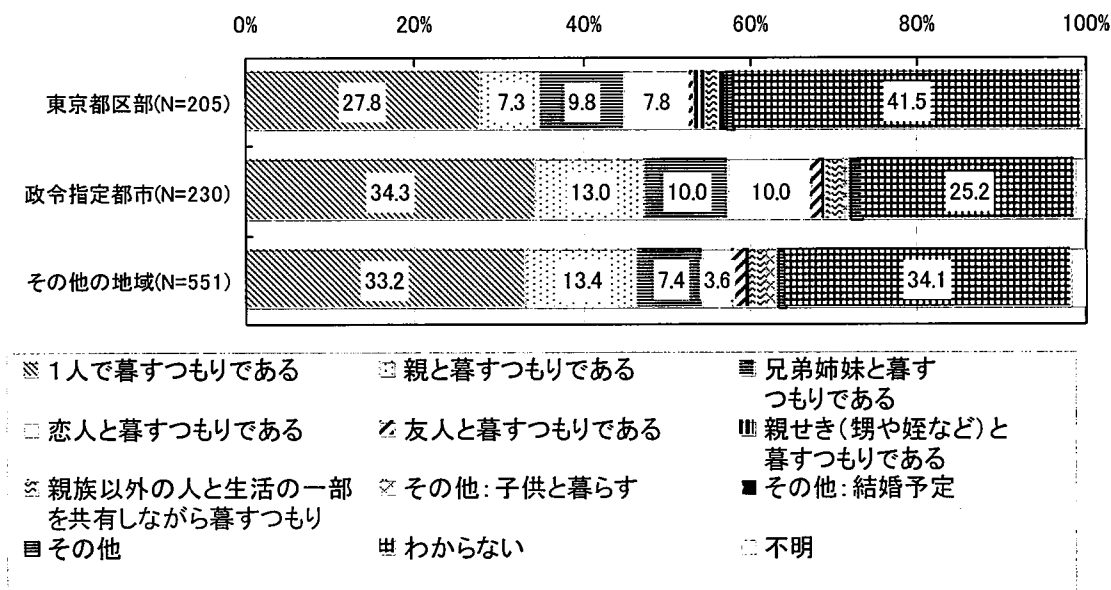
また、年齢層別では、図表 3-3-4 でみたとおり、50歳代後半層で、持ち家率が高くなることと平仄を合わせるように1人暮らしの割合が高くなり、また「親と暮らすつもり」の回答が大幅に低下するとともに、「兄弟姉妹と暮らすつもり」の回答がやや増えていることが特徴的である。

図表 3-6-12 老後の同居意向 (問 14)



また、都市規模別でみると（図表 3-6-13）、「親と暮らすつもり」という回答割合が、東京都区部に比べ政令指定都市とその他の地域でやや高くなっている。

図表 3-6-13 老後の同居意向（問 14—都市規模別）



c. 介護 (問 27)

60 歳以降 (退職後)、自分自身が病気・介護などで援助が必要になった場合、どのような対処をするか伺ったところ (図表 3-6-14)、全体で見ると、「公的介護施設 (特別養護老人ホームなど) に入所する」が 38.7%、「自宅でホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用する」が 37.7%と、両者はほぼ同程度の割合となった。

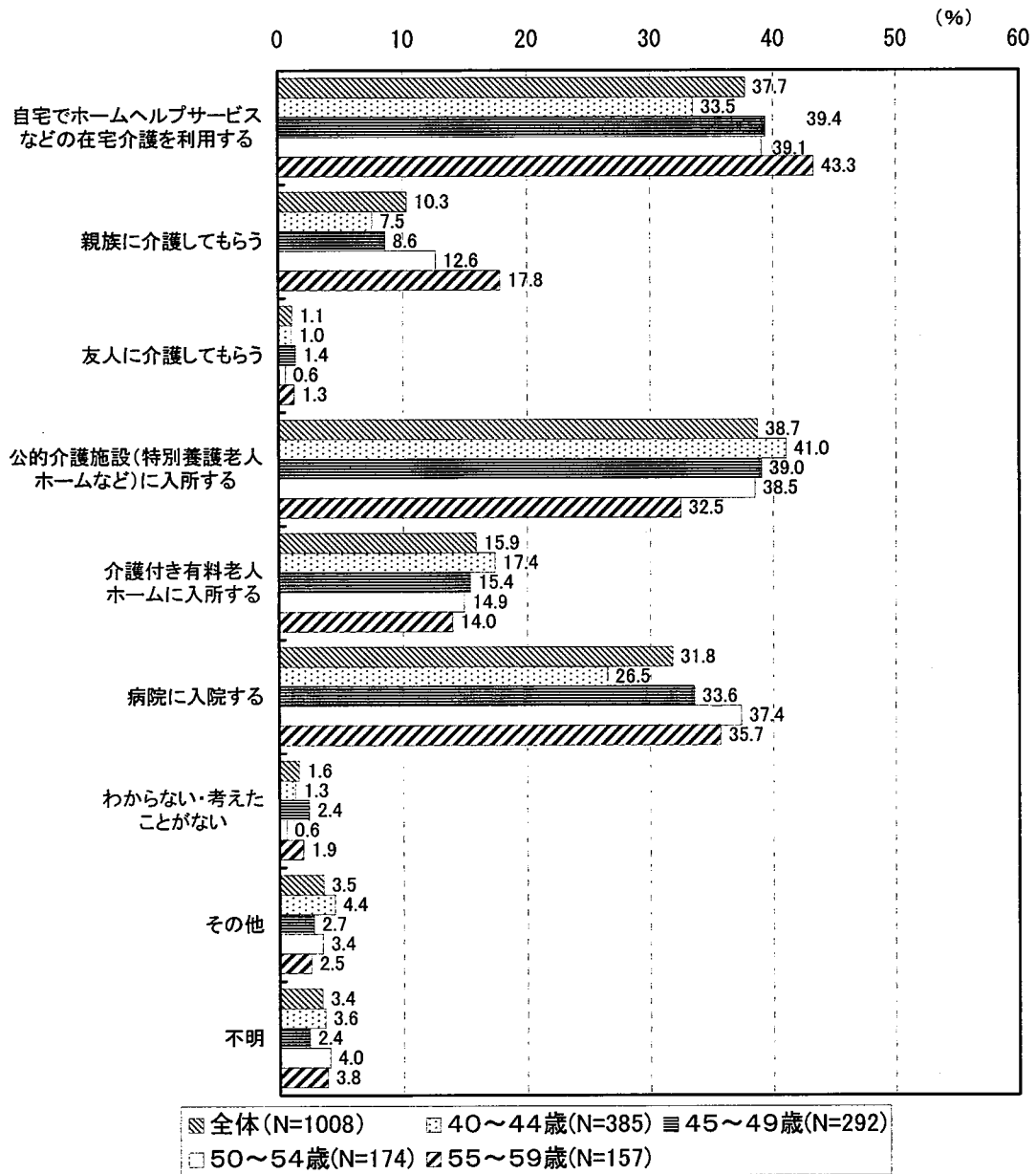
また「介護付き有料老人ホームに入所する」が 15.9%である。この選択肢では、本人の年収が高い人ほど選択率が目立って高かった (年収 500 万円以上の層で「介護付き有料老人ホームに入所する」の選択率が急増する)。

さらに、「親族に介護してもらおう」との人が 10.3%いた。なお、「病院に入院する」の割合が 31.8%と高かったが、これには介護とは別に病気入院が含まれているものと考えられる。

年齢階層別において 40 歳代前半層と 50 歳代後半層を比較すると、後者の方が「公的介護施設 (特別養護老人ホームなど) に入所する」の選択率が低くなり、「自宅でホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用する」と「親族に介護してもらおう」が高くなる。より身近になるほど、在宅での、また親族による介護等を希望するということかもしれない。

ここで、親への対処方法の見込 (問 23/択一回答) の回答と、自分自身の場合の対処方法 (問 27/複数回答) とを比較すると (択一回答と複数回答の違いに留意)、次の特徴がある。「自宅でホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用する」の選択率はともに高いものの、親への対処方法見込みではかなり低い割合であった「公的介護施設 (特別養護老人ホームなど) に入所する」、「介護付き有料老人ホームに入所する」が、自分自身の対処方法では高い選択率となっている。

図表 3-6-14 自分自身が万が一病気・介護などで援助が必要になった場合の対処方法
(複数回答) (問 27)



(7) 行政への要望事項

a. 集計結果

独身の中高年女性は、現在の生活や老後の生活に関し、政治や行政に対してどのような要望を持っているのだろうか。そこで、問 28 において、要望事項を自由記載してもらった。

その結果を集計してみると（図表 3-7-1）、いまの生活については、「税金」にかかわる要望がほかの項目を引き離して最も多く、全体の 2 割近くを占めている。一方、老後の生活に関しては、公的年金にかかわる要望が 3 割を超えて圧倒的であった。

図表 3-7-1 行政への要望事項（問 28）

（単位：件・％）

	いまの生活		老後の生活	
	件数	割合	件数	割合
税負担の軽減	136	19.7	21	2.7
税金の無駄遣いをやめて欲しい	49	7.1	18	2.3
医療費の負担軽減	45	6.5	52	6.8
公的年金の給付維持・不安解消	47	6.8	248	32.4
介護施策の改善	22	3.2	71	9.3
社会福祉の改善	29	4.2	29	3.7
雇用の安定・確保や改善	60	8.7	29	3.7
住宅施策の改善	27	3.9	54	7.0
その他	167	24.2	199	26.0
特になし	107	15.5	45	5.9
合計	689	100.0	766	100.0

b. 記載された主な事項

以下に具体的な記載内容を例示する（例の抽出では恣意性を免れないことにご留意いただきたい）。

(i) 生活について（いま、そして老後）

女 1 人で働いて生活するのは大変です。

親の扶養義務が重過ぎるので、法律を変えてもらわないと、結婚できない。

1 人暮らしで、1 日誰ともしゃべらないので、話し相手が欲しい。

親の介護を通じて、長年住んだ場所や地域がいかに大切であるかを痛感。

親の年金収入だけで扶養されることをやめたい。

独身女性の場合、同年代の男性に比べ、収入がはるかに低い。

母子家庭ですが、自分が病気になると生活ができなくなる。

犯罪が多発し、今後1人になったとき不安。

親がいなくなった後も、ボランティアなど人とのかかわりを持ち続けたい。

老後1人になったら、生活保護で生活していきたい。

独身なので、最期の看取りを誰にしてもらうかで、思いあぐねている。

入居する老人ホームが倒産したらどうしようと不安になる。

(ii) 行政への要望事項

1人暮らし老人の生死の確認をもっと充実させて欲しい。

1人住まいへの定期的な訪問。ボランティアが毎日電話するとか、定期訪問するとか。

公営住宅への入居条件で保証人、同居人を要する。

お年寄りの集まれる空間提供、うるさくないカフェ・テレビ番組。

非常勤講師でも、社会保険に入れるようにして欲しい。

若い人もやがては高齢者になってゆく、そうしたことをもっと学んでもらう教育を期待。

福祉関係の仕事をしているが、給料が安すぎる。

50歳も過ぎると仕事がない。意欲があれば、年齢にかかわらず仕事ができるようにして欲しい。

税金が高くても、老後が安定しているスウェーデンのような政策を取って欲しい。

小さな単位（家庭）から、マンション、近隣へと、コミュニケーションの取れる街づくりが望ましい。

(8) 補足分析—従業上の地位による仕事と生活

a. 分析の視点

本節では、従業上の地位の違いが、収入を始めとする生活全般について、それぞれどのような相違を生じさせるのか、主要項目ごとにみていくこととする。

そこで、正規従業員、非正規従業員ならびに無業者を、以下の条件により抽出し分析の対象とした。

現職の従業上の地位	抽出条件	サンプル数
正規従業員	①勤続20年以上 ②勤続20年未満、かつ入職推定年齢が24歳未満	139件
非正規従業員	①初職が非正規従業員 ②初職が正規従業員、かつ勤続年数5年未満	141件
無業者	過去に就業経験あり	123件

b. 仕事

ここでは、正規従業員、非正規従業員を比較の対象に、勤務先等の企業規模、仕事の内容、最大の悩みや不満をみる(図表3-8-1～図表3-8-3)。

(勤務先の従業員規模—問2付問2-1)

まず勤務先等の企業規模は、大きく括ってみると、正規従業員では「1,000以上・官公庁」が4割近く(37.4%)を占め、「300人以上」では6割(62.6%)を超える。これに対し、非正規従業員では「1,000以上・官公庁」が2割に満たず(17.0%)、「300人以上」でようやく3割(31.2%)を超える状況で、最も割合が高い規模は「30～100人未満」(18.4%)である。これをみると、正規従業員は中規模以上の企業に勤務する割合が高い一方、非正規従業員は小企業の割合の方が高い。

(仕事の内容—問2付問2-2)

次に、仕事の内容では、正規従業員はいわゆるホワイトカラー系の職種(「事務職」、「専門職」、「管理職」)が9割近く(87.8%)となる。これに対して、非正規従業員はホワイトカラー系の割合が4割台(45.4%)と大幅に少ない一方で、「営業・販売」、「サービス」や「製造・技能・労務」の割合が多く、より現業的な仕事内容に就いているという特徴を示している。

(現在の仕事にかかわる最大の悩みと不満—問2付問2-6-1)

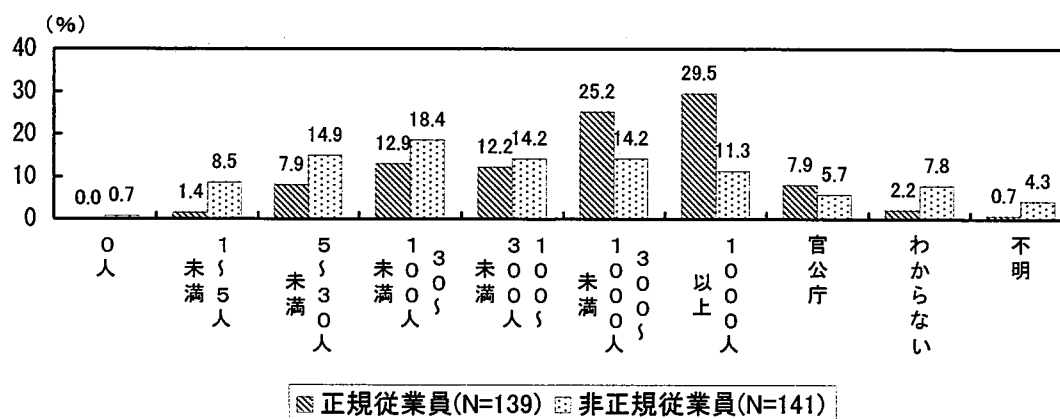
現在の仕事について最大の悩みや不満は、正規従業員は「収入が少ない」(23.5%)、「仕事が多い」(23.5%)および「休暇がとれない」(22.2%)の3項目がいずれも2割台でほぼ同じ比率となっている。収入や雇用面にかかわる悩みや不満よりも、就業上の悩みや不満が大きく7割以上(70.4%)の割合を占め、勤務の多忙さといったことが色濃くでた。なお、「雇用が不安

定」や「社会保険に入れない」という質問への回答は全くみられず、これら項目においては、正規従業員に対する勤務条件・処遇が維持されているようである。

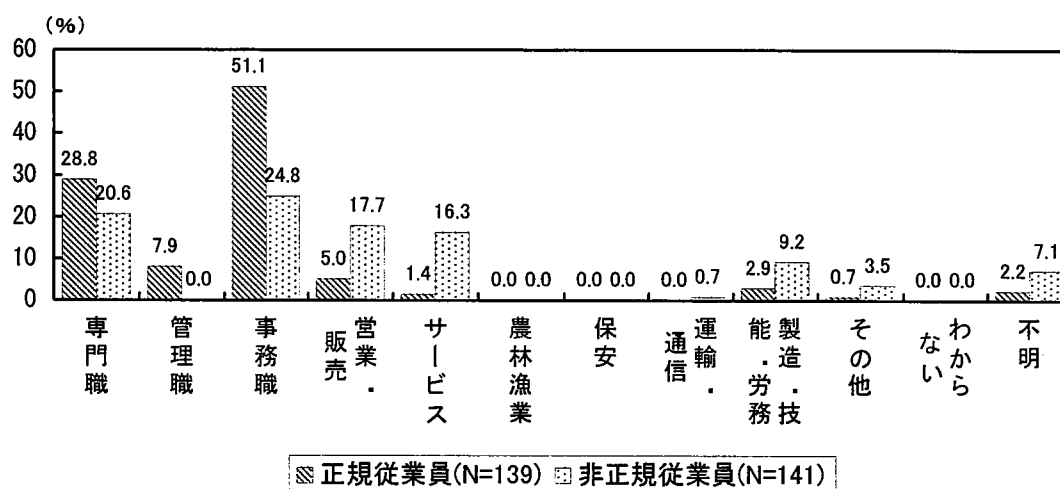
これに対して、非正規従業員は「収入が少ない」が5割近く（46.9%）を占め、さらに「雇用が不安定」、「社会保険に入れない」などが続き、これらを合わせると7割を超える（76.1%）。収入や処遇面で、正規従業員のそれとは非常に対照的な結果となった。

非正規従業員が、そもそも正規従業員と比べて雇用上安定した立場ではないことや、社会保険加入等の福利厚生面の恩恵をあまり受けていないことは、これまでも指摘されてきた。その点が、本アンケート調査においても確認されたといえよう。

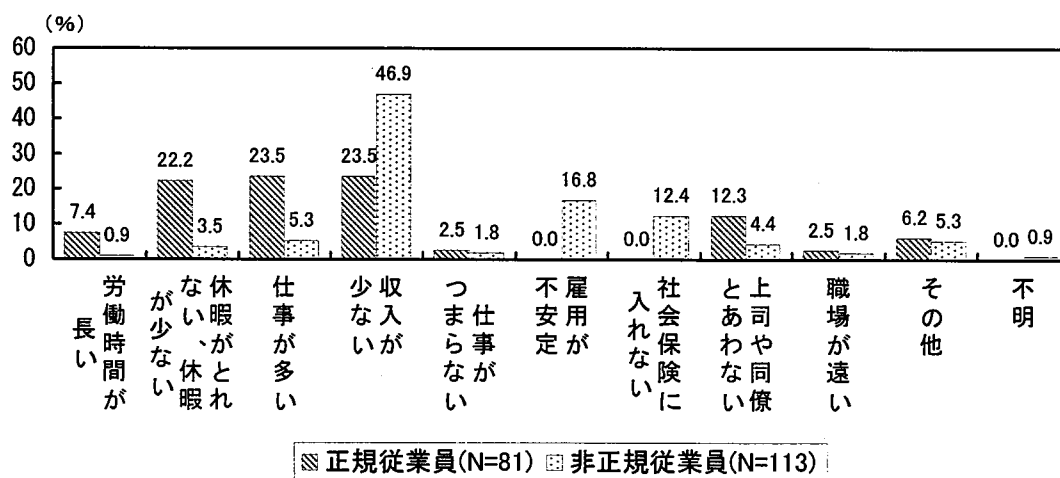
図表 3-8-1 勤務先等の従業員規模 (問 2 付問 2-1)



図表 3-8-2 仕事の内容 (問 2 付問 2-2)



図表 3-8-3 現在の仕事にかかわる最大の悩みと不満 (問 2 付問 2-6-1)



c. 初職の退職理由

ここでは、最初の勤務先や仕事をやめた理由を、非正規従業員と無業者の2グループの比較によりみる(図表3-8-4)。

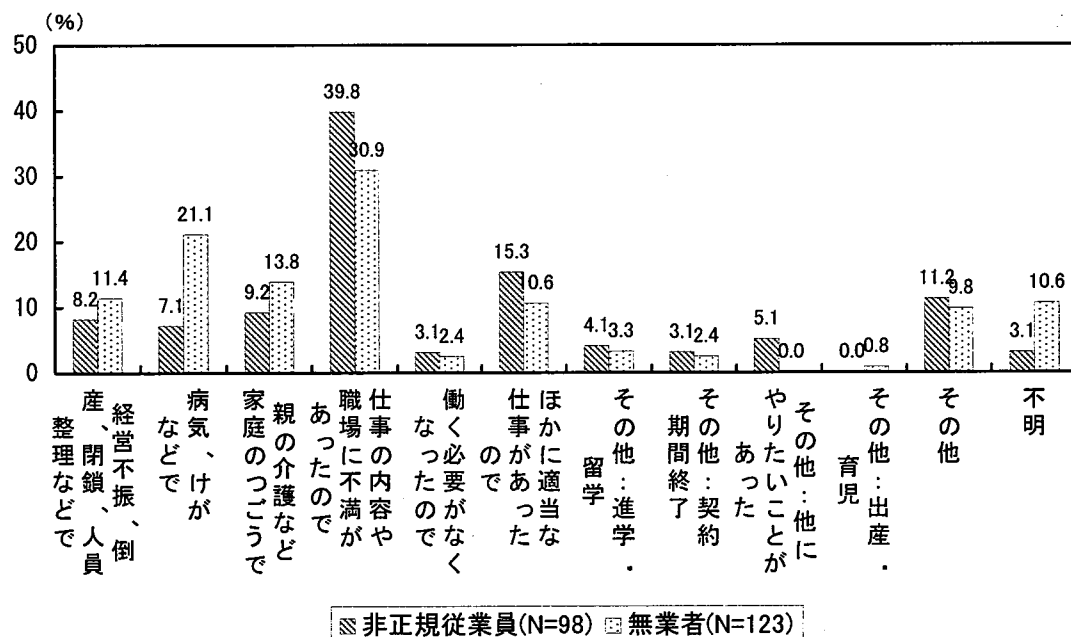
そこで、退職理由を、本人の自発的な理由(「仕事の内容や職場に不満」、「ほかに適当な仕事」、「働く必要がない」、「進学・留学」、「他にやりたいこと」と非自発的な理由(「経営不振」、「親の介護など家庭のつごう」、「病気」)の2つに大別する。

そしてまず、本人の自発的な理由の割合をみると、非正規従業員では7割近く(67.4%)になる。無業者でも5割弱に達する(47.2%)。

しかし、無業者の場合、非自発的な理由が46.3%と高く、自発的な理由とほぼ同程度になり、特に「病気」(21.1%)の割合が相対的に多い。病気やけがによりやむなく退職を余儀なくされ、その後も仕事に就くことができないといった事情かもしれない。また、「親の介護など家庭のつごう」の割合もやや高い。

いずれにしても、初職の退職理由では、非正規従業員、無業者ともに相当の比率で自発的に退職しており、それがその後の仕事、収入等へ影響しているものとするれば、なぜこれほど高率で退職するのか、その理由は何か、もう一段突っ込んだ調査が求められるのではないか。

図表3-8-4 最初の勤務先/仕事をやめた理由(問3付問3-4)



d. 世帯と収入

ここでは、正規従業員・非正規従業員・無業者の世帯と収入等についてみる（図表 3-8-5～図表 3-8-11）。

（世帯人数一問 6）

正規従業員が1人世帯である割合は、相当高く他を1~2割引き離し34.5%となっている。一方、無業者は2人以上の世帯で、とりわけ4人以上の世帯であることが目立つ。

（同居者一問 6 付問 6-1）

同居者のほとんどが親である（正規従業員・無業者で9割・非正規従業員で7割）。なお、非正規従業員では「その他」が29.9%となっているが、「その他」のほとんどは、自分自身の子である。

（主たる生計維持者一問 7）

主たる生計維持者は、正規従業員、非正規従業員、無業者の順に「自分自身」が減り、反面で逆の順に「自分自身以外の人」が増えている。

（自分以外の方が主たる生計維持者の場合の続柄一問 7 付問 7-1）

自分以外の方が主たる生計維持者の場合、その続柄は8~9割が「親」である。次が「兄弟姉妹」である。

（世帯収入一問 8）

世帯全体の収入では、正規従業員では「600万円~800万円未満」の割合が30.2%と最も多く、400万円~1,000万円未満（74.1%）にかなりの割合で分布している。一方、非正規従業員、無業者では「200万円~300万円未満」が最も多く（非正規従業員20.6%・無業者22.8%）、400万円未満にその6割が分布している。

（本人の収入一問 8 付問 8-2）

次に本人が仕事から得た収入を、正規従業員、非正規従業員で比較してみると、平均年収では、正規従業員で546.5万円、非正規従業員で184.9万円とかなりの開きがある。

そして、所得帯の分布状態では、正規従業員が「500万円~600万円未満」で24.5%と最も多く、400万円~900万円未満で7割を占めている。非正規従業員では、「100万円~200万円未満」が41.1%で最も多く、100万円~300万円未満で6割となり、年収「100円未満」の層が14.2%もいる。

（加入年金一問 9）

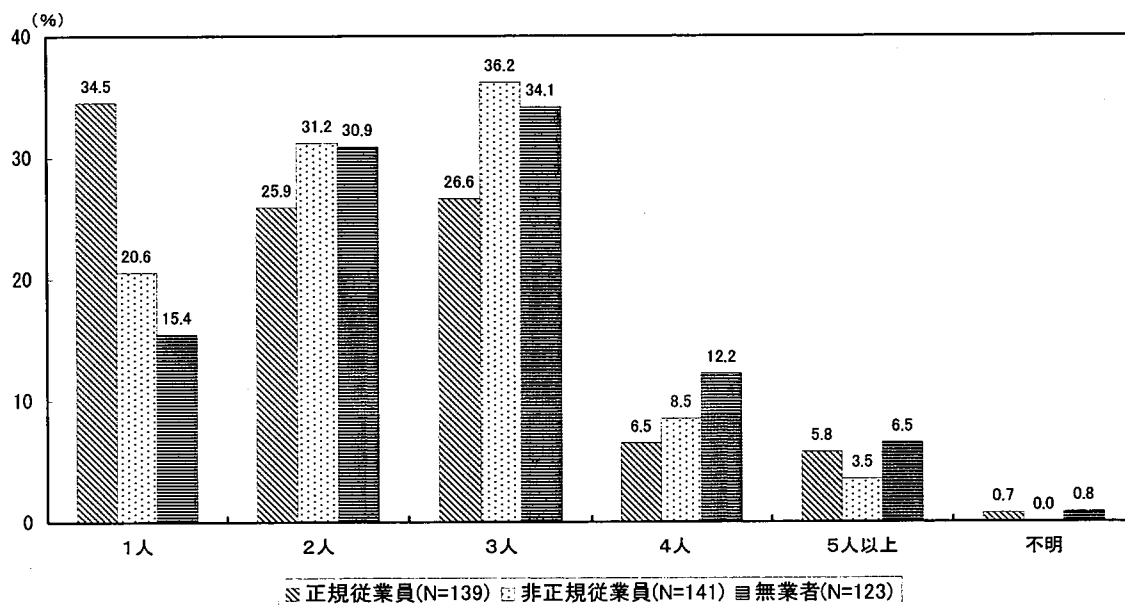
正規従業員、非正規従業員、無業者とも、ほとんどが何らかの公的年金に加入しているが、それぞれの加入年金の種類をみると、正規従業員では「厚生年金」と「共済年金」をあわせて

95.7%が加入し、「個人年金保険」にも65.5%が加入している。

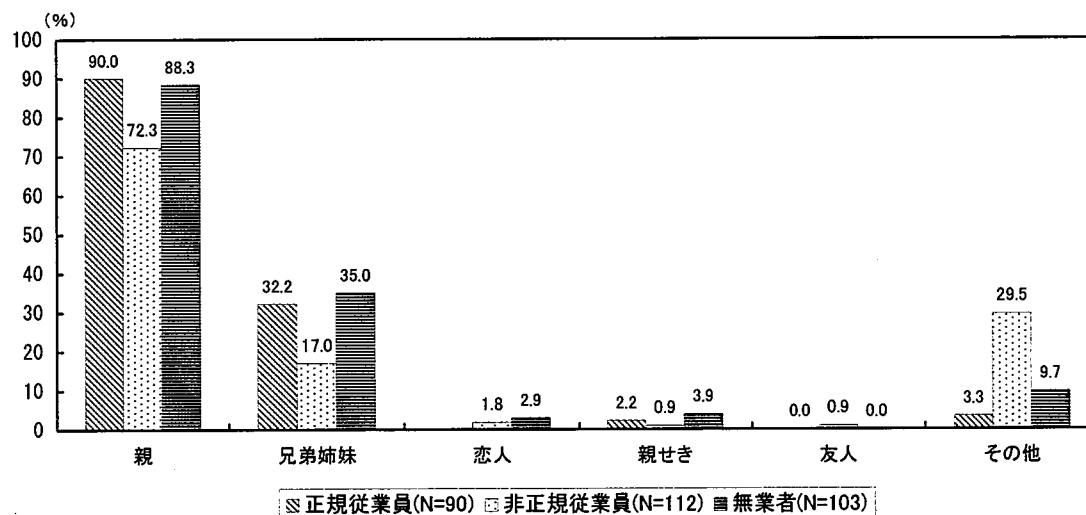
非正規従業員では、国民年金保険（53.9%）のほか厚生年金保険にも39.0%の加入がある。無業者は、圧倒的に国民年金保険（82.1%）である。

個人年金保険の加入率は、正規従業員の65.5%に対して、非正規従業員、無業者はともに35%程度で正規従業員の半分程度の割合である。

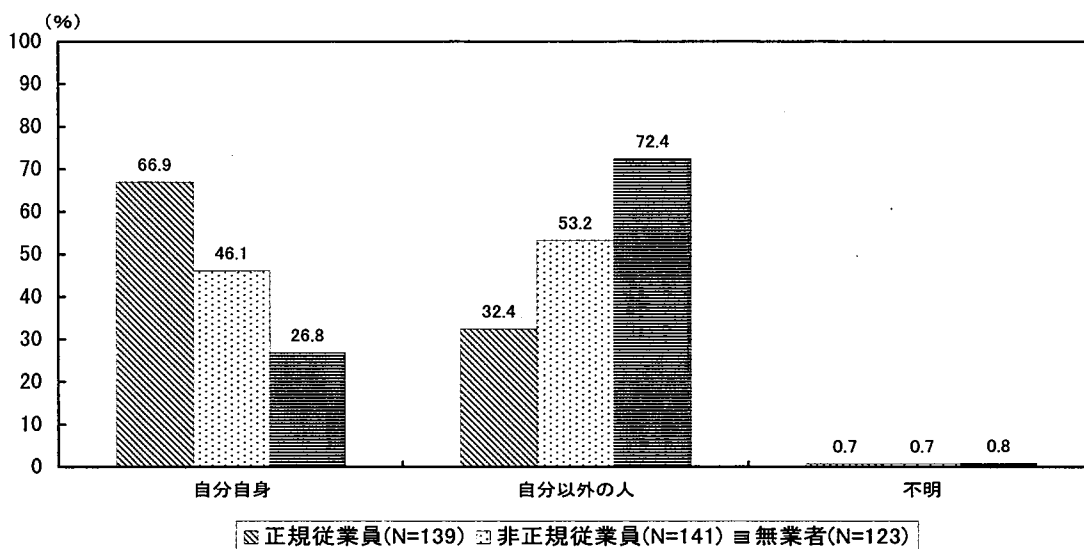
図表 3-8-5 世帯人数（問6）



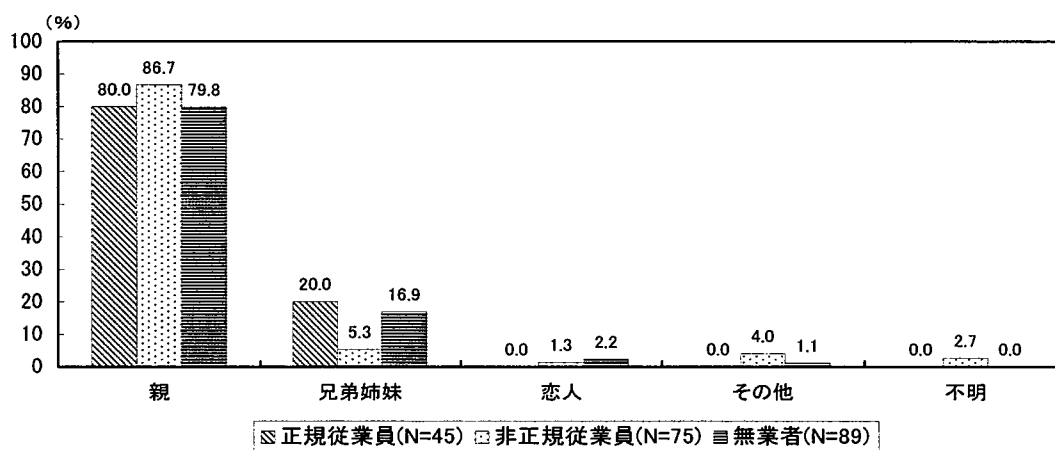
図表 3-8-6 同居者（問6で世帯人数が2人以上）（問6付問6-1）



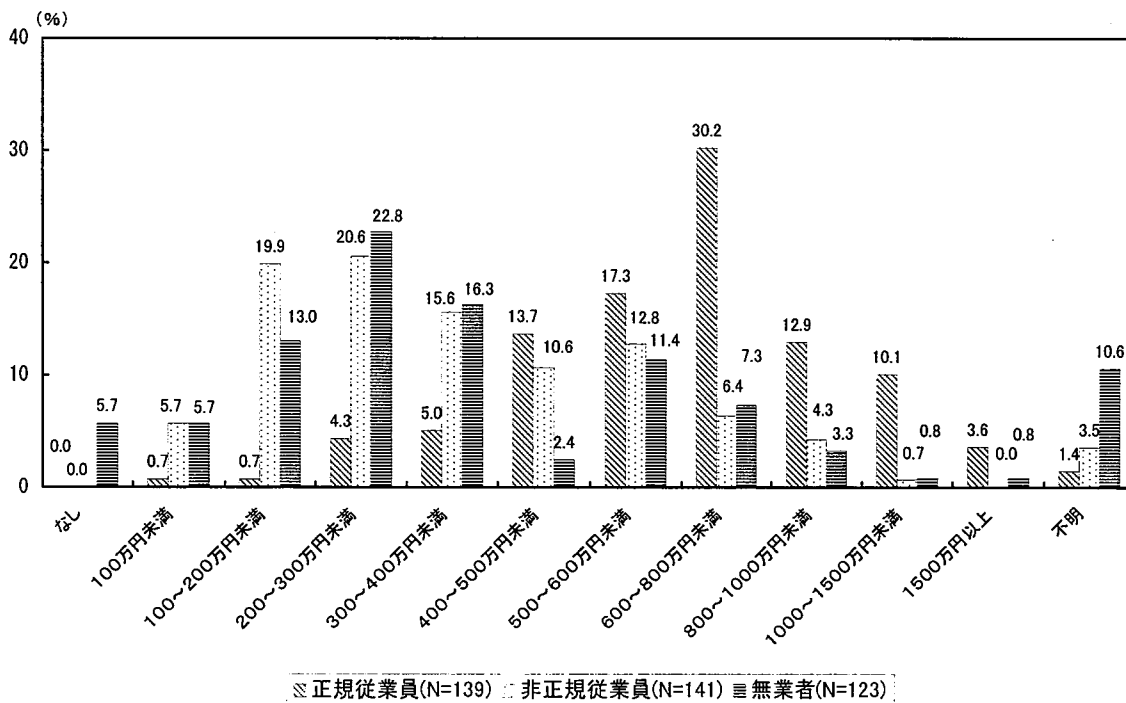
図表 3-8-7 主たる生計維持者（問 7）



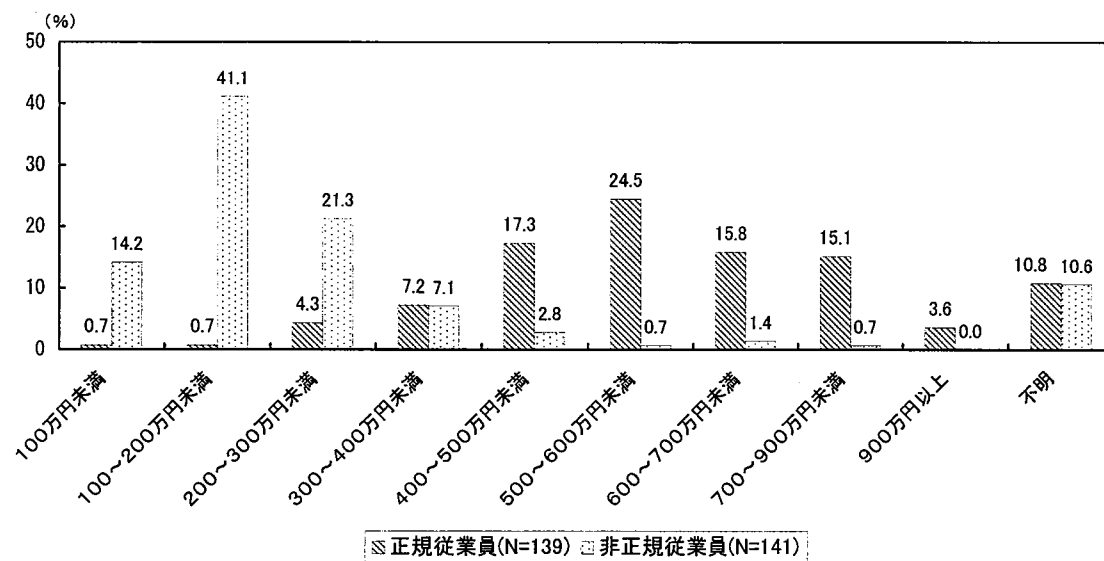
図表 3-8-8 主たる生計維持者の続柄（問 7 付問 7-1）



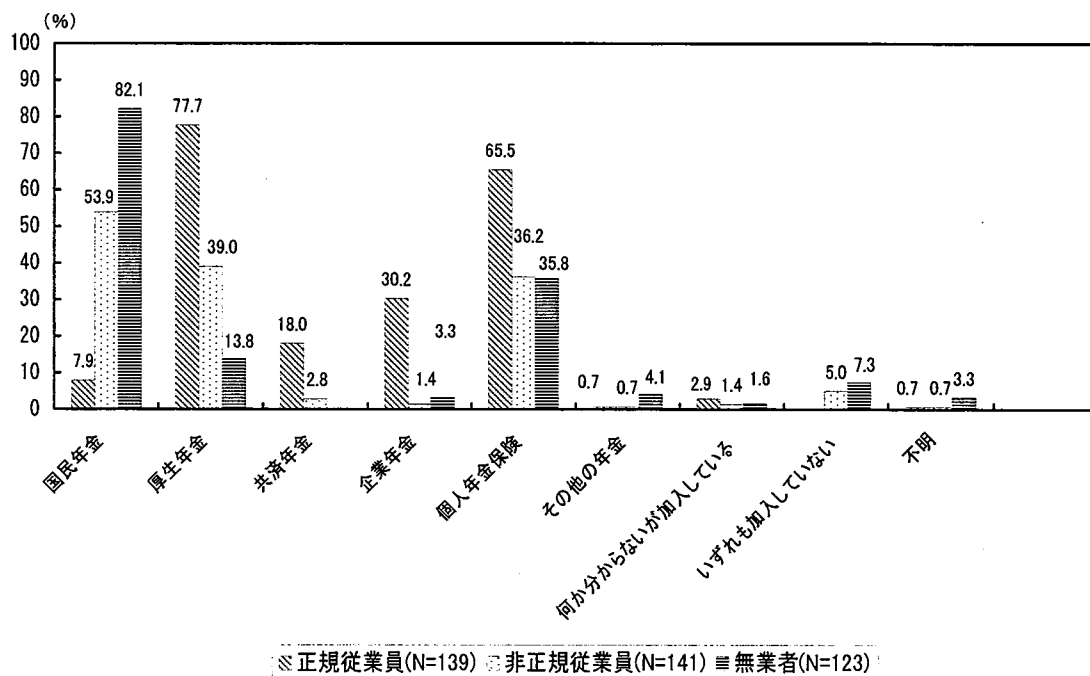
図表 3-8-9 過去1年間の世帯全体の収入（税込）（問8）



図表 3-8-10 過去1年間の仕事から得た収入（問8付問8-2）



図表 3-8-11 加入年金（複数回答）（問 9）



e. 生活

ここでは、正規従業員、非正規従業員、無業者の普段の生活面に注目する（図表 3-8-12～図表 3-8-15）。

（健康状態一問 15）

正規従業員、非正規従業員の間では大差ないが、無業者では「まあ健康」の割合が低く、「病気がち、療養中」が 14.6%あって、相対的に高い。

（充実感を感じる時一問 16）

最も充実感を感じる時については、「趣味やスポーツに熱中している時」が一番多いが、正規従業員（25.2%）・非正規従業員（21.3%）・無業者（19.5%）の順に選択率が下がっていく。無業者において「特になし」（13.0%）が他に比べてやや多い。

（生活全体の満足度一問 19）

「非常に満足している」と「まあ満足している」を合わせたの回答率をみると、正規従業員では 82.0%ある。非正規従業員と無業者は 5～6 割と低くなっている。

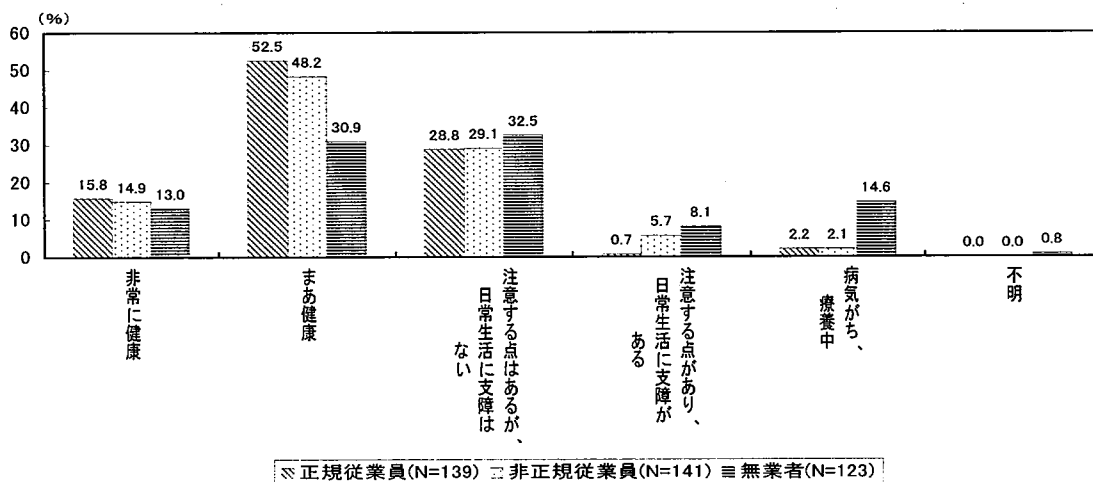
（不安に感じていること一問 20）

不安に感じていることの 1 位でみると、共通して多いものは、「健康のこと」と「先行に対する漠然とした不安」である。その中では、無業者が「健康のこと」に対し、正規従業員が「先行き

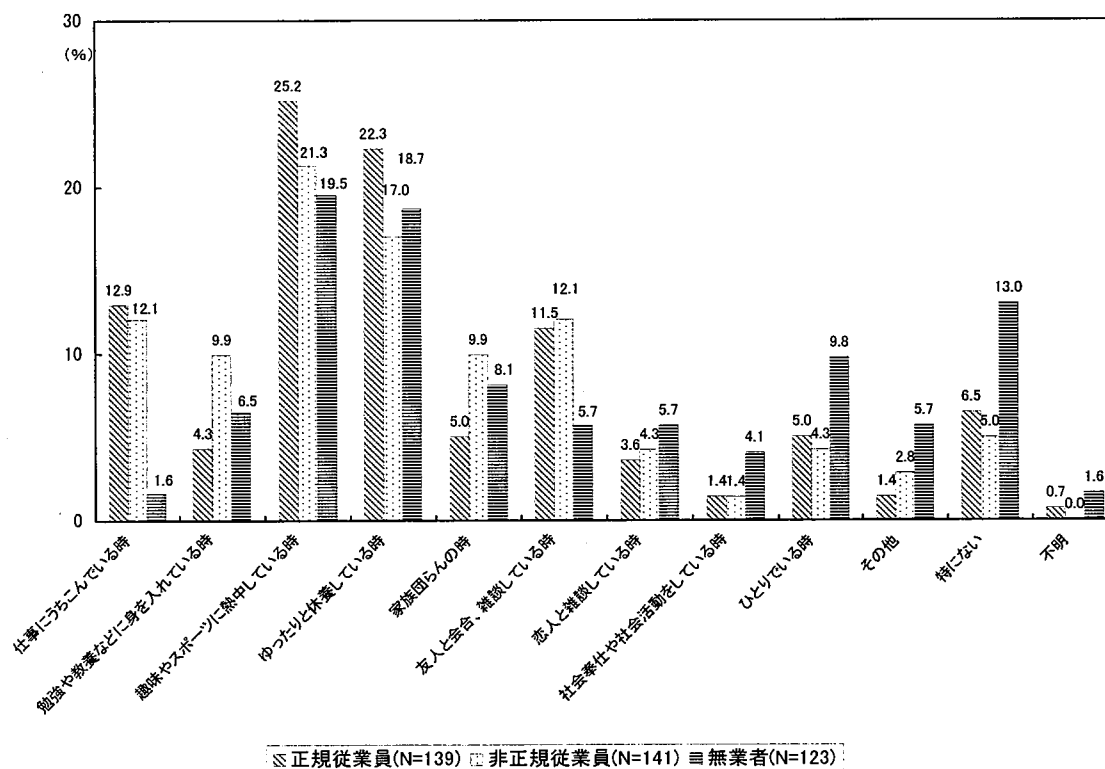
への不安」に対し、選択割合が高い。

また、非正規従業員と無業者は正規従業員に比較して、「生活費のこと」や「雇用が不安定なこと」への不安が高い。

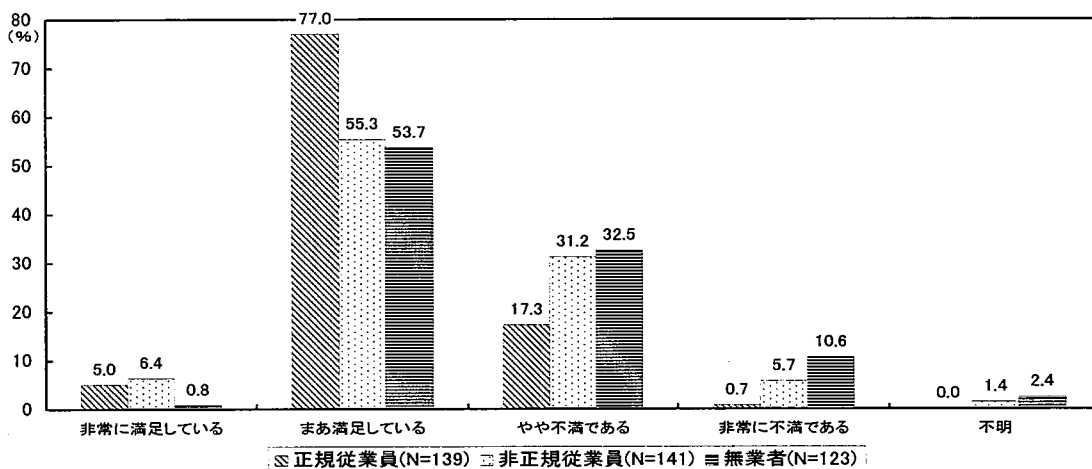
図表 3-8-12 健康状態 (問 15)



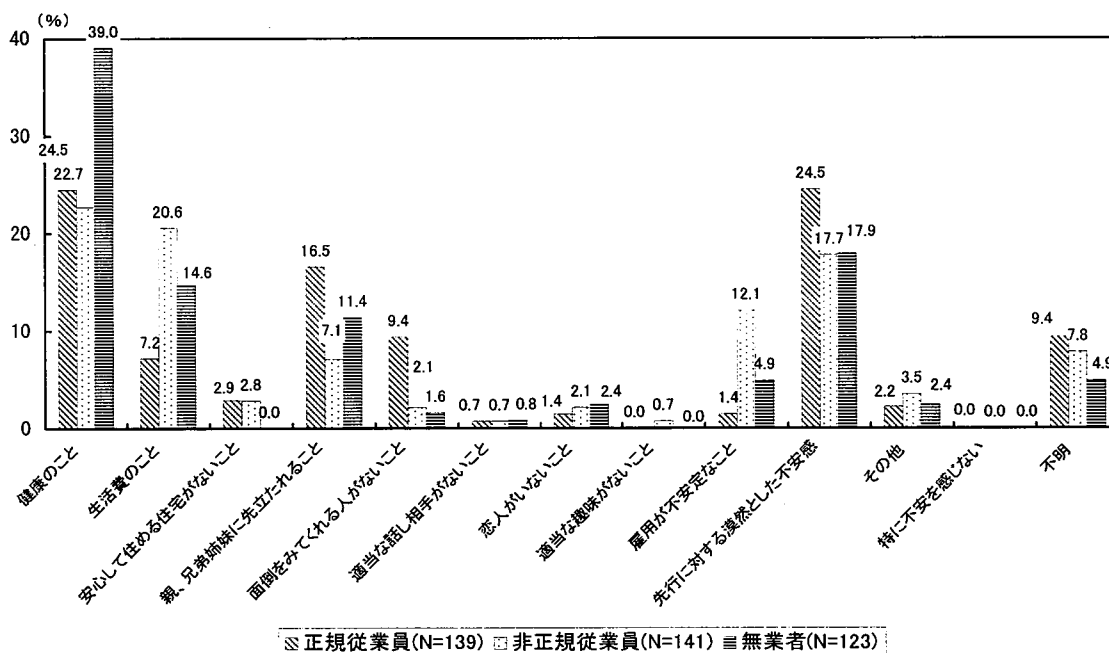
図表 3-8-13 最も充実感を感じる時 (問 16)



図表 3-8-14 生活全体の満足度 (問 19)



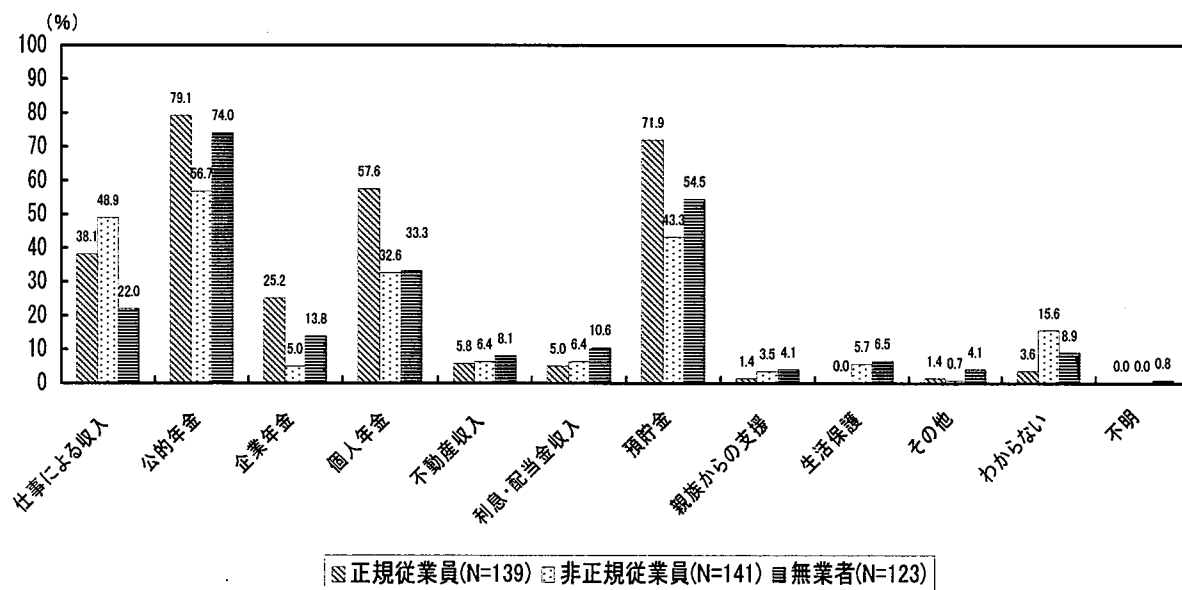
図表 3-8-15 不安に感じていること—1位 (問 20)



f. 老後の収入源

老後の収入源では、正規従業員と非正規従業員を比較すると、非正規従業員の方が「公的年金」、「個人年金」、「預貯金」を選択する割合が低く、「仕事による収入」の選択率が高い。

図表 3-8-16 老後の収入源 (問 26)



第 2 部

1. 独身女性の老後生活―落とし穴とハードルと

直井道子

1. 独身女性の老後生活の何を問題にするか

二十年以上前の独身中高年女性（40歳代、50歳代）を対象にした調査からは（東京都老人総合研究所、1978）、独身女性は配偶者や子がいないので、老後の介護という問題が深刻であるということが浮かび上がっていた。また、調査の前後に行ったケーススタディからは、「中高年で配偶者がいない女性」ということが、世間から冷たい目で見られる、という不満が指摘されていた。さらに、一般に女性は男性に比べて経済力が低いために、その老後には経済的問題に直面することが示された（直井道子、1985）。介護、「世間の目」、経済問題という三点について、このような状況は今も続いているのだろうか。

この調査が行われてからすでに20年以上が経過したので、その間の社会変化がもたらした影響について次のような仮説をたてることができる。まず介護については、公的介護保険制度（2000）や介護休業法ができ、性別役割分業の見直しという風潮の中で介護は必ずしも女性の役割とはみなされなくなってきた。したがって、親の介護も兄弟と協力して乗り切り、自らの老後生活にも明るい見通しが持てるようになってきているかもしれない。第二に「世間の目」については、晩婚化や離婚の増大などの影響もあって独身であるということについて、世間はそれほど特別視をしなくなっている可能性もある。第三に経済問題については、雇用機会均等法（1985）が施行され、女性が男性と均等な雇用機会を得ているとすれば、結婚や出産で仕事をやめるリスクが少ない独身女性の老後の経済問題は改善されている可能性もあるだろう。今回の調査対象者はその年齢からいってこれらの変化の影響をぎりぎり受けたかどうか、という世代ではあるが、このような明るい兆しを読み取れるのか、あるいはそのような変化は読み取れないのか、というのが、今回の調査の注目点の一つであろう。

結論的にいうと、過去のデータと厳密に比較したわけではないものの、次のような変化が読み取れた。第一に介護については、自身が要介護者になった場合の対処方法として、「公的介護施設（特別養護老人ホームなど）に入所する」が38.7%「自宅でホームヘルプサービスなどの在宅介護を利用する」（37.7%）、「病院に入院する」（31.8%）が高率である。サービスが十分かどうかはともかくとして、供給が現実に制度化され、増えているためか、それほど介護についての不安は表明されなかった。第二に、「世間の目」については、現在では独身の自由を謳歌し、友人や趣味の多い人もいて、それなりに自分を肯定的にとらえているように見えた。無論、以上の二つの問題についてこのように楽観的に断定してよいかどうかは、まだ検討する余地があるが、ここでより問題にしたいのは第三の経済問題についてである。残念ながら、経済問題については他の二つの問題のような明るい兆しは全く読み取れず、20年以上前と比較してもあまり事態は改善されていないように見えた。そこで、次に問題になるのは、大きな社会変化にもかかわらず、なぜ老後の経済生活にあまり明るい展望をもてない独身女性が多いのか、ということである。すると、独身女性をとりまく、家族、職場などの中に、女性の経済的能力の発揮を妨げるハードルや落とし穴のようなものがいくつも存在している、という風景が浮かんで

きた。ここでハードルとは努力して乗り越えなくてはならない障害物、落とし穴は予期せずにはまってしまうデメリットのようなものをさすが、もとより比喩的であって、それほど厳密に区別して使うわけではない。趣旨は、安定した老後にいたる道筋に存在するいくつかの分岐点のようなものを、調査結果から示したいということである。

2. 職業生活—多い転職

回答者のほとんどは職業についており、無職は 13.4% である。ただし、正規従業員は就業者の約半分で、年齢が高いほど少ない。初職では 8 割が正規従業員であったが、5 年未満で最初の仕事をやめた人が対象者の 3 割近くあり、しだいに非正規が増えてきたのだと思われる。独身なのだから結婚・出産退職のリスクがなくて初職を長期に継続しているだろうという予測ははずれた。そして、このことが後に述べる低賃金や社会保障の不備につながってきている。そこで、第一のハードルは「仕事を続ける」ことだといえそうだ。

それではなぜ、独身女性の多くが早い段階で転職をするのか？ 最初の仕事をやめた理由を聞くと（複数回答）（図表 3-2-24）、最も高率なのは「仕事の内容や職場に不満があったので」で、仕事をやめた人の 3 割強を占める。これに「他に適当な仕事があったので」の 1 割強を合わせると、職業の諸条件の問題が一番の原因であり、とくに大卒者で高率になっている。ほかに「病気、けが」「親の介護など家庭の都合」がそれぞれ 1 割を超えていた。

初職を辞めるにいたった職業の諸条件の内容をより詳しくグループインタビューから探してみると、「意地悪な先輩」「いやな上司」「そりが合わない人の秘書」などのような人間関係に関することが多い。それから勤務先として女性が長く勤めることを想定していないため、ある程度勤めると行き詰まりを感じて、転職を考えるのではないかと思わせる回答がかなりある。たとえば「いくつになっても、そこの事務の女の子、これやって、という感じ」「男尊女卑」「一般事務を長くやって、ほかのことをやってみたくなくなった」「転職するなら 20 歳代のうちと思った」「資格を取らなくてはと思った」などである。また販売やサービスなどの職種の場合には、転職はよくあることで、より面白い、より収入があるなどの理由で気軽に転職することも多い一方、倒産や不振でやむを得ず転職することも珍しくない様子もうかがえた。小規模の販売などでは昇進や好条件の年金なども期待できず、ある意味で転職しても失うものもあまりない、という状況だといえよう。そのうちには起業を考えるというパターンもあり、それがうまくいかない場合もある。

最初の転職からこれまでの職歴を調査で大まかに聞くと、「概ね一つの組織に継続的に勤務」は少なく、「勤務先は変わったが概ね同じような領域の仕事」と「勤務先が変わるごとに異なる領域の仕事」が 35% 前後でほぼ同じである（図表 3-2-23）。このような状況を見ると、女性独身者の過半数が、勤務先を変える、正規従業員でなくなる、違う領域の仕事をするなどで、収入が低下する可能性が高い職業移動をしている、とまとめることができる。そしてグループインタビューで見ると、一度転職したあと、一休みしたり、親類の介護を手伝ったり、友人のお店を手伝ったりして、収入がすごく少ない状態でつないでいく人がまれではなさそうだ。「仕事をやめたあと、1 年ぐらいリフレッシュして、そのあとヘルパーの資格を取ったが、週 1 回くらいしか仕事がない」「資格を取ろうと思って学校に通いながら 2 箇所でアルバイトをしてき

たが、体を壊し、そのままアルバイトでつないだ」などの例がある。

なお、現在無職の人についてはおよそ半数が「病気」や「倒産」など非自発的理由での退職となっている点とくに注意しておきたい。現在何らかの形で働いている人の中にも、健康上の問題、家族の健康などが転職の契機になっている人が少なくない。「女性は安易に転職する」と見られがちであるが、病気・けがや勤務先の倒産・不振などのような「落とし穴」が調査データに現れる以上に存在しているように思われる。

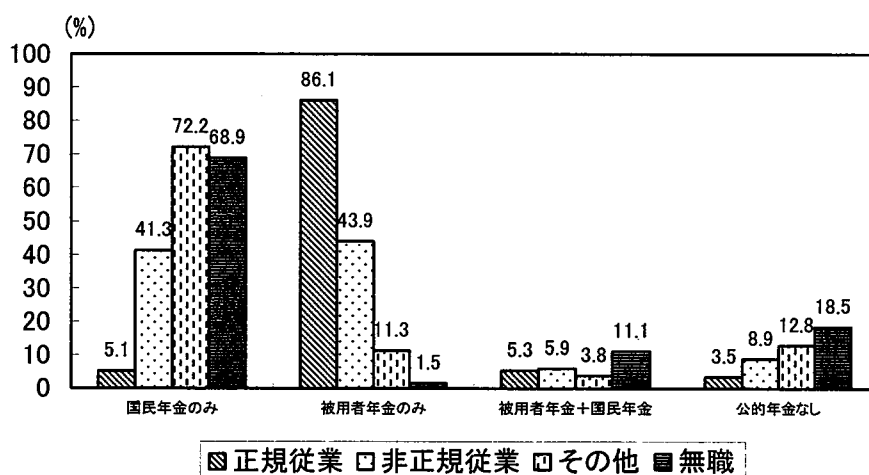
3. 老後のための経済的準備

ここでは職業と老後のための経済的準備との関連を三つの側面からみていく。一つは公的年金加入の状況、第二に個人年金加入の状況、第三に貯蓄などの資産形成の状況である。

まず、年金の加入状況である。図1では国民年金、厚生年金、共済年金という公的年金だけを取りあげ、どのような組み合わせで加入しているのかを従業上の地位別に見た。すべての被用者年金加入者は国民年金にも加入しているはずであるが、調査の結果の回答は必ずしもそのような認識にたつてはいないようなので、被用者年金のみ（厚生年金か共済年金加入者）と被用者年金+国民年金の区別はあまり明確ではない。いずれにせよ、図1からは正規従業員の9割前後が被用者年金に加入しているが、非正規の場合の約4割が国民年金のみであることがわかる。国民年金は最も多くても月7万程度の年金しか期待できないことから、これだけでは老後の経済生活は苦しいものになる。加入期間については調査データからはわからないが、グループインタビューからは非正規の場合には加入期間がかなり短い者も多いことがうかがえる。

「正規の仕事のときは会社で保険料を天引きされていたが、それ以後は何も払っていない」「時給計算で仕事の収入がない月もあるので、年金保険料は払えない」などである。図1では無年金者は1割弱であるが、実際には老後になって受給資格がないことがわかるとか、受給額が非常に少ない者が出てくるものと思われる。

図1 年金加入状況(従業形態別)



第二に、公的年金で生活できなくても、個人年金など他の年金でそれを補うことができれば老後の経済生活への準備ができる。そこで従業上の地位別に個人年金などの加入率を見ると、図表 3-6-3 にあるように、正規従業員では 46.9%が個人年金保険にも加入しているのに、非正規では 34.0%、無職では 27.4% である。すなわち、年金額が低いと想定される層でむしろ個人年金加入比率が低い。図表 3-6-2 からは個人の収入が 500 万円以上になると 66%以上が個人年金保険に加入していることがわかり、非正規や無職には老後の準備までを考える経済的ゆとりがないものと思われる。

そこで第三に現在の収入と貯蓄などの資産形成についてみると、現在の仕事からの収入には大きな差異がある。資産・貯蓄額の合計（不明 2 割近くを含む）を見ても、正規従業員では 2000 万円に約 32.6%いるが、非正規では 24.9%、反対に 1000 万円未満は正規で 26.1%、非正規で 35.9%である。非正規の人も貯蓄は比較的多いという印象もあるが、1000 万円という貯蓄は年金が低額な場合にはとても長い老後をまかなえる金額とは思えない。

以上をまとめると、仕事からの収入が比較的多くて老後のための貯蓄も多くできる正規従業員が、老後に厚生年金でより高い年金をもらい、そのうち何割かは企業年金や個人年金ももらえるということになる。一方で非正規の場合には仕事収入が少ないので老後のための貯蓄もままならず、年金も国民年金で額が少ない者、企業年金などもない者が多いということで、老後の格差は開く一方のように見える。第一の「仕事を続ける」というハードルに重なるように、ひき続いて、「老後のための年金・貯蓄」という第二のハードルが待ち構えているのだといえよう。

4、誰と暮らしているのか—親との関係

これまでは職業と経済という視点から老後生活を展望してきたが、もう一つ老後を考えるに当たって重要なのは世帯（誰と暮らしているのか）という視点である。まず、対象者の世帯構成で一人世帯は 32%しかなく、親との同居世帯（親以外に兄弟姉妹なども同居している場合を含む）の方が多くことが目を引く。したがって、先に述べてきた転職の多さやそれからくる収入の少なさは、親・兄弟姉妹との同居による安心感（現実に住居費などのお金がかからないことも含めて）からきているのかもしれない。反対に一人暮らしをしたいにもかかわらず、収入が少ないために親と暮らしている者もいるだろう。すでに図表 3-4-9 であきらかなように、自分の仕事収入（年間）の平均は一人暮らし世帯の場合が親との同居世帯の場合よりおよそ 100 万円高い。また生計中心者は全体としてみると「自分」が 6 割、「親」が 4 割であるが、一人暮らし世帯では 9 割が「自分」なのに、親と同居だと 3 割未満である。

親との同居世帯の世帯収入は 600 万円以上 800 万円未満が最も多いなど一人暮らし世帯よりは絶対額が多い。その収入源（複数回答）を見ると親との同居世帯では 7 割以上が本人の仕事収入と年金収入（対象者の年齢から見てほとんどは親の年金だと思われる）を持ち、同居の世帯員の仕事収入も 3 割、不動産収入を 1 割強が持っている。すなわち、対象者の中で最も多数を占める親との同居世帯は多収入源であることにより、全体としてはかなりの収入額に達していると見られる。また金額は不明であるが、親の年金収入というのも無視し得ない割合を占めているようである。

さて、このように親との同居は経済面でのメリットも多いが、二つの面で独身女性の老後にとっての「落とし穴」でもある。一つはつい親に依存しがちで、なかなか自立できなくなるという者もいるのではないか。調査からはこのあたりはよくわからないが、グループインタビューには次のような例があった。「何となく親に頼ってきたが、最近は親からお金のことを相談されてすごく不安。父は女が外で働くことはよくないという考えだったのに」「母が他界したときに、仕事をやめて自営業の店を手伝うようになったのですが、しばらくしてその店も閉店。仕事を探しました」。これほどではなくても、何となく娘時代の延長で、いずれ結婚するのだからというような考えで経済的に自立しなかった、という例はもっとあるだろう。もう一つは親の介護の問題であるが、これも第一の問題と関連しており、家に一人、仕事にあまり拘束されない女性がいることは何かと「便利」なことであり、それで介護や親類の仕事の手伝いなどに借り出されやすく、そのためにフルタイムの職業生活が継続しにくくなったという面があるのではないだろうか。

親の介護という問題は仕事を続ける上での第三のハードルとなる可能性を秘めているのもう少し詳しく見よう。過去に家に介護や援助が必要な人がいたかという質問に対しておよそ4分の1は「いた」と答えており、「仕事をやめて自分が介護した」は全体の16%ある。しかし、グループインタビューで見ると、介護のために仕事をやめたのではなくても、ちょうど仕事をやめたときに親族の介護の手伝いを頼まれて、それが数年に及んだ例や、親などの老後のめんどうを見る担当者と目され、そのために仕事に専心できなかったという例などを含めると、より多くの独身女性にとって親などの介護の問題はその経済力を低下させる作用をしていることが推測される。地方では、男兄弟は大都市で働いており、たまたま独身で地域に残った娘が「身軽だから」と介護要員になってしまうケースも少なくないようである。「病気がちの親のそばに誰かいたほうがよいと思って、何かのときのために非常勤で働いてきた」「義理の兄のおぼさんがこどもがいなくて、その借家に家賃なしで住む代わりに用事をしていた」「資格を取ろうと思って仕事をやめたら、まるで待っていたかのように家族が入院を始めた(笑)」「父の病気で3年間の休職をし、介護に専心し、1年前に復帰した」などである。

5. 住居

次に住居についてみていく。全体としては親の家に同居が3割を超えて最も高率、ついで自分の持ち家が3割弱、民間賃貸住宅が2割強と続く。老後の住まいについて聞くと「現在の住まいに住み続ける」と「わからない」がそれぞれ4割弱で、転居するつもりが21%ほどである。転居するつもりの方のうち4分の1くらいは持ち家を購入するつもりであり、あと4分の1くらいは賃貸住宅に転居するつもりでいて、親族から相続の見込みの者は1割ほどにすぎない。すなわち、住居という視点から老後展望をしてみると、現在親の持ち家に同居している場合、自分の持ち家の場合、賃貸住宅の場合で、それぞれ違った問題が浮かび上がる。まず、親の持ち家に同居している場合は、親の死後、どこに住むか、相続でどうなるか、という問題がある。調査ではこの点については尋ねなかったが、グループインタビューでは何人かがこの問題に言及した。「親の家を相続しても相続税を払う現金がなければ結局物納になって住むところなくなる」「姉と共同で相続したとしても、姉と一緒に住みたくない」「無職の弟と親の持ち家を

相続することになると思うが、老朽化していつどうやって建て直すかが心配」などである。

自分の持ち家に住んでいる場合は、一般論としては老後も安心であるが、住宅ローンについてみると必ずしもそうではない。対象者のうち住宅ローンがある人は全体の1割である。借入額の平均は2000万円弱で年間返済額が100万円前後というのが平均像であるが、問題は残余期間が20年以上あるものがローンのある人の4割に達する点である。現在の年齢から考えてこのままいけば定年年齢を超えて返済を続けることになる。借り入れをしているのは正規従業員が多いから退職金で最終的に返済できるのかもしれないが、老後にどのような影響を与えるのか懸念される。現在、賃貸住宅に住んでいてこれから購入を考えている人についても同じようなことがいえるだろう。

賃貸住宅に住み続ける人については、高齢単身者は借りにくい、という問題があるといわれる。グループインタビューからこの点についての記述を拾うと「40代以降で部屋を探すと所得証明を2年分出せとか言われた」という記述があるくらいで、まだ現実のものとはなっていないようだ。しかし、所得水準や年金水準から推定するに、家を借りられても老後の家賃負担は一般にきついのではないだろうか。これらのことがわかっているから、無理をしても住宅購入を計っている人も多いのだろう。

6. まとめ—老後の生活展望

老後の収入源について聞いた回答（複数回答）を正規従業員と非正規従業員で比較すると「公的年金」（77.4%と66.4%）「預貯金」（60.0%,49.0%）「個人年金」（45.5%,32.4%）といずれでも正規従業員のほうが10%以上高率だが、いずれもあまり高い数値とはいえない。

調査の自由記入にはグループインタビューからは老後の経済についての深刻な様相が伝わってくる。「母にこんなに医療費がかかるとは計算外だった」「老後が心配で飛び降りて死んでしまったら楽だという気持ちになったこともある」「ギリギリタイプです。そのときはそのときで考えます」「日本では生活保護で普通の生活ができる、そういう国だと思ったら本当に楽になりました」「これから年金制度も変わると思いますし、考えたとおりにはならないと思うので、考えないようにしています」

このような深刻な経済展望の人が多くなるのはなぜなのだろうか。これまでに書いたことをまとめてみると、老後の経済的安定を得るためには、超えなくてはならない、いくつかのハードルと落とし穴があることあきらかになった。それをどうやって超えるのかを考えると、個人の努力はもとより大切であるが、社会の側にも変化すべき点があることに気がつく。第一に、女性がいくつになっても男性の補助業務の雑用をさせているような分業システムを改め、女性にも仕事を継続するなかで技能を磨いたり、より高度な仕事に挑戦したり、昇進していく可能性がある体制を作ること。第二に、女性の経済的自立を重視しないで、「家にいる女性」を安易に介護や「手伝い」に便利に使う世間の風潮を変えていく。手っ取り早くいえばこれは「性別役割分業の見直し」である。第三に、保険料をきちんと納付してきた者には、それで安心して暮らせる年金を給付できる年金システムを作ることが必要で、調査の自由記入欄には、「年金で生活できるようにしてほしい」という要望が多数書かれている。また「私達が65歳になったら1円ももらえないのでは？」というような不安も多く書かれているので、それを解

消することも必要である。さらに、保険料の未納を放置することなく、人々に年金についての知識を普及し、空白期間が少なくなるような有効な督促を行っていくことも、もっと行われるべきではないか。第四に、病気や倒産という人生の「落とし穴」に落ちた人へのセーフティ・ネットの充実がもっと必要である。

以上指摘したことの中には、雇用機会均等法や性別役割分業の見直しなどすでに着手されていることもあるが、現状では必ずしもそれが普及しているとはいえず、そのしわ寄せを独身女性が受けている、という側面があるように思う。より徹底した改革が現実化することが必要である。

引用文献

東京都老人総合研究所 『中高年女性の生活と老後—未婚・死別・離別の場合—』 1978

直井道子 「中高年女性の経済状態からみた老後保障の問題点」

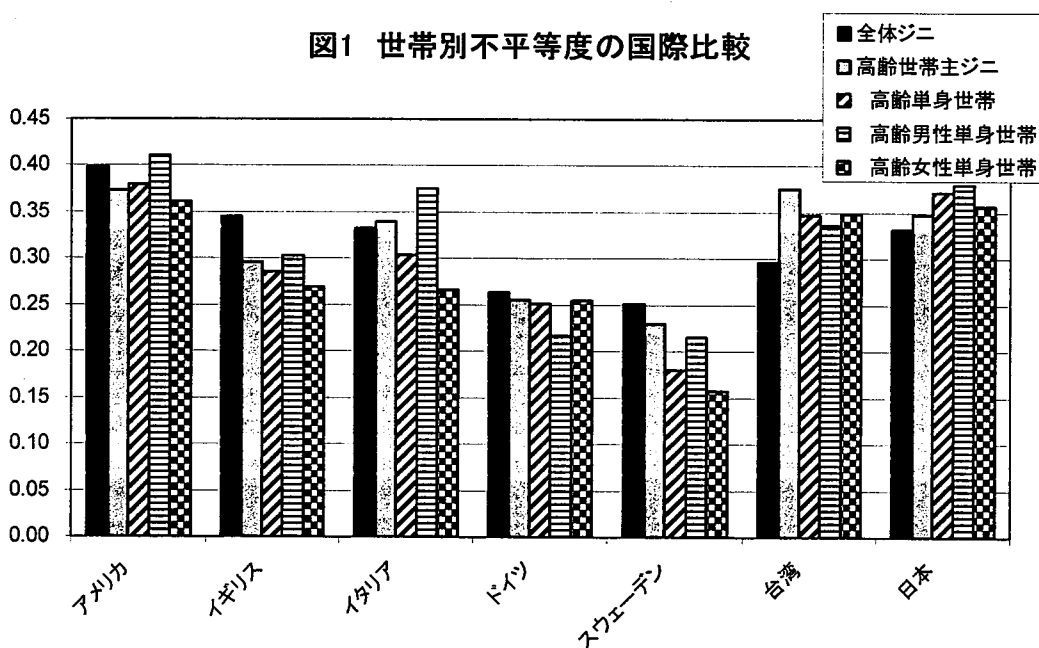
『季刊社会保障研究』 21 巻 3 号 226—236 頁 1985

2. 独身中高年女性の生活

白波瀬佐和子（東京大学）

高齢層の大きな経済格差

わが国は1980年以降急速に高齢化している。全人口に占める65歳以上人口割合を高齢化の一つの指標にするが、高齢化は単に65歳以上高齢者（以降、高齢者）の量が増えることだけを意味しない。実際に生活する場、世帯が高齢者の生活水準を大きく規定する。事実、白波瀬（2002）によると、日本の高齢層の所得格差は欧米に比べて大きく、その理由の一つとして高齢者が属する世帯による経済格差が大きいことが指摘されている。



出典) 白波瀬佐和子「高齢期をひとりで暮らすということ-これからの社会保障制度をさぐる-」

『季刊社会保障研究』第41巻第2号(2005年)、p.111~121

図1は、2000年の世帯全体、高齢者世帯、高齢単身世帯、高齢男性単身世帯、高齢女性単身世帯のジニ係数を欧米、台湾と比較した。日本は、アメリカ、イギリスについて世帯全体のジニ係数が高い。日本の経済格差は欧米と比較しても決して見劣りしない。高齢世帯主世帯に着目すると全体世帯よりもジニ係数は上昇する。その上昇の程度は台湾ほどではないが、全体世帯のジニ係数より高齢世帯主世帯のジニ係数が高い。全世界の経済格差より高齢世帯主世帯の経済格差が大きいのは、日本、台湾、そしてイタリアである。これら3つの国に共通するのは、家族に大きく依存した福祉国家であることである。イタリアも南欧に多い家族主義的福祉国家に区分される。家族に大きく依拠する福祉国家体制をもつ国は高齢者のいる世帯の経済格差が大きい。そこで同居家族をもたない単身世帯に着目すると、日本は特に経済格差が大きく

なる。特に高齢単身女性の経済格差が大きいのが明らかである。

しかし、アメリカも高齢単身女性の経済格差が大きい。同居家族をもたず一人で暮らすことは、高齢にともなうリスクを直接的に受けることを意味する。日本で高齢期を一人で暮らすことに伴う経済格差はアメリカと同程度に大きい。「小さな政府」が志向されるいま、この結果が意味するところは小さくない。アメリカは豊かさを謳歌する国であると同時に貧困率が極めて高い国である。貧しいものと富めるものが同居する社会では、勝ち組・負け組の差は天地の差ほどもある。市場原理を第一義とする社会で、それは当然の結果といわれればそうであるが、やはりそこでの高い社会的なコストも見逃すわけにはいかない。高齢で女性であり、かつ一人で生活するものは、社会的に弱い立場となる場合が多い。彼女らが社会的にどのような位置にあり、経済的ウェルビーイングをどの程度保障されているかは、福祉国家としての成熟度を示す一つの指標ともなりえよう。だからこそ、中高年の独身女性に焦点を当てた本研究の意義は高い。

一人くらしの配偶関係

表1 男女別、年代別、単独世帯主の婚姻上の地位

	男性			女性		
	1986年	1995年	2001年	1986年	1995年	2001年
40代						
未婚	75.6	77.2	76.9	67.4	52.2	58.4
死別	2.3	2.3	1.6	8.7	9.9	8.0
離別	22.1	20.5	21.5	23.8	37.9	33.6
50代						
未婚	43.2	57.4	57.4	31.2	25.8	31.1
死別	15.8	11.6	7.0	45.4	38.2	22.1
離別	41.1	31.0	35.5	23.4	36.1	46.7

出典)白波瀬佐和子「不平等化日本の中身」(表4の一部)白波瀬佐和子編『変化する社会の不平等』(2006年、東京大学出版会)

表1は、1980年代半ばから2001年にかけての40代、50代の男女別配偶関係である。女性に着目すると40代では離別者が増え、未婚者が増えている。40代の女性が一人くらしするのは2001年時点で過半数が未婚者であるが、3分の1は離別者である。一方40代の男性一人くらしの配偶関係は7割以上の多数派が未婚者で、その状況にそれほど大きな変化が認められない。このように、40代で一人で生活する者の生き様は、女性の方が大きく変化した。

しかし50代をみると、男性も女性と同じくらい配偶関係の変化がある。50代で一人でくらす男性の過半数が未婚者となり、離別者と死別者の割合は逆に減少した。一方50代女性の単身者のうち、未婚者の割合はほとんど変化がない。ここで変化したことをあえていうならば、離別者が増えている。

このように一人で生活する40代、50代をみても、生き方の変化が見受けられる。これまで一人の人と添い遂げる人生は多数派であるが、そうでない場合も少しずつ増えている。また、これまで皆婚社会と言われ誰かと結婚することが当然のこととされていたが、一生結婚しない

ものも増えている。少子高齢社会はこのように個々人の生き方が変化することを意味する。このような生き方の変化は個々人の経済状況も左右する。事実、岩田は未婚者が貧困に陥る高いリスクを指摘する（2004）。

表2 配偶上の地位別、男女別単身者の低所得割合(%)

	アメリカ	イギリス	イタリア	ドイツ	スウェーデン	台湾	日本
男性単身							
未婚	45.17	23.43	39.83	17.33	18.72	42.07	27.91
離婚	33.44	18.68	13.10	10.09	9.79	51.29	18.99
死別	32.70	19.93	10.64	7.76	10.00	46.08	18.45
女性単身							
未婚	42.68	21.49	35.17	18.46	15.36	85.35	34.16
離婚	40.36	23.48	35.32	39.53	9.22	—*	38.32
死別	46.00	45.17	27.30	16.39	18.04	62.29	36.10

注)*十分な該当ケースがないため省略

出典)白波瀬佐和子「高齢期をひとりで暮らすということ-これからの社会保障制度をさぐる-」

『季刊社会保障研究』第41巻第2号(2005年)、p.111~121

例えば、高齢単身者の低所得割合を配偶関係別にみると（表2）、男性は未婚者の低所得割合が高く、女性は離別者の低所得割合が高い。男性の未婚者の低所得割合は離別者、死別者に比べて明らかに高いが、女性は一人暮らしの中での配偶関係による低所得割合の違いはそれほど大きくない。高齢期を女性が一人で過ごすことは、生涯未婚者であろうと離別者であろうと低所得に陥るリスクは一樣に高い。

中高年独身女性の生活状況

ここでは平成17年12月に財団法人シニアプラン開発機構が実施した「独身女性を中心とした女性の老後生活設計ニーズについての調査」の結果をもとに、中高年女性のくらしぶりを世帯の観点からみる。本調査の対象者は、40~59歳の独身女性である。

調査時点で仕事をしていると答えたものは86.5%と多数派であり、仕事をもつ割合は40代独身女性の間で9割にもなる。50代後半でも76.4%が仕事を持っていると回答している。働いているもののうち、半数近くは正規就業者であり、3分の1強は非正規就業者である。

家計を中心に維持しているものは6割近くいる。自らが主たる家計維持者でない場合の8割以上が親によって養われていると答えていた。一人暮らしの場合は当然自らが家計維持者となっている場合がほとんどであるが、親と同居している場合には親によって生計が支えられていると答えたものが65.5%いた。言い換えれば、誰と生活しているかという独身女性の属する世帯タイプによって、彼女の経済的な位置づけが異なる。

中高年独身女性の世帯構造

40代、50代の独身女性のうち、3分の1は一人暮らしである。だれかと同居する場合には、8割近くが親と同居している。40代、50代の独身女性は一人暮らしか、親と同居する場合がほとんどである。しかし、一人暮らしの割合は50代後半になると増え、その理由の一つに同居する親が死去することによると考えられる。また、東京都区部に一人暮らしの割合が高い。

なぜ都市部、特に東京に独身中高年女性の一人暮らしが多いのか。一つの考えられる理由は、一人で女性が生活することへの規範的な制約が地方に比べて少ないことがあげられる。40代、50代の女性が結婚せずに一人でくらすことに対する周りからのスティグマ観は地方の方がまだ強い。

親との関係（仙台インタビュー調査）

親と同居する場合が多数派である中、親のことを気遣う様子が独身女性の間で見受けられた。親のことを気遣いいざとなったら親元に戻るといった、親に対する強い気持ちはたとえ親と離れていても認められた。他にきょうだいがいても、親の面倒については当面もっとも気になる事柄の一つであった。そこにはパラサイトシングル論でいわれるところの親のすねをかじる独身成人者というよりも、親のことを気にかけて将来的に世話を提供することも辞さない子の覚悟を感じた。

老後について

老後の生活について尋ねると、40代は「わからない」と答えたものが少なくない。平均寿命が延びて、結婚年齢も遅くなっているいま、40代前半は結婚する意思もある。適当な人がいたら結婚したいとしたものが、40代前半で67.5%、40代後半で5割いる。まだ40代は不確定な要素を秘めた人生の過渡期ともいえる。

老後の不安について聞くと、具体的に何とはいえないが不安はあるという答えが返ってくる。40歳になるまで独身であったことで「老後の不安」を当然のこととして質問するのは適当ではない。老後や将来については、独身者でなくとも不安はある。残念ながら、本調査から40代50代の独身女性の全体社会における位置づけを十分に捉えることはできなかったが、生涯を結婚せずに暮らすことの意味を問う本研究は先駆的である。

40代、50代の独身女性のほとんどは、まだ親がいるし、きょうだいもいる。しかしいつかは親もいなくなり、きょうだいとの関係も今までどおりというわけにはいかないかもしれない。頼れる親族が限られていることが、独身女性の不安を駆り立てるところもあると思う。しかし、老後への不安が独身女性にどの程度特有かどうかは今後さらに研究を進めていかなければならない。

参考文献

岩田正美 2004年 「デフレ不況下の「貧困の経験」」樋口美雄・太田清・家計経済研究所編『女性たちの平成不況』日本経済新聞社、203-233.

白波瀬佐和子 2002年 「日本の所得格差と高齢者世帯—国際比較の観点から」『日本労働研究雑誌』第500号、72-85.

白波瀬佐和子 2005年「高齢期をひとりで暮らすということ—これからの社会保障制度をさぐる—」『季刊社会保障研究』第41巻第2号、111-121.

白波瀬佐和子 2006年「不平等化日本の中身—世帯とジェンダーに着目して—」白波瀬佐和子編著『変化する社会の不平等 少子高齢化にひそむ格差』（東京大学出版会）、47-78.

3. 新しいシングル層の仕事と中高年期

お茶の水女子大学 永瀬伸子

1. シングルライフはどう変化しているか

生涯シングルで生きる女性は、国立社会保障人口問題研究所の中位推計によれば、1985年生まれの女性は16.8%になると予想されている。高位推計では13.3%、低位推計では22.6%である。1950年生まれの女性の生涯未婚率が4.9%だったことから考えれば、中位推計でほぼ3倍、低位では4倍強に増えるという予想である。1986年の雇用機会均等法の施行後に女性の結婚・出産行動が変わったと指摘されるが、1980年代後半に変化が出始めたとすれば、この頃20歳代であった女性たちが、2005年には40歳代となっており、この調査対象に含まれる。

つまり今回、調査対象となった40歳代の女性たちは、シングルで過ごすことが比較的あたりまえの生きかたとして一般社会に受け入れられるようになった「はしり」の時期にあたる。これに対して、50歳代の女性たちは、おそらくまだ女性は結婚するのが当たり前であるという暗黙の了解がある中でシングルにとどまった女性たちが多いと想像される。生涯シングルの暮らしがどう変化しているか、この点について、これまでほとんど調査はされていない。シングルマザーについての調査は少なくとも（たとえば日本労働研究機構（2003））、シングルマザーの貧困率がきわめて高いこと、若いうちに仕事に就きこれを継続していることが重要であることが示されている。また単身者についての研究もあるが、中年期の生涯シングルを離死別者と分けて調査対象としたものは、おそらく今回がはじめてだろう。この調査はモニター調査であることから、きわめて低所得のシングルや反対にきわめて高所得のシングルは抜け落ちており、一定のセレクションがかかっているとは思われるが、「新しい生涯シングル」がどのような女性たちか、50歳代と40歳代の生涯シングルを比較することで、その職業や収入、同居家族、結婚観など、暮らしぶりを見ていく。

2. 職歴—初職と賃金

生涯シングルが増えた「はしり」の世代（40歳代）は、女性が結婚するのは当たり前だったその少し上の世代（50歳代）と就業行動が異なるのではないかと、というのが仮説である。女性が結婚するのが当たり前だった世代に比べて、より一人暮らしが可能なだけのキャリア形成ができるようになったのかもしれないし、逆に、生涯シングルになると思わないまま、むしろ、安易に離転職をしているかもしれない。

まず初職を見ると、40歳代と50歳代とで、正社員が8割弱と差は少ないが、40歳代になると、初職が非正社員である者が15%おり、50歳代の9%より高いものとなっている。

図表1 初職の従業上の地位

(%)

	40歳代 (n=672)	50歳代 (n=317)
経営者役員	0	1
正社員	76	78
非正社員	15	9
派遣社員	1	0
自営業	2	3
家族従業	1	3
自由業	2	3
内職	0	1
その他	2	2
欠損	0	0
計	100	100

注) 初職継続者、転職者、離職者を含む

就業パターンを見ると、初職継続が40歳代でも50歳代もほぼかわらず、約3人に1人である。しかし40歳代では勤務先が変わるごとに異なる仕事に就いたという場当たりのな就業者が4人に1人を占め、50歳代に比べて割合が高い。逆に50歳代では、概ね同じ企業に勤務してきたが離職した者が多く、その3割は現在は無職になっている。40歳代は、場当たりの就業が多いが無職は15%と低い。

学歴別に見ると、大卒以上で初職継続が44%と高い。

図表2 就業パターン

(%)

	40歳代 (n=672)	50歳代 (n=317)	高卒 (n=366)	短大卒 (n=381)	大卒 (n=216)
初職継続	35	34	32	30	44
概ね(10年以上)同じ企業に勤務した	8	16	13	11	7
転職したが概ね(10年以上)同じ領域の仕事	24	24	21	28	24
勤務先が変わるごとに異なる仕事	26	15	25	25	16
概ね(10年以上)自営	1	4	1	2	5
概ね(10年以上)就業中断	2	2	4	2	1
その他	1	2	1	1	1
欠損	2	3	3	2	2
計	100	100	100	100	100

注) 初職継続者、転職者、離職者を含む

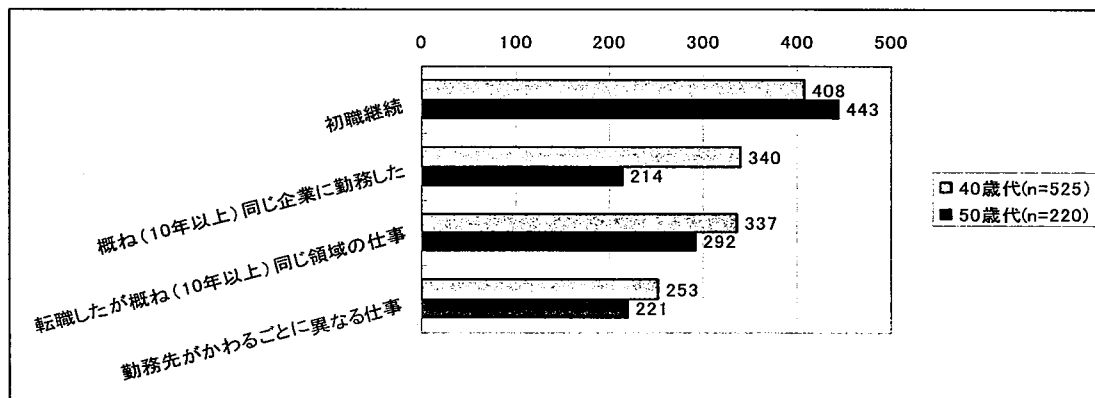
図表3は主な4つの就業パターンについて、過去1年の税込み年収平均をみたものである(有収入者に限る)。初職をそのまま継続できた者の平均年収がもっとも高く、平均で400万をやや超える程度である。逆に概ね同じ企業に勤務したが転職した者の年収は、50歳代は低いものとなっているが、おそらく、余儀ない事情で転職し、現職に恵まれない者が多いためだろう。

離職の理由は「仕事内容への不満から離職」が理由として選択される割合が高いが、40歳代の41%に対して50歳代は28%と低い。かわりに「親の介護など家庭の都合で」が、9%に対して14%、「経営不振、倒産、閉鎖、人員整理などで」が11%に対して15%である。

50歳代のこのグループを除くと、勤務先が変わるごとに仕事内容を変えてきた者は、40歳代を見ると、年収はもっとも低くなっている。逆に企業あるいは職領域に定着し、技能形成がされた者はより高い賃金を得ている。

図表3 就業パターンと現在の年収（有収入者に限る）

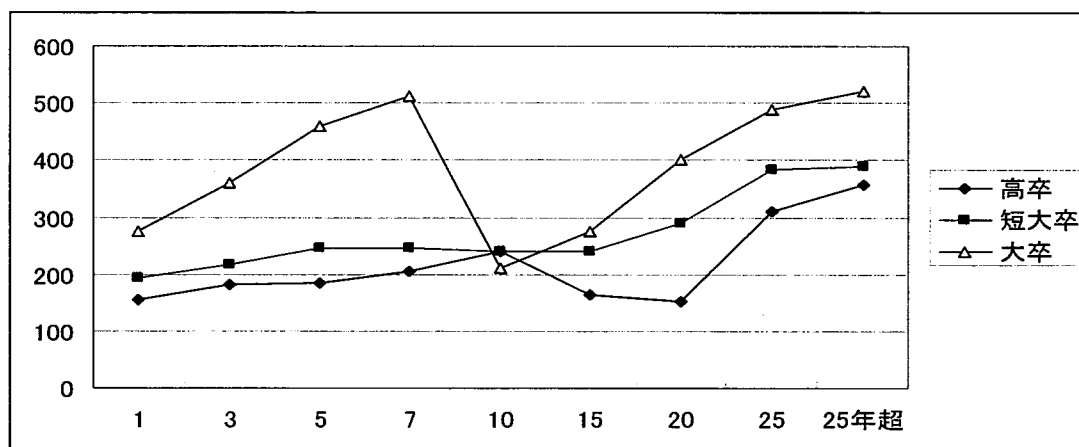
(万円)



図表4は、初職の継続年数別に見た昨年の年収である（離転職者、初職継続者含む）。一般に初職継続者が多いと考えられる勤続25年、25年超の階級の年収が高く、短大、高卒者では、早期離職者の年収は平均200万から250万円程度に過ぎない。しかし大卒女性については、初職5年から7年目に転職した者の昨年の年収も比較的高いものとなっている。初職継続だけでなく、大卒女性については、20歳台後半での転職者も比較的良好な仕事に就いていることを見ることができる。

図表4 初職継続年数別の昨年の本人年収（離転職者を含む）

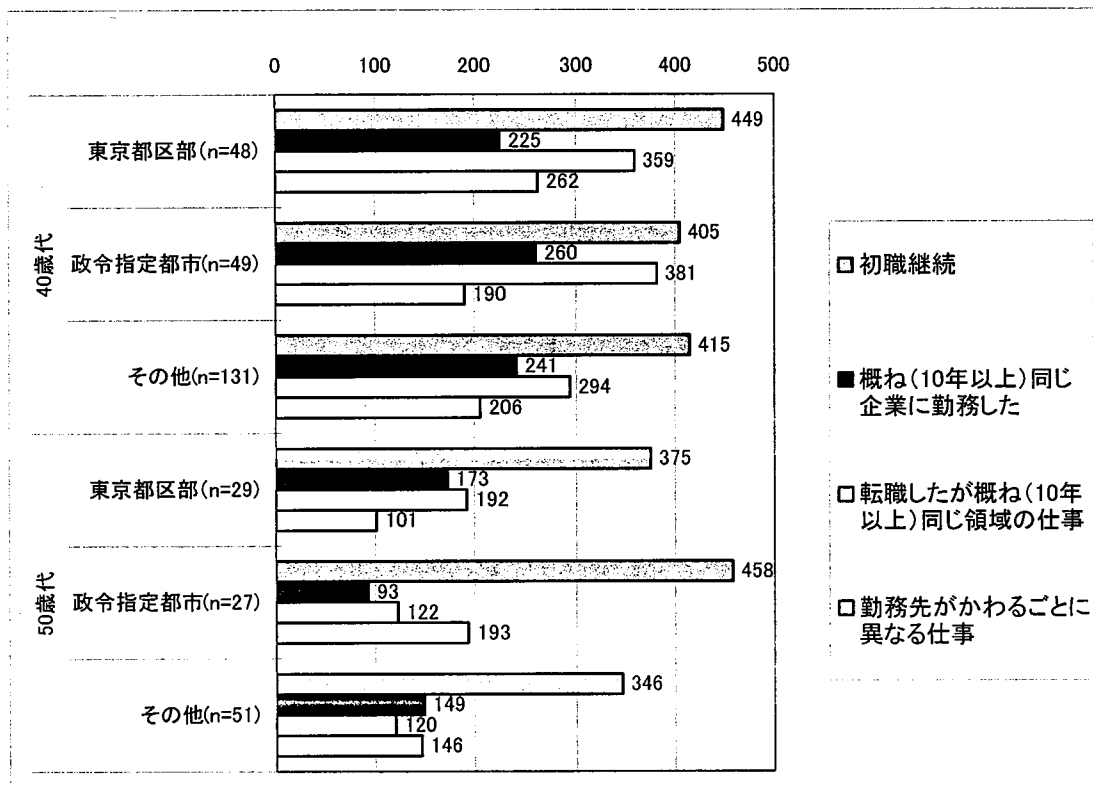
(万円)



図表5は都市規模別に就業パターンと平均年収との関係を見たものだが、初職継続の賃金がどの地域でも高いものの、東京都区部および政令指定都市の40歳代では、同じ領域の仕事に従事することが、一定の技能形成につながっており、一定程度賃金に反映されている。

図表5 都市規模、就業パターンと昨年の本人年収（離転職者を含む）

(万円)



3. 職歴—離転職者

初職継続をしなかった者（約3人に2人）に注目してみよう。この人口については、すでに指摘したとおり40歳代の方が50歳代よりもより流動的な働き方をしてきている。図表6の左欄は、初職継続者も含めた勤続年数の分布、右欄は初職を離転職した者の初職継続年数の分布である。

初職の継続年数を見ると、3年以下で辞めた者は、50歳代では4割だが40歳代では半数を超えている。

図表6 初職の勤続年数の分布

(%)

	全体		初職離転職者	
	40歳代 (n=659)	50歳代 (n=306)	40歳代 (n=428)	50歳代 (n=199)
1年以下	13	10	20	15
3年以下	20	15	32	24
5年以下	12	9	19	14
7年以下	5	5	8	7
10年以下	7	6	11	9
15年以下	4	5	6	8
20年以下	8	6	3	9
25年以下	19	3	1	5
25年より長期	12	42	0	10
計	100	100	100	100

注) 左欄は初職継続者を含む

図表7は、離転職者の就業パターンである。50歳代の離転職者は、「概ね一つの企業団体などの組織につとめてきた」あるいは、「勤務先はかわったが、概ね同じような領域の仕事をした」者が6割を占めるのに対して、40歳代では、この割合が5割に減り、勤務先がかわるごとに異なる仕事に従事してきた、すなわち職領域が不連続な者が増えている。

図表7 離転職者の主な職歴パターン

(%)

	初職離転職者	
	40歳代 (n=428)	50歳代 (n=199)
概ね(10年以上)同じ企業に勤務した	13	25
転職したが概ね(10年以上)同じ領域の仕事	37	36
勤務先がかわるごとに異なる仕事	40	23
概ね(10年以上)自営	2	6
概ね(10年以上)就業中断	4	2
その他	2	2
欠損	3	5
計	100	100

つまり50歳代のシングル層に比べて、40歳代のシングル層は、比較的安易に初職を辞めている者が含まれている。50歳代のシングル層が、多数の女性と異なる生き方をする中で注意深く仕事を確保しようとした(が現実には仕事を失っている者も少なくない)のに対して、40歳代の女性は、もっと楽観的である。あるいは、50歳代の女性たちは、注意深い生涯設計を持たない限り、シングルにとどまって生計を立てられなかったのに対して、40歳代の女性たちは、そうした注意深さがなくとも、シングルでいられる条件が緩和されたという見方ができるかもしれない。

40 歳代の生涯シングルは、生涯設計を持ち独身を貫いているというよりは、結婚する多くの企業勤務女性と同様に初職を比較的安易に離転職し、見つけられた仕事をとる、という形で不連続なキャリアを持っている者が少なくない。

その一方で、離転職を通じた積極的なキャリア形成も、大卒シングル層、および、都市部で同じ領域に従事している層に出てきているとも言える。

4. 同居状況と収入

生涯シングルといっても、親同居が多く、「娘」として生活している者が少なくない。家族構造を見れば、親同居の場合は、主な生計維持者は自分自身は3割であり、65%は親が主な生計維持者と回答している。

40-44 歳層では、一人暮らしは少数派であり、親同居が 57%と 6 割を占め、一人暮らしは 31%である。しかし 55-59 歳は親の死亡もあろうが、この比率が逆転、親同居が 33%に下落、一人暮らしが 44%と半数近くになる。また 55-59 歳層になると、自分以外を主な生計維持者とした者のうち 3 割に「兄弟姉妹」をあげる者が出てくる。また 55-59 歳層では親・兄弟以外との同居が 1 割いるが、誰との同居なのか、あるいは友人同士の同居など新しい住まい方が出ているのかどうか注目される。

つまり、「娘」、あるいは「姉妹」という形で生まれた家族と強いつながりを資源として持つ者が少なくない。

もともと、東京都区部では、同じ 40-44 歳層でも、一人暮らしは 51%、親同居は 41%であり、単身で暮らすシングル女性が親同居を凌駕する。他の政令指定都市だと、34%に対して 49%、それ以外の居住地であると、一人暮らしは 21%と 5 人に 1 人であり親同居が 67%である。

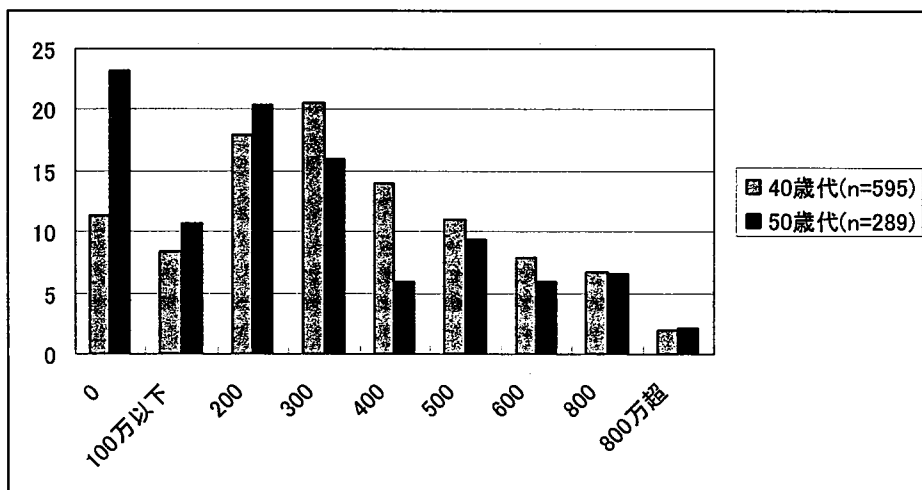
しかし 55-59 歳層となると、ひとり暮らしは都市規模の差が少なく、4 割強から 5 割弱、親同居は 3 割となる。ただし地方だと、それ以外の人との同居がやや増え、親が死亡した後も家族親族地縁の中で生きていく余地がより広いものと思われる。

図表 8 は昨年の本人年収の分布である。50 歳代は 0 が 2 割を超える（もともとこの図においては昨年年収が欠損で現在無業の者は 0 とおきなおした。その結果、無業が多いために 0 が増えたということもある）、0 を除くと最頻値は、100 万超 200 万未満である。40 歳代の本人年収の最頻値は 200 万円超 300 万円以下だが、100 万超 200 万未満もこれに次ぐ。

つまり生涯シングル女性の少なからぬ割合は、親同居といった形での家族内での助け合いがなければ暮らしがなりたない収入層は少なくない。

図表8 昨年年収の分布

(%)



注) 昨年年収が欠損で現在無職の者は年収0とおいた

5. 充実感、結婚希望や付き合い

充実感をえるときという設問の回答を見ると、図表3-5-6のとおり、「仕事にうちこんでいるとき」はどの年齢層も1割台であり、「趣味やスポーツに熱中しているとき」(約2割)や「ゆったりと休養しているとき」(約2割)が仕事を上回る。男性であれば、おそらく「仕事にうちこんでいるとき」がもう少し上位にくるのではと想像されるが、生涯シングルの女性たちは、充実感を仕事に求めたい状況がまだにある、そのような仕事にしか従事できていないということが垣間見える。

結婚希望を見ると、40歳代では、結婚相手が決まっている者は5%強、また適当な相手がいれば結婚したいと考えている者は、40-44歳層では、7割弱、45-49歳層も5割であり、50歳代になると、「結婚するつもりはない」が過半数を大きく超えるようになるのに対して、結婚はまだ「想定内」である。加齢が差を生み出しているのかもしれないが、また50歳代は、もともと結婚しない意志を持つ者が生涯未婚にとどまっているのに対して、40歳代ではそうした明らかな意志がないまま結果として生涯未婚である者が多いという可能性がある。恋人と非常に親しい、もしくはまあ親しい関係がある者は、40歳代では3割強であるが、50歳代になると、2割を割り、恋人はいないが43%から56%に上昇する。逆に別居の家族や親族との親密さは、50歳代の方が相対的に高いものとなっている。

6. おわりに

50歳代の生涯シングルに比べて、40歳代の生涯シングルは、より高収入の層も出ている一方で、生涯設計を持ってシングルで暮らしているというよりは、比較的安易に離職し、関連の薄さまざまな職に従事するという形で低収入にとどまる者も少なくない。その結果、40歳代の新シングル層は、従来よりも多様な層を含んでいる。当面の収入の低さを補っているのは親

との同居である。もっとも一部の者には親は介護と言う形での負担にもなっている。また一人暮らしで自由度の高い者もいれば、一人暮らしで低収入の不安を抱えている者もいる。また40歳代はまだ適当な人がいれば結婚しようという希望も低くなく、老後についても漠然としか考えていない者が少なくない。

母子世帯と比べれば、収入や資産についての不満は高いものの、ニーズは緊急ではないように見える。家族や友人、仕事、職場の人間関係、近隣との人間関係に対する満足度は全般に高い。しかし先行きに対しては漠然とした不安感を4人に1人が持っている。多くの雇用が必ずしも安定していない上に、賃金水準が低いこと、親の介護負担がやがて出ること、兄弟とのつながりが薄れる傾向にあることからそうした不安は故あるものといえる。

<参考文献リスト>

日本労働研究機構（2003）『母子世帯の就業支援に関する調査研究報告書』日本労働研究機構調査報告書

4. 就業形態別にみたシングル女性の生活実態

法政大学キャリアデザイン学部助教授
武石恵美子

30代女性の未婚者が急増しており、今後40代、50代のシングル女性の割合は増加することが確実である。現在40代、50代の女性のライフコースや生活実態は、その下の世代の未婚女性にとっても関心がある点だろう。

アンケート調査結果から、調査対象のシングル女性の生活実態について、特に職業キャリアと関連付けてデータをみていきたい。具体的には、就業形態別に生活実態の特徴をまとめることとする。

現在仕事に就いている割合は86.5%で、40代は9割と高い就業率である。ただし、50代になると、無業者が2割程度と高くなる。就業者のうち、正規従業員として働く割合は5割程度にとどまり、パート社員等の非正規従業員や派遣社員などの形態で働く比率も高い。調査対象のシングル女性は、親と同居している者も多いとはいえ、有配偶女性に比べると自分の収入で生計を維持する必要性が高いと考えられる。男性の場合は、40代、50代の就業者のほとんどが正規従業者であることと比べると、シングル女性の非正規従業員の割合はかなり高いといっ

てよいだろう。現在の就業形態の違いは、対象者のこれまでの職業キャリアや生活の実態と大きく関連している。

職業経歴の特徴をみると、正規従業員として働く者は初職継続者が56.4%を占めるが、非正規従業員で初職継続者は17.8%と、再就職を含む転職経験者が圧倒的に多くなっている。現在非正規従業員のうち88.4%は初職が正規従業員と回答しており、正規従業員として職業生活をスタートしたが、その後転職等を経て現在非正規従業員として就業していることがわかる。

初職を辞めた理由は、現在非正規従業員の場合には、「経営不振、倒産、閉鎖、人員整理など」の会社都合の割合が高く、また「親の介護など家庭の都合」という割合も高い。一方現在正規従業員の場合には、「仕事の内容や職場に不満があった」、「ほかに適当な仕事があった」といった自己都合による退職が多い。非正規従業員として働いている女性は、会社都合や家庭の事情で次の就職先の準備もできないままに初職をやめたことが示唆されている。

また、正規従業員は初職継続者が多いことから、勤続期間も就業形態で大きな差が生じており、これが収入面での違いにも関連していると考えられる。

就業形態の差は、当然のことながら処遇の差にも反映する。正規従業員を継続してきた場合（現在正規従業員で勤続20年以上、もしくは勤続20年未満で入職推定年齢が24歳未満の場合）には比較的大規模企業で働く者も多いが、非正規従業員を継続してきた場合（現在非正規従業員で初職が非正規従業員、もしくは初職が正規従業員かつ勤続年数5年未満も場合）は100人未満の規模で4割を占めている。仕事内容も、正規従業員を継続してきた者は事務職、専門職、管理職で9割弱を占めるが、非正規従業員継続者は、事務職、専門職で半数に満たず管理職は0である。非正規従業員の仕事への不満は、収入、雇用の不安定さ、社会保険未加入問題

などが正規従業員に比べて多くなっている。実際に、仕事から得た年収は、非正規従業員継続者の5割強は200万円未満で、500万円以上が6割程度を占める正規従業員継続者と対照的である。

非正規従業員の収入面での不安定さと関連して、非正規従業員の1人暮らしの割合は低く、主たる生計維持者も正規従業員は「自分自身」と回答する割合が高いが、非正規従業員の場合は親など自分以外のケースが多い。

現在の就業形態は老後の収入にも関連する。正規従業員継続者は厚生年金の加入が8割程度を占めるが、非正規従業員継続者の加入率は39.0%にとどまる。また正規従業員継続者は、個人年金保険、企業年金の加入も比較的高い。正規従業員は、老後の収入源は公的年金の他に、預貯金や個人年金、企業年金など多様であるが、非正規従業員は公的年金の割合も無業者以上に低く、仕事による収入の必要性を指摘する割合が半数近くを占めている。

全体的な生活満足度は、正規従業員継続者の場合、8割以上が非常に満足、もしくはまあ満足と回答しているが、非正規従業員継続者の4割弱が非常に不満、もしくはやや不満と回答しており、この傾向は無業者に近いものとなっている。また、生活費のことや雇用が不安定なことへの不安も強い傾向がある。

以上、就業形態別にみた調査結果の概要から、シングル女性の経済的な安定性が、職業キャリアと大きく関連することが明らかになっている。初職を継続して安定的な仕事で生活にも満足している正規従業員と、会社都合や家庭の事情で初職を離れその非正規従業員として働きながらも、収入や雇用の安定性において不安をもっている非正規従業員の像が浮かび上がってくる。

現在の就業形態は、当然のことながら老後の生活に影響を及ぼすことになる。正規従業員で働く女性は、老後の収入として、公的年金を基礎にして個人年金や企業年金を組み合わせた収入が期待できる者も少なくないが、非正規従業員の中には老後も仕事で収入を得る必要性を感じている者も比較的多い。正規従業員として働いているか、非正規従業員として働いているかが、現在の生活のみならず老後の生活まで影響している。このことは、2つの政策の必要性を示唆する。

一つは、正規従業員として働くチャンスを拡大することの重要性である。非正規従業員は転職経験者が多く、様々な理由で初職を退職した後に非正規従業員の形態で働いている状況がうかがえる。調査対象者のほとんどは、男女雇用機会均等法施行前の初職入職者であり、初職において男性と同じキャリア管理が行われていなかった可能性が高い。初職を継続しなかった女性が転職時、あるいは就業中断後の再就職時に正規従業員の仕事に就くことは難しかったことが考えられる。今後、均等法世代が年齢を重ねていけば、初職のキャリアがその後の転職で生かされる可能性はある。しかし、近年のいわゆるフリーター層の増加傾向により、初職が非正規従業員としてスタートする若者が増えるとすれば、初職におけるキャリア形成のチャンスが制約され、ますます正規従業員になることが難しくなることも考えられる。正規従業員として働く機会が開かれていることは、生活の糧を自分で稼ぐ必要性が高いシングル女性にとっては非常に重要である。

もう一つの政策として、非正規従業員の処遇条件の改善を指摘したい。正規従業員と非正規

従業員の間大きな処遇格差は、政策的には是正が求められるレベルにあると考えられる。厚生年金に加入していない非正規労働者も多く、社会保険の適用を非正規労働者にも拡大することが必要である。また、収入の分布も就業形態により大きな格差が生じており、非正規労働者の処遇について正規労働者とバランスをとり、働く者にとって納得できる格差に縮めていくことが必要になる。また、非正規従業員を継続してきた者は、現在の収入や老後の生活に不安を抱えている実態も明らかになっており、本人の努力次第で正規従業員に転換できる仕組みの整備も重要である。

第 3 部

1. グループインタビュー調査の概要

(1) 調査の目的

40～59歳の独身の中高年女性を対象に、仕事を中心とする今の生活と将来の生活設計ニーズに関して、定性調査であるアンケート調査では表れない詳細な生活実情を把握し、これを補完することを目的とした。

(2) 調査対象者と調査方法

調査対象者は、都市規模や未婚率などの状況を考慮し選定した東京、仙台ならびに静岡の3都市居住者とし、年齢と従業上の地位により1回あたり各5名ずつ6グループとした。

その上で、調査委託を行った株式会社インテージが機縁法によりモニターを募集し、集団面接（グループインタビュー）法による調査を実施した。

グループ	調査対象地域	回数	対象者	年齢	従業上の地位
1	東京	第1回	A	40歳代後半	正規従業員
1	東京	第1回	B	40歳代前半	正規従業員
1	東京	第1回	C	40歳代前半	正規従業員
1	東京	第1回	D	40歳代前半	正規従業員
1	東京	第1回	E	40歳代後半	正規従業員
2	東京	第2回	F	50歳代前半	正規従業員
2	東京	第2回	G	50歳代前半	非正規従業員
2	東京	第2回	H	50歳代前半	非正規従業員
2	東京	第2回	I	50歳代前半	正規従業員
2	東京	第2回	J	50歳代前半	正規従業員
3	東京	第3回	K	40歳代前半	非正規従業員
3	東京	第3回	L	40歳代前半	非正規従業員
3	東京	第3回	M	40歳代後半	非正規従業員
3	東京	第3回	N	40歳代前半	非正規従業員
3	東京	第3回	O	40歳代前半	非正規従業員
4	仙台	第1回	P	40歳代前半	非正規従業員
4	仙台	第1回	Q	40歳代前半	非正規従業員
4	仙台	第1回	R	40歳代前半	非正規従業員
4	仙台	第1回	S	40歳代前半	非正規従業員
4	仙台	第1回	T	40歳代前半	非正規従業員
5	仙台	第2回	U	40歳代前半	正規従業員
5	仙台	第2回	V	40歳代前半	正規従業員
5	仙台	第2回	W	40歳代前半	正規従業員
5	仙台	第2回	X	40歳代前半	正規従業員
5	仙台	第2回	Y	40歳代後半	正規従業員
6	静岡		Z	40歳代前半	非正規従業員
6	静岡		AA	40歳代後半	正規従業員
6	静岡		BB	40歳代後半	非正規従業員
6	静岡		CC	40歳代後半	正規従業員
6	静岡		DD	40歳代後半	非正規従業員

2. グループインタビュー調査記録

(1) 東京第1回調査

■日 時：平成17年12月12日(月)午後6時～8時30分

■場 所：アルカディア市ヶ谷

■参加者：40歳代未婚女性・正規従業員5名

(千保：司会) お仕事のお話しや、いまの生活のお話し、あるいは将来の生活設計に関する現時点でのイメージなどを順次お聞きしてまいりたいと思います。まず、差し支えない範囲で自己紹介をしていただいてもよろしいでしょうか。

(A) 40代後半です。仕事は不動産関係で、特に賃貸の営業をしておりますので現在はかなり忙しい状況にあります。この忙しさが数年続くとすると、50歳を前にして多分体力的に無理がくるのだろうなと思っています。だからといってこの年ぐらいになりますと転職も難しいですし、一体どうしたものやらと思っているような毎日ですね。

(B) 外資の保険会社で事務をしております。この業界に入ってまだ3年目です。以前は全く違う畑で音楽をやっていたりして、事務所に所属してアイドルのバックコーラスを20年近くやっていました。せっかく保険会社に入ったので保険の資格を取ったのですが、将来ずっとそこにいようという気持ちはなく、将来設計としては自分がやってきた音楽を生かした職業につきたいと思っています。いま、実は陰でひそかに動いています。

(C) 私は都内に一人で住んでいます。仕事は輸出の会社で事務をしております。一応秘書ですが、事務全般をやらされています。10人ぐらいの小さな会社ですが、社長が外人で、アメリカ人やイタリア人も勤めているような国際色豊かなアットホームな会社なので、いままで何度か転職したのですが、居心地がよく、ここで頑張っていけたらなああと(笑)。給料は低いのですが、給料よりも人間関係とか居心地のよさが自分にとってはやはり重要だということが分かったので、何歳までいられるか分からないのですが、頑張っていこうと思います。

(千保) 居心地がいいというのはよいですね。職場の居心地ってけっこう大きい。

(C) 大きいです。

(D) 私は一人暮らしをしています。仕事は総務部に所属しています。勤めている会社は大きいので安定していますし、福利厚生もいいので、できれば定年までいたいと思っています。でも、いまやりたいことがあって勉強をしながら、夢があるので目鼻がつけば会社を辞めてそちらに行きたいと思っています。

(千保) 周りをごらんになって、定年までいらっしゃるという女性の方は。

(D) もちろんいます。

(千保) あとはやりたいことがうまく実現できるかどうかということですね。

(D) できればそちらに行きたいのですが、いまはまだはっきりしてないので、安定している職場を捨ててそちらにかかる勇氣はないです。

(千保) 安定というとやはり給料も含めてですね。

(D) 給料、福利厚生、やっぱり居心地もいいですし。

(E) 東京育ちで、両親と弟と一緒にずっと自宅に住んでおります。私もやはり何回か転職して、いまは、社員が4~5人の本当に小さなコンサルタント関係の会社にいます。2年ぐらい前に、社長が心筋こうそくで急に倒れまして、いまは大丈夫なのですけれども、1年半ぐらいは復帰できませんでした。その間、給料が出なかったので、どうしようかなと迷ったのですけれども、転職するのも面倒くさいと思ってずっとそのままおりました。すごく小さいところなので、厚生年金にも入っていないのです。ですから、それで将来ちょっと不安だなと思うところもありますけれども、すごく楽ですし、お給料の面以外はほとんど不満がありません。今度社長がこけたら本当にだめだなとは思っているのですが、それまでのんびりいようかなと思っています。

(千保) 厚生年金に入っていないということになると、公的年金としてはご自分で国民年金に加入されておられるのですか。

(E) いまの会社に勤めてからは国民年金に加入しています。それまでは、途中ちょっとブランクがありましたが、ずっと厚生年金に入っていました。

(千保) そうすると、以前のお勤めのとくと、そのあと少し断絶して、現在は国民年金に入っておられるということですね。

(E) 海外に行っていた時期があるので、それが合計して2年半か3年ぐらいです。

(千保) それはきっと合算対象期間になるでしょうから、受給権の25年以上は大丈夫ですね。

(E) それは大丈夫です。ちゃんと社会保険庁に相談に行って確認しました。

(千保) いくつか転職されていますよね。最初のお仕事はどういう仕事だったとか、あるいは転職されたご事情だとかは、いかがでしょうか。

(E) 私が学校を卒業したときは大変不況のときで、4年制大学を出た女の子は就職口がないという時代でした。学校を出て1年半ほど大手の製薬会社にアルバイトでおりましたが、そのあとに重機械関係の会社に入りました。そこで7年ほどおまして、それから1年半ぐらい中国に行っておりました。ただ、これは全くプライベートで。戻ってきて不動産関係の会社に入ったのですけれども、そこが倒産しまして、それから友人のついで化粧品会社に入りました。そのあと1年ちょっとほど日本語教師で中国に渡っておりました。戻ってきてその日本語学校を経営していた出版社のほうに3年ほど勤めまして、そのあといまの会社です。

(千保) 特に女性の就職が厳しいときがありましたね。

(永瀬) 何年でいらっしゃいますか。

(E) 昭和53年に卒業いたしました。

(永瀬) 大変だったときですね。

(千保) 途中お仕事を変わられたときは、友人のご紹介があったとか、あとはやはり情報誌やハローワークとかという感じでございますか。

(E) 中国から帰ってきてからは情報誌だったのですけれども、それ以降はほとんど友人の紹介で。

(直井) 転職されるときはいろいろなケースがあるかもしれませんが、前の会社が嫌でという感じか、何かもっといい条件があつてということですか。

(E) 会社が嫌で辞めたのは1回だけです。あとはいろいろです。

(直井) 何かもっと面白そうみたいな。

(E) はい。

(千保) Dさんはこれまでずっと同じ会社ですが、もしやりたいことがうまくいきそうだったら、大きな決断をする可能性もあるということですね。

(D) そうですね。勤めている会社は男尊女卑のところがありますので。ただ、いまは正社員も採っていませんので、多分リストラはされないで、定年まではいられるものと思っています。でも、やってみたいことが見つかったので、やはりやってみたいことに挑戦したい。現に夢をかなえた人も周りにたくさんいますし、私も挑戦して、まあ10年後でもいいのですけれども、夢がかなえば何か自分の人生が変わるだろうと。ずっといまの会社にいてもいいのですけれども、あまりにも安定志向なので。仲間もたくさんできましたし、そういうことを目標にやっていきたい、そういう夢を持ってやっていきたいと思っています。

(永瀬) 男尊女卑で悔しい思いをしたということがやっぱりあるのでしょうか。

(D) でもその分、女性だから得をしている部分もけっこうあるので、その辺は割り切り方です。嫌で辞めてしまう人もいるのですけれども、やはりどこに行ってもなにがしかの嫌なことは必ずあるでしょうし。ちょっと割り切って、自分がどうしたらいちばんうまくやっていけるか、損得という考え方もいけないのですけれども。

(永瀬) いいところって、どういうところなのですか、得なところというのは。

(D) やはり、女性だから逆に許されると、甘えてはいけないのですけれども。まあ、いやすいということはありませんね、男性より風当たりもあまり強くないので。

(直井) 男尊女卑の見える典型的なところは。

(D) いまはだいぶ改善されてきたとは思いますが、でもやっぱり、女性の新入社員を採らなくなっていますし、女性の役員もほとんどいません。

(直井) お茶くみとかは。

(D) それをする人を別に雇っているのです。入社したときはあったのですけれども、いまはなくなりました。

(永瀬) 男性と女性と賃金経路が違うということはあるのですか。

(D) 女性は試験を受けて男性と同じルートに行くという道を選ぶのですが、やはり最初の時点ではちょっとあります。

(永瀬) でも途中からは乗れるのですか。

(D) 乗れることは乗れます。でも女性のほうが出世は遅いですし、やはり大きいポジションというか、いいポジションにはなかなか就けないということはあると思います。

(永瀬) ただ、男性と同じルートに乗っても、風当たりは弱くて済むという。

(D) そういうことはあります。私はたたかれるとつらいほうなので、ポジションを保てればそれでもいいのかなとは思っています。志が低いのですけれども、それで定年までやっていけたらそのほうが利口かなと思ったりもするので。

(永瀬) 残業はないのですか。

(D) 6月の総会前はあります。あと3月は、総務部ですけれども多少残業はあります。

(永瀬) でも一般的にはそれなりに早く帰れるし、それに男性と同じルートに一応乗っていただけるということですね。

(D) そうですね。

(永瀬) 男性と同じルートに乗るといのは何年目ぐらいですか。

(D) 5年目から挑戦できるのですけれども、実際に5年で受かっている人はあまりいません。7年目から10年目ぐらいです。

(千保) 入社された時といまとの2時点を比べて、こういうところが変わったと気がつくことは何かございますか。

(D) やはり入社時点は、女の人は本当にお茶くみ、職場の花的な感じだったのですけれども、いまは正社員も少ないので、逆にそういう意味では残った者勝ちといういい方は変ですが、残った強みみたいなのところはあります。

(直井) 正社員で採っていないということは、非正社員で採っているのですか。

(D) 派遣社員とか。

(直井) それは女の人だけが。

(D) そうです。でも男性社員も前に比べたら随分人数は減りました。

(永瀬) そのかわりにだれが仕事をしているのですか。長時間しているのですか。

(D) ただ全体の人数は減っていないのです、派遣社員がたくさん入っているのです。

(永瀬) 男性も含めてですか。

(D) 男性は人数が減った分残業がちょっと増えたりしています。

(C) 私は、新卒で就職したのが日本の大手の損害保険会社で、あまり上司とか先輩に恵まれず、毎日が本当に苦痛だったのです。そこに5年いまして、そのときにはもう外国に行く夢があったので、そのために我慢してお金をためました。それで外国に行きまして、最初の1年間は語学学校、2年目、3年目が現地のカレッジでセクレタリーコースを採りまして、それから貿易会社に社長秘書で1年ぐらい就職しまして、あとは不動産会社に4~5か月、最後は電話会社に勤めまして合計6年半ぐらいいきました。日本では35歳を過ぎると就職が難しいと聞いていたことや、飽きてもういいやと思ったので日本に帰ってきまして、最初の仕事が留学カウンセラーです。

(千保) 経験をそのまま生かされたのですね。

(C) ただ、カウンセラーといっても営業なのです、もう数字数字という感じで。私はみんなの前で話すセミナーとか、本当に大嫌いなのです。もう嫌だなんて思っていたところへ、留学して帰ってきてすぐ受けた会社から、お誘いのお話があったので、迷いながらも社長秘書ということで行ったのです。

ふだんは暇なのですが、月2回の、日本語でも何を言っているか分からない難しい会議の通訳を頼まれて、そのギャップが激しいのですね。もう嫌だと思って他の仕事を探していたところへいまの会社を「ジャパン・タイムズ」で見つけました。給料は下がったのですけれども、居心地が今までと比べるとずっといいので、7~8年になります。

(千保) 最初の会社で我慢というのは、人間関係とかあるいは仕事が忙しすぎたとか、どのようなことがあったのですか。

(C) 意地悪な先輩とか。私、それまでずっと大阪で、ポンと東京に来たのです。東京の女性は最初何か合わないというか、違和感がありました。なかなかなじめなくて友達もいないですし、女性の先輩はキャンキャン言うし、次にやっと異動させてもらおうと今度は嫌な課長でした。5年目、最後の年にやっといいところに移してもらったのですが、この時点ではもう外国に行くことを決めていたのです。1年後に、ちょっともったいなかったのですが、決めていたところへ行きました。

(B) 私はOLをやるのは今回が初めてです。高校時代からモデルやタレントをやっていたので、事務所に所属してギャラを頂いていました。そのときは、将来は外国に家を買って住むつもりでいたのです。そのために20代からけっこう貯金をためて、実際に家を見に行くとか、移り住む計画を立てていました。ですから、日本にいたつもりがなかったの、国民年金の保険料を払ったことがありませんでした。そのときは本気だったので。

でも予定外だったのは父が大病をしてしまっ、結局亡くなってしまいました。父は商売をしていて、借金こそなかったのですが、それこそもうお金も保険も全くゼロという状態でした。遺族基礎年金も、自分で商売をはじめて国民年金に切り替える際に不手際があったので、結局請求できませんでした。それこそ私がお葬式費用から家族の面倒まで全部みて貯金も使い果たし、アメリカにはとても行ける状態ではなくなりました。マンションに住んでいてもととかなりの家賃だったうえに、父が亡くなるちょっと前に近くで一人暮らしを始めたので、母親と自分の家賃と二重で大変な負担でした。

いまの会社は外資系の保険会社で、10人ぐらいの小規模な会社です。正社員ではないので社会保険にも入れず、福利厚生面ではちょっと不満です。ただ、1年ぐらいで役付けにもらい給料面はすごくいいのでやりがいがあります。でもやっぱり自分がやってきたことを生かしたいので。

(千保) 初めてそういう仕事に入られたときはどんな感じだったですか。いままでと全然違う世界なのでしょう。

(B) 全然違います。ただ人と接することが好きだったことと、OL生活に何かあこがれていた部分もありました。あと電話応対で最初に褒めていただいたのでその気になって、きっと社長がうまいのですね。やると私は突き進むタイプなので、自分よりも年下の上司に向かって意見を言うのですが、それで部長にちょっと何か小言めいたことを言われるとか、最近はちょっとその辺の風当たりがあるので気をつけようと思い、いろいろ学んでいます。

(永瀬) どういうご縁でそこに就職なさったのですか。

(B) もう完全に情報誌です。

(永瀬) お給料は満足していらっしゃるのですね。

(B) そうですね、はい。

(A) 私も長いヒストリーがあります。はしょって言いますと、雇用保険で行ける学校というのが昔ありましたよね。失業するたびにそこに通わせていただいて、半年間ぐらいパソコンや簿記をやらせていただき、また次の仕事に結びつけていくという感じだったのです。たまたま先生の覚えがめでたくて、先生のご紹介ですとか、仕事先で知り合った人の紹介ですとか。私の場合は新聞の求人広告に応募してというケースは全くないです。

(千保) 仕事を探し始めるのはけっこう大変ですよ。

(A) 大変ですし、履歴書を返されたりするとかなりへこみますよね。そういうことでいくつか仕事をしました。ちょうどバブルのころは証券会社で、外資だったものですから、そこでは比較的仕事の内容も好きでしたし、それなりのペイももらいましたので満足していたのです。でも、そこもやはり女性はガラスの天井があるという感じで、ちょっと息詰まったところに母の体が利かなくなっ、田舎がまた遠いものですから、そちらにいったん戻って介護をしなければならぬ状況になりました。母は生きる死ぬではなくて、足が利かなくなったということだったので、手術をしてその後回復しました。本来でしたらそのまま実家に戻って仕事を探すことになるのですが、いったんは引っ込んだものの全く就職ができない状況でした。その後母も普通に動き回れるようになったので、私も好きにしてよしいというお許しが出て、また一人東京に戻ってきて仕事をしているわけなのです。

(千保) 過去にいくつか転職されたときの理由はどんな感じでしたか。

(A) 私も海外に強く引かれるほうだったので、まとまって旅行したいと思ったら、もう辞めるしかなかったのです。それですね、大きい理由は。人間関係がもとでというケースは私もやはり 1 か所ありました。それはどうしても反りが合わない人の秘書という立場だったので、毎日が本当に苦痛でしたから。

(千保) いまのお仕事や、あるいはお仕事そのものを、年齢的に、またはあと何年ぐらい続けたいと思われるのか、その辺はいかがでございますか。

(A) 東京に出てまいりましてから 1 年間は正社員で働いたのですが、その後は派遣社員として働いていまして、いままたやっとならぬ正社員にしてもらったのです、この年齢では奇跡的です。ですから、正社員になってみればなってみて、やはり居心地のよさはあります。ただ、時間給の人たちができないような残業は全部正社員にかかってきてしまうので、いまは労働集約的に働かされます。ですから、このままの状況が続いたら、いまは何とかこなして、家に帰ればもう寝るだけの生活ができますけれども、あと何年続けられるのだろうと思っています。

(永瀬) 何時ぐらいにお帰りになるのですか。

(A) ここのところだと、日を越してから家に着いている感じです。

(永瀬) 残業代は出ますか。

(A) 残業代は出ません。もうまとめて営業手当みたいな形で出るのです。だから、時間を長く働けば働いただけ、ちょっと私にとってはメリットがないのです。

(直井) それで、朝は普通に 9 時出勤なのですか。

(A) はい。

(永瀬) その会社に派遣社員でいらしたのに、正社員になられたのですか。

(A) そうではないです。ただ、派遣社員のとときに知り合った人の引きで入りましたので、まだちょっと音を上げるわけにもいかないのです。

(千保) どの会社も正社員がけっこう減って、同じ話しが一般的にあるみたいですね。正社員がいままで以上の仕事のボリュームを背負いますので大変ですね。

ただ、職場環境を整えればもうちょっと、50 歳を超えても働こうというお気持ちは。

(A) あるにはあるのですが。

(永瀬) 転職も大変ですよ。

(A) もうこれからの転職はまず無理ということですし、いずれにしても母親が75歳を超えましたので、またいつ呼び戻される状況になるか分からないのです。そのときにはテンポラリーで働いている状況だと帰りやすきはあるのですが、蓄えがどうなっているかと思うと心配ですし、このままもうちょっと頑張ってお金を貯めて、仕事を何年か休んでも大丈夫なぐらいにはしておかなければいけないかなと思っています。

(千保) Bさんは、音楽関係のほうに行くとしても、もう少し働いていきたいというイメージでいらっしゃいますか。

(B) いや、もうすでに準備を始めている状況なので。

(千保) それは年齢にかかわらずお仕事ですか。

(B) そうですね、歌ですので、ある程度体力があればできる限りだと思います。地域のカルチャースクールでしたり、これからデビューする若い女の子のボイストレーニングとか、あとはご老人の方にお教えするとか、いろいろニーズがあるので、いま実は動きだしています。そちらでしたら自分の体力が続く限り、あとは生徒さんがいる限りです。私の友達で元歌手の人たちもそういうことを始めています。自分で事業をはじめることになるので、安定するかどうかは分かりませんが、やり方によってはうまくいくと思っています。

(千保) それを仕事にして生活もできるイメージですか。

(B) はい、もちろん。ニーズはかなりあります、リサーチをしましたので。もっと言えば、本当は音楽療法士も考えていたのですが、かなりハードルが高くて、いまはちょっと手が出せないのですが、いずれはそういったことも学んでいきたいと思っています。

(C) 私は別にキャリアウーマンでも仕事に生きる女でも何でもないので。ただ一人なので仕方がないからという感じです。

でも私は、特にお金に関しては心配性なので、何とかなるという考え方ができないタイプなのです。これから老後もずっと一人だし、年金がどのくらいもらえるか分からないと思うと、なるべく働いていたいと思います。ですから、健康のほうも心配で、サプリメントを飲んでなるべく長生き(笑)。長生きしなくても、とりあえず元気であればと思っています。

(D) 夢がかなえば80歳ぐらいまでは現役でやっていきたいです。

(E) 私はそうですね、社長がこけるまで(笑)。

社長が私と2歳ぐらいしか変わらないので、多分同じぐらいまでだと思うのです。せっかくお給料も出ずに2年ぐらい頑張ってきたので、会社に貸した金を取り返さないと辞めるに辞められません(笑)。

(直井) その2年間は働いてはいらしたのですか。

(E) 事務所は閉鎖したのですが、社長の友人の事務所に間借り、居候させていただいて、一応体面は保っていたのです。会社としては。

(直井) では、その残務整理じゃない、残ったお仕事をお給料が出ないのにやっていらしたということですか。

(E) はい。でもうまいもので、以前にやっていた貯金がちょうど満期になるとか、保険が満期になるとかで、何とか自分の分は食いつないでいたのです。貯金を始めるときはこんなに

貯金して給料が安いのに大変だと思っていたのですけれども。

(千保) 次の話題ですが、いまの生活一般ということで、ご友人や近所とおつきあいとか、現時点でご両親やご親族の方の介護が必要ですか、いまの生活を中心にした辺りはいかがですか。

(E) いま、私は両親と弟と住んでいるのですけれども、父のほうがちよっと体の具合が悪くて、要介護3の認定を受けています。週に2回デイサービスに通っておりますが、いまのところ母が元気なものですから全部母のほうで面倒を見ていまして、私はそのサポートみたいな感じなのです。弟も交通事故で首を痛めている状態ですが、障害者認定にならないのです。薬をずっと使っているためやはり普通に仕事をするにつらいところもあるらしいので、いまずっと家にいます。ただ両親は子供が頼りにならないということを見越して、もう三十年以上前に自宅をアパートに改装してくれまして、その上がりがまだあるものですから、国民年金でそれこそ2か月に7万ぐらいしか入ってこないような状況なのですけれども、おかげさまで生活のほうは安定しています。

ただ、両親が亡くなったあと、兄弟で相続しなければいけないわけですが、弟もそういう状況で仕事を持っていませんし、私も割と自由にやらせてもらっているので、いま持っているアパートが老朽化して建て直さなければいけないときに、多分銀行や公的なところからは融資が受けられないと思うのです。ある意味ぜいたくな悩みと言われるかもしれないのですけれども、そういう心配があります。

(D) 私の両親はもう定年で退職してまして、二人ともいまのところ健康で何とか年金で暮らしているみたいです。遺産はせいぜい家ぐらいなので、そう大した額にもならないと思います。私は一人暮らしですけれども、いまつきあっている人がいるので何年か先には結婚して一緒にやっていきたいと思っています。ですから、親がもし病気になるとか介護が必要になるとちよっと生活も変わると思うのです。いまはまだ元気なのですけれども、いつ介護が必要になるか分からないので、そういった準備はしておかないといけないと思っています。

(千保) 一人っ子でいらっしゃいますか。

(D) そうなのです。ですから、そういうことも勉強していきたいと思っています。

(C) 私の両親は隣の近県に住んでいるのですけれども、けっこう経済的にはゆとりがあるようで、悠々自適といった感じです。

でも最近、父が脳こうそくで体の一部の動きがちよっと悪くなるということがありました。治らないかもしれないですが、そういう症状が何とか薬で和らげばと願っています。母は健康ですので、介護という話しは出てきません。妹が結婚して都内に住んでいるので、もし介護が必要になったら妹がやってくれたらいいなと心の中では思っています(笑)。

(千保) 妹さんはお姉さんがやってくれたらと思っているのでしょうかね。

(C) 私には仕事がありますが、妹は専業主婦なので、いまは子供がまだ小さいですけれども、もう少し大きくなれば時間にゆとりができて自由が利くのにとあって。

(千保) ではいまは一人で暮らしておられるのですね。

(C) 1LDKの小さなマンションを5年前に買いました。ローンも2年前に返し終わりました。親からお金を借りることができ、利息もなく本当にラッキーでしたが、もうきっちり返

しましたので、いまは私のものです。

(千保) そうすると、お勤めですから、近隣とのおつきあいも限られてしまいますね。

(C) そういうことはあまり好きじゃないです。隣の人も独身の女性なので、最初は何度か家を行き来していたのですけれども、何か煩わしくなっていました。私はいつも声をかけられるほうで、それだとだめですね、自然に声がかからなくなってしまっ

何か一人暮らしをしてから外に出るのもおつくうになって、昔みたいに友達と出歩くことはなくなりましたし、一応おつきあいをしている人はいるのですけれども、その人だけしか会っていないです。

(千保) では、その人とはいずれは。

(C) さあ、私は昔から結婚をしたくないのです。もう子供のときからです。

(千保) あまり魅力は感じなかった。

(C) 全然感じないです。自分一人で精いっぱいなのに、ほかの人が入ってきて苦労や心配事が増えてしまうことが嫌で、結局わがままなのですけれども。

(千保) そうすると、何か悩み事がある場合は、その人に相談するということですか。

(C) 私は出さないほうです。悩み事を人に相談するタイプではないです。聞いてあげるタイプですから。

(千保) 何かストレスを解消するということも含めて、よく友人とお話しをするとか、そういったことはどうですか。

(C) あまりないです。悩みを抱えると、自分で考えて何とか自分で解決策を見つけます。最近友達と出掛けるほうが逆にストレスを感じます。

(永瀬) 気晴らしはどのようなことをなさるのですか。お部屋をお掃除するとか、そういうことですか。

(C) 私は掃除、大嫌いですが(笑)。きれいにしておきたいし、汚いのは嫌いなのですけれども掃除は嫌い、もういらいらしながら掃除をしています。ストレスです、それは。何でしょうね、気晴らし、寝ることでしょうかね。一人でいることが好きなので。

(B) 私は全く逆で、一人が嫌いです。楽しい場所に自分が参加していないということが嫌で、楽しい場所が大好きです。あと、すごく地域密着型で、歩けば近所のおばちゃんから話しかけられるという感じです。だから地域のイベントにも積極的に参加しています。やっぱり歌をやっていたことを皆さん知っているので呼んでいただいて歌ったりとか、地域の人たちとは仲良く、お隣の人とも割と声をかけ合ったりしています。マンションは一人暮らしなのですけれども、けっこう近所づきあいは好きなほうですね。

父が亡くなってから、母も近所にやはり一人で住んでいるので、母に何度か一緒に住もうと誘っているのです。でも、父の看病のあとやっと一人暮らしが慣れてきたので、生活も違うしめんどうくさいから一人がいいと断られてしまいました。

ただ私も、妹がいて、結婚しておりますが、彼女には子供がいるので、もし母に何かあったときには私が面倒をみるという気が私にはあるのです。というのは、子供が障害手帳をもらっている状態なのです。だからリハビリに通っているし、そういう子供を抱えて大変だと思うので、母にもし何かあったら私が何とかしなくてはという責任感があります。

(千保) 大変失礼ですが、お母様の場合、収入は。

(B) いま、仕事をしています。ただパートなので、やはり安定はしていないし、年金の問題がやっぱりあって、加入していなかった時期もあるし、手続き上の不手際もあつたりして、将来もらえないと自分であきらめている状況です。ですから、そういった面でも私が何とかしなくてはという気持ちが強いです。

(A) 私は東京ではほとんど近所づきあいにはしていませんね、独り者の所帯が寄り集まった集合住宅です。ただ、近くに幼なじみの家族がおりますので、そこは割と緊密につきあっていて、私が一人何か事故で連絡が途絶えたときは多分怪しんで見に来てくれるかなという感じにはしてあります。

ただ、私がいちばん心配していることは、いま、田舎のほうのコミュニティは母親が出ていて、例えばお彼岸やお盆の共同墓地の清掃作業とか、そういったことは母親がすべてやっているのです。そこで、私が年を取って田舎に帰ったときにそういうことに溶け込んでいけるかどうか、絶対に無理のような気がするのです。離れて長いですし、年に1回、2回帰るか帰らないかです。田舎って、例えばお寺ですとか、子供の学校ですとか、いろいろな集まりがありますから、どこにも所属していないと本当にどうするのだろうなど、いまそれをちょっと考えていますね。まあ、自然に入っていかざるをえないのだろうと思いますけれども。

父はすでに亡くなりましたが、母が公務員だったので、母自体の年金で何とか田舎では暮らしていけるのです。私も弟がおりますが、そこに弟がぶら下がっているような状態なのです。彼自身も稼ぎはあるのですが、田舎ですからそんなに多くはもらえないようなのです。ですから母は、母がいなくなったときに、弟のことや近所とのおつきあいはもちろんのこと、墓を一体だれが見てくれるのか、そういったこともかなり真剣に心配しているようです。

(千保) ふだんの生活で、例えば悩み事や相談事はどういう方に相談されるのですか。

(A) 私もどちらかというあまり自分のことを話すたちではなくて、人の話を聞いてあげるほうです。人に話してすっきりするとは思えないので。

(千保) それでは、退職後の生活についてお聞きしたいと思います。いま、男性も女性も、環境が整って、かつ健康であれば、働くという流れ、意識になっているような気がするのです。想像の世界ですが、退職後の収入とか、その辺りはいかがでしょうか。

(A) 母親に介護が必要になったとしたら、私は東京を引き払って、あとはそのまま田舎住まいになる可能性のほうが高いです。そこで東京でも、田舎でも役に立つ資格を取ろうと思って宅建を取りました。だから田舎で不動産屋のおばちゃんをしようと思っています。住まいは確保されていますので、あとは自分が食べていく分だけがあればいいわけなのですけれども。

(千保) いままでの公的年金の加入状況はいかがですか。

(A) 私はちょっと不安ですね。失業していたときもありますので、そこは全く払っていませんでしたから。社会保険事務所のほうに確かめに行かなくてはいけないですけれども。

(千保) 民間の年金保険に入っているというケースはけっこう多いようなのですが。

(A) いえ、それにも入っていません。先々のために何かを準備しておくという、そもそもそういう考え方があまりないほうですね。割とギリギリタイプです。そのときはそのときで考えます。

(B) 考えているのはいま話題になっている株式投資ですね。私の頭の中には全然なかったのですけれども、後輩の子がやっているのです、ちょっと勉強させてもらおうと思っています。もちろんリスクはあると思うのですけれども、いま持っているお金をいかにうまく運用するか考えていこうと思っています。

あと、保険会社に勤めていることもあって保険の備えはちゃんとしています。ただ年金型はちょっとまだ検討中です。

(永瀬) いまから公的年金に入ろうとは思っていないのですか。

(B) 正直、いまからはいいですね。

(C) この間やっと社会保険事務所に行って調べてきたのです。いまのところあと 10 年ぐらいいさせてもらえれば 25 年は大丈夫と思うのですけれども。あと、保険会社の個人年金保険に入っています。

いま貯蓄に回そうと努力しているので日々の生活はけちけち生活です。でも苦しんではいないです(笑)、欲しいものをすごく我慢してということはないのですけれども。

(D) いま終身年金に入ろうと思ってすごく研究しています。もともと保険に入るのが嫌だったのですが、以前ちょっと 10 日ぐらい入院して、そのときに保険金でけっこう助かったのです、年金保険に入ろうという気になっていろいろと考えています。あとは家を買いたいとは思っているのですけれども。そうですね、これまで生涯設計ってほとんどしてなくて、計画性がないと言えないのですけれども。いまはとにかく終身年金に入らなければという気持ちでいっぱいなのです。あと将来年金が幾らもらえるか計算をしてもらったことがないので、そういう計算もしてもらおうかなと思っています。

(永瀬) 終身年金は以前から関心を持っていらしたのですか。

(D) いえ、最近です。年金がだんだんもらえなくなるという気がするのです。

(直井) 厚生年金ですよ。

(D) そうなのですが、でもやっぱりどうなるのか不安なので補える分、もし払えるならば終身年金もいいのです。介護のときに使えるものもあると聞いたので、保険料があまり高くなければ入らなくてはいけないと思っています。

(永瀬) そんなにいま、終身年金の関心が高いのですか。

(D) 私だけかもしれないのですけれども。

(E) 私は好きで入ったわけではないのですが、15 年の定期年金と終身年金、あと 60 歳で満期になる介護保険に入っています。30 代のころ、みんな友達のおつきあいで入ったのですが、割と早めに掛けたので、掛け金は二口の年金のほうで年間 30 数万円ぐらいです。60 歳から 75 歳までの 15 年間に年 90 万円と、あと終身で年 36 万円なので、年に百数十万円入る予定です。

ただ、ずっと厚生年金でくる予定だったのが国民年金になってしまったので、そこら辺はちょっと計算が狂ったなとか思っています。

(千保) いちばんいいのは、年金を受け取る手前に就労の機会があることなのかなという気はしますけれども。

(直井) 半分くらいの給料でもいいから、ちょっと働けたらいいですね。

(千保) それでは最後になりますが、シングルであることのよさとか、あるいはデメリット

とか、その辺りはいかがでしょうか。

(永瀬) あと、シングル女性だからこそこういうことを知ってほしいとか、シングル立場から考えてみるとここがこうだというご意見はいかがですか。

(E) シングルの女性の立場から声が出る機会は意外とないかもしれないですね。

(直井) 例えば政策的とかですかね。例えば今後こういうことが変わってほしいとか。

(E) 国会議員の偏見をなくしてほしいですね。「子供を生まない女は」とか、多分本当に思っているからああいう発言が出るのでしょうかけれども。公の場で言われると、「人前でそういうことを言う子に育つのなら、子供なんか要らない」と思うこともあるのですけれども。

(千保) 本来であれば、国の政策を動かすべき議員がそんなことを言っているようでは男女平等もないというご意見ですね。

(E) では何で子供が生めないのか、子供を育てられないのか。いま結婚して子供を育てたとしてもその子供が育つ環境が私たちのときに比べてすごく悪くなっているのです、育てる自信がないということもあるのですね。

(千保) 昔は都会も含めて親と同居、三世同居がごく自然で、比較的子育てのサポートが身近にあった。ところが、いまはかなり距離があるということがいちばん大きな要因なのか。小泉政権によると待機児童ゼロ作戦をやっている、延長保育をやっているとか、一時保育や休日保育もやっているとか、大変力を入れているのです。ところが、子育て側の環境がよくなったかというところでもないですね、おっしゃるとおり。だから、どこが悪くなったのですかね。

(E) 昔の環境がいいということはだれかが我慢をしていたのだと思うのです。例えばうちの母の世代だと、お姑さんに仕えることに我慢してそれでも子供をいい環境で育てようということがあったのだと思うのですけれども、いまはみんな自分が一番だと思ってしまっていてなかなか我慢するときってないですね。そういった誰かの犠牲の上に成り立つことはいけないとは思いますが、でもいまの日本はやっぱり何かおかしいなと思うのです。ではどうすればいいのかということは全く分からないしうまくも言えないのですけれども。入れ物だけあって中身がないのではしょうがないなとも思いますし。

(千保) 例えば、シングル女性という観点から何か感じる事とか、その辺りはいかがでしょうか。

(E) 私も小さいときから結婚するという意識が全くなかったので、「シングルだからどうですか」と言われると、何か「でも」というような感じです。本当に意見がまとまらなくて申し訳ないと思います。

(C) そうですね。先ほども子供の話しが出たのですけれども、私は昔から子供は好きではないし欲しくないし、だからいないのであって、何か特別の事情で作らないとかそんなことではないので、ちょっとお答えしづらいところがあります。

(千保) そのお話しに限らず、もうちょっと広く考えるといかがですか。

(C) 結婚ですか。

(永瀬) 一人では、何か生きにくい部分があるという部分にあるということはあるですか。それともそういうことは全然ないですか。

(C) 感じないです。

(永瀬) 全くない。

(C) はい。結婚しないということは自分で選んだことなので、後ろめたいとか恥ずかしいとか、そういうふうを感じることはないです。

(永瀬) 自分が感じなくても、そういうことも全くなくて全く自由に。

(C) 気づいていないだけかもしれませんが。

(E) 都会に住んでいるとあまり感じないですね。私もずっと生まれたところに住んでいるのですけれども、近所の人にも別に「Eさん家の子は嫁に行かない」と言われることもないです。

(D) でもやっぱり、私は独身でいて損だと思います。いまの日本の制度はやっぱり結婚しているほうが得だと思うことはけっこう多いですね。例えば、奥さんだったら配偶者が亡くなった場合に遺族年金とか寡婦年金とか、あと 65 歳になるまで何かいろいろもらえたりするではないですか。でも独身の女性はそういった保障というか、保護してもらうものが、失業してしまってもリストラされてしまってもありません。私はこの間知ったばかりなのですが、相続では奥さんは税金がすごく軽くなるし、あと第 3 号被保険者になると年金の保険料を払わなくてもいいではないですか。自分が結婚していないから別にひがむわけではないのですけれども、やっぱり結婚しているほうがいろいろ得なのかなといまにしてすごく思います。やっぱり独身の女性も、例えば病気をして失業してしまったときに安心していられる制度、すぐに生活保護とかになるとやはりちょっとプライドが傷つく人もいると思うし。遺族年金、やっぱりうらやましいと思ってしまいます、正直、寡婦年金も。だから独身女性にもそういったものが少しでもあったらいいなと思います。でも独身でいるから悪いとか、それこそ本当に子供を生まないのが悪いと思っているような政府の方だとちょっと期待できませんが。やっぱり同じ生きている人間だし、独身女性も何か少しはそういう制度があったらいいなと思うときはすごくあります、ひがみではなくてね。

(E) 私も男性に比べて賃金が低いのではないかといつも思っているのです。

(B) それはすごく思いますね、男女雇用機会均等法とか何とか言っている割には。会社にもよるとは思いますけれども、きっと。日本人的ではないのかもしれないのですが、明らかに仕事のやり方で間違っていると思うことを私が指摘したことに、年下の上司は傷ついているらしくて、社長に何か告げ口され、社長に呼び出しを食らいました。別にその人を否定するわけではなくいじめるわけでもなくて、一応気を遣いながら言っても、受け入れてもらえませんでした。

(千保) その年下の上司は特別に気の弱い人なのでしょうか。

(B) いや、私も別に気が強いわけでもないし、そんなストレートに言ったつもりもないのですけれども、仕事のことで気遣いながら言っても、女性のそういった声が反映されないところはやっぱり女性の賃金のほうが低いことと似通っている気がします。年下の上司のほうが全然仕事をしていないのに給料がいいという、不公平だなと正直思います。

(E) 企業っていつまでたっても「女の子」という意識なのですよ。だから「〇〇さん」ではなくて、「その事務の女の子、何かやって」みたいな。以前に重工業関係の会社にもいた

ことがあります、やはり男社会だったのですね。だからお茶くみもまだ私のころはありましたし、何をやってもとりあえず「女の子」という感じだったのです。私がいたころに定年で退職された方もいらっしやったのですけれども、その方もやはり同じような感じで、いつまでたっても「女の子」みたいな扱いでした。そういうことって、もう意識を変えようと思っても多分無理だと思うのですね。

私が入ったころはまだ男女雇用機会均等法はありませんでしたけれども、でもそういった雇用機会の均等ということだけをうたって、実質それに対する罰則はないですよ。だから男女で入社試験を受けることはできるものの、採るのは男性だけだと決まっていたても、それに対する罰則というのはないですから、本当にザル法です。やっぱり法律を作ることも男性主流になってしまいますから。

(千保) だからそういう一つ一つのことにもっと実質的な、内実を持たせるような方向でいかないときっとだめなのでしょうね。

(E) 何か寂しいですけども、それに対する何か法的な罰則がないとどこも協力しないと思うのです。私もこの年になってみると分かりますが、やはり 50 いくつのおばさんを採用よりも 20 いくつの女の子を採用のほうが使う側は絶対に使いやすいです。

(A) とりあえず求人とき、いまは男女別、男性のみ女性のみということとはなくなったみたいですけども、年齢制限の表示はどのようなのですか。

男女差別はなくなったかもしれないけれども、年齢差別は厳然としてありますので、雇用機会均等というのであれば、その辺りもぜひお願いしたいところだと思います。

(B) ただ、不思議なことに「ぐらい」って書いてありますよね。いまの会社の求人広告は、「35 歳ぐらい」だったのですけれども、「35 歳を超えても大丈夫ですか」と電話をしたのです。やはりそういうことを言える人もいれば、35 歳ぐらいということは 35 歳が境になるとあきらめてしまう人もいるし、私みたいに図々しく 37 歳でも 38 歳でも行く人もいるかもしれないし、その「ぐらい」という書き方も非常にあやふやです、年齢をうたっているところで。

(千保) いまは少し景気もよくなってきましたから多少枠を広げているのだと思いますけれども、本当に女性も 40 歳を超えるとほとんど新しい仕事はないですよ。

(B) ないです。いまでもやっぱり 35 歳が限度じゃないですか。40 歳までってすごく少ないですよ。

(2) 東京第2回調査

■日 時：平成17年2月15日(火) 午後6時～8時30分

■場 所：スクワール麹町

■参加者：50歳代未婚女性5名

(千保：司会) 今、どんなタイプのお仕事をされていらっしゃるか、などを交えて、自己紹介をお願いします。

(F) 健康食品を扱う会社で、事務関係、出荷、また、人数が少ない会社ですので、雑用その他をしております。まだ入社して日も浅いので、楽しく毎日仕事をしています。友達もなぜか独身女性とか離婚した人とか、お子さんがいらしてもシングルの方が多いです。地方出身ですので、年に3回4回帰って友達と会ったりしています。一生懸命仕事をして、収入を頂いて、楽しいことをしたいなと思っています。趣味は4年前に再結成した昔のアイドルグループのコンサートに行ったりしています。

(G) 今は、健康食品の会社に2～3年勤めています。仕事は電話での自社のものをご案内ということで、カウンセラーを兼ねさせていただいています。仕事は楽しいのですが、年齢的にも50歳を過ぎていますので、ここ2～3年、やはり身の回りで、親が高齢でとか、それから猫を飼っていて、それもやはり高齢で(笑)、介護することが増えてきました。趣味とかいろいろなことが出来なくなってきた、仕事もなかなかコンスタントに出来ないような状況が続いてきました。自分が50代になって、健康とか生きがいとかを幅広くお勉強して、健康で生きがいを持って生きられる、残りの人生ではないですけども(笑)、悔いのない人生が過ごせたらいいかなと思っています。あとは、いろいろな方に支えてきていただいて自分がここまであるのだから、自分の好きなことをしながら、何でもいいのですけれども、自分の今できる範囲で1つでも2つでも、社会にお返し出来ることを少しずつやっていけたらいいかなと思っています。

(H) 私は、勤めていた会社で気の合った仲間と会社を作りまして、その会社がバブルの崩壊で、しばらく頑張ったのですが結局難しくなって、大手ではないですから、クローズしてしまいました。私自身ずっと仕事をしてきて、父も早く亡くなってしまい、非常に精神的なショックを受けました。経済的なこともありますので、すぐ働きたかったのですけれども、やる気が一切起きなくなったのです。ちょうど3年ぐらいたつのですけれども、何かをやりたいという気持ちが欠落してしまったのです。うつだともっと深刻だと思いますが、私の場合、自分としては、頭は正常に働いている、しかし回転が鈍くなるのです。いろいろな動作が普通の感覚で出来なくなってしまったのです。スローテンポなのです。私自身もその間はいろいろと悩んでしまって、それで全部ほうり投げて、とりあえず生きていられるという感じになりました。そのころに美術館の券をたまたま頂いたのです。絵は普通より好きだなという程度だったのですが、それがきっかけで、病院に行くつもりで美術館通いをしています(笑)。病院に行くより自分が精神的に豊かになるなと思っています。絵画を見ているうちに少しずつよくなってきました。

声をかけられたりしたときは、バイトをちょっとしたのですけれども、すごく疲れるのです。

ですから、積極的にではなくて、人から声がかかったときだけやって、とりあえずそれでいいと思っています。50代ですから、経済もよくならないと働く条件もはっきり言ってよくないですから。経済が上昇基調になってから動くことに決心をしたのです。バイトから徐々に始めて、生涯をかけてできるような自分の仕事を見つけて、最終的には社会に還元できるようなスタンスで生きていきたいなと思っています。

(千保) ありがとうございます。それでは、Iさんはいかがですか。

(I) 私は30代まで仕事をしたことがありませんでしたが、ちょっとしたきっかけで30代前半に生命保険会社に入りました。仕事の内容を全然知らないで入ったのです。そのときは運がよかったのか、いわゆる立ち上げたばかりの若い子ばかりの職場でした。まだ男女雇用均等法がないころで、バブルのころ時代もよかったので、自分の周りも金融関係の人が多く、非常に浮かれてそのまま(笑)、何も考えずに、月にゴルフに10万や15万平気で使うような生活をずっとしていたのです。

けれども、30代の後半にたまたま、学生時代の同窓会がありました。それで、待てよ、私、自慢できるものが何もないじゃないかと気づきました。仕事が好きかと言われたら、自分ですごく好きでやっている仕事ではないということが分かっていたから。例えば結婚していれば、ご主人の話題なり、子供の自慢なり、お家を買った何だっって、30代の後半ってちょうど出てくるのではないですか。みんなそれぞれに先が読めてくる。私は何にもないから、どうしようかと思って、それでたまたま知り合いのかたの紹介で、体型補整の下着のサロンを自分でやったのです。ところが大元が簡単に3年ぐらいで倒産してしまいました。それで、どうしようかと思いました。人には仕事で貯蓄を勧めていたのに、自分では入ってくるなり使うという状態でした。

それでまた、もとい生命保険会社の人たちに、「また来れば？」という感じで戻ったのです。けれども、そこは普通の生命保険会社の営業部で、当時40代半ばになるかならないかでしたから、まだまだ若手なのです(笑)。普通の生命保険会社の営業部というのは、70代でも80代でも、動ける限りは絶対に辞めないです。雇用関係で、1回退職年齢というのがあり、退職するのですけれども、そのあと嘱託で死ぬまでいてもいい。ですから、当時はパソコンが導入された時代で、こんなおばあちゃまたちがパソコンを頑張っって覚えて、キーボードで入力できるようになるのを間近で見ている、すごいなと思いました(笑)。お金のためだったら絶対なのです。だから、ここにいる限り私は年を取らないなという感じで今来ています。

ボーイフレンドがずっといまして、その人も以前は為替関係でしたからバブルの中にいたのですが、今ペット通販を始めたのです。それでインターネットでペット通販の手伝いをさせられました。かわいい2か月ぐらいのワンちゃんたちの仲介をやっています。本当にお客さんが喜んでくれ、それが楽しくて、これで今後やっていけたらいいなぐらいの感じです。20代、30代のときに世の中が動いたど真ん中にいましたから、もう欲はありません。それよりも何か心のほうの余裕ですよ。この10年近く、たまたま友人たちも子育てが終わって、今しかないと思って楽しんでます。あと5年か10年したら、絶対にだれかしら親の面倒を見ていて、気持ちが暗くなって、外に出られなくなって一緒に遊べなくなるからです。学生時代の友人たちとか、会社の人間たちもほとんど独身でフリーが多いですから、「今が養う時間だね」なんて

みんなで言いながら、そこそこ楽しんでいきます。

(J) 私は30年ちょっと、総合商社の輸出部門でずっと働いておりました、数年前に退職いたしました。50歳まで勤めると60歳になるまで毎年幾らという形で年金を頂ける制度がありまして、それがもらえるようになるまでは何が何でも働こうということで、退職までは一生懸命石にかじりついたように働きました。当時不況の真っただ中でしたから、男性もリストラみたいなことはなかったのですけれども、自主的に辞めていく方が大勢いらっしゃいました。

1年ぐらい休みというか、リフレッシュしまして、そのあと何をやろうかなと考えてヘルパー2級の資格を取りました。親もだんだん高齢になってきますし、そういうことに関連することがらを何も知りませんでしたので、ちょうど将来について勉強しておくのもいいかなと思って勉強しました。たまたまヘルパーの勉強に通った学校で、介護ビジネスをやっていたら男性がいました。その方が「この資格が取れたら、うちで働いてもらえないかな」と、教室の何人かをスカウトしたのです。こっちも渡りに船で、即「やります」ということで、やり始めました。今もやっているのですが、週1回しか仕事がありません。非常に不安定な仕事なのです。いつ何時その高齢者が入院してしまうとか、亡くなってしまうこともございますし、そうすると、仕事がなくなってしまいます。やはり簡単な仕事ではないので、もう少し安定的な収入を得られる道はないかと考えて、それで今は和菓子屋で販売員の仕事もしております。

商社にいたときには、おいしいものを食べ、海外旅行に山ほど行き、ものを買って貯金もし、という生活でした。そこからガラッと変わりました。今はまだ体も丈夫ですし、一応60歳ぐらいまでは働いて、将来に向けていろいろ投資とかも勉強したい。映画がすごく好きなので、月に2~3本は見ます。美術館などに行くことも好きです。

(千保) これまでの職歴も含めて、お仕事の話をもう少しお聞かせいただきたいと思いますが、Fさん、いかがですか。

(F) 最初は化粧品の販売会社にいました。事務職とか好きではなく、接客業が好きでした。私の高校は中国地方だったのですが、東京にすごく出て来たかったのです。たまたま何かしら縁があって化粧品会社の東京営業所に就職しました。4年間いたのですけれども、4年間で行き詰まったのは、下町のチェーン店さん回りでした。とにかく販売会社だから数字の世界で、高いものを売らなさいでした。それで退社して、でもやはり化粧品関係の仕事をしたかったので、デパートで1年ぐらいしました。でも土日が休みではないので、それが嫌で辞めました。

そのあとはアルバイトでずっと銀座とか六本木とか夜のお仕事をしていました。このアルバイトを5~6年しましたけれども、今思うとけっこう人生勉強でした。マナーにしてもそうでした。年齢的にある程度行くと、このままではしょうがないと思いました。それから、お手伝いということで、知り合い関係の不動産管理に何も分からなくて6年ぐらいいたのですが、やはり時代とともにクローズになりました。

何か仕事をしないと生活ができないので、そうしたら昔からの知り合いが、今の会社の経理の女性ですけれども、通販の健康食品関係がだんだんよくなる時期だったので、一般事務として、出荷もちろん、お客様のお電話を頂くことをふくめて、そういうものも全部やってくれる女性ということで、私を選んでくれました。半年ぐらいアルバイトで、そのあと正社員になり、もう1月で丸6年です。

(千保) 途中、お仕事を変わるとき、ハローワークなどを利用されましたか。

(F) ハローワークには行ったことがないのです。一人で探せない性格なのです。だれかに紹介してもらったり、たまたま「どう？うちの会社で探しているのだけど」とか「知り合いが探しているのだけど」という感じです。

(千保) 今の会社では、例えば社会保険はどうなっていますか。

(F) ちゃんと入っています。

(千保) ご自分で働いておられた時はいかがでしたか。

(F) 不動産関係の仕事をやっているときは、国民年金、国民健康保険を会社でしていませんでしたし、自分でも払っていませんでした。国民年金を払っている時期と払っていない時期と、何か一度調べないといけないと思うのですけれども。

(千保) そうですね。調べた方がよろしいでしょうね。公的年金を受給するにも、いろいろと条件がありますから。

(F) 今の会社に入って、テレビとかでもけっこう年金問題をやっていますが、すごく疎くて「別にもらっても、もらわなくてもいいんじゃない？」みたいな感覚だったのです。だから、ちょっと普通の方よりも、そういう意味での常識がなかったと自分では思うのです(笑)。もっと早くにちゃんと勉強したり、だれか教えてくれたりとかしてくれればよかったと。今はものすごく切実に、だんだん年齢も行ってきていますし、変な話、今の会社もどのくらいもつか分からないです。その先やはり最低加入期間の 25 年に足りなければ払っていく必要がありますので、ちょっと相談に行きたいと思います(笑)。

(千保) Iさんの場合、30代までお仕事をしておられなかったですが、その間はどうかされていきましたか。

(I) 20代の前半で日本を飛び出して、日本にいなかったのです。本当は向こうに住み着いてしまう予定が、いろいろあって20代の後半に帰ってきました。それで、翻訳系の仕事をしようかと思いました。親とけんかをしていましたから、頼れませんでした。Fさんと同じように、知り合いが銀座でクラブをやっていたので、小遣い稼ぎに働いていました。その間に翻訳で身を立てようかなと思っていましたから、夜に仕事をするのは嫌でなかなか大変でした。

(千保) 今の生命保険会社にお勤めになったきっかけは？

(I) たまたまよく飲みに行くところで、保険会社のおば様がお客さんで来ていて、マスターの紹介で何となく話をしていたら「あら、あなたうちに来なさいよ」みたいなノリだったのです。保険の「ほ」の字すら知らない状態でした。たまたまその会社で別に新しく部署を作るので、そちらに紹介するから行ってみないかという感じで、そのときは面白そうだなと思って勤めました。預金と貯金の違いすら知らなかったです。したことがないですから。だから何も知らなかったのですごく面白くて。仕事のことは自分でもすごく勉強しました。その部署は当時25から39歳ぐらいまでで、一定ランクの学校を出た人間だけというところでした。それで、みんな初めての人たちばかりでしたから、「みんなで頑張ろうね」だったのです。

(千保) むしろみなさんが同じような立場だったのがよかったかもしれないですね。みんな頑張ろうって。

(I) そうです。20代の子たちばかりでしたから、何もお互いに分からなくて。ですから、

本当の保険会社の世界を知ったのは入り直してからです。そこでは2年ぐらいで管理職と営業とを選ぶのです。私は性格的に固定されるのが嫌いで、営業だったら気ままですし、自由さがありました。ただ、正直、残れる人間というのは10人に1人というのが事実ですから、それがある意味ラッキーだったのだなど。時代もよかったですし。

今の仕事は、将来的には別に欲がないから、かわいいワンちゃんの通販です。そしてワンちゃんを買ってくれた飼い主さんから「名前が決まりました。今こんなです」と写真を送ってくるのです。やはりワンちゃんを見せたいのですね。そういうのがすごく楽しくて。だから、将来的にはペットショップもやりたいと思っています。

1回お店を辞めたときに体型補整の下着のサロンをやったのですけれども、それも来てくれた人に試着させるわけです。体型が全然違うのです。そうするとうれしくて、「帰るときはそれを脱いでね」と言わないといけませんでした。生命保険では、喜んでもらうことが非常に複雑な思いでした。例えばご主人が亡くなって保険金が下りて助かったとか、病気したときに保険が下りて助かったとか。保険に入ったからといって、それで喜ぶ人はいないわけです。

ですから、ワンちゃんの通販で、素直に喜んでもらえることが、じかに伝わってくるというのはやはり楽しいです。

(千保) これまで国民年金とか、その辺はいかがですか。

(I) 会社にいましたから納付していました。でも、それ以外の時は入っていないです。返してもらいたいです(笑)。国民年金をもらうのに25年払うということが必要だと最近知ったのです。うろ覚えだったので、私は全く無になるとは思っていなかったのです。毎月明細を見せられて、ものすごく税金は引かれるし、厚生年金はすごく引かれますよね。うんざりするくらい。これが25年やらなければ何にも戻らないの？と、ものすごく矛盾を感じます。そのお金はどこに行くの？だれに行くの？って、すごく素朴な疑問です。

(千保) 年金を終身で受給できることの裏返しだと思いますが。

(I) 分かりますけれどもね。納めた保険料という金額の総額がありますよね。本当に取られていた記憶があるので。

(千保) Gさんの場合、現在の会社には2~3年ということですが、これまでどういうお仕事をされて来られたのかお話いただけませんか？

(G) 私は、自分が何を一番したいのか分からないで、結構いろいろなこと、いろいろな仕事をやりました。そこで一生懸命やって、慣れたところに辞めてしまったりしていたので、会社にはけっこう迷惑をかけました。生命保険のセールスも7年ぐらいやりましたし、自営業もやりました。あと、会計事務所とかです。

(千保) 最初に入った会社は。

(G) 生命保険会社に入りました。法人関係で、やはりバブルのときでしたから、社長さん相手に企業年金とか、企業保険とか、個人向けの保険など、そこそこやっていました。でも、どうしても上司との折り合いがうまくいかなくて、それで、もうお金じゃないと辞めました。そのあと、お客様に保証人になっていただいてお店を構えたのですけれども、やはりライバル店ができて売り上げが下がって。それでも3年後に売り上げを戻して、そのときが一番伸びていました。けれども、今度は借りていた店舗が老朽化してしまっていて、それで配管で大家さんと

トラブルがありました。あれやこれやで、最終的には出ていく、出ていかないという話になって、それで一応クローズしたのです。

そのあと、先ほど言ったように母も高齢だったものですから、年齢的に仕事はなかなか見つからない。私の場合は自分で新聞とかいろいろ見て、電話して、今の仕事にたどり着いたので。年金に関しては、私もちゃんと入っていないです。今考えているのは、正直、国民として、年金に納得いかないこともあるのです。やはりちゃんとした道で使ってくれるのであったら、よいのですけれども、払ったお金で変なものを建てたりとか、何に使っているか分からない。そういった無駄なところをちゃんとやってくれて、納得がいくのなら払っていきます。だけど、そうではないのだから、当てにもしていませんし（笑）。その代わり、正直大変です。

（千保） Hさんの場合、ご自分で仲間と会社を興される前のお仕事は。

（H） 私は最初に学校を出たときは、一応上場会社にきちんと5年ほど勤めました。お給料とか、ほかの会社より非常に恵まれてはいたのです。製紙会社でしたから結構よかったです。けれども、私自身サラリーマンが好きになれなかったのです。確かにお給料日が来ると、自分がどれだけ会社に貢献したかとか分からないのに、一応決まった額は頂けるのです。ただ、完璧な男性社会ですから、一生懸命やったらそれなりに自分の納得のいくような、そうした仕事の道があまり感じられませんでした。5年ぐらいで父が急死しまして、これを機に考え直そうと思ひまして会社をやめました。

そのあと、ちょっとアルバイトをしたり、運転免許を取ったりしながら、何をやりたいというのでもなかったのですけれども、しばらくは自分探してみたいに迷いました。あるとき友達が航空券の販売をやっていたのです。今ではH. I. S. という安い航空券を販売するところがありますが、それができる前の話です。ちょっとその話は面白いなと思って、友達と「小さく事務所を借りてやってみない？」ということで始めたのです。最初は不安だったのですが、航空券を仕事関係の人にセールスして、手続きもきちんとやりましたら、だんだん紹介が増えまして、それがけっこううまくいったのです。それを15年ぐらいでしたか、やっていました。

途中で交通事故に遭い、足が動かなくなって、2年間ぐらい病院とカイロプラクティックでリハビリでした。その後、少し呼吸困難になりまして、体が動かなくなると難しいですからその仕事はとりあえず辞めてしまったのです。

そのあと、ちょっとアルバイトをしたり、いろいろ考えながら、途中で不動産会社に入ったのです。それでそのときに、初めてだったのですけれども、仲間と何人かでグループでやってしまえということで（笑）。中間会社なのですけれども、20年近くやって、途中ずっと下り坂だったのですけれども、バブルの崩壊でやはりだめになりました。やはり交通事故のこともありまして、もう3年半になるのですけれども、やる気が一切起きなくなってしまったのです。でも、来年ぐらいから何かをやりながら、自分が何ができるか、そういうことを考えながら、年齢に関係なく続けられるものを選択してやっていきたいと現在思っています。

（千保） Jさんが今のお仕事先の和菓子店を見つけられたルートはどのような。

（J） そのお店の前に「アルバイト募集」となっていてまして、これで応募してみようかなと思い。それで採用していただいたのです。やはり50歳過ぎて会社を辞めて、新たな仕事となると、なかなかないのです。失業保険をもらいながらハローワークに行っても、仕事はすご

く限られていまして、なかなか難しいです。

(千保) それでは、話が変わりますが、今のお住まいのこととか、あるいは日常生活はいかがでしょうか。

(J) 私は兄弟がいませんで、一人っ子なのです。両親と同居していますので、ゆくゆく、もしかして倒れたりしたら、介護をしなければいけないかなと思っています。住まいは小さなマンションですけれども。両親もかなり高齢になってきていますが、今のところは元気です。ただ、いつ何時そういうことになってともいう覚悟はしているつもりなのですが、二人いっぺんに倒れられたらどうしようかと思っているのです。

(千保) 介護というのは非常に大変だということが社会的にも認識されて、介護保険が出来ました。そうしますと、いずれは介護保険とかを使いながらですか。

(J) 私は兄弟がいませんので、順番からいくと最終的には一人になってしまいます。ですので、一応民間の介護保険にも入っていますし、あとは入院したら幾らとか、がん保険も入っています。だから今後、成年後見制度を利用したいと思っています(笑)。

(千保) ご近所とかご友人とのおつきあいはいかがですか。

(J) 同じマンション内の人たちとは、コミュニケーションを取ったりはしています。私自身も、会社を辞めた時点からはそういうことをしております。

(千保) Fさんの場合はいかがですか。お住まいとか生活という観点で。

(F) まず、住まいは、ボーイフレンドの名義で私が頭金を月々払っているのです。11年ローンで中古マンションを買ったのですが、あと2年で支払いが終わったら私の名義に切り替えます。ただ、もうボロボロなので、震度5の地震があったらどうしようかなと思って(笑)。家賃を払うのはばかばかしいと思ったので、大きい買い物といえば大きい買い物です。そのときは、中古でも雨風しのげれば、それで年金をもらえれば細々と食べていけるかなと思ったのですけれども。だんだん変わってきつつありますでしょうか? でも、住むところがあれば何とかかなかなと。楽観的なのですけれども。

(千保) 住まいは大事ですよ。

(F) そうですね。住むところがないと。私の実家は、母が10歳以上年下の男性と再婚しました。そこも自分の家ではないのです。私の父親は小さいときに離婚しています。だから、地元に戻っても、母がもし順番で先に逝ってしまうと、帰るところもないです。それで、自分の家が欲しいなど。

(千保) では、いまの家はパートナーの方の名義ではあっても、一緒に住んでいるわけではないのですね。

(F) ええ、週末婚ですね(笑)。前は都心に住んでいたのですけれども、そのころは結構友達がいっぱい来てくれたのが、今は東京近県なので、来てくれなくなりました。遠いと泊まりがけで来ないと、という感じで。遠くに引っ越して友達が減ったような気がします。

(千保) 距離ってけっこう大事ですよ。

(F) やはり私も遊びに行くとかは。職場は東京ですけれども、もう帰るだけで精いっぱい。疲れてしまって。1時間半かかりますから。土日はゆっくりしたいというのがあるから、わざわざ東京まで、仕事ではないのに出て行って友達に会うというのは、ちょっとしんどいですね。

(千保) Gさんはいかがですか。

(G) 私の場合は、先ほどの店舗のトラブルがあって、姉夫婦のところで弁護士紹介してもらったかわりがあるって、それが縁です(笑)。義理の兄のおばさんが、たまたまお子さんがいらっしやなくて、敷地に借家があったのです。姉はぜんそくがあるものですから、年老いた母と義理の兄のおばさんの両方の面倒を見られないということで、義理の兄のおばさんのところの借家が空いているので家賃はいいから、「おまえ、ちょっとこっちへ来て」と。そのおばさんも介護施設に入るのですけれども、行ったり来たりできないので、そういうことをやってくれということでした。それでここ2~3年、母を見ながら、義理の兄のおばさんのちょっとした用事をしながら、猫も高齢で、猫の病院へ行きながら、という感じでやってきました。去年の暮れに猫が高齢で1匹死んでしまって、今年に母、義理の兄のおばさん、もう1匹の高齢の猫が亡くなって、今やっとそういう動きがなくなったところです。

(千保) Hさんはどうですか。お住まいの状況とか。

(H) 私は中古マンションで、買ったのは買ったのですがすけれども、途中で崩壊してしまいましたから、払えなくなりまして、事情を知っている方に長期のローンを組んでもらって、とりあえず立て替えたのです。いろいろな事情を分かっている方なので、その人の名義で買っていて、支払いを長期にしてもらって、安くしてもらっています。狭いマンションですがすけれども、私1人で住んで、それを私が今、払っているのです。払えなくなったら、もうどうしようもないですよ(笑)。

(千保) でも、その方が、張り合いがあるというか。

(H) 張り合いになるのか何なのか、自分で気合いを入れています。それしかない。日本経済と一緒に爆発するのだ、みたいな感じです。

(千保) 失礼ですけれども、ご両親は？

(H) 父は若いときに急死しました。母は弟がいますから、弟が結婚して母と一緒に暮らしています。父が残した家がありますから、そこに住んでいます。ですから、私も月に2回ぐらいは、お食事を兼ねて、母の散歩を手伝って、昼間一緒にランチということをやっています。

(千保) では、弟さまの方がお母さまを。

(H) そうです。一応責任をもっています。最悪の場合は私が見なければならぬかもしれないということでずっと来たのですけれども、弟は結婚もしましたし、そちらのほうで何とかなるということです。

(千保) Iさんはいかがですか。

(I) 私は今、この近くで賃貸なのですがすけれども、若いころに親元を飛び出してしまうから、ずっと一人です。ただ、一時期親と仲直りしたときに、頭金を出してあげるから家を買いなさいと言ってくれたのですがすけれども、私自身が、定着するのがすごく嫌だったのです。引っ越しができなくなるとか、固まってしまうのが嫌というのが強かったのです。今となってはちょっと後悔しています。たとえば、カードローンは、独身で賃貸だったらまずはねられます。同じように40代以降で部屋を探すと、はねられるのです。結局、所得証明を2年間にわたって出さなければいけないとかです。それを聞いてしまったから、多分引っ越しが難しいのだらうなと思っています。でも、そのうちに20~30代の人が減って40~50代の人ばかりにな

ったら、大家さんたちもそんなことを言っていられないはずですから、あと 10 年たったらきっと大丈夫かなと楽天的に思っています。

(千保) お父様は若いころに逝って、お母様は？

(I) 妹夫婦と同居してしまっていて、母はいわゆる乳母さん代わりにこき使われています(笑)。妹は私とそんなに年が変わらないのですけれども、妹の夫が、妹の七つ年下です。うちの妹は気が強いので、人の意見を聞かずにバブルの絶頂期に、どうしても家が欲しいと行って建てたときに、不動産屋さんが「奥さんのお母さんと同居なら安心ですね」と言われました。だから、今でも母はお手伝いさんみたいです(笑)。でも、妹夫婦と一緒に居られるので。ただ、心配なのが、妹の夫が長男で北陸出身なのですけれども、義理の弟さんにお子さんがいないのです。だから、うちの姪たち 2 人は、将来的にはかわいそうだなと思います。

(千保) 難しいところですね。

(I) 法律的には、例えば私が動けなくなったりしたら義務が多少はありますよね。だから、今、一生懸命こうやって「おばちゃんの面倒を見るんだよ」とか言って(笑)。でも、本当に姪たち二人で、両親である私の妹夫婦と、義理の弟夫婦を実際に面倒を見なければいけないというはめにはなるかもしれないですね。本当にかわいそう。だから、なるべく迷惑かけたくないと思っています。義理の弟のご両親も、今、北陸で二人で暮らしていますが、病気がちです。そうすると、例えば怖いのが、妹の夫も「北陸に帰るか」という話ですね。そうすると、結局介護のためになってしまうではないですか。そしたら「うちの母はどうするんだ？ 私が引き取るの？」みたいな(笑)。

(千保) 今、ボーイフレンドの方とは一緒にお住まいではないのですね。

(I) 将来的には、2 人とも年が 4 つぐらいしか違わないですから、60 歳ぐらい、あと 5～6 年したら向こうのほうの仕事も落ち着くので、そうしたらどうしようかという感じですね。

(千保) これからのことを考えると、ある意味では心強い面がありますね。もしも 2 人で住めば、それなりに支え合えますよね。

(I) 何か、どうにでもなるのではないか、みたいな感じです。例えば「老後」という言葉の定義が分からなかったのです。何で「老後」という言葉を使わなければいけないのか。何歳から老後なのか。例えば保険会社にいたら、70～80 歳のおばあちゃんたちも、本人たちは絶対に老人とか老後なんて思っていないです。だから、老後って何歳以上のことを指すのかというのが、すごく漠然としていて分かりません。

(千保) 本当にそのとおりのお話です。私どものイメージは、実はこれは退職後というイメージなのです。年齢では考えていません。だから、以前であれば 60 歳ぐらいということだったかもしれませんが、私どもの今のイメージは、リタイアしたら。だから、60 歳のケースもあるでしょうし、65 歳をイメージされているケースもあるでしょうし、さっきのお話のように 70 歳ぐらいのイメージの方もいらっしゃると思います。これは多分、生活費という面からみると、働いている間はあまり生活費に困らないのです。働かなくなったときに、給料がなくなってしまうから、あとは貯蓄か、年金か、資産か、子供におんぶするかしかないのです。そういうことをイメージしているのです。

(H) 私は前から思っていたのですが、日本の社会というのは全部、お役所から、国から、

上から落ちてくるのですよね。私の個人的な印象ですけれども、60歳が定年だと、60歳の翌日から、もう老人よ、ということですよね。そうすると、男の人たちは何年間もびっしり仕事をやって、でも60歳から社会的に老人にされてしまうのです。そういうこと自体、すごくおかしい。男性の場合78歳ぐらいが平均寿命ですよ。一般でも、親せき、友達の関係とか周りを見ても90歳代ぐらいはけっこういます。女の人なんか特にそうです。新聞で最近は考えているような雰囲気があるのですけれども、老人だとか老女だとよく書いてありますけれども、これは上からのお仕着せです。今なんか、70歳を過ぎたって、私の絵の友達なんか77歳ぐらいですけれども、ものすごく身ぎれいにしています。別におしゃれをしているからというのではなくて、それでだれも老人だなんて思っていないのです。

(千保) Jさんはとりあえず60歳まで働くというお話をされていましたが、60代になったときの生活のイメージ。働いているか、働いていないか。あるいは好きなことをやっているとか。可能であれば、社会的な貢献といった話も何人かから出ておられますけれども、その辺はいかがですか。

(J) 多分、親の介護はいつかしなければいけない。コロッと死んでもらえればいちばんいいのですけれども。親が病気とか介護とかという状況にならない限りは、少しずつでも働けたらなとは思っていますが、でも基本的には働くのは好きではありません(笑)。かといって、老後の心配がないお金があったとしても、のらくらして過ごすというのは、やはり精神的にも肉体的にもよくないではないですか。ですから、もし親の介護が必要ないとすれば、今のところは、80、90歳までは無理だとしても、働けそうなのでできる限り働きます。

(千保) もし環境が許して、無理に働くことはないという状況になるとしたら、Jさんは何をされていらっしゃいますか。

(J) やはり投資です。今は株価も上がってきているので、株とか言っているのですけれども、バブル崩壊の前に株を買って、当然のことながら下がってしまって、そのときに煮え湯を飲んだのです。当然何の知識もなく、証券会社の人に勧められて、今考えたら当たり前のものだったのだなという、初心者にも勧められる銘柄で、それも当然損をしてやめました。これは勉強しなければだめだと思い、いろいろ勉強しました。それで会社を辞めたときには、退職金とか、その他もろもろそれなりの金額のお金が手に入りましたので、それをある程度投資して、それなりの成果は挙げています。踊り場脱却とか言っています。ですので、今後もこれで何かという感じです。

(千保) Iさんはいかがでいらっしゃいますか。

(I) 仕事の内容が、多分保険会社にはもういたくないので、いないと思いますけれども、基本的には同じだと思うのです。

(千保) いろいろな通販の仕事も含めて、事情が許せば働いていますか。

(I) さっきの話で言えば、65歳までは年金の保険料を払わないと(笑)。今あきらめるかどうかの瀬戸際ですよ。でも、10年前を振り返っても大して変わっていないというか、仲間がいて、友達がいて、健康であれば、本当に欲をなくすということがすごく安心感につながるのです。長年お金ばかりの世界で、成績ばかりの世界で、すごく嫌です。

(千保) なかなか過酷ですよ。数字に追われるのは。

(I) だから、それも自分というか全体に欲がなければ、本当は昔から生命保険なんて国が管理して、一人一人の人に基本的に「あなたは今これだけ必要です」とやれば、保険料運用は別個として、正直もっと家計は助かると思います。そのところで月2万でも3万でも、例えば老後の本気のプランとかに回せるはずですし。本当に保険なんて、必要ですけれども必要以上ではないから。ただ営業の世界は必要以上のものを売っていかない限りはだめだというのは分かっていますから、もう嫌(笑)。あとは自分でどういうふうに、楽しく、多少は人のお役に立っているかなという自己満足とか、趣味は数えきれないくらい持っていますから……。最後はヨーロッパで、本当はお金がかかるのですけれども、ハウスボートを買って、運河で暮らしたいです。向こうはリタイアするとうこういう暮らしをする方が多いです。向こうでは2000万ぐらいで、2DKぐらいの船が買えるのです。ヨーロッパは本当に風景がいいし、のんびりしているから、そういうところで暮らしたいというのがあります。それはできないから、多分キャンピングカーを買って、とりあえず日本じゅう行く。今でも地図に沿ってドライブをやっているのですが、ある程度60から70歳ぐらいまではそれいき、その後は、多分もう車に乗ると危なっかしくなってくるから、という感じです。

(千保) Hさんはいかがですか。

(H) これからは健康で、自分に意欲があれば、ありとあらゆる選択肢があって、働ける社会がいちばん望ましいのではないかと思うのです。60歳になっても元気な人はいっぱいいますし、政治家なんか80歳まで頑張っているのですからね。だから、もうエイジレスの時代にして、健康で働きたければ、幾らでもチャンスがある、どこでも働ける、どんなことでもチャレンジできるといういろいろな選択肢があって、そういうことを認めるような社会にしていくようにしてほしい。

(千保) Gさんは、いかがですか。

(G) 基本的にはHさんと全く同じです。今まではみんな競争社会で、みんな出来なければいけないとか、あったではないですか。そうではなくて、その人それぞれの素晴らしさとか。でも、社会もだんだんそういうふうに、皆さん今やっというふうなので世の中もそういう動きになってきていると思うのですけれども、本当に素晴らしい能力を持っていらっしゃる方はいっぱいいるので、年とか関係ないと思うのです。そういう社会になっていくようなすごい期待というか希望は持っています。

(千保) Fさんは、いかがですか。

(F) 働くことが私は好きなので。ただ、小さい会社ですけれども、人間関係も含めて偶然働きやすいところに属してきたので、今の会社でだめになっても、仕事があれば、パートでも何でも、そういうところがあれば働きます。健康でないと仕事もできないし、おいしいものも食べられないし、だから、やはり健康だったら70歳過ぎても働いていたい。ただ、そういうところがなければ、自分で会社を興してもいいかなという部分が最近あります。

(千保) 最後に、いろいろ環境の違いはあると思いますが、今のお立場と伺いますか、あるいは一応独身ということ的前提に考えた場合に、それでよかった面、逆にデメリットの面とか、その辺り感じるものがあれば、手短かに、Fさんからお願いできますか。

(F) 良い面は、独身で、やはり煩わしいものがない。自由に自分の時間が持てる。デメリ

ットは、やはり世間の目と、同級生と会っても、子供の話になると、話に入っていけません。そうしたことです。

(千保) 世間の目って、昔と違うような気がしますけれども、今でもありますか。

(F) 昔は分からないのですけれども、多分違うとは思うのですけれども、税金だっていちばん払っているわけではないですか。私なんか扶養家族がいませんし。なのに、結局女として一人前じゃないみたいな、子供を育てる苦勞、結婚した苦勞も知らないから、そこを突いてこられてしまうと結構つらいです。例えば親の件でも「あなたは一人なんだから、だからできたのよ」とか当たり前みたいに兄弟から言われたりするとかいうところですね。

(G) 自由でいられるというのはいいかなと思います。あとはそんなにありません。ただ、今度は一人で生きていく。でも、また変わってきているので、今はそういう人たちが増えているので、そんなにどうってことはありません。困るとか、そういうのはないです。

(千保) 結婚していると、ある意味で寂しくないという言い方もしますけれども、別の観点からは煩わしく見えますか。

(G) やはり大変だと思います。

(千保) 定年退職すると、男性は「家にいないでね」と言われているわけです。だから、両方あるそうですね。心の支えとか、話し相手がいるとか、そういう意味では寂しくないかもしれませんが、煩わしいかもしれない。Gさんはいかがですか。

(G) やはりお互いに育ってきた環境が違うし、うちの姉は熱烈な恋愛で結婚しましたがけれども、そういうのをみてますと、やはり結婚生活って難しいというか、お互いがお互いに成長し合えるような、高めていくような相手に巡り会うというのはすごく難しいと思うのです。見る目もないし。だから、私にはちょっとできないかなと思います。

(千保) Hさんはいかがですか。

(H) やはり日本の社会は伝統的に男性側の社会です。女の人は子供を産んで家を守る。それは社会全体としてはある意味ですごく効率的なのですからけれども、でも、結局それがいまだに続いていて、男性は仕事以外一切何もできない、お手上げです。女性は何でもかんでも子供並みに面倒を見て、それで拘束されてしまいます。私の場合はちょっと病気をしたことも途中でありましていろいろなことがあって結婚しなかったのです。やはり社会全体が、男性は何をやる、女性は何をやらなければいけないと全部枠にはめてやるから、今の若い女性は豊かな時代に育って、はたと結婚を考えたときに、母親を見たりして、あんなに拘束されて1年中24時間休みがない、何から何までお母さんはやっているという姿を見ていたら、きっと多分、結婚に対してあまり夢を描けないのではないかと思うのです。

(千保) 今まで単身で面白くないとか、あるいは、よかったなという辺りはいかがですか。

(H) 自由にものを考えて、私の場合、人様にどうこうするほどちゃんとしたことはできなかったのですけれども、ただ、夢を持って生きるということと、自分でどんなことでも考えて歩いてきたというものが、やはり根底にはあるわけです。ですから、どういう状況になっても必ず歩いていけるという、心の中にそういうものがいまだにあるのです。もしこれが人に生活を依存していたら、多分こういう気持ちは生まれなかつたらと思うのです。ですから、確かに自由であることと、ものを自由に考えて発想して歩けるということを得ました。それと同

時に、結婚そのものはそんなに感じないのですけれども、子供を産まなかったということは、大きい子ではなくて小さい子を見たときに、やはり子供というのはほかにかげがえのないものだということによく感じます。ただそれだけです。

(千保) Iさん、いかがですか。

(I) 自分で選んだ独身ですから、それに関して文句は絶対言わないと決めています。ただ、さっき言った、気がついたら保障とか何かで差別を受けているんだな、くらいです。

(千保) 強いて言えば、デメリットはその辺りという感じでございますか。

(I) というか、独身だからとか、結婚しているからというよりも、一人一人だと思っています。例えば家庭内離婚だってあるわけですし、うちの母は30代前半で寡婦になりましたから、母の苦勞を見ているので、結婚したって、それがすべて永遠ではないわけです。子供だって、不幸にして子供のほうが先に亡くなってしまう場合もあるわけです。やはり人間は一人一人だということもなりのので、あまり独身だとか何とかというよりも、自分だと思っています。

(千保) Jさん、いかがでしょうか。

(J) もっと若いころは、独身でいると、いわゆる売れ残りとか昔は言われて、そういう意味での、差別とまではいかないのですけれどもそういうのを感じました。けれども、時代がだんだん移ってくるとそういうのも薄れてきて、今では、男性も尊敬できて魅力のあるような人ってなかなかいないのです(笑)。

(千保) 皆様のお話をお伺いしていると、多分20年前とか30年前の単身の女性が見られた、あるいはあったであろう世間の目みたいなものは、今はかなり違っているという気がしません。だいぶ時代は変わったということですね。

(J) やはりこれからは自己責任の時代なので、一人一人が自分に責任を持って生きていくということになると思うのです。人に頼っては生きていけないので。

(千保) それはそうですね。

(H) だから男性社会ではなくて男女社会です。男性も女性もありません。

(G) 人間社会。

(H) そう、人間社会。

(千保) おっしゃるとおりですね。

(3) 東京第3回調査

■日 時：平成17年12月19日（月）午後6時～8時30分

■場 所：スクワール麹町

■参加者：40歳代未婚女性・非正規従業員5名

（小川：司会）はじめに皆さんのほうから、ご自身のことについて簡単に自己紹介をお願いしたいと思います。内容としては、まずご年齢、例えば40代前半とか、後半とか、そういった形でけっこうです。次に、現在のお仕事の内容。それから、お一人で生活されているのか、あるいはご家族と一緒なのかどうか。また、お住まいはご自分のおうちなのか、あるいはお借りになられているのか、その辺のお話しをお聞かせいただきたいと思います。

（K）年齢は40代前半で、仕事は健康機器販売の会社で事務をしています。独身で、住まいはアパートを借りています。

（L）年齢は44歳です。いま就いている仕事は、ランプの卸売り会社で、一般事務の仕事をしております。家族は母と暮らしておりまして、母の持ち家に住んでいます。

（M）40代後半に差しかかりました。学校の事務をさせていただいております。それで、Lさんと同じように母の家に、マンションですが、母と二人で暮らしております。

（N）年齢は40代前半で、職業は建築関係で、建築設計デザインの仕事です。住居は賃貸で、独身です。

（O）40代前半で、職業は、おととしまでは放送関係をしていたのですが、去年お友達が輸入雑貨をインターネットで販売する小さな会社を作りまして、いまはそちらを手伝っています。私もいろいろ勉強したいのでお手伝いしているのです。一人暮らしで、家は親が持っている一軒家に住んでいます。

（小川）それでは、お仕事に関してもう少し詳しく伺いたいと思います。現在のお仕事について、いまの会社にお勤めになられて、どのぐらいになるのか。また、1週間に何日ぐらい働いておられるのか。また、もしお仕事で何か不満やお悩みのことがあれば、その辺りも。

それから、お仕事を、以前何度かお変わりになった、そういうご経歴があれば、どういったお仕事で、お仕事を変わられたご事情は何か、そういったことも教えていただきたいと思いません。

（O）去年、友人が輸入雑貨の、個人の本当に小さな販売会社を作りました。それまでは放送関係の仕事に10年間契約社員でおりましたが、やはり契約社員でしたので将来のことを考え、販売の仕事をしたことやパソコンを操作する経験もなかったため、そういう勉強も兼ねて、いまそのお友達と一緒に仕事をしています。

仕事で不安に思うことは、去年立ち上げたときはけっこう売れましたので、こんなに簡単にうまくいくのかと思い、これなら生活もできると思っていたのですが、今年になってかなり波がありまして、売れないときは全く売れないのです。いまはお手伝い程度で決まったお給料も求めていますので、何とかうまくいっていますが、人を雇ってまでやるのはなかなか難しいのではないかと思います。将来の勉強と思って一緒にやり始めたのですが、最近ちょっと不安になってきました。

(小川) それは全く新しい会社を興されたのですか。

(O) お友達が会社を作りました。私は社員ではなく、ただ手伝っている形です。私は彼女が海外に仕入れに行くときにパソコン管理をすとか、スケジュールは全く自由です。ですから、続けて3日間働かないということもあります。

(小川) 仕入れに行かれるときは、海外に行かれることが多いのですか。それと、お二人だけでやっついていらっしゃるのですか。

(O) 去年忙しいときには3人いました。韓国のあるものを輸入しているのですけれども、韓国人のアルバイトの子が2人いました。

(小川) 販売は国内向けですか。

(O) インターネットを使って国内で販売しています。

(小川) お仕事は毎日ではないということですが、もう少し具体的にお聞かせください。

(O) 本当にアバウトで、お友達と会うから明日はだめとか、来週の水曜日はだめだからと、お互いに都合をつける形です。もちろん彼女は基本的には毎日仕事をやっついて、本当に休みなく365日働いているような状況なのですけれども、たまたま彼女にもどうしても抜けられない用事などがあると、その日は私が都合をつけたりしています。でも、私は社員で契約しているわけではないので、スケジュールは基本的には私が自由に決めています。

(小川) お給料はどのような形でもらっていらっしゃるのですか。

(O) 売上げの何%みたいな形で頂いています。でも、いまは本当はないときはないです。

(小川) その前は放送関係に10年お勤めになられたというお話しでございませけれども、それ以前にも何か別のお仕事を。

(O) いえ、仕事はしていませんでした。

(小川) いまのお仕事に就かれたきっかけは、もともとお知り合いか何かで。

(O) 日本にいる韓国の子なのですけれども、ずっとお友達で。ソウルオリンピックのころから、いまから17年ぐらい前ですが、韓国に興味がありまして、韓国語の勉強をしていたので、韓国人のお友達がかなりいます。その中で本当に長く親しくしている子が始めたのです。信用できる人だったので、いいかなと思って。

(N) 私は仕事の形態から言いますと個人事業主という形になりますが、建築デザインと構造デザインをやっています。受注があって締め切りがありますから、その締め切りに合わせて仕事をするということになります。だから、ひどい話し、自分が本当にやりたくないと思うと全くやらないときもあります。

(小川) いまのお仕事はどのぐらいになられるのですか。

(N) 途中やりたくなくてやらないときもあったのですが、何だかんだで15年ぐらいこの仕事をしています。

唯一不安があるとすれば、40年ぐらい体を使っているとだんだんボロボロになってきますよね。結局、個人事業主ですので、自分が動けなくなったら稼げない、ダイレクトにそれだけが心配です。仕事をするとき、手伝いで友人とチームになっているときもあるのですが、そういうときでもお互いに体を悪くしたら終わりだという心配もあります。

(小川) もともとスタートからそういった形の建築関係のお仕事ですか。

(N) 本当は1回きちんと就職したのですが、私は決まった時間に通勤することが苦手だったので、だめだったのです。それで、辞めていただらしていたのですが、結局何かしらのお仕事を世話してくれる先輩がいましたので、はじめました。

(小川) 就職されたときもやはり建築関係のお仕事ですか。

(N) はい。大学が建築学部なので。

(M) 私は自分の卒業した学校にそのまま同窓会の事務で入っております。週3日ぐらい勤めております。そのほかに、いま盛りのお受験にかかわっています。学校の勤めと並行してずっとお花を教えていたのですが、いままでは普通の成人女性に教えていたのです。それが、最近、日本古来の作法というほどでもないのですが、そのようなものをお受験の中に取り入れる傾向があつて、何人かの友人とそういう仕事を始めています。それがもうちょっと何か形になればいいなという状況です。

(小川) そうすると、ずっと学校関係のお仕事をされて、そういった中でいまお話しになられたお花の関係のお仕事を。また、お受験というお話しがございましたけれども、幼稚園生を対象に、いわゆるお行儀とか、そういったものの一環ですか。

(M) たまたま勤めている学校が下から続いている学校ですので、その受験に、同じ学校の事務にいる人たちと組んでかかわっているということです。いまの仕事とはまた別なのですが。

入学試験では、例えば花と葉っぱが別々に出ているのです。そうすると、これがアジサイの花で、こっちがアジサイの葉っぱで、これを結びつけるとか、海の風景がある中にアジサイが咲いていて、どこが季節的におかしいとか。あとは季節の行事です。ゆず湯とか、花ももちろんそうなのですが、四季の行事のような。基本的にいまは核家族なので、おばあさんたちと一緒に住んでいच्छらない。それで、伝えていく者として間に入っているということです。

自分が結婚をしておらず、子供を持っていないので、いまの小さい子を持っている親御さんがどういう状況にあるのかいまひとつ明確ではないのですが、結局、長いこと座ってられないとか、指がまっすぐ合わないとか、いろいろあります。

(L) 私は専門学校を出て、最初は正社員で勤めましたけれども、そこが倒産をしまして、その後また正社員で働いたのですが、勉強がしなくなったのでその会社を辞めました。学校を卒業したあとは派遣社員と契約社員という形でした。現在は契約社員で働いております。就業的にはフルタイムです。仕事の内容は一般の正社員の方と変わらずに働いているのですが、お給料と責任のバランスが合わないということは常に思います。

それから不安なことは、正社員でもそうなのでしょうが、女性だとお給料が低いとか、ボーナスも少ないので、厚生年金に加入して会社も負担してくれているのはいいのですが、保険料の額が少ないのです。母もいまはまだ健康なのですが、いずれ介護の問題が出てくるわけです。私の友達もこの間お母さんを亡くしましたが、お母さんの介護をしていたとき、正社員でもかなり大変という現実を目の当たりにしたので、自分が実際にそうなったときにどうなるのかという不安をすごく持っています。

あとは契約社員なので、最初に解雇される可能性もあります。本当は手に職があればいいのですが。いま、また勉強を始めましたが、それが実際にすぐ役立つかどうかは難しいので、手

に職を持っていけばよかったと後悔しています。

(小川) お仕事は一般事務とおっしゃられたのですが、差し支えなければそれはどういう内容ですか。

(L) 営業事務の仕事です。経理に渡す前段階の仕事で、発注して請求書が来るものの処理とか、受注したものを発送する手配とか、どちらかというとな営業事務的な仕事で、多少経理も入るかもしれないのですが、俗に言う一般事務です。

(小川) 世間では正社員の採用を控えて、契約社員や派遣社員の方の比率が高くなっているというお話をよく聞きますが、いまお勤めになられているご職場ではいかがですか。

(L) 多いですね。実際に求人が増えている状況にあるらしいのですが、結局その求人の内容は派遣社員や契約社員のような形態が多いというのです。あとはハローワークに行っても、年齢的な問題があるので、よほど優秀であれば「正社員でどうですか」と言われるかもしれないのですが、会社としてもいちばん都合がいい形態なので、そういう需要が多いのではないかと思います。

(小川) ただ、実際におやりになられているお仕事は、正社員と全く変わらない内容ですよ。1日の労働時間とか、1週間当たりの労働日数とか、そういったものも基本的には同じですか。

(L) 変わらないですね。ただ、5年ぐらいになるので、だんだんこちらの態度も大きくなって、責任がある分強く言ったりもするのですが、それとお給料とは全然関係ないので、自分の責任だけが大きくなっているということですね。

(小川) そうすると、正社員の方との違いは、そういった意味では給料の違いだけということですか。

(L) そうですね。給与体系ですね。

(小川) 先ほど責任があるとおっしゃられましたけれども、責任が大きくなると給料も増えるのではないですか。

(L) それとは全然比例しないです。そこを割り切ってしまうと、私はここまでしかやらないというふうにしてもいいのかもしれないのです。

(K) いまの会社は健康機器販売ですが、そこはまだ1年くらいです。週4日程度で、そのときの都合で3日になったり、もうちょっと増えたりします。

初め10年ほどは鉄鋼会社でOLをしました。そのあと、建築会社に4年か5年ぐらいいました。OLで一般事務を長くやってきたので、ほかにいろいろなことをやってみたいということが辞めた理由でした。

それから、洋服の販売とか、結婚式場でお客さんの衣装を選んだりする仕事とか、ホームヘルパーを、短期間ずつやっていました。

去年腰を打ってしまって、2か月ぐらいまともに動けず、仕事をしばらく休んでいました。そのあと、1週間フルに働くことは無理だと思いながら、ハローワークで何か仕事を探さなくてはいけないと思っていたところ、いまの仕事を知人から紹介されました。

(小川) お仕事で、何か悩み事とか、ご不満はありますか。

(K) 個人会社なので、アルバイトの事務員ぐらしか雇えない規模なのです。もっと販売

が順調にいけばいいのですが、いまは社員を抱えるのが難しい状況なので、人数が少なくつまらないです（笑）。年配の社長と2人で仕事をしていてつまらないと思うことがけっこうあります。たまにお客さんを招いて勉強会を開くときがあるのですが、そういうときはいろいろな方が見えるので、それが楽しいといえますか（笑）、それで気分転換になるというような状態です。

いまは貯金を崩して生活費にあてている状況なので、このままでは絶対やっていけません。ただ、けがをして2か月ほど動けなかった時期に考えました。いままでは仕事が入ると、夢中になって働いていました。でも、必ず体に無理が来て、もう20代、30代の若いときとは違って、体をだましながら使うことができなくなっているのではないかということです。

仕事も絶対に必要なのですが、いま死んでしまったら終わりだという思いがすごくあるので、これからはお金のことばかりではなく、体のことも大事にしないといけないと考えようになりました。一人では考え違いをするので、上京している友人に相談しながら、例えばいまの状況では週5日は無理だから減らしたほうがいいのか、そういった相談をしながら仕事をするようにしています。

（小川） ご健康のほうは、完全に回復されたのですか。

（K） 全く普通に歩けますし、ちょっと走ったりすることも別に問題はないです。ただ、けがをする前と比べると、重いものが持てなくなったのです。尾底骨を打ってしまって、それが思ったよりひどかったのです。

（小川） それは交通事故か何かで。

（K） 転んでしまって。打ったのがひどかったらしくて、それもそのとき仕事が忙しかったので、あまりたいしたことはないと思ってそのあとも動き回ってしまいました。

（小川） それはお仕事をされている最中に。

（K） 休みの日にやりました。ただ、そのあと仕事が立て込んでいたので、それをやらなくてはいけないということで、3日ぐらい動き回ったら頭と首にちょっと変な感じがありまして、これはまずいと思って、それで休んで、それっきり2か月ぐらい。何とか動けて、病院には行けましたけれども、それ以外は無理という感じだったので、これはもう大事を取る以外ないということで、結局会社を辞めました。

（小川） 現在のお仕事を引き続きお続けになりますか。

（K） 健康機器といいましてもやはり一般的なものではないので、すごく景気が悪いようです。それに会社というほど大げさなものではなく、本当に小さいところなので。最近社長からやり方を変えるという話がありまして、来年度から営業の仕事で、アルバイトを入れるそうです。そうすると、私の立場がどうなるのか、勤務日数が変わるのか、その辺のところを社長が全部話してくれているのかどうか分からないところがありまして、それだったらほかの仕事を探したほうがいいのかとちょっと考え始めています。

（小川） それでは、次の質問に移らせていただきます。ふだんの生活に関しましてお話を伺いたいと思います。

まず、ふだんのおつきあいについて、例えばご家族とか、ご親戚、または職場の同僚とか、ご友人、あるいは近所の方。そういった方と現在どのような形でおつきあいをされていらっし

やるのかということですが。

それから、ふだんのご生活の中で、こういった場面で充実感を感じられるのか。例えばお仕事をされているときとか、あるいはご趣味とか。

あとは不安です。これは現在、あるいは将来に対してということですが。それと、不安を感じられたときにご相談される方はどなたか。その辺のお話を伺いたと思います。

(K) 近所とは割りと仲がいいのです。最近は無沙汰していますが、以前は毎朝近所をちょっと掃除していたのです、ほんのちょっとなのですけれども。そうすると、近所のおばあちゃんが何かと声をかけてくれます。見られたくないときもあるので、困るときもあります。アパートに一人で住んでいるのですけれども、全く一人ぼっちという感じはしないです。

(小川) そちらにはけっこう長くお住まいですか。

(K) そうですね。8年ちょっと。

友人につきましては、昔から一緒によく旅行に行ったりしていました。本を買って愛読者カードを出すと講演会の案内などが来ますが、それで講演会に行つて、そこで知り合った人たちと旅行に行くということをよくやっていました。いまもそのときの友人と電話でしゃべるとか、交流があります。

それから、けがの治療のため通っているお医者さんや整体治療があるのですけれども、そこでは治療だけではなく、精神的な話しもできます。1か月に一度ぐらい定期的に話しをしていますが、将来どういうことをしようかという話しもできますので、とてもありがたいです。

そのほか、リハビリに太極拳がいいと言われていまして、以前習っていて一度やめたのですが、また今年の春から始めました。区の施設で、ボランティアで教えているところがあるので。習う一方で初心者の方に教えていると、つきあいのなかった方とも仲良くなって、いろいろ話しができるので、そこに通うことに充実感を感じています。

将来の不安は、いまはなるべく考えないようにしているのですけれども、やっぱり経済的なことです。来年からはきちんと週5日働かなくてはと思いながらも、いまの状況ではまず正社員は無理でしょうし、派遣社員にしても難しいだろうと思いますので、どうなるのかなというところですが。

年金をもらえないかもしれないという話しをよく聞きます。私はまだもらえると思っているのですが、本当にもらえなかったらかなり大変だろうなという気持ちがあります。

(小川) いまは国民年金でいらっしゃるのですか。

(K) いまは国民年金です。

(小川) そうすると、厚生年金から国民年金に切り替えて、途切れなくずっと加入されているのでしょうか。

(K) はい。

(小川) 受給資格として25年以上加入という要件がありますが、それをクリアすれば保険料を納めていた分に対応する年金が、終身で受給できるしくみになっています。

(K) あれは25年以上払えばいいということですか。40年ではなくて。

(小川) 40年というのは、国民年金の年金額の計算上、加入期間が最大限で40年ということで、いまは年間で80万円弱の年金額が、その40年の満額なのです。ですから、40年に満

たない場合には、40年に対して保険料を納めた年数分の割合で年金を終身受取れます。

(K) 30年しか払っていない方であれば、30年の割合ですか。

(小川) 40年の満額が80万円とすれば、その80万円の40分の30に相当する年金額です。

ただ、25年以上といいますが、カラ期間と通称されますが、そういう期間も含まれます。例えば海外に行かれていたとか、正式には合算対象期間といいます。そういう期間も含めて25年以上です。ただ、給付のほうは、実際に保険料を納めた期間しか年金額には反映されません。

(K) そのところが友人もよく分からなくて、子供さんがまだ成人していないのですが、もうちょっとしたら保険料を払わなければいけないけれども、やっぱりもらえないから子供に勧められないとか。社員になってしまえば強制なのですが、いまの時代はアルバイトとか、社員として雇ってもらえない場合が多いので、親としてはそういう子供に対して年金に入れとは言いにくいという声もよく聞くので、どう言ったらいいのかなと思いがら……。

(小川) そのご友人には、心配しすぎないで、お子さまの将来のことを考えれば、年金には是非加入しておいた方がよいとお勧めいただければと思います。

(L) 私の家族は母と姉が1人います。姉は一人暮らしをしておりますが、公務員なので経済的には全く安泰です。ですから、世間ではきっと姉がいるから大丈夫と見られているのですが、姉とはちょっと性格が合わないので、一緒に暮らすことは難しいかもしれません。自分の気持ちとしてはやっぱり独立したいと思っているのです。いまある家にどちらが住むのかという話しになると、そこでもめることもあるかもしれません。遺産というほど大げさなものではないのですけれども、家の問題が実際におきるかもしれないのです。

母がずっと地元なので、母の兄弟は全部地元に住んでおります。何かあったときは、ふだんのつきあいはないですが、お葬式ぐらいには来てくれるだろうと思います。父のほうは亡くなっていて、しかも遠方なので、あまり行き来はないです。

友達は、やっぱり学生のときからの友達が多く、職場の同僚たちとは距離を置いてつきあう関係です。それは、たまに一緒に食事に行くことがあってもあまり深入りをしない、差し障りのないつきあいということです。ですから、学生時代の友達や、いま行っているスポーツジムとか、趣味で知り合った友達のほうがいろいろ相談に乗ってくれます。

趣味は、スポーツジムに行くこととか、映画鑑賞や相撲観戦です。あとは合唱をしています。年齢はさまざまですが、友達もけっこういます。男の友達は少ないのですが、相撲関係ですと男の友達もいます。また最近、カウンセリングの学校に行っているのですけれども、そこで知り合った友達とは、同じ目的を持っているので、やっぱりいろいろな話ができます。

ただ、充実感とか、満足感を感じる時があるのか、わかりません。

(小川) 例えばご自分の趣味とか、目的をもって勉強されているときとか、そういった場面はいかがですか。

(L) そうですね。以前仕事を辞めて通っていた学校を卒業できたときには、さすがにすごく満足しました。

(小川) そういった勉強はいまのお仕事に役立てられて。

(L) そうではなく、普通の大学の通信教育だったので。卒業論文があったものですから、卒業論文を書き上げたときはかなり満足しました。

(小川) 逆に不安に思われることは何かございますか。

(L) 姉のほうはあまり感じていないかもしれないのですが、先ほどいったように姉とちょっと折り合いがよくないのです。一緒に暮らすことができないと思っていて、姉が家に戻ってきたときに自分を出なければいけないと決めているので、将来自分がどこに住むのか不安です。できれば結婚して出ていきたくったのですが。あとは自分が自立できるように貯金をためるといところです。

(小川) 立ち入って恐縮ですが、お姉さまとのご関係は具体的にどのような。

(L) 表面的に仲はいいのですが、うちの姉は俗に言うところとちょっとわがままというか、自分かってなところがあって、機嫌の波がすごく激しいのです。そういう具合なので、一緒に暮らすとなると、衝突することが多くなって、ちょっと難しいかなと。

(M) 私は、交友関係というと、ずっと同じところにいますので、下級生、上級生および同級生が主な交友範囲です。それから、自分が趣味でやっておりますものを通じた友達がいる、これからもそういう方たちとおつきあいをすることになると思います。

充実感は、趣味でやっていることが工芸なので、それができ上がったときにとっても充実感を感じます。

不安はやはり親の高齢化です。親が今後どういう状況になっていくのかまるで読めないわけです。いまはとても元気しておりますし、親と一緒に行動することも楽しみの一つではありますが、親の高齢化ということにやはり漠然とした不安があります。

(N) 交友関係は、どこで知り合ったかよく覚えていないのですが、いろいろなジャンルの友人がいます。そんなにしょっちゅう会うわけではないですが、会うと楽しいという感じです。

充実感は、自分があこがれているアーティストの方がいまして、そういう人と一緒に仕事できたときがいちばん楽しく、充実感があります。

あと不安は、2~3年前に父が脳梗塞で倒れて、いまはもうピンピンしていると本人は言い張っているのですが、それですね。最近友人のお母さんが倒れたとか、周囲で親が危ないという話しがボロボロ出てきています。両親に対して、何かあったときのケアが全くできていないので、すごく悪いという気持ちがあって、不安というよりも罪悪感があります。

ですから、本当は自分が2人いて、1人の自分は仕事をしていて、もう1人の自分が仕事をしないで結婚しているというパターンがいちばんいいのだろーと思っておりますが、こればかりは申し訳ないという感じです。でも、近所にいとこがおりまして、その子も私と同じ独身で、「私が結婚しないので結婚しない」と言い張っているのですが、「どうにかして見てちょうだいね」と言っております。

(小川) ふだんの悩み事はやはりご友人とお話しをされて解消されていらっしゃるのですか。

(N) 逆に相談されるほうです。個人的なことは人に相談してもしょうがないという気持ちが根底にありまして、一人で円形脱毛症を作っている感じです。でも、友人から相談されると、逆に自分の悩み事も解消できる場所もあるので、いろいろなジャンルの友人がいていいなと思っております。

(小川) お仕事以外でもいろいろなおつきあいがおありになるのですか。

(N) 仕事関係の友達はいないかもしれませんが、仕事仲間はいますが、私的なことは一切話

さないでやっていますから。私は割と旅行先で食べ歩くことが好きで、海外に行っても仲間がいたほうがいいので、たまたまフリーの旅行などで、自分と似たような人がいると「食事しませんか」と誘うのです。それで知り合いになり、いままで続いている人が何人かいて、けっこういろいろなジャンルの方と友人になっています。

(O) 交友関係につきましては、3年ぐらい前までは本当に幅広くつきあっていました。誘われても断ることはせず、昔からの仕事関係のお友達、あとは学生時代のお友達、それも中学時代、高校時代、大学と、本当に選んでいなかったのです。3年ぐらい前からは、やはり経済的なこともあるのですが、大事な友達は少しいいから、そのお友達との時間を大事にしようと思って、それからは年に1回ぐらい社交で会うような感じのお友達とはつきあわなくなりました。

いま満足していることは、本当にないような気がします。2年ぐらい前から父も母も急に体が悪くなりました。いま母が病院に入院してまして、この2年間で4回ぐらい入退院を繰り返しています。1回の入院に70万円も80万円もかかるので、それを見ているとやはり不安になります。また、父も年をとって少し変わりました。それまでは、私一人ぐらい大丈夫と言っていたのです。うちは2人姉妹で、姉は結婚しておりますので、姉のことは心配していません。私だけ心配で、私一人ぐらいなら何でもないと書いていたのですけれども、最近お金にとってもシビアになりました。いままでは買いたいものを買って、本当にぜいたくさせてもらったと思うのですけれども、最近、父のそういう態度を見て本当に不安になります。父の態度を見ても不安ですし、やはり両親の体が悪くなったのも不安、自分の将来も不安、不安ばかりです。

でも、その不安ばかりでしたらやはり毎日の生活ができなくなって、病気になりますよね。ですから、一生懸命働いている方には申し訳ないのですけれども、本当にどうしようもなくなったら・・・。日本は「死になさい」とは言わない国だということが分かってきました。韓国のお友達に教わったのですけれども、韓国では公的な年金制度がまだ確立されていないので、日本でも知られている財閥系のグループや、銀行や保険会社に勤めている、本当にごく一部の方は別ですけれども、普通の一般企業の方には年金制度がないというお話です。ですから、その方は老後の生活を子供に頼るのです。また、生活保護もほとんどお金をもらえず、最低の暮らしです。それで韓国のお友達が言うには、日本は生活保護で普通の生活ができる、最低の暮らしではないと。日本にいる在日の人で、生活保護で生活している人を見ても、韓国の暮らしとは全く違くと。もちろん生活保護でお金をもらえるからいいと思っているわけではないのですが、日本はそういう国なのだと思ったら本当に楽になりました。

父がいくらか残すと言ってくればもう少し楽なのかもしれないですけれども(笑)。ただ、本人もいつまで生きられるのかわからないと思うし、不動産もやはりこんなに下がってしまって計算外だったと思うのです。父が80歳を過ぎて、私たちにお金のことを急に相談するようになって本当にそれがすごく不安です。だったらもっと早くに自立をさせてほしかったと。自分がしなかったのもいけないのですが、父もさせなかったのです。女の人が外で働くことが好きではなくて、外で働くのはよくないという感じでした。母は自分の分はきつと確保していると思うのですけれども(笑)、私の分までは・・・。母は母でこんなに医療費がかかるとは計算外だったかもしれません。

(小川) いまの生活の中で満足されていらっしゃることは何ですか。

(O) いままでは海外旅行に行くと、買い物や、買わなくても見て歩きがすごく好きだったのですけれども、去年お友達の仕事を手伝うようになってから、何を見てもこれは売れるかもしれないとか、これはいくらぐらいのもうけになるとか、そういう目で見えるようになってしまって、楽しいどころか、本当に疲れるのです。いままでは息抜きだったのですが、いまは仕事になってしまったのです。ですから、向こうに行っても、最近流行っているものは何かとか、日本人はどういうものを買っていくのかとか、そういう話しになってしまいます。

(小川) 悩み事をご相談されるとか、不安の解消法とか、そういったことはご自分なりに何かされていらっしゃるのですか。

(O) 中学のときから本当に仲良くしているお友達で、22歳で結婚して、早くに23歳で子供を産んだお友達があります。私には記憶がないのですが、結婚した当初は生活が大変だったらしく、そのときに私が彼女にいろいろとお世話をしたようです。でも、たぶんお友達だからとごく普通にしていたと思うのです、来たらごちそうするとか、子供のものを持っていくとか。でも、彼女にしたらそれがとても助かったと言うのです。

彼女はいま、ご主人のお仕事が成功して本当に優雅な生活をしています。昔の恩があるので、私一人ぐらいなら面倒を見る、だから心配要らないと言うのです。まさか面倒を見てもらおうとは思わないですけれども、彼女と話しをしていると不安の解消になります。彼女のご主人も、いざとなったら私一人ぐらい会社で面倒を見てくれると言ってくれます。

(小川) 皆さんからお話しを伺って、親の介護のご心配をいろいろとされていらっしゃるようですが、これまでのご経験なり、あるいは現在ご対応をされていらっしゃる状況とか、その辺りはいかがですか。

(真野) 例えばおじいさんやおばあさん、そういったご経験も。

(M) うちの祖父母は脳卒中で病む期間も短くて逝ってしまったので、実際に経験したことではないのですけれども、ボランティアで老人ホームにお花を教えに行ったことがあります。そうすると、非常に抽象的な話しになるのですが、金銭的には恵まれている方たちもとても寂しいのです。精神的には飢えておられて、「今度はいつ来るの」と言われます。そういう気持ちは他人に頼ることでしか満たしてもらえないという感じです。

(N) 知人の話しですが、ご両親は名古屋で、ここ3年ばかりケアハウスに入って、退職金で余裕のある老後を暮らしていたようです。でも、去年お母さんがくも膜下出血で倒れてしまって、いまは残念ながら植物状態になって、もう治らないと言われているのです。その状態になると、ケアハウスには入れないので、お母さんはどこか新しく探さなければならない。でも、とにかく施設が少ないし、施設に関する情報が本当に入りにくいと言っていました。

また、病院に患者をケアする方がいらっしゃるのですが、十分に育成されていないようで、病室に入ってきてやるのが素人と一緒に、書面を見ながら連絡をするとか、しかもインターネットを使っているのです、それがすごく不安だと言っていました。

お父さんはケアハウスの権利を買っているので一人そこに残っているのですが、お母さんがそういう状態になってしまって、「おれ、これからどうしよう」というお父さんの言葉を聞いて、暇があると名古屋に帰っているとこぼしていました。

(小川) これまではいまの生活のお話を伺ってまいりましたが、次に、将来に関する質問をさせていただきます。将来の生活設計について、例えばお仕事はあと何年、いくつぐらいまで続けられるとか、あるいは生計をお立てになる手段はどのように考えておられるか。それから、お住まいについて、将来どのような心づもりか、その辺りのお話を伺いたいと思います。

(K) 去年までは正社員としてきちんとした仕事を見つけたいと思っていたのですが、いまはちょっと考えが変わりまして、まず体と相談しながら、話しが来たものをちょっとずつやっっていくことしか考えていない状態です。

生活設計についてもいまは漠然としています。実は私もお金の不安があります。何年前に、いまは暮らしていける貯金はあるけれども、老後のことが心配だから飛び降りて死んでしまったほうが楽だという気持ちになって怖くなった時期がありました。いまはそういう考えはなくなっているのですけれども、お金をどのようにしていくかまだはっきりしていません。

それから、住まいは、いまは賃貸にいます。実家には父と母と妹がいるのですが、将来、介護の問題も出てくると思うので、家売って別の場所に引っ越して、私も一緒に住もうか、どうしようかと考えているぐらいで、これもまだはっきりしていません。

(小川) お仕事のほうはお体の状態を見ながら続けられるだけ続けていかれるというお考えですか。

(K) 友人から何日か手伝ってという話しがあれば、それはありがたいことなので、例えば週2日でも3日でもそこに行かせてもらいたいという気持ちがあります。体が動くうちは何かしらの仕事はやると思います。

(L) 正社員だったらもうちょっと安定した生活設計ができるのですが、あと何年か働くと年金がもらえる25年に達するので、いまの会社ではないかもしれないですが、そこまでは何とか仕事を続けていきたいです。

できれば将来は田舎で暮らしたいのですが、田舎ではなかなか職がないので、そこが難しい問題です。高校のときの先生が実際に田舎で暮らしてしまして、自分の退職金や、りんご園を手伝って生活をしているらしいのです。半分冗談で先生のおうちの隣に住むと言っているのですが、実際には具体的に考えたことはないです。姉と暮らしたくないとか、そんなわがままなことを言っていますが、実際問題、それもできないかもしれません。

お金をためて海外に住むと宣言している友達もいるし、マンションを買っている友達もいて、それぞれ自立の道を歩んでいるのに、自分はどうしようか具体的には考えていないので。ただ、親の面倒を見るにしても自分が健康でないといけないと思っています。

(M) 将来の、例えば5年先、10年先の展望をきちんと持っていなければいけないのですが、とにかくいまある予定を全部片付けていくことで日々大変忙しいのです。でも、先ほどお話しをした事業を、大きくなくてもいいのですが、できれば立ち上げたいと思っています。

あと、最近不安に思うことは、お役所の申請手続きです。将来だんだん高度になってきて、コンピューターを使わないとだめだということになってきたら、そのときの時流に対応できるか不安がありますね、

あと本当に二極化が進んで、階級とまでは言わないのですが、何らかの形で分かれてしまっていると思うことが非常にあります。

(小川) それは具体的にどういった場面でお感じになられるのですか。

(M) いま受験のことにかかわっているのですが、例えば塾なのですが、1レッスン1万2千円もするのです。それを毎週やっていて授業料を払っていきける。でもそれは必ず実るものでもないではないですか。そのほかに体操とか何とか、それを全部クリアできる層もいるということです。それを見ていると、本当に二極化しているという気がするのです。やはりお金を持っているからで、いろいろ享受できるのはお金次第だと思つてと何だか悲しくなります。

(N) いまの仕事が続けられるうちは続けようと思います。あとは多分80歳まで生きそうな気がするのですが、これから先、50歳までにやりたいことがあって、それを実現したいという希望と、お金をかけたい趣味があるので、その楽しみがある限りは働こうと思います。

その一方、自分の両親もいずれは倒れると思いますので、民間の保険に入りました。あとは年金のことです。いままでは区役所で話しを聞くと、「どうせまた制度が変わるし、支給開始年齢がだんだん延びるからいつでもいいから入りなさい」と言われていましたが、今日の話しを聞いて入ろうかなという気になっています。

(O) いま親が持っている家にいますが、いざ親に何かあって相続する場合、現金がなければ国にそれを持っていかれてしまうわけです。ですから、持ち家だからといって安心ではないのです。

でも、将来設計ができないような気がするのです。この先年金制度も変わるといいますし、医療制度も変わってきます。ですから、考えても考えたとおりにならないと思うので、逆に考えないようにしています。それは親を見ていて学びました、計画どおりにいかないということ。ですから、無駄なことはしないようにしようと。

(小川) 最後の質問にさせていただきます。独身でいらっしゃるお立場で、例えばこういったメリットがあるとか、逆にこういったところはデメリットだとか、そういうふうに感じられることが何かございますか。

それから、行政に対して、ご要望が何かあればぜひお聞かせいただきたいと思います。

(O) 親がいる間は自由で、自分のことだけ考えていけばいいですから、それがメリットだと思います。ただ、親がいなくなった場合に自分一人になると思うと不安です。老後に一人でいて寂しいことがデメリットだと思います。

行政に望むことは、この年齢になると、本当に働きたくても、希望する収入が得られる仕事がないのです。求人広告に年齢や、男女を分けて書いてはいけないと法律に書いてありますが、実際はそうではないです。本当に平等にしてほしいと思います。

(N) 私は、たぶん結婚しないで、自分一人で仕事をするだろうと思っていたので、大学でやりたい仕事の資格を取りました。それから、世間は学歴で何とかなるだろうと思ったので、ちゃんと卒業しようと考えました。ですから、一人で暮らしているデメリットはこれまであまり感じませんでした。

いま自分の親の面倒も見っていないのに、逆に結婚すると、配偶者の親の面倒も見なければいけないことになるので、独身でいることをメリットと考えています。

あとは仕事をしながら勉強ができる制度をもっと充実して欲しいと思います。本格的に、何か勉強するとか、資格を取りたいと思つても、そのためにはお金をためなければなりません、

勉強と仕事はなかなか両立できませんので、結局仕事を辞めることになってしまいます。

(M) 私はもともと一人っ子なので、30代までは、一人であることに関してどうこう感じることはなかったです。むしろ他人とかかわるほうが煩わしく感じていました。でも、自分もある程度年を取って、親の年を取った姿を見ているとやはり不安になります。

私も勉強したいと思うことがありますが、いまを全部リセットするわけにはいきません。大学も社会人編入ができますが、結局それ相当の学費を払える人たちのためのものです。ですから、私も、いまの仕事を手放さなくても、勉強ができる制度があればいいという気がします。

(L) やっぱり自由であることが独身のメリットだと思います。自分がやりたいと思うことを最優先できます。この間、友達のお母さんが倒れたときに、手伝いに来て欲しいと頼まれて一緒に介護をしました。それはやっぱり独身のほうが動きやすいので、何かあったときにはいちばんに声がかかります。だから、本当はそういう意味で独身は楽しいのかもしれないのです。

しかし、私の友達は大半結婚して、大変そうな人もいますが、楽しく結婚生活を送っている人が多いので、育った環境の全く違う人間と暮らすことがどんなものなのか、経験してみたいのです。ですから、結婚に対しては、行動は別にして、すごく前向きな考えではいけません。

行政に対しては、出産のときに最初から保険が利くようにしてほしいと思います。後で、一時金の給付がありますが、だったら、最初から保険を利かせて、子供を安心して産めるようにすればいいと思うのです。いまは育児休暇制度もありますし、出産ときのことも考えてほしいと思っています。

それから、働いているとやっぱり男女平等ではないとすごく思います。正社員の方も、仕事と同じでも、お給料は全然違うのです。また同い年でも、男の人のほうがやっぱり役職も上です。まだまだ女の人だからということで差別があるのは事実だと思います。

(K) 独身のメリットは、やはり時間的に自由で、外出とか、趣味とか、勉強などを自分一人の都合で決められるということです。

デメリットは、最近はないのですが、独身でいると、20代や30代のころは会社でかなり批判を受けました。「わがまま」とか、「選り好みをしている」から始まって、「なぜ結婚しないのか」、「年金のことも考えて子供を産まなければいけない」と男の人によく言われたので、それがきっかけです。そして、それをいつの間にか自分で自分自身にもやっけて、五体満足で仕事をさせてもらっているのに、結婚をしない、子供も産んでいないということに対して漠然とした罪悪感がありました。それは自分でかってに考えていたことかもしれないですけども、そういう雰囲気は周りにあったことがきっかけです。

行政に対しての希望は、お年寄りと子供と一緒にいられる場をつくってほしいということです。いまお年寄りは老人ホーム、子供は保育園と分けてしまっているのです。例えばヘルパーさんがお年寄りを虐待するとか、子供がお年寄りをいじめるとか、そういった問題が起きるのだと思います。わざわざ新しく造らずに、あるものを補修して使って、そこに行けばお金を使わなくても、子供からお年寄りまで遊ぶとか、話しができる場を作ってもらえれば、心のむきも変わってくるのではないかと思います。

太極拳に来ている人はお年寄りの方も多いのですが、私たちが同世代同士で交流していても、自然に加わって、いろいろ話しをしてくれて、教えられればうれしいし、聞けば知恵を授けて

くれるので、お年寄りの方との交流がとてもうまくいっています。そこに子供が来ればもっといいのです。そうすれば、子供がいない私でも人の子供をかわいがることができるのです。

それから、いま私が住んでいる区の施設の料金が上がっているので、お年寄りが払えないと言い始めています。ですから、そういうことはやめてもらいたいと思います。財政が大変なのは分かりますけれども。

そうかといって、いろいろなところで無駄な建物を建ててしまっ安値でたたき売ったという話もありますから、そういうことに気をつけていくことが結局自分たちの実になるのではないかなと思っているのです。そういうことをお願いしたいと思います。

(4) 仙台第1回調査

■日 時：平成18年1月13日（金）午後6時～8時30分

■場 所：ホテルJALシティ仙台

■参加者：40歳代未婚女性・非正規従業員5名

(真野：司会) 最初に自己紹介的なものとして、おおよそで結構ですから年齢と今ついておられる仕事についてお聞かせください。

(P) 40代前半です。仕事は雑貨衣料の販売を主にやっています。

(Q) 40代前半です。仕事は不動産業です。私の場合は自社物件を不動産屋さんに紹介する仕事です。賃貸の管理と物件の売買です。

(R) 40代前半です。仕事は16年くらいなんですけど、短大と専門学校で非常勤の教員をしています。非常勤講師の仕事は、デザインとか、建築とか教えています。非常勤なものですから、拘束時間が非常にまちまちです。あとはフリーで、デザイン系の授業を持っていますのでフリーランスのデザインなんかをちょっとする感じです。ただいま、建築がよくなくて、非常に学生数が減っているのです、建築の非常勤の仕事はほとんどなくなりました。

(S) 40代前半です。仕事は写真館で働いています。

(T) 年は40代前半で、仕事は、身体障害者デイケアの指導員をしています。

(真野) ありがとうございます。まず、お仕事についてもう少し伺わせていただきたいのですが、学校を出られてから経験されたお仕事と、どのような経緯でそのお仕事につかれたのかお聞かせ下さい。まず、Pさんからお願いできますか。

(P) 私はずっと、販売の仕事は今まで同じなのですが、学校を卒業してからキャラクターグッズのお店で10か月ぐらいアルバイトをしまして、その後、今度は別のキャラクターの会社に正社員で就職しました。そのキャラクターのお店は仙台の会社だったのですが、そこで5年ほど働いたときに、今度、同系統の会社が仙台に出店する際、そちらをどうしても受けたくて、面接を繰り返して、やっと入社することができました。今までの販売とは全く仕事内容が違って、人材管理のような内容の仕事をしました。2年半働かしまして、その後ちょっと体調を悪くして1年間はおちにおりましたが、そのあと、以前働いていた、また別の会社の社長さんの知り合いの紹介で、今はナチュラル系の、籠とかりネン、麻の雑貨衣料を販売する店で働かせていただいています。

(真野) もともと、キャラクターの関係のお仕事に関心があったのですか。

(P) はい、最初のキャラクターのお店には子供のときから絶対、一度は働きたいと思いついて、ただ、正社員で入るのはなかなか難しく、やっとの思いでアルバイトからでした。

(真野) 今はキャラクターとは全然関係ないですね。

(P) はい、今はキャラクターものではないお店で働いています。

(真野) もし機会があれば、またそういうキャラクター関係の仕事に就きたいですか。

(P) でも、キャラクターは規制がかなり厳しくて、働いてみて分かったのですが、自由に自分たちの思いどおりにお店を運営することは、まず出来ないのです。法律に引っ掛かることもたくさんあって、直営店ではそういう心配は全然ないのですが、一つのキャラクターの重さ

というのを、けっこう痛感したのです。それで一つのキャラクターだけでは、お店は成り立たない、そうなると、いろいろ働いてみて、キャラクターでないほうが自分も働きやすいかなとか、接客のしやすさかなと。あとは時代の流れで、今はけっこう麻とか、そっちのほうがよく売れるようになりましたので、今はそちらが面白いなというのはありますね。

(真野) 社会保険はいかがですか。国民年金は自分で納めていますか。

(P) 自分で納めています。

(真野) ありがとうございます。では、Qさん、お願いします。

(Q) 学校を卒業して最初に勤めたところは、職種はコピー業で2年間ぐらいいました。官公庁とか建設会社が、自分のところでコピーなどを賄えない分を外注に出すというところでした。そこで、お客様のところへ行って受け取ったり、製本の依頼を受けたり、そういう仕事をしていました。車に乗ることが多くて、何回かちょっと接触事故とかやりました。家族から、女なのに心配だということと言われて、内勤の仕事をとりましたが、勤めていた会社の一般事務や内勤はもう埋まっていた、一族でやっている小さな会社だったので、ちょっといろいろな人間関係がありまして、まだ若いしということで辞めました。

次に勤めた会社には12年間いまして、営業事務をやったり、経理にも行きました。そこはいろいろな部門があり、工場も持っていました、工場では密度検査もやりました。12年間勤めたのですが、母が他界しまして、それをきっかけに、自営業の酒屋を父1人では賄えないということで辞めました。その仕事に未練もないし、やることもやったなと思いました。そのとき32~33歳だったかな。7年間、自営業でやったのですが、時代の流れで酒屋も閉店することになりました。「閉店することになった、今後どうしよう。仕事を探しているんだけど」と友達に話したら、その紹介で去年の2月から今の仕事に就きました。

(真野) 自営業でご実家の仕事ですと、なかなか大変なことはございましたか。

(Q) でも、自分がやっていて、合っていたなと思いました。人と話すことが好きなので、それが今の仕事も、ふだん事務所に1人であることがあるのですが、何か事務所が明るいなと言われます。本当に、そんなに話すことはないのですが、思わず事務所に来た人に話しかけてしまいたくなる。自分としては、接客とか、人と話すことが好きなんだなと。

(真野) 今のお仕事では、職場環境とか人間関係とか、そういったことに関してはどのような感じですか。いろいろ悩みがあるとか、今のお仕事に就かれてよかったとか。

(Q) 今の会社は個人会社なのです。社長さんがいて奥さんがいて、私というような環境なのです。大きい組織の中にいたこともありますし、両方経験して、どっちにしろ、働くというのは大変だなというのが正直なところですよ。

(真野) そうですか。では、社会保険は会社の方で納めているのですか。

(Q) 会社に掛けてもらっています。

(小川) 以前の酒屋さんのころは、ご自分で国民年金を納めていたのですか。

(Q) そうです、掛けていました。

(真野) ありがとうございます。では、Rさん、お願いいたします。

(R) 美大を出ました。私が出たころは4年で卒業の女性が非常に就職しづらい。特に地方では、使いにくいということで、短大卒だったらいい、そのような状況でした。たまたま中学

の教員という話がありまして、しばらく勤めたのですが、毎日が嫌で、生活指導が嫌でした。校内が荒れていたのが毎日大変な思いをしました。そのころは何も知らない無鉄砲なときで、バブルがちょうど盛んになるあたりですから、そのまま東京に行きました。

東京で不動産会社に入りまして、それも非常にバブルな会社だったのですが、大きく料理屋をやっていて、そこで企画営業というのをやっていました。しばらく東京にいたのですが、親が病気をしまして、そろそろバブルも終わりの時期だったこともあって、戻ってきました。

戻ったときに、さてどうしようと。大学にたまたまちょっと相談かたがた遊びに行きましたら、デザイン学校で教員を探しているようだから、「おまえ行け」と言われて、大学の教授の紹介で入りました。それがデザイン学校の最初です。ただ、そのまま行くのは不安があったので、その時点で、もう1人で生きていこうと多分思っていたのだと思うのですが、資格を取ってキャリアアップして行こうと思いました。それで、学校の教員をしながら、インテリアコーディネーターの資格を取りました。それでインテリアの授業もしながら、学校のデザインの授業もして、フリーランスなのでインテリアコーディネーターの仕事もしながらでした。ですから、一時、非常勤で、市内で5校に行っていた時期があるのです。今はもう少し減っています。非常勤の教員を続けていますが、コーディネーターの仕事は開店休業状態です。保険に関しては一切何の保障もありません。

(真野) では、ご自分で国民年金は納めていますか。

(R) もちろん、私たちは時給計算でいきますから、働かない月は収入がないですし、保険も何も、労災も一切ありません。少しだけ時給が高いというだけです。ですから、すべて自分で申告をして保険料を払っています。

(小川) ところで、東京に行かれたきっかけは、お知り合いの方がいらっしゃったのですか。あるいは、取りあえずちょっと行ってみようか、ということですか。

(R) というか、多分、私のやりたいことは仙台にはないだろうと、そのときは思ったような気がします。その時期に、実は人材募集雑誌会社を受けて受かったのです。1日か2日勤めに行ったら、ちょっと驚くようなことがあって。それで、仙台にはないと。あまり大きい志を持って行ったとかいうのではないです。

(真野) ありがとうございます。では、Sさん、お願いします。

(S) 私は高校を卒業して、すぐ美容室に就職しました。学校は通信制の美容学校で大丈夫だと言われたので、技術を覚えながら美容学校ということでした。そのころ通信制は2年で、仕事をしながら通信で毎月勉強して、春と夏にはスクーリングがありました。お店では仕事が終わってから勉強会があって結構12時とか遅くまでやっていたので、電車はないし、お金もないのにタクシーで帰るしかなくて、大変な思いをしながら生活したのです。20人ぐらいの大型店舗だったのですが、いろいろな人が集まっているし、先輩に対しての口答えは一切だめというところでした。

(真野) 厳しいですね。

(S) 厳しかったですよ。そういう中で一つずつ覚えていく中で、最初はシャンプーから、最後にカットです。一つずつ覚えながら、「これを覚えたら辞めよう、これを覚えたら辞めよう」といいながら、一応カットが出来るようになって国家試験も通りました。

そのときに何か違うものをしてなくなって、着付けとかアップが出来るようになったらいいかなと思っていました。知り合いのさらに知り合いの方から、ブライダルの仕事をする人を探しているということで紹介されて、そっちのお店に移ったのです。正社員でもパートでも、どちらでもいいという感じだったので、そこは、正社員ではなく、パートの時給にしてもらいました。今から10年ぐらい前だったので、その後ブライダルはだいぶ変わってきたのです。和装からウェディングへ、です。お嫁さんは、和装するときには人数もある程度必要になってくるのですが、洋装、ドレスだったら1人でも大丈夫なのです。人手が足りない。身内でやっている店でしたので、ちょっと何となく疲れたというか、違う仕事もしてみたいなと思いました。

販売の仕事に、ちょっとあこがれがあったのです。たまたまそれも知り合いの人からの紹介で、電気屋の中で、ゲームとかCDを置いている売場のレジをさせてもらいました。結構、楽しかったのですが、そのCDショップが電気屋から出てゲームショップのお店になるというときに、アルバイトやパートは皆くびになりました。

また新たに仕事を探さなくてはいけないときに、やはり美容関係かなと思ったのですが、そのころにはもうある程度年齢が上がってきている。そうすると、美容師は採用が少ないのですよね。そのとき見付けたのが今の写真館だったのです。そこで着付けとかヘアとかで、最初は短期で入ったのですが、「もうちょっとやってみますか」と言っていたので、今、2年めです。

(真野) では、Tさん、お願いします。

(T) 私の場合は、高校を卒業してから、叔母がお豆腐屋さんをやっていたので、そこで製造と配達を5年ほど手伝いました。

そこを辞めたとき、知り合いが誘いに来て、生命保険外交の試験を受けて通りました。自分で20代前半に生命保険会社の仕事に入ったために、自分の父親ぐらいの人たちに保険を売らなければいけないじゃないですか。でも、自分はそのとき、どうして保険がそんなに必要なのか分かっていなかった。とりあえず4年は勤めたのですが、本当は自分で分かっていないのに設計書を作って、それを勧めに行っているのかと思って辞めたのです。

その後、事務職で入った会社が拡大しすぎて倒産しかかったときに、同じ生命保険会社と一緒に働いていた方々から誘いを受けて、また同じ生命保険の外交のほうに戻って6年ちょっと勤めました。そのときに、これから生命保険は本当に大変になっていくと思いました。リストラとかいろいろ騒がれていたときですから、多分この仕事も大変になってくるだろうなど。

そして自分の中で、福祉関係か、なぜそう思ったのか分からないのですが、葬儀屋さんに勤めたいと思ったのです。たまたま広報誌にヘルパー2級の募集が載っていたので、おととしの暮れに生命保険会社を辞めて、その翌年にヘルパー講座を修了して、ホームヘルパーで働き始めました。でも、今度はその事業所が閉鎖になったのです。それで、福祉だけのハローワークみたいなのがあるところがあって、その紹介で今のところに勤めるようになりました。

(真野) それでは、話題を変えさせていただきます、今の生活とか、ご家族、一緒に暮らしている方とか。また、先ほどもちょっとお話がありました、ご両親で介護が必要だとか、そのお世話をしていらっしゃるのか、その辺りを伺わせていただいてもよろしいでしょうか。では、Pさんからお願いいたします。

(P) 家族は、母、弟、叔母3人と同居しております。昨年2月まで、祖母が2年半ほど病

院に入院していました。老衰で亡くなったのですが、それまでは家族で、交替で介護をしておりました。去年までは、うちも母と叔母で商売をしておりましたので、普通の日はずり行きな。もう1人の叔母にウィークデーは行ってもらってというような形で大変でした。落ち着いてみんな仕事が出来ないといえますか。弟は仕事に行かなくてはいけなかったのも、商売をやっている母と叔母が、臨機応変に病院に駆けつけたり、そういう形でした。

(真野) 大変だったですね。そういう状態では、仕事を選ぶときに難しいと思いますが、そういうことはいかがでしたか。

(P) そのことは前もって会社に伝えておきましたので。曜日は、必ず、日曜日か土曜日を休みに入れてもらうということで、やっていました。たまたま知り合いの紹介だったので、わがままを通させていただいて、今はもうそういう介護をしなくていいので、休みの指定はしていません。今、バイトといえども、仕事はそんなに簡単に見つからないので、そういう休み希望とかは、本来はできないと思いました。

(真野) Qさん、いかがでしょうか。

(Q) うちの4人家族です。同居しているのは父と姉と私の3人です。弟がおりますが、弟は今、東京近県で仕事をしています。酒屋は廃業になったのですが、商店みたいなことを父と姉が2人でやっています。そんなに人手は要らないということで、私は外に出て働くことになって仕事を探しました。母は、初めて病気になったのが命取りのような病気でけっこう早く亡くなりました。母とは違って、父は自分から何でも検査に行ってくれるのです。趣味は検査というぐらい、今度は何月何日に検査のバスが来るとか、自分で丸をつけて率先して検査を受けてくれるので、そういう点はありがたいのです。その検査で、早期発見ということで2~3回入退院を繰り返しています。ふだん、家のことは父がほとんどやってくれています。家事とか、もともと料理が好きな父で、母が健在のときから、ご飯とか作ってくれていたのですが、母が亡くなって、より一層腕が上がったところもあります。

(直井) Qさんは、お仕事だけをして帰ればいい。

(Q) そういう点では、そうです。普通、男やもめという、娘と一緒に暮らして何かと世話をしなくてはいけなくて、のようですが、うちの父親は自分から旅行に行ったりとか、日曜日も朝早くから出掛けてくれます。そういう点では、父親を心配する必要がないので、本当にご飯も作ってくれるし(笑)、ありがたいかなと思います。近所の人からは、お父さんは娘さんと暮らして幸せだねと言われているのです。「お父さん、近所の人はこちら言ってるんだよ」と言うと、「そうかな、お父さんが幸せなのかな。本当は娘のほうが幸せじゃないかな」という感激もたまにあり、「お互いに幸せなんだね、私たち」というような会話をよくします。

(真野) では、Rさんお願いします。

(R) 1人で暮らしています。実家の敷地内で1人暮らしです。すぐ裏に父が1人で暮らしています。ですから、1戸建てに、それぞれ1人です。東京から戻って間もなく実家に戻ったのですが、実家は実家で、私の友達が来ると時間も違いますし生活のサイクルが違うのと、母が長患いしていたこともあったので、私は解放されたい一心で、家を建ててそこにいます。弟が1人いるのですが、仕事で東京に行ったり戻ってきませんので。私が仙台にいないとはいけない理由は何もないのですが、父のことがあるのでいます。母は16年ぐらい患ってしま

たので。

(真野) かなり長かったですね。

(R) 今、父は、3年前に母が亡くなってから、非常に平和な暮らしをしています。母が病気になるまで、それまで何もしなかった父が、薬を飲ませたり、母は6時半までにはご飯を食べなくてはいけないので、私が帰ってくるのを待ってられないわけですよ。父がご飯を作るようになって、父が面倒を見る形です。そういう意味では、家族は母1人のことで全部、動きが変わってしまったのです。それが逆に、いろいろなことをやったおかげで、今は平和に暮らしているのかな。それぞれが、頼らないで生きていけるといところです。

私はけっこう遅く生まれた娘なので、父は今年80歳なのです。やはり父は危ないです。何か匂うなと思うと、フライパンが火をかけたままです。オール電化にしようかなと、弟と相談したりしました。ですから、夕飯だけは一緒に食べるようにしています。後はいつどうなるか分からないですから、具合が悪そうかどうか、チェックは顔色を見ています。私がうちにいるときは食事を一緒にして、というか、作ってくれているのですけれど(笑)。Qさんと一緒にすよ「いいね、娘さんと一緒に」でと。彼は「死ぬまで子供の面倒を見続けなくてはならない」と言っていますけれど。私は、父がいるから、いるという存在だけで多分、お互いにけっこう心強いのかなと思ったりしますね。

(真野) 今は非常勤のお仕事をされていますが、仕事を選ぶとき、お父様のことを意識されることは多いですか。

(R) 父のことは全然考えていなかったのですが、母が何度も死にかけて大変だったのです。ね、介護とか看護とか病院のこととか。そうすると、非常勤のメリットは、その時間さえあればいいだけなのです。病院を抜け出して仕事に行くと、2時間だけで帰ってくるからというのができるのです。ですから、その時間だけはだれかにお願いして、学校は4時ぐらいには終わってしまうので、夕食の世話などはできるわけです。朝もそんなに早くないです。ですから、介護とかサポートをするうえでは、私の仕事は非常に動きやすかったのです。だから、ほとんど休まないで看護も介護もしていました。ただ、穴を開けると次がない仕事ですから、くびにならないように契約を更新してもらえようと気を遣いました。

(直井) では、お父様のことでというよりは、お母様の看病のときに大体そういうライフスタイルができたのですね。

(R) そうですね、ええ。あるいは、もう、しょうがないですから、弟に帰ってきてもらうときもありました。弟は正社員ですから、年休を取って2日間だけいてもらうとか。ですから、そういうことで、看護とか介護とかですね。ただ、父はちゃんと勤め上げて年金も結構な金額をもらうので、やれますけれど、私みたいな立場のものは年金はどうなるんだろう、保険もないで、どうやって生きていくのかな、とは思っています。

(真野) 例えば、今後お仕事を探される場合においても、お父様のことがありますので、ある程度その辺を意識した形で、夕方は一緒に食事ができるような仕事を探されるとか、そういうことになりそうですね。

(R) 最近はそうも言っていないのです。固定給でもらえるわけではないですから、ちゃんと収入をどこからか得て来なくてはならない。正社員の話もないことはないのですが、県

外だったりします。そうすると、やはりそこは、父のことがネックなので、お断りせざるをえないです。ですから私は、正社員にはならないけれども、例えば、週5日間だけそこに行くのはいいと、そして週末は帰ってくるよ、ここが拠点だよということにして、父に、自分は捨てられたと思われないようにしたいなと思っています。弟たちが帰ってくることは多分ないし、また弟たちのところに父が行くことはないので、私はずっと最後まで彼のそばに形だけでもいたいと思うのです。

(真野) ありがとうございます。それではSさん、お願いいたします。

(S) 私は1人で暮らしています。実家のほうに両親と弟夫婦と、その子供2人と暮らしているのです。両親は全然健康で、今のところ何の心配もなく、もし何かあったとしてもお嫁さんがいてくれるという安心感があるのです。今のところは何も、両親の病気とかあまり考えたことはなかったです。反対に、親のほうが私の心配をしてくれているみたいで、老後どうするんだと(笑)。親のほうに、私がかえって心配をかけていると思うのです。父親は70歳ぐらいなので、これから心配は心配なのですけれど、ほかの同年齢の方に比べると元気です。だから、あまり考えたことはないですね。

(真野) ありがとうございます。Tさん、いかがでしょうか。

(T) 私は、両親と自分で3人暮らしなのですが、父親が4年前に、ちょっと一時期病気になったのです。父親は運転手をしていたので、一応自分の中では65歳まで働きたかったようですが、62歳のときに辞めてもらいまして、今は年金で生活しうちにいられています。辞めてから、月1回通院して、畑仕事をしたり、自由気ままにやっているみたいです。母親はまだ元気に働いています。

(真野) これから、ご両親が日常のことをやるのにいろいろ支障が出てきたりされたらどうされますか。

(T) 一応、祖父母が生きていたときに、祖母から、高校に入ったときから全部夕飯をやりなさいと言われていたので、今も仕事に行く前に下準備とかして、焼き魚だけ焼いてもらうとか、お肉だけ焼いてもらうとか、ほかのものは全部作って冷蔵庫に入れていく状態なのです。あと、本人が気が向いたら、父が自分で何か作っているぐらいで、一切、食事のこととかは心配ないと思うのです。

(真野) 当面お仕事を続けていくうえでは、ご両親の健康状態の心配はあまりないですか。

(T) 全然心配はないです。みんな携帯を持っていますので、何かあったら連絡が取れますし。母を父が送り迎えしているから、もし父が都合が悪くて母を迎えに行けない場合は、そういう連絡が入るようにしています。私も毎日、朝は顔を合わせますし大丈夫です。

(真野) これからまだ働いていかれると思うのですが、今後のイメージを、例えば60歳になった後の生活のイメージで、生涯現役で働いていきたいとか。そのぐらいになったら自分の好きなことをやりたいとか、社会貢献とかボランティアに入りたいとか。そういったことを伺いたいのですが、Pさん、いかがでしょうか。

(P) 漠然としたイメージしかないのですが、近い将来、自分でお店を出したいと思っています。去年、うちは商売していたのですが、そこを閉めまして、店舗が空いているものから、希望がかなえば、そこを借りて。家族も一緒にそばにいられますので、そういう形で計

画を進めていきたいと思っております。ただ、自分が60歳になったとき、70歳になったとき、健康面でいつ何があるか分からないということもありますので、例えば1人になってしまったときとか、だれも面倒を見てくれる人がいないのが今の前提ですので、そうなったときの方法、どこかの施設に入るか、もしくは1人でそのまま生きていくのか、そういうことがまだ見えてこないのです。ただ、いずれ考えなければなりませんから、50歳までには何か決めたいと思っています。ただ、それがどういったものかは、まだ分からないのですが。

(真野) 今空いている店舗を使って、何か自分でお店を開きたいということですね。

(P) 自分でというか、まだうちも母親が店をやめて1年しかたっていないものですから、お店で買うだけの目的のお客様ではなく、話をしたいという60代の方が、結構まだ近所にたくさんいらっしゃって、お店をやめても、うちでお茶を飲んだりされる方が多いのです。私がやるなら、利益を追求しないと生活していけないのですが、私がお店を始めるまでに、母や叔母が何かやれるのであれば、そういうコミュニケーションの場所を今のうちに作って、皆さんで来ていただいて、必ずだれかと会話できるようにと思っています。お一人で暮らしておられる方が多いので、そういう面でも少し力になるというか、安心というか、そういうのを地元で、自分たちの地域でできればいいなど、近所の人と話しております。

(真野) ありがとうございます。Qさん、いかがでしょうか。

(Q) 年金というのが話によく出のですが、私は、自分の中では当てにしていない部分があります。いかに今蓄えて、独身なので好きなこともやりつつ、貯蓄もある程度しながら、その貯蓄でどうにか老後をとというような、漠然と、どのくらいお金が必要なのか分からないけれども、年金は当てにしないで、自分の蓄えで老後を、という気持ちです。姉がいるのですが独身です。よくニュースの特集とかで、老人ホームのことを取り上げていますね。私たち二人とも伴侶がいないので、もし自分たちが病気になった場合、姉だったら、妹に迷惑をかけたくないとかあるので、もし自分がずっと独身だったら、こういうところにお金がかかるかもしれないけれども行こうかという話はします。やはり、人に迷惑はかけたくない。あと、今働いているところが不動産業なので、私が独身ということも分かっていて、奥さんが「あなた、ここで今のうちにアパート経営のノウハウを学んで、あなたも将来はアパート経営をしてみたら？小遣い程度にはなるわよ」というアドバイスを受けております。

(真野) そのあたりはいかがですか、検討されていますか。

(Q) 今までは漠然と食べていくためにという感じで、親と一緒に暮らしているので、独り暮らしでもありませんし面倒を見てもらっているところもあるので、小遣いぐらいはという気持ちで働いていました。けれども、何かそういう言葉をかけてもらってから、そうだな。そうすると、また明日から働く張り合いも違ってくるかなと、最近思うようになりました。

(真野) お仕事の将来のイメージはいかがですか。

(Q) ずっと何か働いていたいとは思いますが。やはり、働いているからこそ休みがあって、休みがあったから、また明日から働こうという気持ちが出てくるというのが分かってきました。毎日が日曜日でも、何か寂しいものだなと思います。最近、この年になって思ってきました。若いころは「ずっと休みだったらいいのに」なんて思っていたことが、休みがあって働いてというのが、健康的なことなのだと思うようになってきました。

(真野) Rさん、いかがでしょうか。

(R) 死ぬまで元気でいたいというのは、亡くなった母を見ていて強く思います。長生きしても、病気で長生きするのであれば、いろいろなところに負担が行きますし、もちろん面倒を見てくれる人は今のところ存在しませんから。そう考えると、周りの人たちは、仕事を探す前に、結婚相手を探せという話もあるのですよね。それで、すべてクリアされるだろうというわけですよ。将来のこともお金のことも、相手さえ見つかってうまく結婚さえできれば、相手が働いてくれて、相手の年金がもらえるということですよ。

でも、私にはその選択肢はないのです。私の仕事は年齢制限が一切関係のない世界です。この先も社員になることは多分ないですし、だてに1人でやっているわけではないと思うので、それをどこかで生かす場所を探っている状態です。40代半ばには、ある程度その基礎を固めたいなと。基礎さえ固まれば、元気なうちはそこにいられると思うので、その中であっちに行ったりこっちに行ったりできると思うのです。ですから、勝負はあと3~4年かなと思ってます。いろいろなアプローチのしかたで自分の居場所を作れるような動きを今一生懸命しています。それができるのであれば、私は一獲千金とか、たくさんお金が欲しいとかではないので、楽しく仕事できて、自分がいる意味が自分の中で見出せればいいので、それだけです。死ぬまで元気で。

(真野) 元気で、そして生涯現役ということですね。

(R) そうですね。ええ、ですから、1人になったとき寂しいだろうなど。父がいなくなったときに寂しいだろうなどと思いますから、女性の友達を充実させて、結婚はしていても、子供がいなくて、結婚は一生しないだろうとかいう友達がけっこういるので、最終的には小さなアパート1軒、1棟借りて、そこで全員で暮らそうかという話もあります。

(真野) 最近、友達どうして住むとか、いろいろな年代の方々と、台所だけ共用にして住むとか、例えば、コレクティブハウスですか、そういうものにも関心がありますか。

(R) 大いにあります。プライバシーを侵害しない程度に、です。女性がいいのは、自分ですべてのことを出来るじゃないですか。男性がかかると、ご飯を作ってくれとか、洗濯してくれみたいなことが出そうなので。女性は基本的には自立したときに強そうなのです。

(真野) ありがとうございます。Sさん、いかがでしょうか。

(S) 私は、どちらかというと怠け者なので、老後は好きなことをしていきたいと思うのです。ただ、好きなことというのは趣味と仕事を一緒に、好きなことを仕事にしながらというものです。ただ、何をどうしようかというのは決まっていないのですが、1人でいるので、周りの人に迷惑をかけたくないという思いはあるから、施設というのもやはり考えたことがありますし、今住んでいるところのそばにケアセンターが入っているから、このままここにいるのも大丈夫かなとか、漠然とですが、そういうことを考えています。あとは、仲間どうし、美容師とか多かったんで、みんなそれぞれ持っている技術を生かして、何か仕事したいよね、立ち上げたいねという話も一応しているのです。まだ、話が出ているだけで、詳しくは決まっていないのですが、やはり何かをしたいのです。専業主婦の人たちも、技術を持ったり、子供が手を離れたりとすると、何かしたいというのはあるみたいなのです。何かやってみたいという気持ちは、みんなそれぞれあるみたいですよ。

(真野) 今、そういった話をされている方々は、お仕事が同じか、年齢的にも同じぐらいの方ですか。

(S) そうですね。30代前半から40代後半の人で、もうお子さんの手を離れた人がいますし、まだ小さい人もいますが、着付けができたり、美容師さんだったり、です。何らかの理由があって仕事を離れている人もいますが、やはり美容の仕事をしたいなというのは聞いているのです。介護の中で出張で美容とかできたらいいよねという話はするのですが、介護の資格がないと、出張で寝たきりのかたの体は触れないとかで、その資格を取らなければいけないとか、そういう話も出ています。そういうので、もう少し煮詰まった話をこれからしていけたらいいかなと思っています。

(真野) もしその仕事が立ち上がった場合、例えば60歳とか70歳ぐらいでも、その仕事は続けられたいですか、それとも、そのときは方向転換されますか。

(S) そうなのですよ。そこがやはりちょっと心配というか、ある程度、体力勝負みたいなどころもなくもないと思うのです。そうなったときに、私は何歳までどうやって仕事をしているのだろうという不安は持っています。店舗とか構えて、ある程度、土台を作って、あとはオーナーになってお任せするというのもあるのかなとも思っています。

(真野) Tさん、いかがでしょうか。

(T) 仕事はずっと続けたいと思いますし、年金は当てにしていらないのですが、とりあえず厚生年金で、あと2~3年かければ達するので、それまでは厚生年金のあるところまでと思っています。一応、ヘルパー2級なのですが、多分、今年の後半あたりから、ヘルパー2級が廃止になると思うのです。ですから、来年の1月ごろに介護福祉士の国家試験を受けて、それからまた実務を積んで、ケアマネジャーのほうに進んで、多分、福祉関係の仕事からは離れないと今のところ思っています。老後のことなのですが、やはり友達にも結婚していない人がいるのですが、そこは農家なので、その一角を借りて、みんなで共同生活という計画は立ててあるのです。

(真野) もう進めていらっしゃるのですか。

(T) というか、その土地を提供してもらって、両親が他界したら、今住んでいるところの土地でも何でも売ってしまって、そちらに引っ越してもいいかなと思っているのです。それは多分、これから20年ぐらい先の話になります。だから、とりあえずみんな手に職をとということで、それぞれ整体師の資格を取ったり、人に使われるのではなく、自分たちでやっていけるという方向で、30代後半から一気に動きだしたのです。自分の中では福祉関係でとりあえず段階を踏んでやっていきたいなという、小さな目標はあります。

(真野) 60歳、70歳ぐらいになったときのイメージは、いかがですか。

(T) 今はまだ自分が健康なうちは体力を使えるので、それまでにケアマネジャーの資格を取って、今度は相談員みたいな形でやっていけば、年齢的に話し相手とかできるので、そんなに体力は使わないと思うのです。だから、そっちの方向に進むためには、まだ元気で体力もあるうちに、全部身に着けるものは身に着けて、資格も取って、というつもりなのですが。

(直井) 先ほどおっしゃった、農家で共同生活をしようというお話しのお友達というのは、いつの方ですか。

(T) 高校3年のときの友達です。どうしても中学、小学校となると、会う機会がだんだん少なくなっていくって、あと、結婚したりするとやはり離れていくというのがあるのですけれど、どうしても高校のときの友達は、いちばん最後に、友達づくりじゃないですけど、いちばん思い出も深いし、そういう友達がけっこう多いですね。あと、仕事関係の友達がどんどん広がっていています。

(真野) 皆さんいろいろ状況等は違うと思いますが、独身であることのメリット、デメリット等、お感じになっていること。それから、独身でいらっしゃるという立場で、国など公的なところに対して、こういう制度にしてほしいといった要望等ありましたら、お伺いしたいと思います。Pさん、いかがでしょうか。

(P) 独身であることのメリットは、時間と、お金はそんなに持っていないのですが、自分で使えるお金を自分で決めて使えるということです。私は幸い同居ですので、そんなに生活費もかからない、そういう面ではすごく助けられています。

デメリットは、あまり考えたことがないのですが、今ではなく、将来のことに不安というのはすごくあります。既婚者の方から、いろいろうるさく言われたりとか、何か「どうするんだ、どうするんだ」みたいなことを聞かれることもありますので、そういう場合は、何も考えていないわけではないので、それなりに対処するつもりですと言います。ただ、分かってくれる人には一生懸命、100%の力で説明するのですが、人の話をあまり聞こうとしないで、「どうするんだ、どうするんだ」という人が多いので(笑)、そういう人にはちょっと、申し訳ないですが適当にしています。

(真野) 将来の不安というのは、どのような不安が。

(P) 年を取って、面倒を見てくれる人がいればいいのですが、そうではないとき、お友達どうして、Tさんみたいな、そういうプランが今はあるわけではないので、やはりそういう場合は施設に入るとかですね。あとは年金の問題もあって、私たちのときには本当に全く期待できないのです。自分のお金の問題ですね。所持金がどれだけあるかということで、金銭面のこともすごく不安です。

(真野) これまで、例えば公的年金保険とかに加入してこられましたか。

(P) はい、掛けてきました。

(真野) ご親族の方に、今のうちからお願いしやすいように心掛けておくとか、そういう話も聞くのですけど。

(P) それの武器となるものが今のところまだ成立していないものですから。面倒を見てもらう代わりに何かという形があればですが、そこまでは逆に遠い感じがするので、親兄弟とはまた違うので、それだったら本当に他人様にお世話になったほうがいいのではないかという考えもあります。うちは親戚も少なく、1年に1度、会うか会わないかです。

(真野) そういう意味では、自分でやっていかないといけないという感じですか。

(P) そうですね。そういう面では、あまり不安はないのですけれど、誰かとかかわってということは、ただ、健康面と、あとは貯蓄の問題とか、そういうことは結構、不安です。

(真野) あと、今の社会保険の制度とか、国や県に、こういう制度にしてほしいとか、何か要望はありますか。

(P) あまり私も詳しいことを勉強していないのと、知らないことが多いので、家族を持っているかたなり、独身の人なり、国の制度に対して不満はたくさんあると思うのです。ただ、私にとっては、制度が分かりづらいのが一番の不満です。40歳になったときに介護保険の納付書が届いたりして、ちょっとびっくりという感じです。もう私もそんな年なのだなと思うのですが、今から払うのかというような、ただ単純な不満だったりするのです。でも、今から払わなければいけない理由を、もっと簡単に私たちに説明してほしいのです。

あとは、高齢化社会で老人がたくさん今から出てきますよね。そうなったときに、私たちはどうなるのだろうかとか、分からなすぎて質問しようがないことがたくさんあります。分かっている方は分かっていると思うのですが、普通の凡人の私にとっては新聞を読んでも分からない用語がいっぱいあって、それ以上追究する気にもなれないという感じです。国民年金は払わなければいけないのでしょうか、みたいな形でも、私たちが一生懸命働いて払った保険料が一体どんなことに使われているかというのと、とても残念な結果だったりとか聞きます。そういうのが納得できないので、その辺がもっと透明感のあるように、誰にでも分かるようにして欲しいなというのがあります。

(真野) Qさん、いかがでしょうか。

(Q) メリットは、自分の時間がたくさんあることです。自分を犠牲にして何かに費やすということがないのがいいというか、毎日生活する中で、それが幸せなことなのかと思います。デメリットで思うことは、やはり40代で1人していると、「自由気ままにここまで来たのね、何も苦勞せず」と思われがちなこと。現にそうなのですけれども、「気楽にここまで来たのだな、この人は」と思われているのかと、人と話をしていると、ちょっと節々に感じように思います。だから、そういうときは自分から「まだまだ世間知らずなので」とお話をさせていただくと、この人もちゃんと分かっているのねと(笑)、そういうところがあります。

(真野) 国の制度とかで、独身である立場として、変えてほしいとか、そういった要望事項はありますか。

(Q) 40代で中高年層に入っているのですが、ここがおかしいのではないかと、こうして欲しいとか、まだピンと来ていないところがあります。父親が年金をもらっているな、毎月もらっているのだなという感じですね。自分がまだ勉強していないところが、もうちょっと、本当は、普通の人だったらこの年になっていたら、もう少し勉強するのもかもしれないですけれども、まだそこに至っていない感じです。

(真野) Rさん、いかがでしょうか。

(R) やはり私も、メリットは、自分のためだけに、リスクが多い分、自由だということです。ただ、そのせいで、私みたいに9時5時の仕事をしていない人間は、今日は何もないから寝ていられるとか、いつ起きなければいけないとか、そういう縛りがない分だけ、非常に甘いところを自分で律していかないといけないのです。朝早く起きてご主人にご飯を作っている方を見ると、大変ですね。5時だから帰らなきゃねとか、夕食の用意をしなくてはいけないねとか、私は別に5時だろうが8時だろうが関係ないので、そうした方々には申し訳ありませんというふうに反省するのです。

デメリットは、すごく大きい交通事故を自分で起こしたときに感じました。自分のことをや

ってもらおうのが、高齢の父しかいなかった。彼にやらせることがすごく不憫で、頼めなかったのです。事故を起こしたところが遠かったので、頼れる人間は誰もいなかった。保険証を持ってきてとか、どこの支払いをしてもらおうとか、だれに電話をしてもらおうとか、自分の代わりに貯金通帳からお金を下ろして支払いをしてくれるとか、非常に、身近な人間がいないということを感じました。一人でいることが身にしみましたね。それがデメリットです。

年齢が高いからとか、若いからではなく、突然来る現実というのがあり、妹とかいないし、弟も遠いですし、孤立してしまいました。ですから、そういうときに、例えば行政みたいなものが、一時だけでも自分が動けないときだけ、駆け込み寺みたいなシステムがあったら、ありがたいと思います。母が50代前半で倒れて、亡くなるまで16年ですが、老健施設は一切アウトだったのです。年齢が若かったので、50代前半で倒れた人間を面倒見てくれる施設というのはないのです。病院も違いますし。書類上はいろいろ制度があったらしいのですが、実務に当たる人がそれを教えてくれなければ、私たちは分かりません。後から聞くと、いろいろな制度があると、全部過ぎてから出てくる。当事者は時間がなかったり、どこに行ったらいいか分からないのです。今だったらネットで、どこが助けてくれるとか出てくるシステムとか、開発されていないのでしょうか。

(真野) ありがとうございます。Sさん、いかがでしょうか。

(S) 私は、1人で、時間的にも好きなように、だれにも気兼ねすることなく生活はできますけど、1人で生活しているので、全部、収入を自分の好きなものに使えるわけではないので、それを切り詰めながら自分の好きな方に回すというか。そういう感じで、家にいて、もう少し生活費が浮くとか、収入は全部お小遣いにはならず、みたいな感じで、けっこう切り詰めた生活をしています。でもその分、自由なので、それはしょうがないのですけども。デメリットは、やはり将来の不安というのが、いろいろ計画は立てながらも、あります。将来が心配なことで、それが一番ではないかと思います。

(真野) 美容師の関係の方々と、何か立ち上げようということでしたが、そのあたりでは。

(S) そうですね、それも、やはり何歳まで仕事できるかというのがありますし、何も不安はないということはない。何に対しても、少しずつ不安はあるのですが、その中でどうやって生活していくかという感じですから。

(真野) 国や自治体への要望はありますか。

(S) 今まで平和にというか、何事もなくここまで来られたので、これとって改めてというものはありません。これから大変なことや心配事が目の前に来たときに、多分改めて焦るというか、勉強する感じなのかなと思っていたのです。でも、今回、いろいろな人の話を聞いて、やはりちょっともう少しいろいろなことに目を向けないといけないなと思いました。

(真野) Tさん、いかがでしょうか。

(T) メリットは、やはり皆さんがおっしゃったように、自由気ままな時間があるということで、両親のことも心配しないでいいというのもあります。ただ、デメリットとしては、自由気ままな時間がある分、たまに落ち込むというか、寂しくなるというか、だれかに頼りたいなと思うときも、何年かにいっぺんぐらいはあるのです。だから、そのときに、そばに誰かがいてくれれば、また違うのかなど。頼れる人が、友達とかではなくて、本当に頼れる人がいたら

いいのかなと思うときもあります。けれど、自分の中では楽天的な性格なので、将来のこと、老後のことまで今考えているわけではないですし、考えても、どうにもなるわけではないかなと思うので、本当に 2~3 年先のことしか今は考えられません。もうなるようにしかならないと思っています。

ただ、行政に関しては、去年の初めごろから、厚生年金とか介護保険が上がるという話があったのですが、突然 10 月のお給料から天引きされたときに保険料の金額が増えていたのですね。だから、そういうのは、今月から多めに引きますとか、はっきり、いつ引くということをお願いしたいです。だから、そういうのはちょっと困ります。政治家の人たちが、国会中継とか見ていると、居眠りしていますよね (笑)。それで、どうしてあんなにお給料をもらえるのだろうかとか。そういう上の人たちのお金を削って、貧しい人たちに回した方がいいのではないかと、つくづくテレビを見ていて感じます。

(5) 仙台第2回調査

■日 時：平成18年1月14日（土）午後2時30分～5時

■場 所：KKRホテル仙台

■参加者：40歳代未婚女性・正規従業員5名

（真野：司会） お仕事を中心としたいまの生活や将来の生活設計についてお伺いしたいのですが、最初に、皆さんに簡単な自己紹介をお願いしたいと思います。まず、年齢については40代前半とか後半とか、おおよそで結構です。また、いまどのようなお仕事に就いていらっしゃるのか、お聞かせいただきたいのです。

（U） 40歳になりました。いまの仕事は、金融関係にずっと携わっています。住まいは、家族と一緒に同居しております。

（V） 私は42歳になりました。仕事は建設関係に勤めており、主に営業事務で、入札関係などの仕事をしております。両親と同居しております。両親が病気をしたので、心配な面があります。私自身も独身で頼る者がいませんので、ちょっと心配なところがあります。

（W） 私は41歳になりました。でも、自分では41歳という感覚が全然なく、若いお友達も多いので、気分は20代ぐらいです。私も親と同居なのですが、世の中ではパラサイトシングルなどと言われていますが、まさにそのとおりです（笑）。家族や親戚、友達にすごく恵まれておりますので、将来の不安はありますが、いまはとても幸せです。医療関係の仕事をずっと長くしておりますが、将来やりたいこともありますので、ほかの資格にもチャレンジしております。

（X） 私も41歳になります。仕事は、去年の11月に替わったばかりで、工事会社で総務経理関係をやっております。

（Y） 私は、45歳を超えております。仕事は、1年ほど前に替わったばかりですが、現在、タクシー会社で介護の仕事をしながら、普通の流しもしています。実は、老後については、自分なりにかなり現実的に受け止めていまして、就くべき仕事は何かと考えたときに、高齢化社会に即した仕事であり、自分もいずれその中に受け入れられていくようにと、介護を強く意識して、この仕事に転職しました。

（真野） お仕事に関して、もう少し伺います。いままでどういったキャリアでお仕事を続けられてこられたのか。転職のご経験をお持ちの方もいらっしゃると思うのですが、お仕事をどのように見つけられたのか。その辺りをお伺いしたいと思います。

（U） 私が専門学校を出たころは、就職難だったので、しばらく家の仕事を手伝っていました。そのうち、いまの勤め先で求人があって、部長のほうから「明日から来ないか」と声がかかり、父からも「行きたいところもなければ、すぐ行きなさい、お小遣いをやるような年齢でもない」と言われて、すぐに決まってしまったのです。そのころはいまのようにニートとか、そういったことも言われていませんでしたので、勤めに出ないで家にいることが恥ずかしいという雰囲気でした。

（真野） 部長さんが学校へじきじきに来られたのですか。

（U） いえ、家に来たのです。父から行きなさいと言われてしまい、そのころは反抗もでき

ずに、次の日からだった記憶があるのですが、勤め始めてそのままずっと、現在に至ります。

(真野) いまお勤めの会社の部長さんがおうちにいらっしゃったというのは、学校か何かの紹介とか。

(U) いえ、部長が地元の人で、もともと父と顔見知りだったので、「お宅の娘だったら間違いないでしょうから、もし就職が決まっていなければ、うちの会社も人が足りないので、すぐに来てほしい」という話だったのです。希望していた仕事とは、ちょっと違いましたけれども(笑)。

(真野) それでは、有無を言わずということで、お父さんの手前もあるでしょうから。

(U) そうですね。勤め続けられなければ、別に転職してもいいという話だったのですが、なぜか転職を考えながらも二十数年経ってしまい、いまだにおります。

(直井) 居心地がよかったですでしょう。

(U) 居心地がいいわけではないのですが、うちから近いことと、転職の機会を逃したというよりも、将来こうしたい、ああしたいという具体的な希望がなかったことが、その理由です。仕事の中身は随分替わりましたが、そのままずっといます(笑)。

(真野) お仕事の内容が、例えば営業や事務とか、いろいろ替わられたということですか。

(U) そうです。まず販売員のようなことをやって、それから電算関係を長くやって、そのあと金融関係を10年ぐらいやっています。金融関係では、窓口とかいろいろ替わっています。

(真野) かなり幅広いお仕事をされていますね。

(U) そうですね。いまは接客もありますし、年齢も年齢なので、別な仕事も増えています。

(真野) 職場の中でお仕事をいろいろ替わられているわけですが、替わること自体どんな感じですか。

(U) 部署が替わると、一から出直しです。総合的な業務を扱っているところに勤めているので、部署ごとに仕事の中身が全然違うのです。ですから、初めから教えてもらわないと分からないことが多いので大変です。

(V) 私も何回か転職を経験しております。専門学校を卒業してから、父の知人の紹介で、某自治体の臨時職員として半年勤めたあと、電力供給会社に一時的にアルバイトで勤めました。その後、主に電力供給会社の工事を請け負う会社に、紹介によって転職しまして、主に総務関係の仕事で5年勤めました。そこを退職したあと、半年ぐらい求職活動をしていたのですが、いまの建設コンサルタント会社が、新しく支社を出すにあたって、事務員を募集しており、友人の紹介で採用されて、それから15年経ちます。ただ、支社のため、営業事務が主な仕事なのですが、支社内の事務全般を任されてやっております。

(真野) では、けっこう幅広いので、大変ですね。

(V) そうですね。そして、建設業ですと繁忙期もありますので、そういった時期になると、やはり残業も多くなる一方で、残業がないときは全くないので、そのギャップが激しく、そこがちょっと大変といえば大変です。

(真野) 最初、短期のお仕事をされましたが、それは、何か他にされたいお仕事があつて、変わったのですか。

(V) その当時、自分は一体何ができるのか、何がしたいのかははっきりしなかったのです。

学校は出たものの、どうしようという感じだったのです。それではだめだと思いまして、臨時で半年間だけやってみないかと言われてましたので、事務補助ということで入りました。そこは建設関連のお役所だったのですが、それからずっとご縁がありまして、建設業に携わるようになりました。

(真野) いまのお仕事をご紹介された友人の方は、かなり親しい関係なのですか。

(V) そうですね。高校時代の友人で、友人もトレースをやっていまして、いまの会社の外注先である設計事務所でアルバイトをしていたのです。そこで、仙台に支社を出すけれども、事務員を探しているという話を、たまたま友人が聞いてきたのです。ですから、偶然、そういったチャンスがあって、すぐに履歴書を持っていきまして、即面接になりまして、採用されたのです。

(真野) 途中、正社員でお勤めになった会社を辞められたのは、何か理由があったのですか。

(V) そこは地元の会社だったのですが、福利厚生面に関しても、やはり友人が勤める全国規模の会社と比べると、見劣りする面がありまして、何となく不満を感じていたのです。それで、5年勤めまして、自分自身もある程度、社会経験を積みましたので、転職するならやはり20代半ばまでだと思いまして、退職して別なところを探そうと考えました。

(真野) 福利厚生は、やはり気になるところですか。

(V) その当時は景気もよかったので、お給料の面に関しても、同業他社の友人に比べて、やはり差があったのです。ですから、自分自身、一步前に出てみようと思いました。

(W) 学校を出てから、やはり就職難の時代でした。本当はイラストレーターや漫画家とか、絵を描くような仕事がしたかったのです。いまはありますけれども、仙台にはその当時、そういった専門学校がなかったのです。そのときに友達から誘われまして、医療関係に入ったのですが、そこは5年ぐらい働いて退職して、また同じ仕事で、別の病院で働くようになったのです。やはり30代過ぎたあたりから、自分のやりたい仕事で、何かをやり遂げたいという気持ちが強くなりました。そのあと、仕事をしながら、あるいは退職して、学校に通っていろいろな資格にチャレンジしています。いまも勉強中で、将来は自営業というか、開業したいと思っています。

(真野) それは、イラストや絵とか、そういった関係ですか。

(W) それとは違います。20代後半から30代にかけて、体を少し壊しまして、そのときに健康にすごく興味を持ったのです。もちろん、医療関係で働いているので、仕事をしながら、いろいろ勉強になっているところもあるので、健康で人のためになる仕事でやりがいがあって、しかも達成感のある仕事をやってみたいと思って、そういう学校を選びました。

(真野) 何回か転職されたということですが、その都度お仕事に就ききっかけは、例えば学校の紹介とか、知人からの紹介とか。

(W) 知人からの紹介が一つで、もう一つは求人情報誌などを使って自分で探しました。

(真野) 知人とおっしゃいますと。

(W) 中学からの同級生から誘われました。

(真野) 転職されたときに、前にご経験があるということはかなり有利ですか。

(W) 有利でした。ただ、このぐらいの年齢になると、有利ではないですね、幾ら技術があ

っても。雇う側にとっては、若く安く使ったほうが良いと思います。医療関係だと、若い子のほうがお給料も安いですし、見た目も良いのではないのでしょうかね（笑）。

（真野） 医療サービスを受ける側にとっては、ベテランのほうが技術もあるでしょうし、安心して受けられると思います。

（W） 医療関係といいましても、60歳～70歳になってもできるような仕事でもありませんし、あと、頂点があるというか、それ以上の仕事ができないわけです。そういうのが、私は嫌なのです。

（真野） 頂点というのは。

（W） 結局、医者ではないので、医者と同じように治療ができません。一定の水準まで達してしまえば、それ以上を目指してもその上がないということです。ということは、向上しようと思えば、自分で努力して、やはり上に上にと上られる仕事が良いのです。そういうことをいろいろ考えて、学校に行っています。

（X） 私はいまの職場で5つめです。自分でも、実際にこんなに転職するとは思っていませんでした。最初は短大を出まして、8年間、金融関係の会社に勤めておりました。辞めた理由は、その仕事が自分に向いていないという気持ちが積もり積もって、結局辞めてしまったということです。

辞めたあとに資格を取ろうと思ひまして、学校に通いながら官公庁のアルバイトを2か所しました。30代前半は、体を壊してしまい、あまり調子がよくなかったため、官公庁のアルバイトでつないでいました。

30代半ばになって、不安定な生活はやめようと思ひ、電気設備関係のコンサル会社に契約社員で、体の調子を見ながら勤めていたのですが、去年11月に、会社の事業縮小のため辞めて、いまの会社に転職しました。

（真野） お体のほうは、やはりフルタイムで働くことは、かなりしんどかったのですか。

（X） そのときは腰だったため、座って何時間も耐えられない状態でした。働きたいという気持ちはすごくありましたが、半年に1回ぐらいずつダウンする状態だったので、体の調子がよくない一方で、やはり不安定なため、このままではいけないという葛藤がありました。

（真野） 官公庁のお仕事はどのようなものでしたか。

（X） 官公庁ですと、期間が決まっているのです。アルバイトで何か月、そこで切れると、別のところに行かなければならないとか、一回休まなければならないというルールがありますので、収入がそこで途切れるわけです。

（Y） 大学がこちらだったので、18歳でこちらに来ました。大学は法律関係の学部だったので、卒業して法律関係の事務所に勤めました。すごく残業が多く、深夜12時までにはざらでした。3年ぐらい勤めたのですが、やはり人に使われることがいやだったので、資格を取って自分で仕事をするに限ると思ひ立ち、残業のない会社に勤めながら、夜勉強しようと思ひを立てました。そこで、通信販売関係の会社に勤めて、資格を取るはずだったのですが、残業がなくなると、今度は友達から声がかかって、遊び歩いているうちに、資格を取ろうという志が失せてしまいました（笑）。

30歳ぐらいのときに、その会社が倒産してしまったのですが、やはり法律関係の仕事をした

かったので、そのあと法律関係の事務所に勤めて、10年以上おりました。ところが、ちょうど1年ぐらい前に母が病気になったのです。母の介護が必要になって、1か月ほど休みを取りたかったのですが、そこは少人数のため、それができないので結局辞めました。実家に帰っても仕事がないので、何か資格を取ろうと思い、それで介護関係の資格を取ることにしました。その第一歩が、ヘルパー2級という、どなたでも取れる資格なのですが、その勉強をしながら、母の介護をしていました。

その後、母の状態が安定してきたので、こちらに戻ってきました。介護関係の資格は、資格を取る上で、実経験が必要になるので、これから先、そういう資格を少しずつ取って行って、できれば仲間と会社を起こして、自分たちでやりたいと思っております。

(真野) お母様の介護がある程度落ち着いてから、いまの介護タクシーのお仕事を始められたのですか。

(直井) 運転は、以前からやっていらっしゃったのですか。

(Y) もともと普通免許は持っていたのですが、介護タクシーをやるにあたって、会社の援助で二種免許を取らせていただきました。

(直井) 実際は、介護の要請はどれぐらいの頻度であるのですか。普通のお客さんを運ぶのと、介護関係のお仕事と、どれぐらいの割合ですか。

(Y) 介護タクシーの要請はけっこうあるのですが、皆さん予約を取られていて、病院に行かれる時間帯がすごく似通っているので、朝できるのは3本が限度です。介護タクシーの乗務員がけっこうたくさんいて、それで対応している状況です。あと、病院が終わったときにお迎えに行くのが仕事の一つになるのですが、それも時間帯が似通っています。それから、院内介護といって、病院に着いてからも一緒に付き添って、会計までしてあげるケースがたまにありますが、それはそんなに数が多くないです。結局、朝の介護が終わって、帰りのお迎えに行くまでの時間が空いてしまうので、その間は普通のお客さんの対応をしています。ただ、割合といわれると、ちょっと分からないです。

(真野) お母さんのお体の具合が悪くなったので、法律事務所を辞められたと伺ったのですが、例えばもしご兄弟がいらっしゃったら、共同でなさる場合もあり得たのですか。

(Y) 私が身軽なものですから。姉妹はいますが、みんなそれぞれ家庭を持っていますので、結局これも宿命かなという感じなのですけれども。

(真野) ご姉妹はお近くにいらっしゃるのですか。

(Y) 姉が近くにいる、妹が東京方面にいますが、母の介護をするために、なかなか田舎に帰れないではないですか、みんなやはりそれぞれの生活があるので。

(V) うちの母も入院したあと、月に1度通院していたのですが、妹は家庭を持っていて、子供もおりますから、どうしても独身である私が付き添って行かなければならない。それから、大きな病院ほど平日しか診察がないので、どうしても会社を休まなければならない。会社に休みたいと言出しにくいとか、いろいろありました。

(真野) 職場で休みを取りにくいということですか。

(V) はい。

(W) しょっちゅうは取れないですね。

(V) 入院したときに、上司にも相談して、通院のため月1回休ませてもらいたいと申し出たところ、最初は分かったと言うのですが、だんだん忘れるのですよね(笑)。「どうしていつも火曜日に休むの?」なんて言われたりすることもあって。

(真野) 続いて、いまの生活に関しまして、例えば介護が必要なご家族の方がおられるとか、そのあたりのお話を伺わせていただきたいと思います。

(U) 父はもう他界して、母と姉と暮らしております。父が亡くなる前に5か月ほど入院しましたので、週5日ぐらい病院に行っていました。本人もよほど具合が悪くならない限りは、「来るな、仕事に行きなさい」と言っていたので、休みは取らず、そのかわり残業はしないで病院に通っていました。

私しか運転免許を持っていないので、何かあったら乗せていかなければいけない。田舎に住んでいますので、バス停が遠く、結局タクシーを頼むことになってしまうのです。ただ、職場では、やはり家庭を持っている人が多いものですから、家族の具合が悪ければ休んだり、近所の葬式などでも休んでいますので、家庭の事情であれば休みは取りやすいです。あと、出産や介護の休職制度もできていますので、介護のため長期で休みを取った方も何人かいます。ですから、もし母の具合が悪くなったときには、休みを取りたいと言えば取ることはできます。

(V) 私は、両親と弟と4人暮らしです。弟が小さいときから病気を持っていて、ずっと母が面倒を見てきたのです。しかし、母も高齢になって、弟の身の回りの世話をするのが大変なので、ヘルパーさんを頼むことにしたのですが、今度は母が倒れてしまいました。そのあと母も、介護の認定を受けましたので、いまヘルパーさんに毎日来てもらっています。

しかし、後々は院内介護という問題も出てくると思うので、私が付き添えるときは付き添いますが、妹も家庭があるし、家族だけの力では限界がありますから、ヘルパーさんとか、公共の制度を利用して、助けてもらえるところは助けてもらわなければならないと、家族と話しているところです。

(真野) 妹さんは、お近くにお住まいなのですか。

(V) 妹は近くいて、随分やってくれるのですが、子供がまだ小学生で小さいものですから、やはり子供優先になります。いまは上司も替わりまして、その上司も病気のお嬢さんがいらっしやるので、そういった面では理解があります。

(W) 私は5人家族です。祖母が94歳と高齢なので、やはり入院したことがあるのですが、勤めている病院が少人数のため、先生よりも、一緒に働いているスタッフに申し訳なくて、ほとんど休めませんでした。毎日夜、病院に通った経験があります。

また、30代後半に資格を取ろうと思って、仕事を辞めて、学校に行く予定を組んでいたのですが、待っていましたといわんばかりに、父をはじめ家族が入院しはじめたのです(笑)。そのときは、イチゴ農家なので、家のこともやらなければいけませんでした。

兄と弟がいますが、2人とも県外にいるので期待できません。でも、親戚とはすごく仲がいいので、そういった面はすごく頼れます。

(真野) ご親戚の方のお加減が悪くなった場合は、逆に。

(W) そういう気持ちはあります。自分に余裕があれば、病院の送り迎えや、洗濯をしてあげたり、お互いさまなので。

(直井) 娘さんが残られて、男の兄弟が外へ出るというケースが多いのですかね、昔と違って。

(W) 多いですね、最近。兄は転勤族で、もともと1か所にはいないので、仕方ないですね。いいのです、兄は外からお金さえ持ってきてくれれば(笑)。あとは甥っ子に見てもらおう。いまのうちに貢いでおいて、後で返してもらおう(笑)。でも、冗談です、自分の甥や姪は無条件でかわいいわけですから。絶対私の面倒を見てねとか、本心からそこまでは思っていない。

(真野) ヘルパーとか、公的な制度を利用することはお考えですか。

(W) できれば使いたくはないですね、在宅のほうは別に嫌ではないので。実は私もヘルパーの資格を持っていて、研修に行ったときに思いましたが、そういう施設には、できれば入れたくないというのが本心です。何か流れ作業みたいで、嫌だったのです。自分に余裕があれば、家で私が見ますが、やはり限界がありますので、そのときは頼みます。

(真野) お仕事を選ぶときに、もしご家族に何かあったら面倒を見なければいけないということ意識されていますか。

(W) できる仕事が決まっていますから。勤務地は、なるべく近いところだと思っています。だから、そのために開業して自分で仕事がしたいと思うのです。

(X) 私の家族は両親と姉で、4人で住んでおります。姉も私同様、未婚です。女3人は、いまのところ健康に近い状態ですが、父は呼吸器系が弱いので通院しています。去年、2~3週間、入院しましたが、現在は退院して、通院にも付き添いが必要な状態ではありません。

(真野) 将来、もしご両親に介護などが必要になられた場合は、お姉さまと分担されるおつもりですか。

(X) 仕事を持っておりますと、この週は絶対だめということがありますので、分担することになると思いますが、先々、やってみないと分かりません。

(Y) 田舎に両親がいますが、母の病気のほうは安定して、通院はしていますが、送り迎えは父がしています。父は糖尿病で、インシュリン注射を打って生活していますが、体調はいいようです。

(真野) ご両親に何かあれば、Yさんのほうに。

(Y) そうです。例えばポリープの手術をしたとかそういう小さいことは、退院してから言っよこす親で、「田舎に帰って仕事を探してもいい」と言うと、「こっちには仕事がない。都会にいなきゃだめだ」と言うような親なので、遠慮しているわけではないのでしょうけれども、「私たちのことは大丈夫だから、あなたは自分のことをやって」と、本当にそういうことをよく言うのです。でも、さすがに母が病気になったときは、かなり精神的に弱ったようで。

ただ、逆に、両親が仙台に出てくることは、年取ってからだと、きついみたいなのです。やはり周りに知っている人もいないし、空気も違うようで、やはり知っている人がいると、たまに遊びに来てくれるとか、そういう気分転換ができるようなのです。ですから、何かあったときは私が実家へ行こうと思っています。

(直井) 介護タクシーだったら、地元でもお仕事がありそうですね。

(Y) あと、なければ、とりあえずヘルパーとしてどこかに勤めるつもりです。田舎でも、施設ができてきて、少しずつ職場が広がっているようですし、「年齢は問わない」と、そういつ

た条件のところはけっこう多いようなので、何かあったときは帰ってもいいと思っています。

(真野) それでは、将来に関するお話を伺いたと思います。まず、今後のお仕事について、例えばいまのお仕事を続けられるとか。それから、60歳以降の生活では、例えばお仕事をずっと続けられるとか、お仕事ではなく、例えばボランティアをされるとか、そういった辺りのお話しをお願いします。

(U) 転職は考えていません。なぜかという、もう勤めて長いですし、それと年齢的な問題、それから、これをしたいという仕事も特にはないのです。周りの人たちを見ている、このまま定年まで勤められれば、勤めたほうが良いと思っています。ただ、うちは農家ですので、将来的に農業をどうしたらいいのかという問題はあります。

近所に、私より10歳以上、上のいところがありますが、いまは、そのいところに機械を操作してもらって、それでお米を出荷している状態なのです。いところが年を取ったあとも、うちのことをやってもらえるのかどうか。その息子も、成人式を迎えたばかりですが、農家はしたくないと言っているようなのです。また、売るといっても、昔と違って、近所も農耕地を増やすことは難しいようなので、どうしたらいいのか。うちの仕事を考えたときには、すごく不安があります。

いまも、農業だけでは生活はできませんので、私が母を扶養していますが、仕事を辞めてしまえば、母の少ない年金だけになってしまうので、定年後も、できれば仕事は続けていきたいと思っています。

(真野) 貯金などのご準備は。

(U) 個人年金に入っていて、早い段階で、受け取れるように設定していますし、それなりに退職金も出るようなので、年金を受給し始めるまでは、それでどうにか生活していくしかないと思っています。

(V) 私も、いまの会社に15年勤めているので、できればこのまま定年まで勤めたいのですが、建設業は先細りなので、実際、早期退職者なども募集していますし、雇用面での不安があります。

定年後のイメージは、まだ全然ありませんが、もし自由な時間が持てるようであれば、何か社会参加できるものとか、生涯できる勉強をやりたいとは思っています。ただ、いまは、目の前にあることをこなすのが精いっぱい、老後に一体お金がどのくらいかかるのか、現実問題としてまだピンと来ないのです。公的年金も、そのころになったらあまりもらえないということも言われていますから、これからどういう貯蓄するのか、考えなければいけないと思っています。

(W) 医療関係は、ほかの会社と違って保障が少ないのです。そういった不安がありましたので、将来独立しようと思って資格を取ろうとチャレンジしてきましたが、このまま仕事を続けていくのか、いま独立するのか、ある程度の年齢になったらするのか、現在検討中です。

(真野) その資格は、いまのお仕事と関連がありますか。

(W) 関連があるといえばあります。整体師の資格を取ったので、一応健康に携わる仕事です。それと、いま、患者さんは、一つだけでは来ないので、ほかに二つとか三つとか、健康に関する技を習得したいわけです。これで治らなければこっち、こっちで治らなければもう一つ

というように、一つでは成り立たないので、そういう勉強をもっとしたいですね。

(真野) 将来的に、60歳以降の生活のイメージは、基本的には働いているということですか。

(W) できればずっと、健康な限り、働いていたいです。

(真野) いまのお仕事でも、生涯ずっと続けられるのであれば、それも選択肢なのですか。

(W) 別に嫌いな仕事ではないので。ただ、自分としてやりがいが、途中で止まっている、そこからそれ以上がありませんというだけです。

(真野) 保障が少ないことがいまのお仕事の問題点であると。保障というのは、年金とかそういうお話ですか。

(W) 年金にしても、給料や退職金も。大きい病院ではないので、そういう保障が少ないのです。幾ら技術があっても、それは期待できないのです。

(直井) 年金は、厚生年金ですか。

(W) それは病院によっていろいろです。あるところと、ないところと。病院側で保険料を半分負担しなければいけませんから、いまは不景気なので大変なわけです。結局は出たくないのが本音です。

(X) 勤めている会社は、できてまだ1年で、この春以降本格的に稼働するので、いまは、まだその一歩手前の状態なのです。ですから、この仕事をずっと続けるかどうか、具体的にあまりイメージはできない状態です。ただ、いまの会社がどうのこうのというよりは、自分の体力と気力が続く限り、60歳を目指して働きたいとは思っています。

(真野) 60歳以降の生活のイメージは、働いていらっしゃるのか、それとも、何かご自分の好きなことをなさっているのか、どちらですか。

(X) 私は、できれば働いています。お金があったほうがいいですし、働くことが好きです。いろいろな困難も、できれば楽しみに変えていきたいという気持ちもありますので、働いていれば、やはり自分に返ってくるものがあると思うのです。もちろんボランティアもいいのですが、ボランティアですと、その辺がぬるくなるという感じがします。

(Y) いまの会社で仕事を始めたばかりですが、3~4年後に資格を一つ取ったら、退職するかもしれません。5~6年後にもう一つ資格を取りまして、その後は定年のない介護関係の仕事で、体の続く限り働いている予定です。

やはり運転というのは非常に気を遣いまして、年を取れば取るほど、きつい仕事だと思えます。自分の集中力や運転技術が続く間と考えていまして、あまり長くやる仕事ではないと考えております。

(真野) 60歳以降は、介護関係のお仕事をされているというイメージですか。

(Y) できれば、東京に、そういう関係の仕事を長年やっている友達もいて、そういう方たちと一緒に、自分たちなりに立ち上げたものを作って、できれば自分の親もそこにいらせていただいて、自分もそこで死んでいくというのが、私の設計なのです(笑)。1人なので、要するにそこまで考えざるをえない年齢になってしまった、ということもあるのですけれども。

(真野) まず資格を取ることが、いま、その準備ということですね。

(Y) そうですね、はい。

(真野) 東京にいらっしゃる方は、どのような方ですか。

(Y) 一度結婚されたのですが、いま、お子さん2人抱えて働いていらっしやいます。

もともと彼女の考えなのです。「東京に来て、やらないか」と誘われたのですが、東京だと、あまりにも親と離れてしまうので、いつでも両親にも会いに行けるような、地理的な位置にいたいと思い、断りました。「東京では、70歳のおばあちゃんでも、すごく元気でケアマネージャーをしている」と、すごく魅力的な言葉もありましたが、仙台でもできるのではないかと考えています。

(真野) 最後に、独身であることのメリットやデメリット、そういったことについて伺いたいと思います。また、行政に対するご要望もあれば。

(U) メリットやデメリットは、別に感じたことはないです。ただ、仕事で、上司から「どうして結婚しないの」と言われることがあります。気にしません。お客様から言われることもありますし、お話ししている間に独身だと分かって、「どうしてなの」と突っ込んでくる方もいますけれども。そういったことを言われることがデメリットといえば、デメリットですかね。生活をしているうえでは、取り立ててないですね。

(V) 私も、デメリットはあまり感じたことはないですね。結婚していると見られがちで、そういう前提で話しをされたりすることは確かにありますが、それは仕方ないと思います。強いて言えば、仕事のことなどで、何か相談したいときに、男性の意見も聞いてみたいということもありますが、それ以外生活をするうえでは、あまり感じたことはありません。

むしろ、自由な時間がありますので、趣味や家族のこととか、自分で配分を考えて動ける点はメリットだと思います。

介護の問題に関しては、少子化ですから、子供に面倒を見てもらうよりも、地域社会がかかわるウエイトが、これからますます大きくなると思います。うちの家庭も、ホームヘルパーさんを利用しているので、そういった制度が一層充実することが、これから生きていくうえで、いちばん重要なのではないかと感じています。

行政への要望に関しては、具体的なものはありませんけれども、介護の問題にしても、やはり家族だけでは面倒を見ることができない状況が必ず来ると思うので、国や地方自治体から、もっと充実した施策が出てくることを期待していますし、子供たちを守るうえでも、パトロールなど地域社会がかかわっていくことが、ますます必要になってくるのではないかと感じています。

(真野) いまお住まいのところで、ご近所とのおつきあいはありますか。

(V) マンションなので、昔ながらのご近所づきあいがやはり希薄なのです。せいぜいあいさつする程度で、家庭の中に立ち入るとか、そういったことはありません。

(W) 私は、デメリットより、メリットのほうが多いと思っています。自分の時間を束縛されるのが大嫌いなのです。夫や子供がいれば、自分の時間を費やさなければならない。当たり前のことなのですが、そう思ったら、私は器用ではないので、人の世話をしながら、自分のことができないのです。そう思うと、自分で好きな時間を有効に使える独身でよかったと思います。もともとあまり結婚する気がなかったもので、独身でいることに満足しています。

お友達の夫婦を見て、ああいうのを幸せというのだったら、私は不幸でもいいと思うような場面があります(笑)。大体の夫婦は、お金や親のことでけんかすると思うのですが、それも長

い人生のひとこまなのでしょうけれども、私はそんな無駄な時間は要りません(笑)。自分で仕事をしていれば、自分の得たお金は、自分の好きなように使えます。でも、相手がいると、相談したり、気を遣ったり、そういうことをしなければいけないわけです。また、相手の親のことを考えなければならない。そういうことが分からないで結婚するから、理想と現実は違うと感ずるのです。私はそれが分かっているので、結婚したくないのです。

(真野) あと、行政に対して、何か望まれることはございますか。

(W) いまのところはないです。自分の体の具合が悪くなれば、こうしてくれればいいと思うこともあるでしょうけれども、いまは、元気で、自分のことは自分で、家族のことも、何かあったら私がしますという感じなので、特にありません。

(X) 私は、メリットとデメリット、やはり両方ともあると思うのです。メリットは、束縛されずに自分で好きなように時間が使えること、家に問題がなければどんどん外に出ている。同じようにシングルでいる友達もいますので、年に1回旅行に行くとか、そういう楽しみ時間も作れます。デメリットとしては、私は兄弟が未婚なので甥っ子、姪っ子がいないのです。やはり、ちょっとほかの方よりも、将来の不安を確実に感ずる面もあります。

友達も、40代のシングルの人がけっこういますので、最近よく出る話しは、年を取ったらみんな住もうという話しです。将来的には、そういったことを考える人がたくさん出てくるだろうと感ずています。

(真野) 同じような年代の独身のお友達と一緒に住む場合に、例えば一軒家とか、いろいろな住み方があると思うのですが。

(X) 広い家だったら一軒家で、部屋別に。でも、そうすると、また役割分担ができてきますよね。それは、どうなのかなど。

(直井) 親みたいになって(笑)。

(X) マンションですと、上下階とか、住み方もまた違います。

ただ、40代になると、やはり将来に不安を持っている人はたくさんいると思うのです。ですから、そういった話が出てくるのだと感ずます。

(Y) 時間が自由にたくさん使えることがメリットでもあって、デメリットでもあると思います。仕事に関しては、その日のことを、もちろんその日のうちにやるのですが、自分のことに関しては、「ああ、今日は疲れた」と思うと、次の日に延ばしても、だれも文句を言う人もないので、自分なりのスタンスでやっていけるということはメリットだと思うのです。しかし、例えば今日はちょっとお酒を飲みたいと思っても、家庭のある友達とは、常につきあうわけにもいかないので、やはりそういった友達と共有できる時間が、実際に少しずつ減っています。それは、やはり悲しい現実だと思います。

将来については、自分である程度の見通しを立てていますし、特に不安に感ずることもないので、あまりにもおおらかすぎるころはあるのですが、独身だからといって取り立てて感ずることはあまりないです。

ただ、独身者は、やはりいままでたくさん税金を払ってきているにもかかわらず、特に制度面でメリットは何もないのです。新聞などを見ていて、学校の給食費を払わない父兄がいると、きちんと払えばいいのにと、無性に腹が立ちます。だからといって、制度面で何か変えて

ほしいという具体的な要望はありません。

(真野) いま、一人住まいでいらっしゃいますが、賃貸の場合などで、独身者だと家を借りるときに、借りにくいとか、その辺はいかがですか。

(Y) 20代からそこに住んでいるので、そういった現実については分かりません(笑)。

(真野) 最後に質問を一つ追加して、ご近所とおつきあいなどは、いかがですか。

(U) 隣に1歳半ぐらいのお孫さんがいて、いつも長靴を履いて、午前中にお母さんとお散歩に行くのですが、うちが散歩コースの一つになっていて、必ず上がってきて、おやつをごちそうになってから、隣の公園に行って遊んで帰るとか、公園の帰りにも、どうしてもうちに上がりたいたいと騒いでいて、うちの母がそれを聞いて戸を開けて、名前を呼ぶと走ってくるといったぐあいで、近所づきあいは、田舎なので、都会と比べればそれなりにいいのだろうと思います。また、「変な車があそこに入っていった」とか、「でも、すぐ出ていったから大丈夫」とか、防犯対策にもなっています。

(直井) 仙台からどれぐらいなのですか。

(U) 電車で30分以内です。通勤圏内で、うちの近所でも仙台に通っている方が多いです。私も地元勤めしましたが、本当は仙台が希望だったのです。

(直井) そんなに田舎ではないですね。

(U) でも、やはり田舎ですね。宅地より、田んぼの面積のほうが広いです。誰かが亡くなると、近所の人が、お通夜やお葬式はもちろん、お葬式の行列やお墓まで行くとか、そういった土地柄です。また、入院したと聞けば、お見舞いに来たり、退院したと聞けば、様子を見に来たりします。「なんで結婚しないの?」みたいなことを言う近所のおじさんもいますけれども、だからといって別に気にしません。

(真野) ご近所の状況は、皆さん大体分かっていらっしゃるのですね。

(U) 田舎で、家の戸数も限られているので、大体分かっていますね。小学生の通学路沿いなので、夏の暑いときには「おばちゃん、ジュース」とか、母もあいさつをしなければ「どうしてあいさつしないの?」とちゃんと怒ります。だから、子供の名前などは、私より母のほうがけっこう詳しいですね。

(V) マンションなので、ご近所とは、日常生活ではほとんど交流はありません。以前住んでいたのは一戸建てでしたから、町内会などはありましたが、いまのところに住んで7年ぐらいいになりますが、せいぜいあいさつ程度ですね。

(W) うちも田舎ですので、ありすぎるくらいあって、困っているぐらいです。うちにお客さんが来ない日はありません。昔はよく祖母のフレンドリーな方たちが、朝の6時半ぐらいから来ていて、朝ご飯を家族だけで食べたことがありませんでした。必ずだれか、ほかの人がいました。いまでも毎日、お客さんが、午前の部と午後の部と分かれてやってきて、だからこんなにおしゃべりになったのだと思うのです。でも、プライバシーの侵害というのでしょうか、人のうちを垣間見てチェックしていくお婆さんもいるので、それは勘弁してほしいという感じですか。

(真野) 例えば、ご近所で何か具合が悪くなった人がいたりすると。

(W) それはもう、半日でパーッと(笑)、救急車が来たら1時間でパーッと知れ渡る、そ

ういう地区です。お見舞いも、町内で、必ず行っていると思います。そのぐらい密というか、都会では考えられないと思いますけれども、田舎ではそういったことがいまだにあります。

(X) 私も生まれてから、ずっと同じ家におりまして、子供のころはかなり行き来がありました。親どうしがお互いにお茶のみに行ったり来たり、これを作ったから食べてと持って来るということがありました。しかし、最近は都会並みに、かなりあっさりしてきました。ただ、数年前ですが、隣の主婦の方の具合が悪くなって、「助けて」と電話をかけてきたので、助けに行ったことはあります。いざ何かあったときには、助け合うといったような近所づきあいですね。あまり深くべったりということは、なくなりましたけれども。

(真野) あいさつだけではなく、少しは会話もされるのですか。

(X) 会話もしますね。ただ、いまは、深すぎずで、ちょうどいい感じです。

(真野) それは、ふだんの生活で安心感につながりますね。

(X) つながります。お互いに、何かあったら、助けてもらおうという意識はあります。

(Y) 私の場合は、ごあいさつ程度ですね、朝、ごみ集積所で会ったら、おはようございませうと言うくらい。お会いすれば会話をすることはありますが、ほとんどお会いすることはないです。

(真野) では、何か援助を頼む場合は。

(Y) 近くに、1軒だけですが、そういったことを頼めるお宅があるのです。なぜかそのお父さんと飲み屋さんでよく会っていて、気軽に意気投合して、何かあったときにはその人の家に相談に行ったりすることがあります。姉も近くにおりますので、万が一のときは当然頼りにしています。

(6) 静岡調査

■日 時：平成 18 年 2 月 3 日（金）午後 6 時～8 時 30 分

■場 所：静岡グランドホテル中島屋

■参加者：40 歳代未婚女性 5 名

（小川：司会） まず、皆さま、簡単な自己紹介からお願いできればと思います。年齢では、例えば 40 代前半とか後半とか、また、現在どういったお仕事に就いていらっしゃるのか、その辺のお話をいただければ。それでは、Z さんからお願いします。

（Z） 40 代前半です。私は仕事を二つ持っていました。洋服を作るオーダーと販売の仕事です。オーダーの仕事は、時代の波に押されて、手仕事がすごく少なくなってきて、時間カットとか、社員では雇用されなくなってしまったので、生活もちょっと貧窮しています。昨年末に事故に遭いまして、今は休職中です。本当に不幸中の不幸という感じで、仕事場のほうも、1 か所は長期契約だったのですが、3 か月間、仕事の実態がないということでいったん退社しました。オーダーの仕事の方は、お客さんが激減し、席はないものと考えてくれという状況です。非常に厳しいです。

（AA） 40 代後半です。今、仕事は、和装小物、着物に関する小物の販売・接客をしております。

（BB） 40 代後半です。年を越したので 3 年目に入のですが、16 年勤めた会社を、金融業だったのですが、退職いたしました。というのも、あと 10 年、これから残りの人生を一つの企業に縛られて送り、企業で決められたストーリーの定年までというのがよいのか。定年になってから足腰が立たなくなったりとか、自分の自由がないときに何かをするのではなく、いま退職する、ちょうどその境目が訪れた、そして自由になれたということです。

仕事もオープンになったものですから。グローバルになって、私自身がアナログ人間ですので、デジタル人間についていけない。今の若い人、学生時代からデジタルに親しんできた人にはかなわないと思います。それならば、アナログ人間はアナログ人間にしか出来ないことを、すればよいではないかと思いました。それが独身でいる気軽さというか、やってみる価値はあると思ひまして決心しました。その決心では、3 年間は自由にしたいと思っていたものですから、勤めている間から 3 年分の生活費をプールしまして、それで、上司との意見が合わないことを機に辞めることにしました。

3 年間ぐらいは、ある意味お気楽な生活、苦しいですけどね（笑）。自分で決めたので苦しさは覚悟しています。それにプラス、これからもう 50 代に入るので人生の棚卸しをしたいなと思いました。いろいろと、自分のやり残したこととか、やれなかったこと、そういうことをしたいと思いました。

それで、務めている間に、資格を取るなら 70%から 50%負担してくれる制度があったものですから、フル活用し、ホームヘルパーの資格を取りました。しかし、それでカルチャーショックを受けました。実際にやってみて挫折しました（笑）。思ったより難しいです。ホームヘルパーを生かしていこうと思ひましたけれども、だめでした。

そのとき、郵便局のテレメイトさんという募集がありまして、応募しておく定期的にバイ

トやパートを紹介してくれるのです。それに登録いたしました。それと、財団法人のそういった支援をしてくださるところがありまして、それにも入っております。それがきっかけで今は郵便局関係の仕事をさせていただいております。それは、役所のような職場で、皆さん平等に少しずつというのが決まりらしいので、長い期間、長い時間勤められないのです。ちょうど私のニーズに合っております。あと、今は図書館のボランティアをさせていただいております。いろいろな本がただで見られますし、自分が何を読んでいいかわからないのも、整理しているとわかるようになったりします。

(小川) そうすると、いろいろ経緯を経ておられますが、それなりに今の生活は充実して過ごされていらっしゃるかと。

(BB) そうですね。期限を3年としていますけれど、自分の貯蓄と、3か月ごととか、バイトもやっております。お金は生活の基礎だと思いますので、何とか少しずつ確保しながらということで、今のところはそんな生活をしております。

(小川) それでは、CCさん、お願いします。

(CC) 年齢は40代後半です。私は金融機関に勤めています。初め、店に配属されるかと思ったら、大学は文系だったのですが、新入社員で入ったときにシステム部に入りました。その後、かなり前にアウトソーシングで、システム部が全員コンピューター関連会社に出向という形になりました。以来ずっとそこで出向という形なのですが、仕事は変わらず、システムの仕事をしていました。そしていよいよ転勤になるかなと思ったら、今年から、そのコンピューター関連会社の企画部の方に異動となりました。今までの仕事は割と支店と直結していたのですが、今度のところは、金融機関業務だけでなく外部からの受託もやっています。今はそうした仕事の原価計算を主にやっているのです。私の場合、大学を卒業してからずっと同じところでもう二十何年働いています。

(小川) そうすると、新しい仕事は、これまでのシステム部関係とは変わったものですか。

(CC) もう全く違いますね。今までは自社の店に関係する仕事をしていたのですが、今度は外部と自社と両方見ながらです。その企画部門というのは教育関係もやっているもので、最近職員へも厳しくなって、必ずシステムアドミニストレーター試験と基本情報技術者試験は取れということになっています。

(小川) それでは、DDさん、お願いします。

(DD) 私は、洋服屋さん勤めています。インポートの品ぞろえで、メンズとレディース両方やっている個人経営のお店です。20年以上前にその社員になりました。そこからお店が増えまして、最初1軒だったのですが、多いときは10軒近くまで広がりました。そこでスーパーバイザーというマネジャーの仕事、ヨーロッパに仕入れに行ったりする仕事をしていました。今40代半なのですが、40代初めに大きな病気をしまして、スーパーバイザーの仕事は退かなくてはいけなくなりました。今は大丈夫になったのですが、死んでしまうか、生きていられるかみたいな、すごく大きな病気でした。そのとき一生懸命看病してくれた父が、そのあと私と同じ病気になってしまい、2年前に天国に行ってしまったのです。

その間、私が復活して体の調子がよくなってから、今度は父を看ないといけなくなりました。仕事にも戻りたいし、でも、父の介護に専念したいしというので会社に話をしました。そのこ

ろちょうど洋服業界が下火になってきていて、仕入れを一括で私がやっていた関係上、私が退くとできる人間がいなくなるので、規模を数軒に縮めて、私が戻ったらまた社長と一緒に広げようねと、希望を聞いてもらえたのです。それで、父の介護に専念しました。母と父はそれほど仲が悪かったわけではないのですが、父が病気をしてから、母が看病すると、寄るな、触るなという感じで、母だともものすごく文句を言うのです。私だと下手にしても文句を言わないのです。私も同じような病気をして、その病気のことが分かっているのです、どうされたいか分かっていたのです。あまり父のそばに母が看病でいられなかったので、私が 24 時間ずっとそばで看ているという形でした。

父の介護のあと、1 年ちょっと前に復帰しました。会社には迷惑をかけているのですが、許される期間、とにかく三回忌まではということで、やっています。

もともと私は静岡の人間ではなく、父が転勤族で、たまたま最後に居着いたのが静岡で、それから 30 年暮らしています。お葬式の時、どこの檀家でもないし、親戚もなくて、とても大変でした。私には本当に親戚づきあいがなかったのです。父のお墓も、父の先祖のほうを頼って四国のお墓に入れてもらうということになりました。そうすると、四国まで行ったり来たりしなければいけないので、とても正社員では、三回忌が終わるまではちょっと無理ということでした。

(小川) DDさんご自身のお体は、もう回復されて大丈夫なのですか。

(DD) だいぶいいのですが、まだちょっとです。あとは定期的に診断していただいて、オーケーが出ると「ああ、もう 1 年は大丈夫かな」という感じで。だから、今はとても毎日が宝物状態なので、何があってもけっこう楽しいというか、どんな状況でもうれしかなというところですよ。

(小川) ありがとうございます。それでは、皆さまの普段の生活、そういったことに関するお話をお伺いしたいと思います。現在お一人なのか、あるいはご家族と一緒に。お住まいは自宅か、または借家か、その辺はいかがでしょうか。DDさんからお願いします。

(DD) 3 人兄弟のいちばん上なのですが、下はもう静岡にいません、お嫁に行って。私だけが母と二人で暮らしています。家は母の所有になっていると思います。一戸建てです。母は、今、すごく寂しがっているのです。父が天国にいて、まだ 1 年半ぐらしかたっていないのに、母は歯をいきなり 6 本だめにしてしまいました。母がこんなになっちゃうとは思わなかったもので、すごくびっくりしています。

(小川) それでは、CCさんはいかがでしょう。

(CC) 私は 3 人兄弟の末っ子なのですが、上が二人とも独立しているものですから、今は母と二人暮らしです。家は、持ち家で一戸建てです。うちもこの 3 月で父が亡くなって 4 年になるのですが、父の遺言で家は私にということになっているのです。いずれ名義を変えます。家を建ててまだ 6 年ぐらいなのです。うちの父は、具合が悪くなってお医者さんに行っていたが分からなくて、最後に開けたらもうだめですという感じでした。

(小川) それでは、BBさん、お願いします。

(BB) 私の場合、私が 30 代前半のときに、母が 70 歳直前で亡くなりました。その前後に兄弟がみんな独立したものですから、そのときは父と私とで介護をしました。その父も、去年

三回忌をやりました。父のときは、介護保険がまだまだで、勤めを辞めて介護をしてもいいかなと思っていただけです。寝たきりにはならなかったので、糖尿病とか白内障とかいろいろありましたけれど、「お父さんがそんなになっちゃうと、私、仕事に行けなくなっちゃうからね」なんて、頼っているふりというか、いないと困るというようなことを言っていたせいか、気を張って、おむつを当てることもありませんでした。

しかし父が病気になって入院しているときに、お昼の食事で喉を詰まらせて亡くなりました。私としては、すごく疑問で、でも、こちらは見ていただくという立場でしたから、そういうことの狭間でちょっと揺れ動いていたのです。それがきっかけでホームヘルパーを取って体験してみました。ホームヘルパー2級の実習で、5日ほど施設へ体験に行くのです。年寄りというのは、ここで見放されたら家族は見てくれないと思っている方しか入っていないという、それが実情だった気がします。私も、同じ立場を両方経験していますが、預けっぱなしみたいな感じで家族が面会に来ないのですよね。

現場の事情をみて、結論から言うと、私としては一抹の不本意さはあったのですが、父が喉を詰まらせたのはしかたがなかったかなと思います。食事の介助は本当に大変なのです。なかなか食べてくれませんから。できなかつた自分と、専門に任せておけばという安易さとの狭間で、そういう意味でカルチャーショックでした。

私が実習でいちばん耐えられなかったことは下のお世話なのです。もう介護の人が慣れてしまっているのです。悪いという意味ではないのですが、朝、おむつ替えをするときに、ベッドで6人部屋だと、おむつをポンポンと投げて、まるで尊厳がないというか、老人のプライドを傷つけるような。私が教わってきた講座とはあまりに違う。

そういうことを体験して、私が思ったことは、生きがいか、自分が何をしたらいいかということ、前倒しでも何でもいいから、思った時がすべき時だということです。

三回忌も過ぎますと人の出入りがめっきり減って、寂しくなります。そういうことで、去年はすごく寂しい1年だったですね。私は、寂しいということを閉じ込めなくて、みんなに言いふらしました。「寂しい、寂しい」と。そうすると、いろいろな友達が「寂しかったらおいで」と言ってくれます。100%それに甘えるわけにはいきませんが、「寂しい」と叫んで、誰かが手を差し伸べてくれたら甘えてもいいということを経験しました。叫び続けて1年したら、もう慣れちゃって。何かそれですっきりしました。

一戸建ての家は、半分私のもの、兄が半分です。というのは、家を全部所有すると税金がかかるので、貧乏なのに。

(小川) それでは、AAさん、よろしくお願いします。

(AA) 私は、今、アパートで一人暮らしです。実家は兄が継いでいます。母は実家に兄とおりますが、ちょっと認知症気味です。私は、ここ3年くらい、実家に毎週金曜日に通っています。私のほうも、去年、父が他界しました。そんな生活をしております。

(小川) それでは、Zさん、お願いします。

(Z) 私は、家族5人で、父の持ち家に住んでいます。皆さんと違って、父と母と妹二人で住んでいます。うちは幸いにして私以外はほとんどみんな健康なのです。父は去年の6月ぐらいに、今まで父とその兄弟でやっていた仕事を廃業しました。それで今年になってから、私

が病院に行ったあと、母もパートに出ていますので、父はほとんど主夫みたいな感じで家にいます。健康にはすごく留意しているみたいです。毎日、みのもんたさんの番組が（笑）、ご多分に漏れず大好きみたいです。

私は完治して社会復帰する時、とても大きい壁に当たると思うのです。なぜなら、先ほどBBさんおっしゃったのですが、私もアナログのような仕事をしていて、スピーディではなくこつこつと、という感じですから。時代ってこんなに変わったんだと日々体感しています。

（小川） それでは、次に将来の生活について、例えば、すでに何か生活設計で考えていることがあれば。お仕事をどうされるとか、何か資産形成をされているかとか、その辺のお話をお聞かせいただきたいのですが。Zさんから、いかがでしょうか。

（Z） 私は恥ずかしいくらい金銭感覚がなくて、貯蓄とか無縁なのです。父も今は仕事をしていませんし、国民年金なのでとても安いです。母はパート、妹も別に当てにできないですし、家があっても、改築しない限りあと何年間か過ごすにはちょっと大変です。税金だとか保険だとか、どうしようと。父親のほうも兄弟がすごく多いので、冠婚葬祭に関しても大変です。

一体どれくらいあったら私は生きていけるのだろうと思います。仕事の方も、どうしましようという感じです。これから本当にしっかり考えなくてはいけないのですけれど。今の仕事は続けたいのですが、私たちの衣料の関係についても、ものすごい勢いで海外に流出していると思うのです。そのすき間で、自分の中で芽を出したいなど。やはりそれは健康でないといけませんので、心身ともにまず健康に努めたい。そうすれば結果がついてくると、そう思っています。

（小川） AAさん、いかがでしょうか。

（AA） 私もあまり考えていないのです。

（真野） もし働けるとしたら、大体お幾つぐらいまでと思いますか。

（AA） 一応使ってもらえるだけ使ってもらおうという気持ちですね。今のところは多分60歳ぐらいまでは大丈夫だよと言われているので（笑）。だからちょっと余裕はあるなど思っているのですが、そこで何とかしたいですけどね。アパート住まいなので、家賃だけでも払っていかねばならないので。

（小川） 仮に一端リタイアされて、そのあとも体力が続く限り、何かお仕事をされていきたいというような、そういうイメージでいらっしゃいますか。

（AA） はい。私もちょっと、3年くらい前に体を壊したので、やはりそのときに考えました。やはり仕事があっても健康でないと何事も始まらない。入院するほどの大病でなかったので、通院だけで済んでいますけど、やはりそこでも考えました。体が続く限り働ければ働いてと。今、接客の仕事をしています。若い方とも接することが多いので、気持ち的にはすごく若くいられますから、何とかついていけるのではないかと思いながら、自分で自分のお尻をたたいていますけど。

（小川） BBさん、お願いいたします。

（BB） 私も、どちらかというと父と母のことは見てきましたので、そういう意味では早めにいろいろなことを考えなくてはという気持ちがあったのです。私のここ2年ぐらいの体験によると、健康であれば、60歳になっても職種を選ばなければ食べることはできます。ジャスコに行けば60歳でも使ってくれます（笑）。少なくともお中元とお歳暮が日本にありますから、

年2回は1か月くらいのバイトが確保できます。それ以外でも、ちょっとしたバイトがデパートなどへ行けば、職種を選ばなければ、60歳になっても必ずあります。だから、もし好きな仕事があれば、目一杯やるべきだと思います。やれる限りでもいいし、やれるところまでやっていいと思います。

生活面の工夫も考えています。健康のことでは、国民健康保険を払っていますと、市から補助金がかかり出て人間ドックを受けさせてくれます。生活費は、消去法でいって、何を減らせればいいかです。逆に何が必要かという食費ですよね。1か月で大体一人で2万5000円の食費と考えています。家賃が幸いなのですが、それに匹敵する固定資産税があります。家賃か固定資産税かですね。それは逃れることはできません。それと同時に、国である程度免除できるものは、すべて受けたほうがいいと思います。プライドがそれで引込むことはないのです。ですから、国民年金も今は免除申請をしています。あと、自分で要るちょっとした小遣い。5万か10万ぐらいあればいいと思います。私の場合、60歳になるまではある程度自分の好きなことに挑戦してもいいと思うので、今やりたいことをやっています。それを続けていくつもりです。

60歳以上になるとやはり体力が落ちますし、記憶力も落ちます。それで、私は60歳になったら、今も少しずつやるように心がけているのですが、お礼の意味でというか、ボランティアを少しずつやってみたいと思っています。まず図書館で、あるいは動物園でしてみたいと思います。何かできることを生きがいにしていくのもいいかなと。それを今、模索しているというのでしょうか。お金のほうも、目一杯は望めないとしても、必ず最低のものは、生活保護を受けなくてもできると思います。

(小川) それでは、CCさん、お願いします。

(CC) 私の場合、学校を卒業してから入って、もう二十何年働いていますが、今までに一度も仕事が嫌になったことがなかったのです。嫌だったらもうちょっと違った道があったのかもしれないです。割と自分に合っていたのかもしれないですけど、ずっと楽しく来ました。たまたまこここのところ、会社ではうつ病が多いようです。そうした方が復帰されて来る場合、仕事は30~40%しかお願ひしません。本当にできる範囲でということですが、部門の人数は変わらないので、元気な人にすごいしわ寄せが来るのです。また転勤が出るたびに、派遣とかパートに変わっていく。そうすると、残された社員がいままでの120~130%働くとかいう感じになります。去年の夏、仕事は嫌ではないのだけど、そういう会社の考え方がすごく嫌になったときがありました。それで、夏ごろ、本当にそのときは、死にたくなってしまいました。やっても、やっても報われないみたいな感じがして。その間にいろいろ考えることがあって、死ぬぐらいだったら、今まで蓄えたお金があるのだからそれを使ってから死んでもいいかなとか思いました。

その後入社して、上司にいろいろ言ったのですが、改善されないなと思って、今度は逆に早く転勤したくなっていたのです。結果的に、今年の異動で全然違うところに行きました。何かあるとすごく、父の写真を見ても今でも涙が出るのですが、いろいろ話しかけたりとか、お経を読むと落ち着きます。

今度のところは企画部で、仕事が変わったばかりで新しいことをやっているため、今年着任

してから定時が8時という感じで、何だかんだしていると家に帰るのは9時過ぎてしまいます。今は母と二人暮らしです。ただ、母が10年前に脳梗塞をやっているのです。父が亡くなってから急に耳が遠くなりました。お年寄りの認知症に関するテストで長谷川式というのがあって、この12月にやったら、ちょっと今までより数値が落ちていますと言われて、それが心配です。今のうちにその進行を食い止められればよいのですが。そうでなければ、そこが仕事の辞めどきかとも思うのです。今の仕事は、一応期待されて行ったものですから、もうちょっと自分もやってみたいということがあります。だから、母のことがなければ定年まで働くつもりなのです。一応定年が55歳、あとは嘱託として60歳まで働けるのですが、とりあえず55歳まで働いてと思います。

父が、家にいる間にお金をためなさいと言います(笑)。私もこれだけ長いものですから、いわゆる昔の花嫁修業みたいなもの、例えば、お茶とかをもう全部行って、ある程度資格も取りました。それ以外にフラワーアレンジメントをやったり、スタンドグラスをやったり、インテリアセミナーに行ったり、いろいろなことをやっているのです。だから、今会社にいる間にお金をためて、何とか大丈夫なような蓄えを今のうちにしておいて、定年までは今のところにおいて、今のうちにいろいろなことを習って、55、60歳になってから、生きがいを目的とするための何かをやりたいなと思って模索中ではあるのです。

私は、趣味で、ずっと警察犬のゴールデン・レトリバーを飼っていたのです。普通の人に、ゴールデン・レトリバーとかラブラドル・レトリバーとかすごいブームになったとき、大型犬の扱いを知らなくて飼って、引きずられて散歩がうまくできないという問題がありました。それを何とかしようと集まった仲間たちで作った会があるのです。今ではシェパードに切り替えて、警察犬を取っているケースが多いです。静岡県警は、警察犬が全部嘱託なのです。うちの会は全員アマチュアですが、どこの競技会に行っても頭を取るのはいちの会からというくらい熱心にやっています。それに、年2回、困った犬の、問題犬のボランティアをやっているのです。だから、将来は、今やっている犬の関係です。みんな10年ぐらいやっていて、その辺の訓練士よりはうまくなっているのです。せつかく身につけたものを生かそうと。愛玩動物飼養管理士というのも取りました。将来役に立つかなと思って取ったのです。

(小川) DDさん、お願いします。

(DD) 私は個人でやっている洋服屋さんで働いていて、社長とずっと最初から25年ぐらいやってきています。これから、どれだけやっていけるか分からないですが、やれる限り、皆さんの洋服のコーディネート、健康な限り生涯現役でやっていきたい。年金をもらうまでは多分ずっと、年金をもらっても、もらわなくても済むぐらいずっと働いていたい。

お客様で80代半ばの方がいらっしゃるのですが、とてもすてきな女性で、その方が「幾つになっても洋服を自分で選ぶことを忘れてはいけない。女を捨ててはいけない」と言ってくださって。だから、私も、70代の洋服の選び方だとかをコーディネートできたらなと思っています。ずっととにかく働いていきたいです。

でも、どうしても年を取ってきて、フルタイムで出勤できなくなってきたら、収入が減りますので、微々たるものですが、個人年金をずっと掛けてはきています。私は本当に世間知らずで、自分はずっと年金を納めてきて、実際自分は70歳になったときに幾らもらえるのだろう

か、今知りたいそれが分からないじゃないですか。今分かっていたら、本当はもっと、個人年金の金額をもう少し上げた方がいいのかなとか。生涯現役で仕事をしていきたいのですが、若い時からずっとそのまま掛け続けてはいるのです。自分には、それこそ株だとか証券だとか、資産運用みたいなことは全く出来ません。

(小川) 現在の生活で、あるいは将来をお考えになる中で、例えば、行政に何かご要望があれば、一言ずつお願いできればと思います。それでは、DDさんからいかがでしょうか。

(DD) どれだけ自分の好きな仕事をやっていけるかなと考えたとき、その収入との兼ね合いがあると思うので、将来の年金額などが、今分かるようなシステムがあればうれしいです。自分の中で身構えができるので、とてもありがたいのですが。難しいことなのかもしれませんが。国の保障分が明確に提示されていれば払いやすいですし、それ以上は負担できないからあとは個人で掛けてくださいというのも、それは将来設計の中で、自分の中でもしやすいことだと思うのです。

(小川) ありがとうございます。では、CCさん。

(CC) 年金は、会社員はいやが応でも取られるものという感じです。結局、国の年金、あれだけ納めても絶対もらえないと思ったものですから、私はもう13年ぐらい前、バブルがはじける前に、前納で60歳から受け取れるという個人年金にドカッと納めたのです。そのときは自分の蓄えの中からドカッと納めたつもりだったのですが、今考えると金額が年間100万円行かないのですよね。そのころは65歳からかなと思っていたのですが、まだ十何年前で、もしかして結婚するかもしれないなど。そうしたら、子供にいちばんお金がかかるのが60歳ぐらいかなと思って、個人年金を60歳からもらうように、その時期に、何かの足しになるようにという感じでやったのですが、それだけでは足りないかなと思っています。

もう今の状態だと、国に何か求めるというのは難しいかな。自分の老後は自分で守るしかないという感じで、特に期待するものはありません。ただ、医療費が高い。3割というのはやはり高いですね。老人は割と安いから、行かなくてもいいようなことでも行っちゃっているのかなど。だから、本当に今の年金なんて、今の老人に私たちがあげているような形で、全然自分のときには戻ってこないだろうなと思っています。

(小川) では、BBさん。

(BB) 私の場合は、情報公開をもっとオープンにしてほしい。自己責任とか、あるいは、しかたないから医療費を上げるとか、それは、国が自分たちの中で分かっている範囲でそんなこと言っているけど、どうしてそうなったかという公開が常々ないから、突然言われて、という感じじゃないですか。例えば、アメリカでは消費税15%だよ、でも日本の消費税は5%で安いですよ。でも、アメリカでは消費税が15%だというけど、日本ではそれこそ3代で倒れるような相続税というのがあるじゃないですか。海外ではそんなものないわけですよ。消費税が3%のとき、たしか医療費の関係で、老人が多くなるからということでした。そう言うっておきながらなぜ今ごろになってまた医療って。要するに都合のいい理屈でかっぺに上げる。だから、情報公開を徹底してほしいのです。常に、どんなことでも、税金をどうやって納めて、使っているかということをもっと分かりやすく。見ようとしたら隠さないで。そういうことなしで、本当に国民にはすべて情報公開してもらいたい。

年金でも同じです。例えば、60歳になって、これだけ納めていけばいくら年金がもらえるというのがあるじゃないですか。私も年金のことで退職するときに非常に気になったので聞いたのです。そうしたら、60歳で払うから、60歳の一步手前でないと計算できないから答えられないというのですよ。でも、シミュレーションとかがあるのですから、これだけ給料をもらっていて、こうなのですよということで計算をやってくれば、アバウトでもいいから自分に当てはめて、計算できるじゃないですか。私がやるから教えてくださいと言ったら、これは60歳の一步手前まで来ないとだめなのですよという考え方なのです。

(小川) 分かりました。では、AAさん、お願いします。

(AA) 皆さんがおっしゃったことは本当に共感するばかりなのですが、私たちが年金をもらう段階になったら、もうないと考えておいた方がいいのではないかと思います。

あと、先ほどもお話がありましたが、老後の問題もありまして、うちも認知症の老人を抱えているので、介護が必要ということになった場合にどのくらい利用できるのか、といのもあります。介護認定のやり方も、何かいろいろなのですよ。そういうのを間近で見ていると、自分がその年になったときのことを考えると、やはり心配になります。

(Z) 皆さんがおっしゃったことももちろんですが、私は今病院に通っていますので、医療の質というのですか。ドクターがいないとか看護師さんが何とかとか、いろいろ聞くと、どこに税金が投入されているのだろうと、しわ寄せはやはりいちばん弱者の方に来ていると思います。例えば、ドクターが足りないと、診察時間ももちろん少ないですけど、すごくおざなりというか。すごく聞きたいことがあるのだけど、しょうがないよという感じです。

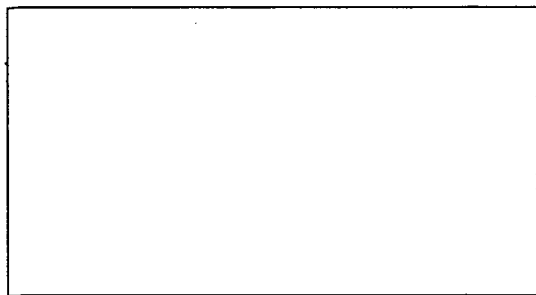
(BB) 余談なのですが、ちょっと恥ずかしくて言えなかったけど(笑)。よく育児手当とかいろいろありますでしょう。でも、それだったら独身手当みたいなもの、控除みたいなものはないのでしょうか(笑)。好きで一人になっているといえればそれまでのことですけど、子供を一人産んだらどのくらい補助が出るとかいうじゃないですか。県営住宅なんかも、独身だと入れないじゃないですか。何かのときにも、制限が、独身だと多いじゃないですか。どうしても多数決みたいなものがあるのでしょうか。

(CC) この間、テレビで、独身税を取るとかいう話しが。

(BB) 逆に、そういうのって失礼ですよ。だって、結婚すると二人じゃないですか。二人で分担して生活していくのに、それで一人産まれたからといって、税金が安くなるでしょう。長く独身でいるからご苦労さまと、少し控除額があってもいいような気がするのですけど(笑)。だって、社会は冷たくなるのですもの。年を増すごとに。何か笑われちゃうけど、すごく前から、そういうのってないのかなと思っていたのです。

(小川) それでは、皆さま、今日はいろいろと興味深いお話をありがとうございました。

資料編 アンケート調査票



お名前	ご記入いただいた方 様
ご住所	ご住所等変更がある方のみご記入ください 〒 — Tel() —

第2回 独身女性を中心とした女性の老後生活設計ニーズについての調査

この度は本アンケート調査にご協力いただきまして誠にありがとうございます。

財団法人シニアプラン開発機構では、シニアの方々の豊かで実りある生活を実現するため、さまざまな調査研究を行っております。

このアンケート調査もその一環で、将来への備えについて考える一助として、40代～50代の未婚女性の方々を対象に、現在のお仕事を中心とする生活と将来の生活設計について、おうかがいすることを目的としています。したがって、本調査の主旨をご理解のうえ、忌憚のないご意見をいただきますようお願いいたします。

なお、調査の結果は全て数字であらわれますので、皆様のお名前が出ることは決してありません。また後日、セールス等でご迷惑をおかけすることもございません。

今回の調査にご協力いただくために、ささやかなお礼(図書カード500円)を同封いたします。どうぞ御笑納ください。

平成17年12月

アンケート記入上のお願い

- 次の諸点にご注意いただいたうえで、宛名のご本人がお答えください。12月26日(月)までに、投函ください。
 - ・本調査は、未婚の方のみを対象にしておりますので、既婚の方(事実婚も含む)は回答をなさらないでください。
 - ・回答は、すべてこの調査用紙に直接記入してください。
 - ・問1から順にお答えください。回答は、あてはまる番号に○をつけるところと、具体的に文字や数字をご記入いただくところがあります。
 - ・質問によっては、一部の方だけにおたずねするものもあります。この場合は、おそれいりますが指示に沿ってお答えください。
 - ・「その他」を選んだときは、番号に○をつけたうえで、()内に具体的に記入してください。
 - ・あなたご自身のお考えをお聞きするものですので、回答に際して他の方とご相談されることはご遠慮ください。
 - ・記入に際しては、なるべく濃いエンピツやボールペンをご使用くださいますようお願いいたします。

● 調査実施機関

財団法人シニアプラン開発機構
〒105-0011
東京都港区芝公園 1-8-21 芝公園リッジビル 6F
担当：小川 真野

● 調査に関する不明点の問い合わせ先

株式会社 インテージ
〒352-0012
埼玉県新座市畑中 2-5-33
TEL 0120-483-433 (フリーダイヤル) (9:30～17:00)
メールセンター担当：松原

わたしたち株式会社インテージは
プライバシーマーク認定事業者です。



プライバシーマークは、
日本工業規格(JIS Q15000)に
準拠し、個人情報について
適切な保護措置を講ずる体制を
整備している事業者に対して付
与されるマークです。

財団法人 シニアプラン開発機構

I お仕事について

問 1 あなたは次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 現在、仕事についている (問2へお進みください。)	86.5
2 現在、仕事についていない (問3へお進みください。)	13.4

NA 0.1

<問1で1に○がついた方のみにかがいます>

問 2 あなたの現在のお仕事(従業上の地位)は次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 経営者・役員	1.6
2 正規従業員	49.7
3 非正規従業員 (パート、アルバイト、臨時雇い、契約社員・嘱託)	27.6
4 派遣社員 (付問2-2へお進みください。)	7.3
5 自営業	7.2
6 家族従業員	1.6
7 自由業	3.3
8 内職 (付問2-2へお進みください。)	0.6
9 その他() (付問2-3へお進みください。)	0.9

NA 0.1

<問2で1~3・5~7に○がついた方のみにかがいます>

付問 2-1 (問2で1~3の方へ) 従業員は、会社・団体全体で何人ぐらいですか。(○はひとつ)
(問2で5~7の方へ) 雇い人はいますか、何人ぐらいですか。(○はひとつ)

1 0人	9.1	4 30~100人未満	15.7	7 1,000人以上	13.6
2 1~5人未満	10.3	5 100~300人未満	12.6	8 官公庁	4.3
3 5~30人未満	17.1	6 300~1000人未満	12.0	9 わからない	3.1

NA 2.1

<問2で1~8に○がついた方のみにかがいます>

付問 2-2 現在のお仕事の内容は次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 専門知識・技術をいかした仕事 (研究者、教員、看護師、栄養士、システム・エンジニア、デザイナーなど)	24.2
2 管理的な仕事 (課長以上の管理職、部長、課長など)	2.7
3 事務的な仕事 (管理・企画・販売・経理にかかわる事務、秘書など)	40.1
4 営業・販売の仕事 (セールス、店員、レジスター係、生命保険外交員、テレフォンオペレーター〔セールス・受注に関わるもの〕)	11.5
5 サービスの仕事 (理・美容師、調理師、ウエイレス、接客サービス、家政婦など)	9.2
6 農林漁業の仕事 (農家など)	0.1
7 保安の仕事 (警備員、監視員など)	0.1
8 運輸・通信の仕事 (バス・タクシー運転者、車掌など)	0.3
9 製造・技能・労務の仕事 (工員、パン・菓子製造工、清掃員、配達員など)	6.0
10 その他()	2.3
11 わからない	0.2

NA 3.2

<問1で1に○がついた方(現在、お仕事についておられる方)のみにかがいます>

付問 2-3 (問2で1~4の方へ) 現在のおつとめ先の勤続期間はどのくらいですか。
(問2で5~9の方へ) 現在のお仕事はどのくらい続けていますか。

--	--

 年

--	--

 ヶ月
 平均 11.2年

NA 8.4

<問2で3～9に○がついた方のみにかがいます>

付問 2-4 1週間の労働日数と1日の実労働時間は次のどれに該当しますか。

(1) 1週間の労働日数 (週によって異なる場合は平均的な日数)

日

平均 4.9日

NA 3.3

(2) 1日の実労働時間(日によって異なる場合は平均的な時間数)(○はひとつ)

1 1時間未満	0.2	4 5～7時間未満	25.9	7 10～12時間未満	2.8
2 1～3時間未満	4.2	5 7～8時間未満	36.3	8 12時間以上	0.2
3 3～5時間未満	11.8	6 8～10時間未満	16.5		

平均 6.8時間

NA 1.9

付問 2-5 現在のお仕事はどのようにみつけましたか。(○はひとつ)

1 学校の紹介で	7.0
2 友人・知人の紹介で	20.6
3 親族・親せきの紹介で	6.3
4 公共職業安定所(ハローワーク)・人材あつせん会社・人材派遣会社などを通じて	17.0
5 新聞広告・チラシや求人情報誌などで	22.1
6 インターネットの求人情報などで	1.3
7 自分が以前つとめていたところの紹介で	4.9
8 その他()	12.3

NA 8.4

付問 2-6 あなたの現在のお仕事について、何かお悩みのことやご不満はありますか。(○はいくつでも)

1 労働時間が長い	12.3	6 雇用が不安定	17.1	11 特に不満はない	18.3
2 休暇がとれない、休暇が少ない	22.9	7 社会保険に入れない	9.7		
3 仕事が多い	15.4	8 上司や同僚とあわない	11.9		
4 収入が少ない	45.4	9 職場が遠い	8.0		
5 仕事がつまらない	7.1	10 その他()	10.3		

NA 7.7

付問 2-6-1 付問2-6でお答えいただいたお悩みのことやご不満の中で、最も大きいものはどれですか。付問2-6でお答えいただいた番号より選んで記入してください。

選択肢 4:39.2 2:11.8 6:10.4

NA 0.8

問 3 あなたのごこれまでの職歴は次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 最初の仕事は現在と同じ(正規従業員かパートかなどの従業上の地位も同じ)(問5へお進みください。)	33.8
2 最初の仕事は現在と異なる(正規従業員かパートかなどの従業上の地位が変わった場合も含む)(付問3-1へお進みください。)	52.1
3 現在は無職であるが、過去に仕事についていた(付問3-1へお進みください。)	12.2
4 今まで仕事についていたことがない(問4へお進みください。)	1.2

NA 0.7

<問3で2・3に○がついた方のみにかがいます>

付問 3-1 あなたが最初についたお仕事(従業上の地位)は次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 経営者・役員	0.2
2 正規従業員	79.6
3 非正規従業員 (パート、アルバイト、臨時雇い、契約社員・嘱託)	13.0
4 派遣社員	0.5
5 自営業	0.8
6 家族従業員	1.4
7 自由業	1.1
8 内職	0.3
9 その他()	2.8

NA 0.5

<問3で2・3に○がついた方のみにかがいます>

付問 3-2 (付問3-1で1~4の方へ) 最初のおつとめ先の勤続期間はどのくらいでしたか。
(付問3-1で5~9の方へ) 最初のお仕事はどのくらい続けましたか。

		年			ヶ月
平均 6.4 年					

NA 3.2

<問3で2・3に○がついた方のみにかがいます>

付問 3-3 あなたのキャリアは、お仕事をはじめられてから現在まで、次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 概ね(10年程度以上)、1つの企業団体などの組織につとめてきた	16.5
2 つとめ先は変わったが、概ね(10年程度以上)、同じような領域の仕事をつとめてきた	36.7
3 つとめ先が変わるごとに、異なる領域の仕事をしてきた	34.7
4 概ね(10年程度以上)自営である	3.5
5 仕事を概ね(10年程度以上)中断した	3.2
6 その他()	1.9

NA 3.4

<問3で2・3に○がついた方のみにかがいます>

付問 3-4 あなたの最初のおつとめ先、あるいはお仕事をおやめになったのは、どのような理由からですか。

(○はいくつでも)

1 経営不振、倒産、閉鎖、人員整理などで	12.0
2 病気、けがなどで	9.9
3 親の介護など家庭のつごうで	10.3
4 仕事の内容や職場に不満があったので	36.9
5 働く必要がなくなったので	2.3
6 ほかに適当な仕事があったので	12.8
7 その他()	20.0

NA 6.8

<問3で3・4に○がついた方(現在、無職の方)のみにかがいます>

問 4 現在、お仕事についておられないのはなぜですか。(○はいくつでも)

1 自分が仕事につかなくても、生活できるから	22.2
2 事業の後継者ができたから	0.0
3 希望する仕事につけないから	26.7
4 仕事をするには体がきついから	29.6
5 親などの介護で手が離せないから	21.5
6 その他()	12.6

NA 15.6

付問 4-1 現在、お仕事についておられない期間はどのくらいですか。

	年		ヶ月		

平均 6.2年

NA 16.3

<全員の方にうかがいます>

問 5 今後、お仕事についてどのようにしたいと考えていますか。(○はひとつ)

1 現在の仕事を継続したい	54.4
2 適当な仕事があれば転職したい	26.4
3 現在は無職であるが、適当な仕事をさがしている	7.5
4 仕事をすることをやめたい	2.8
5 今後も、仕事につくつもりはない	3.7
6 その他()	3.1

NA 2.2

<問5で1~4に○がついた方のみにかがいます>

付問 5-1 あなたはおいくつまで働くつもりですか。

	歳		

平均 61.7歳

NA 4.8

II ご家族・家計について

<全員の方にうかがいます>

問 6 あなたの世帯の人数は、あなたを含めて全部で何人ですか。(○はひとつ)

1 1人 (問7へお進みください。)	32.1	4 4人	8.5	7 7人	0.8
2 2人	25.3	5 5人	2.7	8 8人	0.3
3 3人	28.2	6 6人	1.5	9 9人以上	0.3

平均 2.4人

NA 0.3

<問6で2~9に○がついた方のみにかがいます>

付問 6-1 現在、あなたはどなたと一緒に住んでいますか。(○はいくつでも)

1 親	77.4	4 親せき	2.9
2 兄弟姉妹	25.3	5 友人	0.6
3 恋人	2.2	6 その他()	20.0

NA 0.1

問 7 現在、世帯の中で生計維持の中心となっておられる方はどなたですか。(○はひとつ)

1 自分自身 (問8へお進みください。)	57.2
2 自分以外の人	41.8

NA 1.0

<問7で2に○がついた方のみにかがいます>

付問 7-1 生計維持の中心の方のあなたからみた続柄は次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 親	82.7	3 恋人	1.4
2 兄弟姉妹	12.6	4 その他()	2.6

NA 0.7

問 8 あなたの世帯の、お仕事以外の収入も含めた世帯全体の過去1年間の収入(税込)は次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 なし	0.9	4	200~300万円未満	18.1	7	500~600万円未満	11.8	10	1,000~1,500万円未満	4.0
2 100万円未満	3.6	5	300~400万円未満	14.2	8	600~800万円未満	13.4	11	1,500万円以上	1.9
3 100~200万円未満	9.0	6	400~500万円未満	11.6	9	800~1,000万円未満	6.3			

NA 5.3

付問 8-1 あなたの世帯の収入源は次のどれに該当しますか。(○はいくつでも)

1 自分の仕事の収入	81.4	5	生活保護	0.7
2 同居の方の仕事の収入	21.8	6	その他()	5.4
3 年金収入	39.4	7	特にない	1.4
4 不動産収入	8.1			

NA 2.0

<問1で1に○がついた方(現在、お仕事についておられる方)のみにうかがいます>

付問 8-2 あなたご自身のお仕事から得られる過去1年間の収入(税込)はいくらでしたか。一万円単位でご記入ください。

万円

平均 339.0万円

NA 14.1

問 9 あなたは、現在次の年金に加入していますか。(○はいくつでも)

1 国民年金	39.5	5	個人年金保険	43.8
2 厚生年金	54.2	6	その他の年金()	1.9
3 共済年金	4.9	7	何か分からないが加入している	2.0
4 企業年金(適格年金、厚生年金基金など)	10.0	8	いずれも加入していない	2.7

NA 1.1

問 10 現在、あなたの世帯の1か月の生活費(扶養・住宅ローン支払・医療・教養・娯楽費などを含む)は平均して次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 10万円未満	12.5	3	15~20万円未満	30.4	5	25~30万円未満	12.0
2 10~15万円未満	19.6	4	20~25万円未満	15.6	6	30万円以上	6.3

NA 3.7

付問 10-1 現在、住宅ローンのお借り入れはありますか。

1 ない(問11へお進みください。)	84.2
2 ある	9.6 NA 6.2

(1) お借入の額はいくらでしたか。百万円単位でご記入ください。

百万円

平均 19.9百万円

NA 5.2

(2) 年間のご返済額はいくらですか。一万円単位でご記入ください。

万円

平均 98.0万円

NA 3.1

(3) 住宅ローンが支払い終わるまで、あと何年ありますか。

年

平均 17.2年

NA 6.2

問 11 現在、老後の生計資金のため、どのような方法で資産形成をされていますか。(○はいくつでも)

1 預貯金	64.8	5 株式	14.5	9 その他()	2.6
2 生命保険・簡易保険	50.0	6 債券	7.0	10 何もしていない	18.4
3 損害保険	9.2	7 財形貯蓄	8.0		
4 個人年金保険	39.0	8 外貨預金	5.9		

NA 2.6

<問 11 で1～9に○がついた方のみにかがいます>

付問 11-1 問 11 でお答えいただいた資産や貯蓄の合計額はおよそいくらですか。百万円単位でご記入ください。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

百万円

平均 23.0 百万円

NA 19.4

III お住まい

問 12 あなたの現在のお住まいは次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 自分の持ち家	27.9	5 公団・公社の賃貸住宅	3.7
2 親の家に同居	33.7	6 社宅	0.8
3 親以外の兄弟姉妹・親せきの家に同居	2.0	7 公営住宅・公的施設	3.9
4 民間の賃貸住宅	23.6	8 その他()	1.9

NA 2.6

付問 12-1 お住まいをお借りになったり、ご購入される際にお困りのこと、お困りになったことは何かありますか。

(○はいくつでも)

1 家賃が高い	23.5
2 保証人が必要である	15.6
3 住宅ローンを借りにくい	6.7
4 その他(過去のご経験も含めてご自由にお書きください)	4.0
5 特にない	52.8

NA 13.0

付問 12-2 お住まいでお困りのこと、お困りになったことは何かありますか。(○はいくつでも)

1 古い	35.0
2 手狭である	20.3
3 最寄りの電車の駅からおい	11.7
4 日あたりが悪い	13.3
5 帰宅までの道が暗い	8.2
6 近隣の騒音がうるさい	9.1
7 空気が汚い	5.1
8 治安が悪い	3.3
9 買い物などの日常生活で不便	9.6
10 近所に病院がない	4.2
11 その他(過去のご経験も含めてご自由にお書きください)	10.7
12 特にない	34.4

NA 1.6

問 13 老後のお住まいはどのようにされますか。(○はひとつ)

1 現在の住まいにそのまま住みつづける	38.6	3 その他()	1.1
2 転居するつもりである	21.2	4 わからない	38.7

NA 0.4

<問 13 で2に○がついた方のみにかがいます>

付問 13-1 老後のお住まいについてどのようにお考えですか。(○はひとつ)

1 将来持ち家を自分で購入するつもりである	25.7
2 親族から持ち家を相続する見込みである	13.6
3 賃貸住宅(コレティブハウスなどを含む)に住むつもりである	25.2
4 自立型住まい(終身利用の有料老人ホームなど)に住むつもりである	10.3
5 親族の家に同居するつもりである	5.1
6 恋人の家に同居するつもりである	3.3
7 その他()	12.1

NA 4.7

問 14 老後のお住まいでは、どなたと暮らすことを考えていますか。(○はひとつ)

1 1人で暮すつもりである	32.5
2 親と暮すつもりである	12.3
3 兄弟姉妹と暮すつもりである	8.5
4 恋人と暮すつもりである	5.9
5 友人と暮すつもりである	1.4
6 親せき(甥や姪など)と暮すつもりである	0.7
7 親族以外の人と生活の一部を共有しながら暮すつもりである(コレティブハウスなど)	1.8
8 その他()	2.3
9 わからない	33.0

NA 1.6

IV いまの生活

問 15 現在のあなたの健康状態は次のどれに該当しますか。(○はひとつ)

1 非常に健康	18.2	4 注意する点があり、日常生活に支障がある	3.4
2 まあ健康	48.0	5 病気がち、療養中	3.3
3 注意する点はあるが、日常生活に支障はない	27.0		

NA 0.2

問 16 あなたが日頃の生活の中で、最も充実感を感じるのはどのような時ですか。(○はひとつ)

1 仕事にうちこんでいる時	13.1	7 恋人と雑談している時	5.1
2 勉強や教養などに身を入れている時	5.8	8 社会奉仕や社会活動をしている時	2.0
3 趣味やスポーツに熱中している時	21.7	9 ひとりである時	4.8
4 ゆったりと休養している時	19.6	10 その他()	2.3
5 家族団らんの時	7.4	11 特にない	6.5
6 友人と会合、雑談している時	10.9		

NA 0.8

問 17 次のそれぞれの方々と、現在どの程度親しくお付き合いされていますか。(○はそれぞれひとつずつ)

		いない	非常に親しい	まあ親しい	あまり親しくない	全く親しくない
(1)同居の方	NA 12.6	25.6	41.6	18.8	1.3	0.2
(2)同居以外の方						
①家族	NA 14.5	11.0	39.0	29.5	4.6	1.5
②親せき	NA 11.9	1.1	9.9	41.4	27.7	8.0
③恋人	NA 17.7	47.4	15.0	14.7	2.7	2.6
④現在の職場の同僚	NA 14.1	14.3	7.3	46.5	15.0	2.8
⑤友人	NA 11.7	0.7	32.5	47.2	7.1	0.7
⑥近所の人	NA 12.9	—	4.4	31.5	32.4	18.8

問 18 あなたは、次の生活のそれぞれの面ではどの程度満足していますか。(○はそれぞれひとつずつ)

		あてはまらない	非常に満足	まあ満足	やや不満	非常に不満
(1)仕事の内容	NA 3.8	11.6	7.2	51.8	21.0	4.6
(2)職場の人間関係	NA 3.7	15.2	7.3	49.7	19.3	4.8
(3)収入	NA 3.1	7.4	1.9	28.7	39.5	19.4
(4)資産・貯蓄	NA 3.3	4.3	1.8	25.7	37.4	27.6
(5)趣味やスポーツ活動	NA 3.3	6.9	10.6	50.6	21.4	7.1
(6)家族	NA 2.8	4.4	26.6	53.2	10.9	2.2
(7)友人	NA 3.2	3.0	25.6	60.3	7.3	0.6
(8)恋人	NA 6.9	48.8	11.0	21.4	9.3	2.5
(9)地域・近隣の人間関係	NA 3.1	13.0	4.3	57.0	18.8	3.8

問 19 現在のあなたの生活を全体的にみて、どの程度満足されていますか。(○はひとつ)

1 非常に満足している 4.0 2 まあ満足している 63.7 3 やや不満である 25.4 4 非常に不満である 4.8

NA 2.2

問 20 あなたが不安を感じているのはどのようなことですか。あてはまるもの上位2つを選んでください。

1位 2位

選択肢 1:25.0 10:20.0 2:18.6 NA 7.0 選択肢 10:27.3 2:14.8 1:14.2 NA 14.7

* 下の選択肢より選んで記入してください。

1 健康のこと	7 恋人がいないこと
2 生活費のこと	8 適当な趣味がないこと
3 安心して住める住宅がないこと	9 雇用が不安定なこと
4 親、兄弟姉妹に先立たれること	10 先行きに対する漠然とした不安感
5 面倒をみってくれる人がいないこと	11 その他()
6 適当な話し相手がないこと	12 特に不安を感じない

問 21 あなたは今後結婚したいとお考えですか。(○はひとつ)

1 すでに結婚相手が決まっている 4.6 3 結婚するつもりはない 45.6
2 適当な人がいたら結婚したい 48.5

NA 1.3

問 22 あなたのお宅には、病気・介護などで援助が必要な方がいらっしゃいましたか、あるいは現在いらっしゃいますか。

(○はいくつでも)

1 いない(問23へお進みください。) 73.8 3 兄弟姉妹 1.7
2 親 21.5 4 その他() 3.4

NA 1.1

<問 22 で2～4に○がついた方のみどうかがあります>

付問 22-1 主にどのような対処をされましたか、あるいは現在されていますか。(○はひとつ)

1 仕事をやめて自分で介護	16.2
2 会社の介護休業制度などを利用し自分で介護	4.7
3 同居家族が介護	28.9
4 親せきが介護	1.6
5 ホームヘルプサービス、訪問看護などの在宅介護を利用	15.0
6 公的介護施設(特別養護老人ホーム・老人保健施設など)に入所	4.0
7 介護付き有料老人ホームに入所	1.2
8 病院に入院	20.6
9 家政婦を雇用	0.0
10 その他()	6.4

NA 1.6

問 23 あなたの親が病気・介護などで援助が必要になった場合、主にどのような対処をされますか。(○はひとつ)

1 仕事をやめて自分で介護	12.4
2 会社の介護休業制度などを利用し自分で介護	8.9
3 同居家族が介護	15.0
4 親せきが介護	1.6
5 ホームヘルプサービス、訪問看護などの在宅介護を利用	23.1
6 公的介護施設(特別養護老人ホーム・老人保健施設など)に入所	7.9
7 介護付き有料老人ホームに入所	1.7
8 病院に入院	9.4
9 家政婦を雇用	0.2
10 親はいない	10.7
11 その他()	4.1

NA 5.0

V 老後の生活

問 24 あなたは 60 歳以降(退職後)の生活設計について考えていますか。また、考えはじめたのはいつ頃からですか。

(○はひとつ)

1 まだ考えていない	43.5	4 35～39 歳	10.4	7 50～54 歳	7.5
2 20 歳代	2.6	5 40～44 歳	15.4	8 55 歳以降	2.3
3 30～34 歳	5.4	6 45～49 歳	12.0		

NA 1.0

問 25 60 歳以降(退職後)、あなたの1か月の生活費(扶養・住宅ローン支払・医療・教養・娯楽費などを含む)はどのくらいだと思いますか。(○はひとつ)

1 10万円未満	18.3	3 15～20万円未満	34.6	5 25～30万円未満	6.5
2 10～15万円未満	26.5	4 20～25万円未満	10.2	6 30万円以上	2.0

NA 1.9

問 26 60 歳以降、あなたはどのようにして生計を立てようとお考えですか。(○はいくつでも)

1 仕事による収入	44.1	7 預貯金	54.4
2 公的年金(国民年金、厚生年金、共済年金)	71.1	8 親族からの支援	3.0
3 企業年金(適格年金、厚生年金基金)	12.2	9 生活保護	3.1
4 個人年金(個人年金保険、簡易保険など)	38.5	10 その他()	1.3
5 不動産収入	7.1	11 わからない	8.6
6 利息・配当金収入	6.6		

NA 0.7

問 27 60歳以降(退職後)、あなたご自身が万一病気・介護などで援助が必要になった場合、どのような対処をされますか。(〇はいくつでも)

1 自宅でホームヘルプサービス、訪問看護などの在宅介護を利用する	37.7
2 親族に介護してもらう	10.3
3 友人に介護してもらう	1.1
4 公的介護施設(特別養護老人ホーム・老人保健施設など)に入所する	38.7
5 介護付き有料老人ホームに入所する	15.9
6 病院に入院する	31.8
7 その他()	5.1

NA 3.4

VI 行政に望むこと

問 28 あなたご自身のいまの生活や老後の生活について、国や自治体に望まれる政策や対策は何かありますか。何でも結構ですのでご自由にお書きください。

(1)いまの生活について

(2)老後の生活について

VII ご自身について

問 29 あなたの年齢はおいくつですか。

			歳
平均			47.3 歳

NA 0.0

問 30 あなたには配偶者(事実婚も含む)がいらっしゃいますか。(〇はひとつ)

1 いる	0.0	2 いない	100
------	-----	-------	-----

NA 0.0

問 31 あなたの居住地をご記入ください。

都道府県	市区町村
------	------

東京都:25.8 大阪府:9.9 神奈川県:7.5

NA 2.2

問 32 あなたが最後に卒業された学校は、次のどれに該当しますか。(〇はひとつ)

1 中学校	2.5	2 高等学校	37.0	3 短大・専修学校	38.1	4 大学・大学院	21.7	5 その他()	0.3
-------	-----	--------	------	-----------	------	----------	------	----------	-----

NA 0.4

アンケートは終了です。記入モレがないことをご確認の上、投函ください。ご協力ありがとうございました。

財団法人シニアプラン開発機構は…

厚生労働省、企業年金連合会および民間企業の協力により昭和62年（1987年）11月に設立された財団です。当財団では、概ね50歳以上の企業在職者および企業退職者の方々を〈シニア〉と位置付け、豊かな人生経験を持ち、広範な分野で活躍できるこの年代の方々がその持てる力を活かして、充実したシニア生活を送るためのシステム〈シニアプラン〉を企画開発し、社会に提案しています。

【主な事業】

- サラリーマンの生きがい、社会活動、生涯学習等の研究
- 年金生活設計（PLP）セミナーの研究開発
- 企業福祉に関する調査研究
- シニアプランフォーラム等、豊かなシニアライフに向けた啓発活動

第2回 独身女性(40～50代)を中心とした 女性の老後生活設計ニーズに関する調査

平成18年6月

財団法人 シニアプラン開発機構

Research Institute for Senior Life

〒105-0011 東京都港区芝公園 1-8-21 芝公園リッジビル 6階

TEL: 03-5401-5600(代表)

FAX: 03-5401-5610

<http://www.senior.or.jp>